

「お帰りなさい！」
Home Coming RYLA

第20回 RYLAセミナー報告

1998. 3. 26~3. 29

神戸YMCA余島野外活動センター

目 次

これまでのRYLAセミナー	1
開講式	2
オープニングパーティー	3
キャビンタイム (I)	4
パネルディスカッション	5
レクリエーション	52
ボンファイヤー	53
キャビンタイム (II)	54
記念講話「受講生に期待するもの」	
パストガバナー 森 滋郎	55
新世代会議「受講生がロータリーに期待するもの」	
コーディネーター 中島萬里委員長	67
記念講演「心が人生を決める」	
丹波あじさい寺・観音寺住職、詩人 小籾 実英氏	93
記念植樹 (I)	117
ホームカミングパーティー	118
記念講演「21世紀を心豊かに生きるために」	
直前RI理事 今井 鎮雄	120
閉講式	135
記念植樹 (II)	137
感想文	138
参加者名簿	177
運営委員会	181

これまでのRYLAセミナー

回	年	テ マ	講 師 名
1	1979	「社会の動きと青少年の実態」 「来たるべき余暇社会におけるレクリエーションの意義」 「態度と理解」 「ロータリーの歴史について」 「人と出会い、神と交わり、愛の火の燃えるところ」 「RYLAについて」 「ライラについて」	今池武敏 井田行浦 鎮 孝 雄 池田執 深川 徳 暲 建 山 村 徳 太 純 胤 山 村 徳 太 純 胤 一
2	1980	「世界の孤児日本にならないために」 「今日における青年と大人の関係」 「グループを指導するために」 「経験を通して」	秦田今八 泉 寺 正 一 八 井 尾 方 國 鎮 夫 八 井 尾 方 國 鎮 夫 八 井 尾 方 國 鎮 夫 八 井 尾 方 國 鎮 夫
3	1981	「人間と役割—青年期の意義—」 「社会と青少年」 「国際理解」 「経験を語る」	田増新島 中田 國光 夫 野 幸 次 芳 吉 野 幸 次 芳 吉 郎 野 幸 次 芳 吉 郎 機
4	1982	「生きるとは分かち合うこと」 「日本の社会とグループ青少年指導者の責任」 「リーダーシップの条件」 「RYLAに思う」	岩江武今 村 慎 四 昇 橋 田 井 鎮 郎 武 今 村 慎 四 郎 武 今 村 慎 四 郎 建 武 今 村 慎 四 郎 建 雄
5	1983	「青年理解」 「社会と青少年、般若心経」 「世界のサバイバル」 「青年期のもととは……」	今芳古森 井村木 鎮超俊滋 雄 古 森 井 村 木 鎮 超 俊 滋 全 古 森 井 村 木 鎮 超 俊 滋 雄 郎
6	1984	「歴史を読む」 「現代を生きる」 「未来を生きる」	山根岡 口 光真久 朝 岡 口 光 真 久 澄 岡 口 光 真 久 澄 雄
7	1985	「現代若者の心理」 「私の社会観」 「卓球生活を通じて」	佃加徳 藤 永 範義尚 夫 加 徳 藤 永 範 義 尚 和 加 徳 藤 永 範 義 尚 子
8	1986	現代から未来へ 「日本・世界の食料・農業問題とバイオテクノロジー」 「転換期の地域社会—国際化・情報化・活性化」 「高齢化とこれからの社会」	山高森 本 寄 昇 滋 修 高 森 本 寄 昇 滋 三 高 森 本 寄 昇 滋 郎
9	1987	「もう一人の自分の発見」 「心の角度をかえて日本を見る」 「宇宙的規模・地球的規模より見た21世紀の世界の動き」	松萩奈 原 良 泰 茂 道 萩 奈 原 良 泰 茂 裕 萩 奈 原 良 泰 茂 毅
10	1988	「個人の理解」 「地域社会と青少年」 「国際理解」	美田新野 崎 中 教 國 田 新 野 幸 次 郎 田 新 野 幸 次 郎 正 田 新 野 幸 次 郎 夫
11	1989	「人類を愛する」 「人としての愛」 「自然を愛する」	岩渡福 村 辺 和 昇 渡 福 村 辺 和 子 渡 福 村 辺 和 子 信
12	1990	「地域社会と青少年」 「青少年の理解」 「国際社会と青少年」	田美新野 中 崎 國 教 美 新 野 幸 次 郎 美 新 野 幸 次 郎 夫 美 新 野 幸 次 郎 正
13	1991	HOME COMING RYLA 「私の人生観」 「21世紀をになう諸君たちへ」	梶 浦 暲 鎮 一 今 井 井 井 鎮 雄 今 井 井 井 鎮 雄 夫
14	1992	「日本人とは」 「今を生きる」 「21世紀をになうものとして」	黒奈今 木 良 幹 夫 奈 今 木 良 幹 夫 毅 奈 今 木 良 幹 夫 雄
15	1993	共に生きる 「国際社会における共生」—アジアとの共生・アジアと日本 「地域社会における共生」—男と女・障害者と健常者 総 括	草東今 地 野 賢 一 東 今 野 賢 洋 子 東 今 野 賢 洋 子 雄
16	1994	アジアの一員としての私達はどうかあるべきか	渡 辺 賢 太 忠 塩 月 賢 太 郎 塩 月 賢 太 郎 敏
17	1995	「21世紀における青年の役割」 「福祉社会とボランティア」 「ロータリーの役割と青年の責任」	新野 幸 次 郎 野 尻 井 武 敏 雄 野 尻 井 武 敏 雄 敏
18	1996	「“こころ”とは」	松渡 原 辺 哲 明 渡 原 辺 哲 明 子 渡 原 辺 哲 明 子 実
19	1997	「これからどうして生きるか」	辻 野 ナ オ 片 野 井 鎮 滋 郎 片 野 井 鎮 滋 郎 英
20	1998	HOME COMING RYLA 「21世紀を心豊かに生きるために」	森小今 藪 井 鎮 滋 郎 小 今 藪 井 鎮 滋 郎 英 小 今 藪 井 鎮 滋 郎 雄

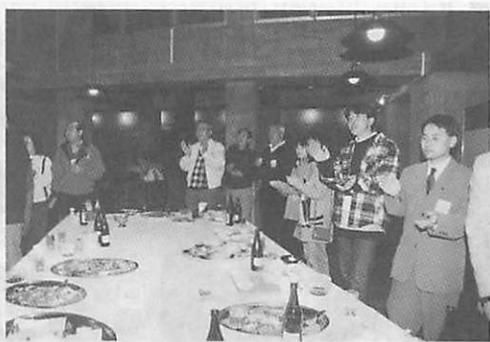


第20回 RYLAセミナ
HOME COMING RYLA
1998.3.26~3.29 YOSHIMA



オープニングパーティー

(I) Δトマビヨッキ



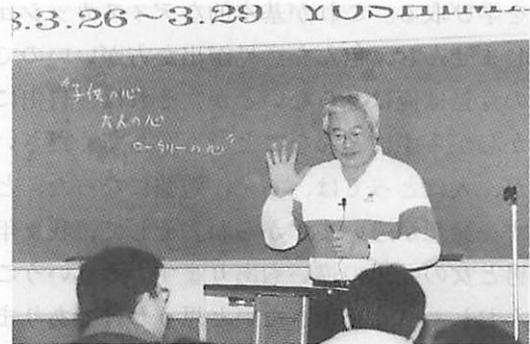


パネルディスカッション1

〈テーマ〉

子供の心、大人の心、ロータリーの心

コーディネーター	深川 純一	アドバイザー
アシスタント	安平 和彦	セミナーアドバイザー
パネラー	小野 清二	
	山本 雅子	
	下野 博康	
	北代 玲子	



深川 おはようございます。ただ今からパネルディスカッションを始めたいと思いますが、人間がこの色んなディスカッションをするタイプには、昔から先輩達が色んな方法を開発しました。

フォーラムというのは、皆さんご存じであります。このライラでもやりましたが、このフロアの皆さん方から色んな意見が出てきて、そして、それぞれディスカッションをする。それだけではございませんで、今日のこのパネルディスカッションというのは、そのフォーラムというのは一つ欠点がございます、カラオケでもマイクを握ったら放さないやつがおるようにですね、しゃべり出したらとどまるところを知らないような人もいて、そうかと言えば、一言も言わない人も出てくる、そういう短所もありますので、皆さん方の中から何人かパネリストを選びまして、ある程度、この基本的な叩き台をしゃべって頂き、それを前提にして、パネリスト同士の議論の投げ合いもよろしゅうございますし、それから、後でフロアの皆さん方にも意見を求めたりします。そういう形でディスカッションをやっていく。これが一つの方法です。

それからもう一つは、シンポジウムというのがあります。これは、紀元前8世紀ぐらいにギリシャの先輩達が開発したものでありまして、あまりかた苦しいのは面白くないから、お酒でも飲みながら議論をやるというのがシンポジウムであります。このライラでは、このシンポジウムをとらずに、わざわざパネルディスカッションを、フォーラムはずっと皆さんもやっていますからね、とった理由は、おそらくお酒は昨日の晩、ずいぶん飲んでおられると思いますので、ディスカッションの時ぐらいはまじめにやろうというのが、このライラ委員会のお心だと思っております。

それで今日は、四国から二人、兵庫から二人、二人ずつのパネリストを選びまして、そ

して、自由にしゃべって頂きたいと思うわけでありませう。後で、フロアの皆さん方にも議論を投げかけますので、何でも結構でありますので、こんなことを言ったら恥ずかしいとか、そんなことはなくて、お互いに世代も違いますし、人生観も価値観も全部違う人が寄っていますので、お互いに発想が違う人達が色々な発想を出して、そこで自分と違うものを学び取る。これが基本的なディスカッションの目的でありますから、結論はもちろん出しませうし、色々な意見が出た方がいいのであります。そして、あの意見はいいとか、この意見は俺はとらないとか、それは、自由にお持ち帰り頂いて結構でありますから、恥ずかしがらずにどんなことでも言ってください。そのことが、恥ずかしいと思っていることが、人にとっては、あゝ、勉強になった、と思うような意見も随分あるはずなんでありませう。発想が違いますからね。そして、我々年寄りの発想と若い人との発想も違うだろうし、男と女の発想の違いもあります。そういうこともありますから、遠慮なさらずに、どんどんおしゃべりを頂きたいと思うわけでありませう。

それで、このテーマですね、「子供の心・大人の心・ロータリーの心」ですが、どうしてこんなテーマを決めたかといいますと、昨日、吉村ガバナーが、このライラの目的が「21世紀を心豊かに」ということで始まったということをおっしゃっていらして、それを聞きながら、まあ、心だなあ、ということ考えたわけでありませう。

このライラというのは、あくまでも、子供達のリーダーシップを養成するセミナーでありますから、やはりリーダーの心を忘れるわけにはいかない。しかし、最近、少年の犯罪がずいぶん目立っております。したがって、そのリーダーとしては、ボーイスカウトでもYMCAでも青年団でも学校でも、色々なところで子供達を指導していく。その時に、やはり子供達の心が分からなければ適正なリーダーシップが発揮できないだろう、だから、子供の心ということをもっと分析してみなければならぬ。これは、リーダーとしての、リーダーは皆さん、大人でありますから、そこで、「子供の心・大人の心」というテーマまでは考えたんでありますが、どうも、最近の少年事件を見ていますと、非常に悲惨でありますし、それを分析していきますと、家庭が悪い、学校が悪い、社会が悪い、政治が悪い、そんなことになってますね、どうも、暗いイメージになっている。これはどうも、あまり面白くないなと。先ほど申し上げましたように、「21世紀を心豊かに」というのでありますから、もう少し建設的に、前向きな話でなければならぬ。もちろん、少年事件の問題とか、現状の分析・反省は必要で大切なのでありますが、それをふまえて未来を夢みるということが大事だろうと思ひます。

そんなことで、昨日の夕方、今井先生にご相談しまして、「子供の心・大人の心までは分かっているんだけど、どうも、イメージが暗いほうにいく危険がある、どうしましょう」と言ったら、「それじゃ、ロータリーの心を加えたらどうだ」ということになって、「あ、それはいいですね」ということになって、こういうテーマが決まったわけであり

ます。

ロータリーの心は、皆さん方は分からないかもしれません。それは、私の方から補足をいたしますが、理想主義者の集団でありまして、いつも未来を夢みる思想をロータリーというのであります。そういう意味で、今の国際ロータリーの会長でありますキンロスさんが、「ロータリーの心を示そう」というテーマを出しておられるし、次年度の、この7月1日からの会長さん、レーシー会長はですね、「ロータリーの夢を追いつづけよう」でしたか、そういうテーマを出しております。

いずれにしても、高々と理想を掲げて、それに少しでも近づこうというのがロータリーの基本的な姿勢であります。そういうものを組み合わせまして、子供の心・大人の心、これはイコール、皆さん方、リーダーの心でもあるわけですが、それとロータリーの心、この辺のところでテーマを決めたというのが、そのいきさつであります。

さあ、そこで、私はコーディネーターであります。私がいちしゃべると意味がないので、パネリストの皆さん、それからフロアの皆さん方が、どんどん意見を出して頂きたい。私はそばのつなぎ粉みたいなものでありまして、潤滑にいくように交通整理をするだけありますので、どうか皆さん、どんどん出して頂きたい。で、議論があまり出なくなったら、時間が来る前でも打ち切ります。私は平気でそういうことをやりますからね。一ぺんやったことがあります。できるだけ、楽しい会をするために、どんどん意見を出して頂けたらと思うのであります。

さあ、それで、どっちからいきますかね、マイクのある方からいきましょう。レディファーストですから、山本雅子さん、まず、なんでも結構です。叩き台でしゃべっててください。よろしく願います。

山本 山本雅子です。よろしく願います。私は、今、子供の心と言われても、ちょっと子供とあまり接していないものでよく分かりませんので、まず、大人の心というのを考えてみました。

最近、ちょっと衝撃的というか、思ったことが、私の友人で3年ぶりに会った友人がいるんですが、ちょっと3年前にけんか別れをしたもので、それ以後、音信不通で、でも、年賀状のやりとりだけは、何か心のつながりというものがあるって、ふと、先週ですか、会ってみようって言って会ったんですね。

それで、3年ぶりなので色々話をしていたんですけども、その友人というのが、精神的に、今も薬をちょっと飲んでいるような状態で、すごく不安定な状態で、それというのも、まだ学生で、今年卒業なんですけれども、学校関係の卒論で忙しかったり、実習で忙しかったり、そういうストレスになる要因というものが沢山一度に集まっていて、そのせいもあって、そのストレスがすごくたまっているということです。その時に、どうしよう

もないからと言って、カウンセラーの人に相談して、薬をもらって、なんとか精神的に安定しているというのを聞いたんですね。

もともと、その子というのは、あまり人付き合いが上手ではないけれども、物事をすごく深くよく考える、私には持っていないものを沢山持っているような友達で、何ていうか、そういうカウンセラーにかかっている、自分はこのカウンセラーの人がいて本当によかったというか、「自分の心の悩みを聞いてもらえる人が、近くの友人ではないくて、カウンセラーの人がいてくれたからよかった」と言っていたんですね。

その子は、すごく自分の家族というものも愛していて、よく実家にも帰っていて、私が思うには、その友人は、自分の事を聞いてくれるカウンセラーの人や、家族の人がいるから、こうやって今いられるんだろうなんて思ったんですね。その時、3年間も私は音信不通で、その子のことを全然、ちょっとは考えていたんですけども、気にかけることもなく、もしかしたら、私がそこで気づいていたら、その子の心の支えになれたんじゃないかって、そう思うと、すごくのほほんというか、3年間何もしなかったことを後悔しました。

その子も、そういう心の悩みを持っている友達で、他にも、大学の時には友達とワイワイやっていたんだけど、いざ、実家に帰って、近くに友達がいないとか、新しい職場に行くと、心の許せる友達が近くにいないという友達は結構いるんですね。だから、寂しくて、ある通販のほうに走ってしまったというか、そういう自分にその子も気づいているんですね。なんか心にそういう支えがなくて、何もやりたいものがなくて、これを一生懸命、その通販なんですけれども、頑張ろうと思うと。その時は、「そういうほうに走ってはだめだよ」と言っていたんですけども、やはり何か心の支えというのが皆ほしい、当たり前なんですけれども、ほしいんだなというか、そういうのにすごく気づいて、だから、今の大人でも十分、そういう心の不安となる要因というのは、沢山持っているんだと思います。

それで、今の子供達というの、たぶんそういう存在になる人っていうのが、私達の世代よりも、もしかしたら少なくなっているんじゃないかなと思います。例えば、最初にあげた友達なんかは、家族が支えになっていたり、二番目の友達だったら、例えば、友人とか、そういう人達が支えになっていたり、そういう人と人とのつながりというのが、たぶん昔の中から築かれていて、その助けを求めるときに、そういう助けてくれるような人が、今いるんですけども、今の子供達というのは、例えば、家族でそういう絆が築かれているのかなとか、友人達の間でも、そういう深い悩みを打ち明けるような関係が築かれているのかなとか思います。

私がある新聞記事で読んだのが、ある新聞記者の方が、「友達の間でどういう話をしているの？そういう深刻な話をするの？」と聞くと、「いや、もう、今の中学生はそんなことは友達同士ではしないというか、そういう友達同士ですること自体も危ない、だから、

あたり障りのない話しかしないんだ」という、そういう記事を読んだんですね。それはもちろん、一部の人だとは思いますが、でも、そういう傾向が増えつつあるのではないかなとは思っています。

だから、そういう人間関係の希薄化が進んでしまったことに、やはり今の子供の心の不安定さというのが生まれてきているのではないかなと思います。今の大人でも、人との交流が苦手という人も沢山いると思うんですね。私も結構、沢山の人とこういうふう知り合うことは、なかなかむずかしくて、なんていうのか、誰とでも、まず、自分の中にちょっと壁というものを持っていて、なかなか何人もの人とすぐ打ち解けられるというのがむずかしいんですね。だから、そういう壁を徐々に取り除いていきたいなと思うし、無理して取り除くこともできないので、自分のやり方で人との交流を進めていきたいなと思っています。

それで、自分のやり方というのが、私は、一人の人間というか、やはり今まで色々付き合ってきた人というのは沢山いるんですけども、今、その沢山の人とそんなにいっぱい知り合いではないんですけども、でも、昔からの友達というのを、あ、この人は素晴らしいとか、すごく魅力を感じるという人を、私はのがさないんですね。すごく大切にしたいとか、ずっと付き合っていきたいと思っているから、もう、その出会いは本当に些細なことで、あまり親密な関係にならなかったとしても、絶対その手紙のやりとりというのは、突然、何か月ぶりに「何していますか？」というふうに書いてみたりとか、一人の人と私は親密に付き合うという、そういうやり方が得意なので、そういうふうにと向き合っていきたいなと思っています。そういう人と人と向き合いながら、なおかつ、沢山の人と色々知り合えたら、もっと素晴らしいだろうなと思っているので、また、このライラの研修を通して、色々皆さんと付き合っていきたいと思っています。言いたいことはこれぐらいです。

深川 ありがとうございます。私の話が行き当たりばったり始まったので、大切なことを忘れておまして、山本さんがしゃべりだしてから、皆さんのパネリストの紹介をするのを忘れておまして（笑い）今からやります。

今お話を頂いたのが山本雅子さんといまして、南国市の龍馬学園の事務職員をなさっております。高等学校ですね。

それから、こちらにおられるのが小野清二さんといまして、有限会社小野企画の社長さんであります。山本さんは19回目のライラに、昨年いらっしゃっております。それから、小野さんは18回目のライラにご参加になりました。

それから、兵庫県であります。こちらが下野博康さんといまして、相生中学校の事務職員をなさっております。この学校は、実は昨日聞いたんでありますが、須磨の悲惨

な事件がありました。あの事件が起こる前日にですね、下野さんの中学校の3年生の子が2年先輩の男の子をバットで殴り殺したという事件が起こったそうでもあります。ただ、あの神戸の須磨の事件があまりにショッキングでありましたので、ニュースバリューがそちらのほうにいっちゃって、あまり目立たなかったのですが、そういう学校に勤めておられて色々な体験を持っておられると思いますので、それを、また後で紹介頂ければと思います。下野さんは12回と13回、13回もたしかホームカミングライラだったと思いますが、2回、ライラに参加しておられます。

それから、一番そちらの方が北代玲子さんで、職業は今ありませんが、千葉県の方からわざわざおい出頂いております。北代さんは10回と11回のこのライラに参加をなさっております。そういうことでありますので、順次、色々なお話をうかがえるかと思っております。

今の山本雅子さんのお話は、要するに、大人でも色々な心の不安を持っている人が増えている。それはおそらく、大人同士の人間関係が希薄になっていることが原因だろうと思うし、そして、その事がまた、少年事件が多発する原因にもなっているんだらうということをおっしゃったんだらうと思っております。人間関係、手紙のやりとりを大事になさっているということをおっしゃっていましたが、何かそういうものがなければ、自分の事しか考えない人達がどんどん増えているのと、これは、なぜ、大人の間人間関係が希薄になっていったのか、この原因を究明していくと、これは、大問題になります。

今の近代文明がどうしてこうなってきたのか、その原理をずーっと遡っていきますと、イスラエルに始まったユダヤ教・キリスト教、その辺の自然観、自然をどのように見るかというところに突き当たっていくと思うんですが、これは、このパネルディスカッションでは全部、その解明はできなからうと思っております。ただ、山本さんからそういう貴重な論点の指摘があったということだけ、まとめとして申し上げておきます。時間があつたらしゃべりますけれどもね。それでは、小野さん、次お願いします。

小野 私は、子供の心というようなことについて言おうと思っております。大人の心・リーダーの心というのも、もちろん大切なんです。そのリーダーも、元を正せば子供だったわけで……、大人が変わった時点ではっきり分かるわけですが、それはすなわち、子供が、いわゆるしつけだとか、子供の環境が変わっていて、何年か後に、やはり現れているんじゃないかなと。

で、一番、日本で顕著にみられる違いというのは、戦前には修身という授業がありまして、アメリカやイギリスなどではキリスト教というのが日曜礼拝というのがあります。いわゆる心について考えるという、あたかも、ここである、1時間誰とも話さずというような時間を日本では持ちにくいです。

子供について、実際にどういうことが行われているかということを見ますと、子供に対

して教育が非常に熱心です。非常にお金もかけます。ですが、スーパーとかで子供連れのお母さんがいますと、これは、僕は知り合いには結構言うんですが、お母さんが子供を連れていまして、その子供がですね、アメリカンチェリーというものがあまして、テーブルの上にサクランボを積んでいるんですね、アメリカンチェリーですかね、テカテカ光っている。これは、子供は見ているとですね、なにせ子供ですので、手を延ばして取ってしまうんです。取って、食べ物ですから口に入れるわけですね、子供ですからね。本物の子供ですから、普通の小さい子供ですからね。そうしたら、お母さんが言うんです。バシんと手を叩いて、「だめでしょう、食べちゃ、まだ洗っていないのに」と言うんです。違うでしょう。買ってないんですから食べちゃだめなんです。一事が万事で、僕らは、あっ、これはいかんかと、で、色々あるんです。子供のほうからすれば、子供の心というのは、大人になるにつけて、早い話がですね、お医者さんになっていくような人というのは、子供の時からなりそうな子供なんです。(笑い)あのドラエモンを見ていると、のびたよりは、まだジャイアンのほうが見込みがあると思うんですが、のびたはいかんですから、子供を見ていると、だいたい行く末は知れていますね。お医者さんになるとか、いわゆるロータリアンは素晴らしいですが、子供の時は、あまり子供らしい子供じゃなかった部類の人ではないかなと思うんですが、大人が子供に接する時に大きな間違いをしているんです。子供は時間軸が足りないんです。子供は今の事しか考えません。そういう障害がある人もそうです。だから、食べ続けていると食べられないのに、もう自分で食べてしまって、立ち上がってパーね。で、子供がそういうふうになるのを恐れて、親が「だめですよ」ということで規制をかけます。ずっと規制をかけ続けて、今度、親は規制緩和をするわけですね。そうすると、子供は、急に野に放たれるわけですから、動物園でずっと飼っておきながら、「もう、あなたは成人式を迎えたから今日から大人よ、おめでとう」と、パーンと野に放されたらですね、それはエサですからね。

病院なんかですと、例えば、化粧品が、ちょっとこの前聞いたんですけれども、昨日の夜聞いたんですが、薬が効かない、悪いかもしれないというものを、顔に塗っている化粧品ですね、悪い場合は背中につけてみるんですね、そうしたら、背中につけてみると痒い、背中につけて痒いものだから顔なんかにつけたらかぶれるでしょうって言うんですよ、先生。

そういうようなことでしたね、ここの坂を行くとこけるだろうというような事について、親は知っているから言うんです。だけど、こんな事をしちゃうと死んじゃうよということになるとですね、とたんに親は経験がないんです。ナイフを持って人を刺すなんていう事は考えないですね。隣の子に石を投げられたとかいって文句を言いに行くすべは持っているんです。ところが、その子供が暴力団とぶつかって、「おどりゃあ」と言われた場合、「あんな人にかかわっちゃだめ」と言って連れて出るでしょう。

だから、親がですね、その経験が狭いうえに、一番最初に言ったように、宗教だとか、いわゆる修身だとかというようなものをですね、英語の授業を盛んにやりますけれども、漢文をやりませんから、日本は漢文をやらないといけない中に、論語だとかがあって、それでやってきたんだろうなと思うんです。

で、私のところがですね、僕は小学校を3年までに8回転校しているんです。1週間で転校したところもありまして、小さい時はできがよかったんです。これは、確かによかったんです。成績の通知表もよかったんですが、ある時ですね、全然しゃべらなくなって、どうせ、また転校するだろうと思ったわけです。それはまだ憶えています。だから、もう誰ともしゃべらなかつたんです。無駄な事だからね。もったいないとか、別れが寂しいではなくて、はっきりと憶えています。無駄だと思ったんです。どうせ知り合いをつくっても無駄だと思ったんです。通信簿にはっきり書かれています、暗いと。暗い、誰ともしゃべらない、もっとしゃべりましょうと。

今では、これが一番受ける笑い話なんですが、そんな頃もありまして、だから、僕も、いわゆる自分はエリートだと小さいながらに思っていたわけです。今は思いませんよ、とんでもないことです。その頃は、たしかに、まあ、まじめでした。学校から帰ってきてランドセルをおきましたら、まず机に向かいましたからね。お兄ちゃんはバットを持って外に遊びに行くんですけれども、絶対に行かなかったです。女の子とおままごとなんてとんでもなかったです。恥ずかしかったですね。ジャングルジムも苦手でしたから、運動神経の悪い、とにかく勉強好きなおとなしい子供だったんですが、ちょっと家庭のことがありまして、いきなり施設に入れられたんです。施設に行くと、こういう世界なんです。年齢も全然ちがってね。で、夜9時ぐらいになると、隣の部屋に野襲をかけるということがありまして、今まできちんと、お母さんが、これはいい、これはだめ、ということと言われたなかで、いきなり戦場にたたき出されたわけで、もういいも悪いもないんですね。お菓子とかあったら、ロッカーの中に入れられて取り上げられたうえに、時計のようにグルグルと回されるんです。それで出てきて、世界一周旅行とか色々ありましたね。ただ、あれも結構面白かったですけれどもね。T定規を持っている人だとか、今のファミコンみたいなのがまさに現状でありました。ただ、殴ったりとか、怪我をさせたりとかいう、そういう陰湿なものはなかったですね。トイレの掃除をさせたりとかはあったけれどもね。だから、皆、それぞれに心に傷のある人達でしたから、なにか聞いてやるとポロッとくるんです。そうしたら次の日は、逆におやつをくれるんですね。

で、子供は、子供同士の中でやっていくと、団体についての法則ということを学べるんです。そこに変に親が出ちゃうものですから、大人とかリーダーについて、ルールを決めてルールを守るということは集団では必要ですが、ただ、リーダーが一番知らなければいけないことは、所詮、100パーセントのうちの6割ぐらいしか知らないんだという事を思

わないと、団体の長になった人間が勉強をやめたり、思いあがると、これは、とんでもない方向にいてしまいます。これが一番いいんだという事を、あまり言いすぎるとだめだと思います。

子供は、とにかく、今までの経験がないというだけで、十分に傷つく心も持っていますしプライドもあります。物や人や動物を愛する心も、もちろん持っています。ただ、ルールとかを知らないんです。大人になると、明日のことだとかいうことを考えますからね。

ロータリーの心については僕は知らないのですが、深川さんがおっしゃるとは思いますが、僕らもなんらかの形で、皆さんもロータリーと関係があると思うんですが、私は、このロータリーで例会とかに呼ばれたのは、梶浦先生という方に、今回急にお亡くなりになってしまったんですが、よくポール・ハリスという人の考えを聞かされました。弁護士さんだということで、何べんも言うんです。だから、同じ話がグルグル回るのでロータリーと言うのかなあと思ったぐらいでして、(笑い)とにかく、梶浦先生はポール・ハリスに心酔しておりまして、これは素晴らしい考え方なんです。一業種一社でこうこうやったら儲かるぞという事で始めたんよなという事です。

で、もう一人名前が出てくる。弁護士さんなんです、この人が偉くて、要は、一業種一人なんだろうと、じゃ、君らはいいけれども、それに外れた人達というのはだめじゃん、そんなエゴイスティックな会には入りたくないよ、というような事を言ったので、そこでまた、ポール・ハリスが、だから偉かったんですが、いや、そんな事を言うんだったらおまえも入れないよと、後で吠え面かいてくれとは言わなかったわけで、その人に対して、あっ、そうだなと、そこで、社会奉仕という事を考えたというわけですから、だから、このポール・ハリスという人の一番偉いのは、そのある程度の成功を収めて、きちんとした哲学を持ちながら、なおかつ、人の批判を受け入れたという事です。もうすでに一業種一人という事で会を始めているんだから、エゴイスティックだろうと言われようがなんだろうが、この不景気な時代に、こうやったら仕事もとれる、仲間もできる、僕達は楽しくやれてるよ、という事で突っぱねなかったということなんです。人の意見や、自分の団体と関係のない、自分を批判するものまでを、主として受け入れる心、これは、素晴らしいと思いますね。だから、僕はそういうふうな事でロータリーとかかわってきたわけですが、梶浦先生が、ポール・ハリスがすごい、すごいと言うので、僕は、できるならば、ポール・ハリスを一ぺんですね、梶浦先生に会わせてあげたかったものなんです。

で、梶浦先生がですね、とにかく、ああいう人を僕は見たことがないんです。色んな年齢で沢山見るんですが、梶浦先生は、ご存じの方とご存じのない方もいるかもしれませんが、まあ、見た目はかわいらしいおじいちゃんできてね、素晴らしいです。知識もありますし度胸もあります。なんとも魅力的な人なんです。この人はちょっと格が違うなあと感じておりましたらですね、梶浦先生が、どうも、まだ上がいるようなことを言うん

です。それが、「ライラに行ったら今井さんというのがあるぞ」と言うんです。(笑い) だから、どっちの方面に秀でているのかなと、梶浦先生は一面、夜中の2時でも電話1本で、さあ、来い、という所がありましたから、そっちの方面で秀でている人だったらちょっと怖いなと思ったんですが、確かにお話を聞きましたら、まあ、一般社会では見ないようなりっぱな方々が多いです。そして、夜のシンポジウムでは飲み倒しまして、まあ、高知の人は特別にしまして、他の人も、皆さん、とにかく飲みます。話は分かるし、面白いしね。ロータリーに入るのに、これだけ素晴らしい人達とお付き合いができるという事を、皆さんがですね、自分達のレベルで考えるのであったら、それにしてもいいもんだなと。で、一般の人達が、このロータリーという、いわゆる不思議な仙人の社会みたいなものですね、一般社会からするとそういうものがある事を知れば、目立つものにはなるんじゃないかなと思います。

とりとめのない話をしましたが、特に、子供に対しては、やはり大人に責任があります。ずいぶん気づかないところで、子供は対処の仕方を知っています。借金取りが行っているところで、親がシーンとしていたら、子供が玄関で靴を持ってきて、「バイバイ・バイバイ」と言ったそうです。それで、その人間が、ちょっとこれは早めに片付けてきれいになりたいんですけど、結果的に、「だから、金を貸して」と言われたので、それは別の話だと言ったんですが、やはり子供は見ていますから、その子供が大きくなるということです。

それで、今の世の中に目立つものがないかといったら、ロータリーというものについては分かりませんが、ロータリアンについては、目標とすべき人が多いと思います。非常に愛すべき人が多いと思います。ただ、ちょっと年齢不詳なんで、ロータリーに入ったら歳をとらないんですかね。皆さん、悪いんですけども、ロータリアンの悪いところは一つあるというふうに、深見先生に言ったんです。いついなくなっちゃうか分からないんです。本当に皆、段々弱らないんですよ。元気なんです。それで、ある日、突然亡くなるんです。そして、毎回なのに、毎回、皆がびっくりするわけです。だから、お医者さんがあれだけ多いのに、なんでこういうふうになるんだろうっていう話を、一ぺん、深見さんと話したんですけれどもね。

そういうような事で、ロータリーにいれば、自分の生というものを最後の瞬間まで満喫して、おれは人生でこれを残したという充実感を持っていけるのではないかなという事で、まあ、うらやましいという事と、遠くからでも見続けていきたいなと思っている団体ではあります。以上、松山からの小野でした。

深川 楽しいお話をありがとうございました。ロータリー賛歌を語って頂きました。恐縮に存じます。(笑い) いや、私は、ロータリーの語源が、この同じ話をグルグルするのは(笑い)大変勉強になりました。ロータリアンは皆、その傾向があるんですね。年寄り

の集団の代名詞みたいなものですね。(笑い)

ロータリーの心についても、ちょっと触れて頂きまして、今、ポール・ハリスの話が盛んに出ました。もう一つ、その弁護士さんがおられたというのは、ドナルド・カーターという人でありまして、特許専門の弁護士であります。日本では弁理士という資格の人なんです、その人が、「自分達だけの幸せを求め、そんなエゴの集団にはおれは入りたくない、この地域社会に生を受けて、地域社会で育てられてお世話になっている、その地域社会になんらの足跡も残さない、なんらの恩返しもしないで、自分達だけが栄えてこの世を去っていく、そういう人生はおれは送りたくない」と言って、ロータリークラブに入ることをキッパリと断ったのであります。それが動機になってポール・ハリスが、「カーターの言うとおりでよ、やはりクラブの生き方を変えよう」と言って、それから、ロータリークラブというのは、世のため、人のためのことも考える集団に変わっていくわけであり

ます。そのポール・ハリスは、今、小野さんが見事に表現していただきましたが、人の意見を受け入れる。色んな意見がありますが、思想、宗教も違いますし、本当に色んな宗教の人もいるし、色んな考え方の人が沢山いるのであります。そういう色んな人の考え方がお互いに排斥しない。これは、政党だったら、その政党に反する考え方は全部排除していきませんが、ロータリーという所は、色んな考え方、自分の考え方と違う考え方があるからこそ自分が勉強になる、だから、それを全部受け入れていくわけでありまして。そういう所をですね、ポール・ハリスは、ロータリーの心というものを、「ロータリーは寛容の中に宿る」と喝破したのであります。1910年のことでありました。5年経ちまして、ロータリークラブは1905年にできて、それから5年後に、彼自身も色んな葛藤がありまして、クラブの中でもはじき出されたり、色んな苦い思いをしながら、結局、到達した心境というのは、「お互いがお互いに学び合う、お互いがお互いの意見を入れる、排斥しない。ロータリーはその寛容の中に宿る。これがロータリーの心だ」と言ったのが、ポール・ハリスであります。

実は、このロータリーの心というのは、ロータリアン一人一人によって色んな心があります。国際ロータリーの歴代の会長10人に聞きますと、ロータリーとは何ですかと聞くと、十人十色で全部違うのであります。

関東大震災の時の国際ロータリーの会長でありましたガイガンディカという人は、「ロータリーとは何ですか」と聞くと「愛です」と答える。ポール・ハリスは「寛容」だと答える。ある人は「誠」だと答えるし、答えは全部違うんであります。しかし、皆が共通に目指している所は一つなんでありますね。そういうふうにご理解を頂ければと思うのであります。

小野さんは、子供というのは大人の心をよく知っているとおっしゃいました。子供の心

を理解するためには、まず、やはり大人の心というものをきれいにしていかなければならない。そのへんのところが大変重要なことだろうと思います。

須磨の悲惨な事件がありました。あの事件の時に思ったのでありますが、私自身は、おそらく、ああいう残虐な殺し方はしない。自分でもそういう安心感がありますし、世の中の人達も、深川はあんなことはしないよ、というふうに見ているだろうなという安心感があります。しかし、私が14才の頃に遡ったら、はたしてどうだったかなと、やりかねない、ある状況が与えられますとね。実は、子供でなくても人間というのは非常に残酷になります。非常に平凡な人間がひどいことをやるのであります。だから、人間であれば誰でも残虐なことができる。動物はできません。動物は神様に作られたままに、本能のままに動くわけで、人間が勝手に残虐だと思っているだけのことでありまして、人間だからこそ残虐な事ができる。そういう事になると、自分が、あの14才の少年の立場に立ったら、世間からも、あいつはやるかもしれないというふうに見られているなという、一つの不安がありますし、自分自身も、14才であればやるかもしれないと、いつもそういう不安を持っている。私達が、今、安心をしているということは、逆にいいますと、あの少年の心の世界に入っていけないんです。まったく違う世界に、今、我々は生きている。それだけに、入っていけないだけに、リーダーとしては、どうしてそういう事になったのかという事を理解する努力が必要だろうと思います。価値観も違うし、人生観も違う、だから、もうしようがねえんだと言っていたら、進歩も何もないわけでありまして、あの子供の心の世界を、やはり理解していく。そして、どうしてそうなったのかという現状の分析も大変必要であります。これは、色んな要因があるだろうと思います。その辺の所を、また後で、フロアの皆さんから意見を出して頂きたいと思いますが、そういう意味で、小野さんは、貴重な論点の指摘をして頂いたと思っております。それでは、次、下野さん、お願い致します。

下野 今、小野さんが大変楽しい話をしてくれたので、なかなか後を続けてすることはできないんですけれども、先ほど来、須磨の事件の話が出ておりますけれども、実は、その前日というか、事件が起こったのは須磨の事件とまったく同一日ですが、ただ、報道が私の学校の場合のほうが一日早く、須磨の事件の場合は、まだ搜索をしていたので報道がされなくて、報道は翌日になったという、それだけの事なんですけれども、今年の5月25日です。私の結婚式が24日でしたので、私の結婚式の次の日というか、私の結婚式の夜中に、私の学校の中学3年生が、2つ上の同一クラブの先輩の自宅に、そのバットで殺した方の自宅にその先輩が遊びに来ていて、寝ているところをバットで殴り殺したというような、そういう事件なんですけれども、事件の要因は、もう3年も前から始まっていたわけなんです。ただそれが、学校にはなかなか見えなかった。特に、殺された側の青年は、在校している時には、別の子供に対するいじめが目立っていましたので、そちらのほうの指

導を学校側はやっていて、今回の事件の当事者になった方の事については、一切知らなかったというのが、正直なところなんです。それで、なぜ、という衝撃が走ったのは、職員間、もう全てです。

そういう暗い事件だったわけですが、後から、色んな子供達、まわりの子供達、それから、学校よりも報道機関といますか、新聞とか雑誌のほうがすごいですね、詳しいですね。学校の知らない事を週刊誌であるとか、新聞・マスコミ関係はすごく調査して、聞き込み調査をしていますので、そちらの報道で知る部分の方がかなり多かったというのが、本当のところなんですけれども、それも含めて色々聞いていると、最初は使い走り、それから、小遣い銭をせびられる。どんどん、その小遣い銭も、最初は100円・200円というのが、1,000円になり1万円になっていくという、そういう段々段々エスカレートしていくという、そういう状況なわけです。そういうのはほとんど見えないわけです。事件になって初めて分かるという事です。

実は、「子供の心が見えますか」という、そういうキャッチフレーズで、テレビなんかでも、あの須磨の事件以来ですね、度々、テレビなんかで出てきますけれども、子供の心というのは、本当に見えない部分が増えています。

というのは、大多数の子供の心というのはよく見えるんです。見えるといたら、言い方がおかしいかも分かりませんが、聞いたら素直に答えますから、本当に素直ですから、十分に心を割って話せば、それなりの心が返ってくるんです。だから、見えやすいんです。まあ、それが、本当に100パーセント見えているかどうかというのは、また別の問題ですが、ある程度までは、その状況なり言葉、それから、信頼関係というので分かるわけなんですけれども、実際に問題を起こす、問題になっている子供というのは、先ほどもありましたけれども、なかなか心を開かないんですね。開けないといったほうがいいのかも分かりません。よく、この子はちょっとおかしいん違うかなという子が、やはり学校側もキャッチしますので、その子に対しては、やはり指導しようという事で、言葉をかけるという運動をするんですけれども、やはりなかなか心を開いてくれないわけです。ここが、非常にむずかしいデリケートな問題なわけです。あまり突っ込んで話をかけますと、今では登校拒否というのは当たり前になっていますから、学校に出て来ることすら嫌になるわけなんです。だから、学校に出て来てくれさえすればいいというぐらいの感覚で、長いスパンで、おそらく、今の中学校の教師というのはかかわっているように思います。

私の中学校は、今、120名ですが、この4月からは100名を切ります。そういう小規模の学校です。そういう小規模の学校ですから、本来は、全職員が生徒一人一人の名前と顔が一致する、そういうような学校なわけです。だから、皆の心が見えて当たり前のような雰囲気ですが、実は、そうはなかなかならないというのが現状です。それで、

校内暴力的なことはほとんどありません。いじめも表面的にはほとんど見えません。

別の学校へ行きますと、同じ市内でも、たばこはどんどん吸っているわ、それから、校内暴力、いじめに近い事はどんどんやられているわという、同じ市内ですけれども、そういう学校もあります。

近隣にいきますと、もっとひどくて授業ができない。教室の後ろでドンチャンドンチャンやっていると、授業中にもかかわらずグダグダやっていると、それから、それぐらいならまだかわいいほうで、授業を妨害するとか、そういうような事をやっている学校も、ほんのごく近所の隣の市に現にあります。もう少し範囲を広げると、おそらく、ある学校では、校内にバイクを乗り入れるとか、窓ガラスを叩き割っていくとかいう、そういう学校も、もちろんあるんだと思います。これが現実です。

その子達は、なぜ、そうなったのか。それは、非常にむずかしい問題です。最初からそんな要素があった子も、確かにいるかも分かりませんが、それは、極々一部の子でも、その極々一部の子供達の方がはるかに強いわけで、周りは引っ張られていくというのが現状のように思います。

それで、子供の心ですけれども、いじめの現状でいうと、いじめられている子はどういう気持ちなのか、いじめている側はどういう気持ちなのか、それを見ている側はどういう気持ちなのか、こういうことがよく言われるんですけれども、いじめられている子というのは、基本的には、自分が黙っていたら、そのうちにこの嵐は去っていくだろうというふうに思っているようです。だから、誰かに話をするという事を、基本的には考えていません。親も含めてです。話をすると、どこかから漏れたというのは、そのいじめている側は今度は、おまえが言わへんかったら分からんという事で、さらにいじめられるというふうに、いじめられている側の子供は感じるんですね。だから、言わないんです。

じゃ、いじめている側はどう思っているのかというと、最初からいじめてやろうと思っていじめているやつはほとんどいないんです。最初はおもしろ半分、チョンと突いたのに相手がなにも言わない、ふざけているあいだに、チョンがドンなり、バンになり、挙げ句はナイフをちらつかせるという、そういうような形で、それも全部、いじめている側はいじめているとは思っていないんです。徐々に積み重ねられてその状態になっているので、一つもそういうふうに悪いとは思っていません。「なんで悪いん？」というふうに。おそらく、最近、ナイフで刺したりとか色んなのがありますがけれども、ナイフで刺した時点は、逆上してとか、そういう形で刺しているんだと思うんですけれども、刺した後も、たぶん、「なんで刺したんかよう分からん」とか、刺した事が悪かったという罪の意識というのは、その時点では、ほとんど感じていないような気がします。もちろんそのあと、色んなカウンセラーとか、そういう人達の意見を聞いて心が落ち着いてくると、「わあ、なんて事をしてしまったんだ」というふうに気づいていくんだと思うんです。

というのは、私の学校の事件のあった子供も、今、少年院に入って、そこで、色々な教育を受けて、今ではもう、ひどい事をしたというふうに思っています。ただ、その事件を起こした2か月、3か月位までは、やはりいじめられる、殺した側には殺した側の論理があるわけです。もうそこまで追い詰められているわけですから、あんなやつ死んだって、俺が殺したって何も悪くない、というふうに思っているわけですからね。「そこまでエスカレートする、殺すまでにいくまでに、何で打ち明けてくれへんのん」と、周りは言うかも分からないけれども、彼にはそれができない。そうする事すらできないというのが、彼の論理の中にあるわけです。そのの所を見極めるというのは、本当に非常に難しいものだと思います。

それで最近、職員の中でというか、特に、私の上司の教頭がよく言う話ですけれども、子供と遊んでいないなあという、教師も含めて、親も含めてですが、だから、子供の心が見えてこないのと違うのかという、子供と同じレベルで遊んでいないという事です。子供は家でファミコンをしているとか、たまの休みに、ほんならドライブに連れて行ったろうか、遊園地に連れて行ったろうかと、連れて行っているんですが、一緒には遊んでいないんですね。子供の目線というか、子供のレベルで一緒にはしゃいで、ワーツとか言うのがほとんどないわけです。教師も、まさにそのとおりで、休み時間というか、お昼の休みとか放課後、放課後はクラブでつぶれるし、お昼休みは点付けをしているとかで、子供と一緒に遊んでいる、触れ合っているというのはいないんですね。たまに、レクリエーションの時間として学校行事としてそういうのをやるから、その時間帯は遊んでいるように見えるけれども、それは、決められた中で決められた行事をこなしているの、本当に子供の目線まで降りて、一緒に遊んでいるという姿になっていないんですね。だから、一緒に遊んでいる、子供のレベルまで自分も子供に返って遊んだら、おそらく子供の姿というのが見えてくると違うかというのが、私の上司の教頭が言っている事なんですけれども、まさにそのとおりだと私も思います。

私の所で、今、中学生を集めて、個人的なクラブを作ってやっているんですけど、ここでは、私はずっと言っているんですけど、子供と一緒に遊ぼうと。で、子供よりも大人の方が先に遊ぼうと。その姿を、大人が遊んでいて楽しそうな姿を見せてやろうじゃないかという、子供のレベルに落とした遊びをしようじゃないかという事を、常に言っているんです。大人の遊びを子供に見せてもだめなんです。だめというか、子供はついてきませんから、子供のレベルになった遊びを大人がやるんです。変な話ですけど、鬼ごっことか、缶蹴りとか、最初のうちはシラーツとしているんですよ、中学生なんか、「なにやっとな、この人ら」というようなね。段々そのうちに、何か面白そうなことやっとなあという事で、「一緒にやろう」と言ったら、一人入り、二人入りというのができるんですね。そうした中で、仲間意識みたいなのが、ごつい年齢層が離れているんですけど

も、それができてくるようになっていきます。

私の個人的なクラブも、子供達がなかなか集まらないという、そういう問題はあるんです。何で集まらへんかという、やはりクラブがあって、塾があってというのがあって、私の所も、時間的制約をできるだけ加えないように、出入り自由、プログラムも、あってないようなプログラムという事で、夜来てもかまわんよという、それから、いつ帰ってもかまへんよというような、そういうアバウトな中でキャンプをやっているんですけども、それでもなかなか、子供達が忙しすぎて来れないんですね。で、何回か間があくと来にくくなって、なかなか続かないというのが、今、非常に問題だなと思っているところなんですけれどもね。文部省なんかは、中学生のクラブ活動は第2・第4の土曜日はやめなさい、それから、第2・第4は少なくとも連休にきなさいというぐらいの事までは言っているわけですけども、現実には、第2・第4も全てクラブで埋まっています。

私の中学校は、昨日、電話を家にかけますと、今、近畿中学バレーの女子が出ているんですけども、こんなちっぽけな学校のバレー部員は10名足らずですけども、昨日、3試合全部勝って、今日、ベスト8に残って試合をやるということで、すごいなあと。でも、その子達は、休みがほとんどありません。土・日は全てクラブです。その子達はバレーが好きでやっているから、それはもう、今回の子供達はすごく恵まれて、結果が出て、すごくいい思い出を作っているとは思うんですけども、そうじゃない、毎週・毎週、土・日をつぶしてクラブをやっても結果が出てこない、それで、好きでもないのに部活動の先生が言うから出て行くという、そういうケースもあるわけです。ここも、今、中学校では問題になっているところです。

それで、私が個人的にそういう子供達を集めてやっていて、上からいいますと、土・日はクラブをやめてほしいなあとというのが、せめて土・日ぐらい自由に解放してやったらええのになあというふうに、すごく思うんです。ただ、私も中学でバスケット部を指導していますので、クラブの運営上からいいますと、土・日は練習試合に行きたいなあという部分も持っているわけです。ただ、私は個人的に自分のやりたいことがあるので、子供達にも、土・日は自由にしいよと言って、できるだけ、練習試合が入らないかぎり土・日は練習なしにしているんですね。

でも、そこらへんは非常にデリケートな問題で、今、クラブ自体にでもいじめがあるんです。上級生、下級生といういじめなら、そういう上級生から下級生へ伝えていく慣習的なものは、まだ、まあ、運動部だから、ある程度、そんなものもあるのかも分からないと言えるかも知れないけれども、同級生の中でのクラブに行つてのいじめというのがあるんですね。例えば、日曜日に練習に出て来なかったら、「おまえ、さぼりやないかあ」と言うわけです。日曜日の練習に。だから、自分は親と一緒に遊びに行つてるとか、あるいは、私のような、子供達を集めたような、そういうクラブの所に行つてるとか、別の所

に行っていて、学校の部活に来なかったら、翌日、「おまえ、なんで来へんかったんや、練習さぼったやろう」というような形で言われるわけです。それを言われるのが嫌だから、土・日は、いやいやでも部活に行くんですね。そういう子供達もかなり増えているわけです。それも、まあ、地域性もあるんでしょうし、それから、そのクラブの顧問さんが熱心かどうかという部分もかなりあると思うんですけども、そういうのも、中学校としての現状だと思うんですね。

じゃ、刃物で人を傷つける子供達が増えているのは、どういうことなんやというのは、極々一般的に言われるように、社会環境が変わったとか、それから、親の育て方が悪いんやとか、地域と密着してへんからそんななるんやとかとって、色んなことを言われるんですけども、それも、そういう事が色々あると思うんです。確かにパーセンテージ的に言うと、そういう我々の子供の頃の常識では判断できない行動をとる子供達が増えているのは確かだと思うんです。

ただ、さっきも山本さんが言われたように、大人の姿というのが、やはりかなり影響しているように思うんです。大人の、親の姿を見て、子供はエゴイスティックになっている部分もあるし、それから、家で怒られていない子供というのは、学校とかで怒られてもきかんのですね。なんで怒られなあかんのやと、家でこれしたって怒られへんのに、何で学校へ来て、こんな事で怒られなあかんの、というふうな態度が非常によく目立ちます。基本的に生活が家の中では許されている状況で、別の手段の中に入ってきて、それはだめと言われても、子供自身は戸惑っているというのが、本当に今の現状かなというふうに思っています。

私は、先ほどもバスケットの顧問と言いましたが、バスケット部を指導していますけれども、今、学年によってその質というのは本当に違います。今の現1年生、今度2年生に進級する子供達というのは非常に扱いにくいです。何を言っても無関心、それから、部活中でも他の事を考えている、そういう全然集中していないんですね。

でも、今年卒業した今の3年生は、すごく、1年生の時はそんなに目立たなかったんですけども、去年1年間というか、3年生になってからは、事件があったというのも一つのきっかけかも分かりませんが、すごく変わって、いい方向に変わって、3日前も、その卒業生達と一緒に焼肉を食いに行ったわけですけれども、焼肉を食いに行ってもええなという、そういうような子供達です。もちろんお金の方は我々が負担したんですけども、子供達は、ただで飯を食いに行けるからついて来たというのではないんですね。その子供達は、「いや、僕らもお金持つとるでえ」と言うんですよ。私は現役のものには冷たいんですけども、卒業していったものとか、3年生を引退したものとか、部活を引退したものには、その子達が下級生のために練習に来るといって、ジュースを買ってやったりするんですけども、だけど、そのジュースが目当てで来ていないんですね。最初はジ

ユース欲しさに来ていたかも分からないけれども、最後の方になると、「おい、ジュース買えよ」と言ってお金を渡しても、「いや、僕らお金持っとるからええでえ」と言うんですね。そういう姿を見ると、子供達が悪くなっているなんていうことは全然言えない、もうまったくいい子です。すごくいい子です。あの事件があってそういうふうに変ったのか、その前からそんなに悪くなかったのか、そこらへんは分かりませんが、だから、大多数の子供はいい子です。で、色々なことを考えています。

最後になりますけれども、その中学校3年生のバスケット部のキャプテンが文集に書いているので、すごく印象的だったのは、その卒業する3年生の1級前ですね、1級前のバスケット部というのは、今は高校1年生ですけども、4人しかバスケット部の人間がなくて、必ず2年生、下級生ですね、今年卒業していく3年生がそのチームに1人は絶対入らないと、チームが5人揃わないという状態ですから、もう弱いんですね、すごく弱いチームでした。だから、公式戦では1勝も挙げられなかったわけですね。

それで、今年卒業していくキャプテンの文集には、僕達卒業していく3年生がここまでがんばれた、要するに、新人戦でも優勝、それから、夏季大会でも優勝できたのは、1級上の先輩達の4人の姿、あれだけ下手くそな先輩達が一生懸命、下手くそなのに一生懸命やっていた、その姿があったからこそ自分達は優勝できたんやということを書いていました。

それだけ、周りを見れる、人の事を考えられる、そういう子供が現にいるわけです。大多数の子供は本当にそうなわけです。そういう大多数の子供と、本当にごく一部の子供の心というのを、見分けをつけるというのは非常に難しい、どういうふうにしていったらいいのかというのは本当に難しい。その難しさを克服していこうというのが、今の所、私の心の中というか頭の中にあるのは、やはり子供と一緒に遊ぶ、これしかないのではないかなと思います。現に昨年、私の子供が生まれまして、これから10年先になった時、うちの子供が中学校に入るような時代になった時には、本当に今のまま続けてくれないように、逆に、もっと明るく楽しい時代になってくれることを望んで、できるだけ、親のネットワークといいますか、同世代、自分の子供と同じぐらいの親の人とコミュニケーションをとって、親の集団を作っておいて、そうしたら、何とかかなあというような事も頭においています。とりとめのない話になりましたけれども、以上です。

深川 ありがとうございます。下野さんは、学校の現場に勤めておられまして、そこから子供を見る目というものを、ご自身で大体考えておられたと思います。基本的には、子供は昔と変わっていない、皆、いい子供だという前提に立ってですね、ごく一部の子供達が、やはり問題を起こしてくる。だけど、どうしてそうなったのかということはよく分からないという問題の指摘でありました。で、子供と一緒に遊ぼうというのが、これから

の対策、未来に向けての対策だということもおっしゃっています。確かにこの頃の子供達はですね、集団で遊ぶということがほとんどできない状況であります。

これも、色んな考え方がありまして、小さい時から家庭でそれぞれ個室を与えてもらう。それは、子供の独立性とかという自立心を養うためにはいいことかもしれない。しかし、それが今度は反面ですね、集団生活の人間関係を作っていくという面では非常にマイナスに作用している。これも結局、もう少し突き詰めていくと、この近代文明が発達してですね、特に日本が豊かさで便利さと自由さ、そういうものができてきたおかげで、そういう個室を作ったり、子供に対する教育の考え方も変わってきたんだろうと思います。

したがって、三重県でしたかね、ある小学校が1か月ぐらい、山の方の村へ集団的に行きまして、体験学習みたいなことをやったことがあります。その時に、その都会の子供達は集団での遊び、今、下野さんがおっしゃっていた鬼ごっことか、缶蹴りとか、縄跳びだとか、そういうことの訓練が全然できていなくて集団で遊べないんです。それから、虫に触るなんてとてもできないんです。それから、ヒヨコですね、ヒヨコも、どの程度でつかんだらいいのか、色んな視覚教育で疑似体験はしていますけれども、現実にそういうものをつかんだことがないから、そういうことができない。だから、牛に触るようになったのに3日位かかったというわけですね。これは、やはり子供達の育っていく環境が随分変わってきたと思うんです。

私どもの子供の頃は、小学校から帰ったら、小野さんはずいぶん勉強をなさったそうですが、私は全然勉強をしなくてですね、カバンを放っぼり出して遊びまわっていました。(笑い) 近所の柿の実をとったって別に怒られもしなかった。近所の人達がですね、屏の外に出ている柿の実は近所の子供達のものだと、柿の上の方は鳥達のものだと、自分達は屏の中のものだけ食べたらいじゃないかと、そういうことが行き渡っていましたね。だから、ガキ大将が柿の実をとったってなんとも言わなかった。ところが最近、そういうことをすると窃盗だとか、色んなことで少年院へ送ったりしていく。その対応もちょっとおかしい、ちょっとギスギスしているような気がします。

それで、なぜ、そうなったのかというのが大変問題であります。先ほど小野さんが、修身というのが昔はあった、それから、アメリカにはキリスト教とか、そういう宗教があったとおっしゃいましたが、ただ、アメリカの高校ですね、3,200名ちょっとのマンモス高校ではですね、全生徒に金属探知機をくぐらせています。空港でやっているでしょう。何を持っているか分からないから、全然生徒を信用していないから、まず登校したら、金属探知機をくぐらせるんです。そういう形で全部、ボディチェックをしていって、今、アメリカでは年間、学校を舞台にして発生している犯罪件数が22,000件を超えていたと思うんです。それから、強盗・強姦、暴力事犯が4,400件を超えていたと思います。そういう状況です。

これは実は、アメリカという国はキリスト教がありますが、日本は宗教がありません。あるけれども、皆、個々バラバラであります。ニューヨークで今問題になっている、ニューヨークのレストランですね、教会を中心にした半径4キロメートルの範囲内にあるレストランは、昼間は絶対にアルコールを出さないんであります。それは、なぜかということ、ニューヨーク市の条例で決めているわけでもなんでもない。これは、市民の意識がそういうふうになっている。これが、やはり宗教なんです。法律でも条例でも何も決めていないんだけど、とにかく、教会から半径4キロメートル範囲内のレストランは、5時以降でないとアルコールを出さないんです。このライラは、朝からビールを飲む人もいますがね。(笑い) これは、宗教がないからいいんでありますが、ただ、そういうアメリカであってさえですね、今申し上げましたように、少年事件が非常に多発している。だから、宗教があるからとか、修身がないからとか、それも影響していると思いますけれども、だけど、やはりそれだけが唯一の問題ではない、何か基本的な大きな問題があるような気がするわけでありまして。その辺で、これからどうすべきかという問題もございまして、これは一応、パネリストの皆さんに全部しゃべって頂いた後で、フロアの皆さんからご意見を伺いたいと思います。

マスコミの方が、先ほど下野さんは、詳しいとおっしゃいました。ただ、マスコミというのは、ちょっと害のある場合もありまして、須磨の事件の担当の弁護士さんは、実は私は人権擁護委員をやっています、人権擁護委員の人達の研修に担当の弁護士さんと呼んで話を聞こうと言ったんですが、忙しくてとてもだめで、私は大阪弁護士会のものですから、大阪弁護士会の少年問題の担当の副委員長を呼んで話を聞いたわけですが、彼が言っていました。

あの須磨の事件を担当している弁護士さんは、神戸弁護士会の少年問題担当委員会の委員長さんと副委員長さん、それから、前年度の委員長さんと副委員長さん、この4人がやっているんですが、かわいそうに、仕事が全然だめになった、お手上げだと言うんです。なぜかということ、マスコミ攻勢といやがらせの電話で本職ができない。なぜ、そんなことになるのかなという問題があります。あの先生方も、それは、やりたくてやっているわけではない。少年問題担当委員会の委員長・副委員長でありますから、やはりやらなければならないとやっておられるんですよ。だけど、その事も考えずに、いやがらせの電話がしょっちゅうかかってお手上げだということをおっしゃっていました。

そんなこともありますから、そういう社会の一つの意識といいますか、その辺の所も大変問題だろうと思いますし、下野さんがおっしゃったように、子供は大人の心をよく知っている、この大人の姿を見て子供が悪くなっていくんだと、そういう大人の世界の、その社会の色々な状況が子供に反映して行って、そして、こういう問題が起こってくるんじゃないかという、問題点の指摘をして頂いたわけでありまして、大変根の深い問題でありま

す。また後で議論をしますが、皆さん方も、それじゃ、未来に向けてどのようにしていったらいいのかということも、ぜひご意見を出して頂きたいと思います。次、それでは、北代さん、お願いを致します。

北代 子供の心、大人の心ということで、昨日、テーマを聞かされたんですけども、それを聞いた時に、頭の中が一瞬真っ白になってしまって、何を話していいか分からなかったの、ちょっとそれるかもしれませんが、自分自身の事をちょっと話してみたいと思います。

いつ頃からだったんでしょうか。考えてみると、もう1才ぐらいの時には、すでに傷ついていたんですね。訳もなく怒られたりして、ひどく悲しかったり、何かそういうことを結構沢山憶えているんですね。3才頃になったら、もう音楽、童謡というんですか、童謡を聞いてすごく心がなごんだことを憶えています。小さな子供でも、確かに心というか、自我というか、あるんだなあというのは、今でも自分の事を思い返して思うんですね。子供の時から、子供を傷つけるような大人にはなりたくないというか、ずっと、そう思ってきました。

それで、また自分の事になりますけれども、うちは転勤が多かったんです。それで、小さい時からずっと転校してきました。小学校は3回なんですけれども、3回のうちの1回は、1学期だけしか行かなかった学校もあります。そんな事で、山形に行ったり東京に行ったり、色んな所に行きましたので、言葉が全然違ったりとか、いじめにあったりとかもあったんですけども、その時に子供心に思ったのが、とにかく、笑っていよう、何があっても笑っていよう、笑っていたらそのうちいじめられなくなるというか、忘れてくれるというか、すごくそう思ったんですね。何があっても、もう初日から笑っていたんです。

それで、後で聞いた話ですが、「いじめてもいじめてもいじめがいがいがないから、もうやめちゃったあ」とかいうのは、だいぶ後から聞いたんですけども、でも、本当はすごく傷ついていたんですね。笑ってはいるんですけども、やはり傷ついていたというか、傷ついていた心を自分で、そうじゃないというか、すごくそうやって積み重ねてきたような気がするんです。

それで、中学校になった時に、中学校1年生の4月ですか、図書館に行って、SFという本に出会ったんです。その時はSFという言葉も知らなかったんですけども、その宇宙の大きさというか、すごくそれに魅かれまして、あっ、そうなんだ、色んなことがあっても、例えば、いじめにあったりしても何があっても、宇宙を見たらすごく小さな事なんだ、そんな小さな事で悩んでいたらおかしい、悩んじゃいけない、空を見たら忘れられるというか、すごく思ったんですね。

それで、その中1ぐらいから、もうSFにのめり込むと同時に、いつも空を見て、行き

も帰りも空を見て帰るような生活をしていたんですね。段々そういうのでのめり込んでいくにしたがって、中1ぐらいから、変人と言われだしたんですね。だから、周りの人達とは、ちょっとずつずれてきたというか、周りの人達と会話はしているんですけども、例えば、その時流行っているもの、歌手だったとか、流行っているものがいっぱいありますけれども、そういうものを話しているグループには、何かまざらなかつたというか、それで、段々段々離れていって、変人だとか、天然記念物だとか、そういうふうに言われてきたんです。

それで、そういう中でも転校を繰り返して高校になった時に、明らかに、あっ、周りと違うんだ、というのをすごく感じまして、本当の自分を出したら誰も受け付けてくれなくなるというか、例えば、宇宙が好きとか、科学が好きとか、そういうものを出したら入れてもらえないんじゃないかというのがあって、それはそれで、自分で自分を守るといって、周りとも会話は普通の会話、いつも笑って会話をするといって、だから、誰かが右に行こうと言ったら、本当は左に行きたいけれども、じゃ、右に行こう。行きたくないのに、どこかに行こうと言ったら、それも、言っちゃいけないんじゃないかという思いもあって、そのままついて行ったりもしていました。

それで、高校時代が終わって大学が来た時に、本当になんていうのかな、周りとは違うのかな、すごいショックを受けたんですね。だから、18にもなっていたんですけども、結局、中学ぐらいの心のまま大学生になってしまったような、そういうすごいカルチャーショックがありました。周りを見ると、皆、例えば、お化粧もしてきれいに着飾ったりもして、色んな話題、ボーイフレンドの話とか、色んな事を話しているんだけど、私はそういうものはまったく興味がなくて、やはり本当に話したいのはもっと違う事なんだと、宇宙の事だったりとか、もっと何か違うものを話したいという思いがあったけれども、あまりにも遠いすぎて、話しても誰もとりあってくれないような感じで、結局、自分で自分をしめていっちゃったといつか、何ていうのか、話せない状況に追い込んでいっちゃったといつか。

でも、18の時には痴漢にあたりして、男の人というのがもう信じられなくなって、男の人との会話が、その時点でほとんどできなくなっていました。女性とは話していたんですけども、本当に言いたいことは何一つ言えないで、結局、後で落ち込んだりとか、悩んだりとかして、でも、顔では笑っているから、周りのお友達は、いつも言いました。

「いつもいいねえ、悩みが何にも無くて、いつもニコニコ笑っていて、いいねえ、そんなふうにニコニコ笑って生きていけたら幸せだねえ」と言われる度に、一人になるとすごく落ち込んでいました。そうじゃない、本当はそうじゃないんだ、言いたい事がいっぱいあるけれども、言えないといつか、男の人ともしゃべれないし、で、この先、卒業したらどうしようかと、世の中には男の人と女の人しかいないのに男の人にはしゃべれない、

女の子には本当に言いたい事が言えないというので、21、20ぐらいかな、20ぐらいの時には、自閉症のような感じになっていて、本当に閉じこもってしまうというか、ただ、人から見たらそれが分からない。だから、転校してきたせいもあって、うまくカモフラージュしてしまう自分がいたんですね。カモフラージュにカモフラージュを重ねていて、本当の自分になったら、何ていうのか、どうしようもないというか、それで、しまいとその境目が分からなくなってしまったというか、本当の自分は何だろう、本当の自分はどこにいるんだろうというか、そういうので、すごい悩んだんですね。自殺も考えた事があるんです。もう何度も考えました。

何でそう思ったかといったら、人と本当の話というか、かかわりは、自分は一生持てないんじゃないかと、すごく思ったんですね。どうやって話していいのかも、その時はもうすでに分からなくなっていて、普通の会話はできるんだけど、本当に言いたい事とか、話したい事とかが言えなくて、それで、そんなだったら、他の人は何を考えているんだろうというか、何か自分と全然違う生命体がいるというか、だから、自分は何だろう、本当はこの宇宙にいてはいけないんじゃないか、ここにいちゃいけないんじゃないかというか、いること自体が間違っているんじゃないかというか、段々そんなふうに考えていて、もう死ぬ一歩手前ぐらいまで、20かな、21かな、行ったことがあるんですね。

ちょうどその時に、たった一人だけ、先輩ですごく信頼していた人がいて、信頼しているにもかかわらず、本当の事は言えなかったんですね。ただ、その先輩の考え方とかにはすごく共鳴していて、あっ、本当に話せたらいいなあ、と思っていたんですね。その先輩に相談できたらいいなあ、その自殺まで考えた時に思ったんです。

ところが、すごく些細なことでけんかをしていて、言葉ももちろん、その時はちゃんと言う事ができなかったのも、ますます溝が深まって、もう半年ぐらい話せない状態になっていたんですね。それでも話したいと先輩の事を思った時、その3日後ぐらいかな、先輩が自殺したんです。自殺したというのを、その先輩は大学を卒業して大学院に行っていたんですけれども、大学院の方から大学を通して私の方に入ってきたんですね。

その先輩は自殺したんですけれども、「一番仲が良かったあなたは、何か知らないのか」と言われて、実際のところ、半年も音信不通になっていたのも何も知らなかったんです。その先輩はいつもも言っていたんです。「死ぬなんことは最低の人間のすることだ」と、だから、その先輩が死ぬなんて事はあり得ないと思っていたんです。ところが、実は死ぬほど悩んでいたんですね。だから、そう思った時に、またすごいショックを受けて、自分をもっと自分を乗り越えていって、話したいという気持ちを優先して、その先輩の所にとんでいいたら、その先輩と本当の話ができたんじゃないか、そして、その先輩も助ける事ができるんじゃないか、絶対助けられたんだと、すごく思ったんですね。すごい罪の意識にかられて、あゝ、私が悪かったんだっていうか、今度、本当にますます、あっ、もう

これは死ぬしかない、先輩の所に行って死んで話すしかないというか、何かすごくひどく思い詰めていたんですね。

そんなある日、フッと空を見たんですよ。その時は空も見ることを忘れていて、その時に、すごくきれいにまたたいていたんですね。その時に、あっ、そうなんだ、空があるんだ、自分には宇宙が見てくれたんだ、何かこんな事で死んじゃいけないというか、スーッと何かをとれたような感じがあって、あっ、生きなくちゃいけないんだというか、強くそう思い出して、それからですか、自分を変えなくちゃ、このままじゃいけないんだ、このままじゃしょうがないんだというか、何かすごく目が覚めたような感じになって、ちょうどその時に、大学の心理学の先生達が組織している「人間関係研究会」というのがありまして、そこのエンカウンタースクールというのにたまたま出会いまして、あっ、これだ、これしかない、これに行ったら自分が変わる、話せるようになるというか、すごく瞬間的に思ったんですね。本当はそういう所に行くのはすごくいやだという気持ちがあるんだけれども、どこかで行かなくちゃいけないというのがあるって、これを逃したら、もう他にはないというか、そういう思いがあって行きました。

それで、行って、はじめは、セッションとか色んなことがあったんですけども、知らない人同士がグループになって色んな話をするわけですが、20数名ぐらいいて、それで、ファシリテーターという促進者という方がいらっしゃるんですけども、その方は何もしないで黙って見ているだけなんです。そういう輪の中において、もちろん私はしゃべれないのに、ましてや、そんな輪の中で話せるわけがないし、隣に男の人がいたりしたら、もうとてもじゃないけれども話せないというのがあるって、その時は、とにかく、その場にしようというか、いなくちゃいけないという思いでジーンとしていたんですね。本当はもう逃げて帰りたいくらい、そういう思いがあったんですけども、それをジーンと抑えていて、何かがあるかもしれない、何かがあるかもしれないと思って、4日間か過ごしました。

それで、一番最後の日に一人の男の人が私に言いました。私はその時、奇怪な、変な子というので、きっこちゃんとあだ名が付けられていたんですけども、「きっこちゃんは、いつまでそうやって黙っているんだ、黙っていたら何も分からないじゃないか、君は、黙って周りの人を見て色んな事を感じているのかもしれない、色々考えているのかもしれない、あの人はこういう人なんだって君は分かっているかもしれない。でも、僕は人の言葉でしか人を理解することができないんだ。だから、僕は君の事がまったく分からない、ウンでも何でもいいから一言でもいいからしゃべれよ」と言われたんですよ。

その時に、あっ、そうなのか、しゃべらないと分からない人がいるんだと、その時初めて気づいたんですね。というのは、なんていうのかな、あまりにも自分の事だけを考えていて、自分で人を見て、人の事を洞察するというか、だから、周りの人も同じように、自分を見て洞察してくれるもので、できるもんだと、すごくどこかで思っている所があって、

だから、話し掛けてくれたら話せるのという思いがあったんだけど、そうじゃなくて、自分で話さないと、人の言葉によってでしか分からない人もいるんだという事が、すごくその時に分かって、あっ、そうなんだなと思ったんです。でも、思ったからといって、すぐに話せるようなものではありません。そこから戦いが始まったんですね。あゝ、話さなくちゃいけないんだと。

それで、そのグループのセミナーが終わって、地上に戻ってくるというか、そういう感覚だったんですよ。私にしたら、もう雲の上の世界に行って帰ってきたような感覚で、それで現実に戻ると、まったく何も変わってなくて、あゝ、変わっていない、どうしたらいいんだろうと思って、まとも、そのセミナーに参加しました。3回ぐらい参加して、その時に、何かちょっとずつ話せるようになったんですね。

第1回目のそのセミナーの時に同じグループにいた人で、女性恐怖症という方がいらっしやったんです。社会人の方だったんですけども、もう女性と隣合わせになっただけで何も話せないという方がいて、あゝ、私と似たような人がいるなあと、その時はそれだけだったんですけども、3回目にまた偶然、そこで同じ所に参加していたんですね。その人と、あっ、来たんだねみたいな感じで、お互いにもう頷いていて、最後には、ちょっとだけ話せるようになったね、という感じで会話を交わせたことが、すごく印象に残っています。

それから、地上に戻ってきて、その時に、「右に行こう」と言ったら、「うん、いいよ」と言っていたのを、「右に行こう」と言った時に、「ごめん、私、左に行きたいから左に行ってもいい？」と、本当に小っちゃな声でおそろおそろ言いました。そうしたら友達が、「何だ、いいよ、左に行ったら私は右に行くから」と。それで、じゃ、バイバイということになって、あっ、なんだ、こんな簡単な事だったんだ、こんな簡単な事が言えなかったんだ、何か言っても別に友達は傷つかないんだ、私はこっちに行きたいよと言ってもいいんだって、すごく思いました。あっ、そうなんだって。じゃ、ちょっとずつ言ってみよう、言ったら変わるかもしれないと、それから、ちょっとずつ変わってきたんですね。

そうやって、ちょっとずつ変わってきた時に、山と出会いました。山と出会うというか、私は以前、小学校の4年生から中学校の2年生まで、山形の東根市という所にいたんですけども、その時に窓を開けると月山が見えたんです。子供心に、あゝ、なんてきれいなんだろうと、もうどんな絵を見るよりもその月山を見るのが好きでした。特に雪をかぶった月山が好きで、知らないうちにそこで、たぶん自然が好きという気持ちが培われていたと思うんです。

でも、そこを離れてからはずっと都心で暮らしていたので、そういう気持ちすら忘れていたんですけども、「山に行こう」と、ある日言われて山に行った時に、あっ、山もいい、山も好きだ、山があったんだ、空だけじゃない、山もいいと、すごく思って、それか

ら、何か山に登るようになったんですけれども、でも、順序を踏んで登るということを知らなくて、いきなり山に行ったのが、つるぎだったかな、大きな山だったんですよ。山の知識がないから運動靴で行ったんですね。それで、もうひどい目にあいまして、もう足はガクガクで、もう本当に歩けないぐらいになって、一緒にいた方に山ほど迷惑をかけたんです。

それで、そうだ、登山靴からやはり揃えなくてはいけないと、本屋に走って登山靴から色々揃えました。揃えたところで、その時に、何ていうのかな、人とはちょっとずつ話せるようになったけれども、今度は、やはり自分の事ですごく悩んでいる事があって、山に登ろう、山に登ったら何かが見えるかもしれない、もし、山で命を落としたらそれまでの人生だったんだと思って、憧れていた穂高に行きました。

今考えたら、すごく無謀な事だったんですけれども、時期が10月だったんですが、自分では大丈夫だと思って、穂高の中腹というか、穂高に登る手前まで行ったんですけれども、その時に、先発隊というか、先に登った方が皆さん降りて来られたんですね。「上は雪が降っているからだめだよ」と言って、慣れている方達が皆さん降りて来られたんです。でも、私はこの日しかないんですね。だから、その日登らなかつたら、もう後はないというか、すごく思い詰めていたこともあって、私は、登りたい、登らないと先が分からないというのがあって、ちょうど1グループだけ登るグループがあったので、「連れて行ってください」と言って、穂高の奥穂・前穂と登ってきました。ちょうどその時に雪が降っていたんですけれども、上に行ったら止んだんですね。

それで、装備というか、自分では本を読んで十分に揃えてきたつもりだったんですけれども、実は落し穴があって、その雪が降ったという事で、小屋泊りの用意しかなかったんですけれども、小屋泊りの人達が、もう小屋を閉鎖して下に降りた後だったんですね。小屋はもう閉まっていて降りるしかないという事になって、じゃ、強行軍だから降りましょうと降り始めたんですね。その時に、私は実は新しい靴を履いていたので、足が痛くて、小屋までだと思ってがんばってきたんだけど、あゝ、降りるのかと思っちゃって、でも、「降りないと死んじゃうよ」と言われたので、もう降りるしかないと降りて行ったんですけれども、途中で暗くなるし、懐中電灯を持ってきても灯かなかつたり、ヘッドライトを持っていなかつたりで、もう周りの人に怒られながら歩いていたんですけれども、夜の8時か9時に倒れてしまったんですね。私は、で、「どうしたんだ？」と言われて、「すみません、足が痛くて一歩も歩けません」「足を見せてみる」と言われて、もう両足がパンパンに腫れていたんですね。「どうして、こんな事になるまで黙っていたんだ」と、またひどく怒られて、それで、たまたま、そのグループがお医者さんと看護婦さんのグループだったので、注射を打ってくれて、痛み止めを飲ませてくれて、「30分したら効くから、もう降りないと死んじゃうから」と言われて、迷惑をかけながら下まで降りてき

たんです。その時に、あっ、生きて帰ってこれたんだ、だから、やっぱり自分の思った通りに生きればいいんだという、皆さんには迷惑をかけたんですけれども、何かすごく、そう思うものがあった、やっぱりがんばっていかうみたいに思いました。

ちょっととりとめなくて申し訳ありません。それから、その時広告代理店に入っていたんですけれども、仕事も、それからすごく一生懸命やりだして、すごく楽しかったんですね。楽しかったために、朝も昼も夜も忘れてというか、何ていうのかな、時間があってないようなものなんですね。だから、楽しくてのめり込んでいくうちに、仕事を1時までとか2時までとか、朝方ですとか、していたんですよ。スタジオなんかに入ってしまうと、昼か夜か朝か分からないんですよ。それでやっているうちに、夜ご飯を抜いちゃったりとか、終電がなくてタクシーで帰ったりとか、そういうことが続いたりして、たぶん知らないうちに、何ていうのかな、心が痛いって言っていたと思うんですよ。

そういう気持ちにも気が付かなかったんですけれども、そんなある日、これも突発的な事なんですけれども、ポートピアランドで、すごく風の強い日に、風が強いために持っていたものを落としちゃったんです。それを拾っていたら、こんなような、これぐらいのテーブルが飛んできたんですよ。私には机は見えなかったんですけれども、しゃがんでいたら、ここに机が当たったんです。友達の証言では、そんなものが飛んでくるなんて思いもつかなかったというか、渦巻きのような強い風が急にきて飛んできたらしいですけれども、救急車で運ばれて、頭を打っているということで色んな検査をして、結局、何でもないといい事で帰されたんです。

それで、帰されたんですけれども、それから2~3か月後ぐらいからひどい頭痛に悩まされて、もう朝も昼も夜も夜中も、ずーっと痛みだして、それで、病院に行ったんです。病院に行ったら、検査に引っ掛かって、阪大病院の脳神経外科に行ってくださいという事で行ったんですね。結局、MRIとか器械に入って、それは実は、脳腫瘍か何かの検査だったらしいですけれども、それで、帰ってきてから、たまたまテレビを付けたら、こういう器械に入って脳の検査をしているのは脳腫瘍の検査だということをやっています、あゝ、そうなんだ、もしかして頭を打ったりして、脳腫瘍というか、血のかたまりとか何かかできているかもしれないから、こういう検査を受けたんだ、もしかしたら、これで死んじゃうかもしれないんだって、またその時思いまして、でも、死んだら死んだでいいやというか、でも、もし、それで何でもなかったら専門学校に行ってみようとか、すごく思いまして、その時に興味のあった、インテリアコーディネーターというものに興味がありましたので、もし、何でもなかったらそこに行ってみようという思いがありまして、検査結果を聞きに病院に行ったら、何でもなかったんです。何でもなかったんですけれども、「後遺症として5年間ぐらいは頭が痛みますよ」と、「5年間経ってそれ以上頭が痛かったら、また検査を受けてください」という事で帰されたんです。後遺症は5年でもうピツタシ痛

みは止まりました。

その、あっ、助かったんだっていう思いがあって、その年かな、次の年かな、コーディネーターの学校に行きました。広告代理店にいたので、昼間だけ抜けさせてもらってお昼に行ったんですね。それで、夜は遅くまでしていたので、そういう学校へ行きながらそうやっていて、コーディネーターの仕事も、その会社でも少しさせてもらったりして忙しい生活をしていたんですけれども、そういう時にライラセミナーに出会ったんですね。

ライラセミナーに出会って余島に来た時に、何かまた、すごく衝撃が走ったんですね。何ていうのかな、何が衝撃だと思ったら、時計も何もなくて、その時はもう時間に追われていた生活をしていましたので、時計も何もない、テレビも新聞もない、そういう時間がすごく心地よかったですね。

その時に、何か色々すごい感じるものがあった、例えば、土の上を歩くというのが、あゝ、なんて久しぶりなんだろう、久しぶりというか、忘れていた、あっ、土の上を歩くとこんなに気持ちいいもんなんだという感覚を忘れていたというか、それとか、木の香りとかぐと、こんなに心地いいんだっていうか、海の音とか、その自然の中にいる心地よさというのか、そういうものを本当は自分は求めていたんだ、自分というか、自分の体が求めていたんだというか、何かすごくそういう思いにかられたんですね。すごく衝撃だったんです。

ライラは2回来たんですけれども、2回目は、テーマが愛だったんですね。それも、すごく心に響くものがあった、あっ、そうなんだ、愛なんだ、愛があれば全ては救われるというか、子供も大人も愛が足りないんじゃないかというか、愛で全てが解決するといったら変ですけれども、とにかく、愛が足りないんじゃないかというのをすごく思いました。

その時に、私の中に宇宙がテーマというのがあったので、宇宙が好きだというか、宇宙を愛しているというか、すごくそういう思いが大きくなって、その時に、あっ、自分が今ここにいるのは、そういう事を感じるためにいるんだというか、将来につながるためにそういう事を感じているんだというか、すごく思ったんですね。

そういう事があって、そのあと前後して、私自身の事ですけれども、病気とかなんかしたりして、その度々に、例えば、ある日は匂いが失われたりして、匂いの感覚というのか、その匂いの感覚がすごく大切なんだというか、ちょっと言葉が足りませんけれども、ある日突然に匂いがなくなっちゃったんですね。病院に行ったら、急性蓄膿症だとか言われて、何日かしたら戻りますよと言われたんです。

その時に、自分の中ですごくびっくりしたんですけれども、あっ、匂いのないのもいいもんだ、これを感じてみようという思いがあって、その匂いがいまま、梅田とか、そういう交通量の多いところを歩くとすごく快適なんです。あっ、そうなんだって、本当は車が走って見えるんだけど、その排気ガスとか何も感じないというのは、それだけで、こんなに気持ちの安らぐものなんだ、こんなにいいもんなんだっていうのを、すごく感じ

たんです。

そういう所はよかったですけれども、実際、花屋さんに入ってみたら花屋の匂いが無い、ステーキ屋さんの前を通るとステーキの匂いが無い、喫茶店に入るとコーヒーの匂いがなかったりして、あっ、匂いって、すごく生活に密着していて大切なものなんだというか、すごくそういう事を思いました。例えば、オナラの匂いがありますよね。例えば、自殺しようとしている人の前に誰かがすごいオナラをしたら、その匂いだけでその人は笑って助かるんじゃないかって、そんな事もその時考えたりして、その時、匂いの感覚はすごいと思って、その後、色々病気をしたんですけれども、その度に自分の、例えば、子宮は大切だとか、内臓は大切だとか、自分の腎臓はここにあるんだとか、色んな事を考えて、何ていうのかな、人間が愛しいというか、すごくそういう思いにかられたんですね。大人も子供も人間が好き。だから、大人も子供も、もっと仲良く深くかかわっていきたい。何かもっと皆、色んな感覚を忘れてるんじゃないかというか、すごくそういう思いがあったんですね。例えば、自分の事でも、自分が、例えば、歩けるという事を、皆、当たり前歩いたり呼吸したりしているけれども、そういう事だって、本当は自分の体が丈夫でちゃんと機能しているから、そういうふうに歩けたり、呼吸ができたり、手が動いたり、話せたり、聞こえたり、目が見えたり、大人も子供もそうなんだけれども、そういう事から、もっと皆考えたら、自分も大切だし、相手も大切だし、自分も好きだし、相手も好きだし、子供も好きだし、大人も好きだし、そういう大人も子供もという、そういう枠もなく、生きているもの皆好き、だから、宇宙にいるものが全部好き、皆宇宙とつながっている、すごくそういう思いにかられました。

だから、これから先、私は、大人とか子供とかお年寄りとか、そういう枠なく、皆好き。だから、話したい、付き合いたい。それでいて、例えば、今皆と一緒にここにいて、でも、宇宙も好き。だから、手を広げてフッと力を抜いた時に、宇宙のその生きている鼓動を感じたりとか、あっ、宇宙と一緒に今存在しているんだという、何かそういうものを全身で感じられるような、そういうとぎすまされた人間になりたいなあと思っています。何かとりとめもなくごめんなさい。以上です。

深川 ありがとうございます。北代さんには、ご自分の成長過程を振り返ってですね、子供の心の世界の一端をご紹介頂きました。空を見たり、山を見たり、そして、心のなぐさめを得てきた。要するに、一言でいいますと、どうも、自分以外の、宇宙を含む全てのものが原因になって自分の心が色々変わってきたという、人間の心というのはそんなもんじゃないかなあとということをおっしゃったかっただろうと思います。

これは基本的には、神様と人間と自然と分離した考え方といいますかね、人間というものを一つの物質として見ていて、その色んな部分を分析している、今、近代医学、西洋医

学はその立場だろうと思うんです。例えば、何かの薬を与えると気分が非常に朗らかになったりするというのは、要するに、その物質が原因で、その結果としてその感情に影響が出てくる。ということは、心というのは、そういう色々な刺激の反射的な効果でしかないんだという考え方も、一つ出てくるわけでありまして、まあ、この議論はちょっと難しくなるからやめておきますけれども、とにかく、人間の心というのは、人間以外、人間も含めて自分以外の全てのものからの影響の中で色々な変遷をしていくだろうということの論点の指摘だろうと思います。色々な事を、自分の成長過程を振り返りながらご指摘を頂きました。

後ですね、パネリストの皆さんから、先ほど言い足りなかった事とか、何か補足を、後でまたちょっとして頂きたいと思います。なければそれで結構です。それから、他のパネリストの意見に対して、ご自分が疑問に思ったり、あるいは、将来的にどうしたらいいのかというふうな意見ですね、そういうものの補足をやりたいと思いますが、ちょうど2時間近く経ってしまいました。5分間だけ休憩をいたします。

深川 それでは、ポツポツ始めたいと思います。あと1時間足らずであります。先ほどパネリストの皆さん方にお話を頂きました。もし補足があれば、この機会におっしゃって頂いた方がいいと思います。その後で、皆さん方、フロアのご意見も伺いたいと思います。山本さん、何かございますか。

山本 先ほど、北代さんが、子供も大人も、愛が足りないのではないかとおっしゃっていたんですけれども、私は19期なんですけれども……、その時にも、福祉って何だって……、何か福祉というのは、一番身近な所で行われるというか、自分の家族、だから、自分のおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さんを大切にするという、そういう身近な所から始まるんだという結論に至りました。大人も子供も、お年寄りも、枠がなく皆大好きという、そういう福祉の精神とか、そういう愛の精神というのを、やはりこれからの私達にとっては、すごく大切な事なんだなというのを、また再度、改めて思いました。それぐらいです。

深川 ありがとうございます。小野さん、何かありますか。

小野 皆さんのお話を聞いていて心が洗われるようだったんですが、皆さん、いいお話を聞かせて頂いてありがとうございます。

私の方はですね、一つ、いつか、ちょっと疑問に思っていることで聞いてみたいと思っていたことなんですが、私は実はですね、教員志望だったんです。教員免許は二つ、国語と社会と持っているんですが、いわゆる大学は3回入っておりますので、ずっと大学生だったんです。だから、会社を作った時も大学生だったんですね。で、ずっと教員になろうかなと思っていたわけです。その理由は、僕はあまり物欲がないわけです。何をどうというか、一番困るなあと思ったのは、遊び相手に困るだろうと思ったんです。

じゃ、なぜ、教員になるのをやめて自分で会社をしているかといいますと、教育実習に行った時に、「子供があまり遊んじゃだめだ」という事を、学校の方で言われたんです。教育実習では結構人気が出ましたよ。ただ、校長先生とかから、「生徒とは距離をあけてしなければだめだよ」とか言われてるんです。青年の団があって、こっちに来てくれとかいう、教育実習の段階で呼ばれるのは誉れだよみたいなことを言われまして、僕はいきなり実習で派閥に入るつもりはないですからおかしなもんだなあと思って、その教育実習に行った時に、一番最初に受けた注意がですね、僕は不思議だったんですが、僕は教育実習で来た時にはまだ学生なので、皆さん、私は学生ですからそれはだめなんです。「先生と呼ばせて」と言うんですけれども。僕らは、アルバイトとかで会社を見ているけれども、新入社員というのは灰皿が飛んできますね、このバカがとかいってビョーンと飛んできます。病院なんかだったら、注射1本打ち間違えたら人が死にますから、空気を抜くのを間違えないとかいって、ミスが許されない世界というのがあります。学校の先生というのは教育実習で来る、つまり、インターンですらない段階、今は、インターンの前ですよ、その段階で先生なんです。それで、家に帰ると、子供というのは、お父さんがいますよね、ロータリアンのような社会的な優れたような人物です。優れたというか、あまりいい表現ではないですけれども、もっとかわいらしくていいものだと思いますけれどもね、ロータリアンは、愛すべき存在だと思います。

それで、子供から見るとですね、親だろうが、ロータリアンだろうが、とにかく、学校の先生というのは偉いんです。「学校の先生がこう言ったもん」と言うんですよね。学校の先生よりもさらに偉いのが学校の教科書なんです。

僕は松山なんですけれども、坊っちゃん、夏目漱石のくだりで、英語の発音だとか意味だとかいうのがあります。それで、「先生、こういうふう書いてるぞな」と言われますと、夏目漱石はいつも簡単に、「それは教科書がまちがっている」と言うんです。非常に進歩的な考えです。今ですと、教科書にこういうふう載っているというのを、生徒と先生が同時に調べた場合は、先生は、「ちょっと待ってね」と、絶対に言います。そこまで自信を持っていません。持っていれば大学教授です。(笑い)

それから、僕ら、ある程度、社会に出る時に、同級生が学校の先生になりますけれども、中学、高校とか、専門学校とか、色んな先生になります。そうしたらですね、クラスの時

の、あいつはこのレベルというのを、やはりランクを付けていますから、その中で、必ずしもトップから順番に学校の先生になるわけではないのに、私の場合ではないですけども、子供がですよ、自分が大事に大事にして、自分の会社でも継がそうかというような子供がですね、「お父さん、違うぞね、先生がこういったんだから」と言うけれども、「ちょっと先生、連れてこい」というぐらいのものにはなると思うんですが、それぐらい子供に対して、先生というのは絶対なんです。だから、何かが違う、親が悪い、学校が悪いということは絶対に言いたくないんですけども、だけど、学校社会は本当に何か違うんですよ。とにかく、やれば、がんばれば認めてくれると、それだけ教えてくれればいいものなんです。がんばっても、やりがいがないとか何とかではなくて、何かをやること。

それで、さっき、一緒に遊ぶというふうなことを、先生はおっしゃっていました。それは、ものすごく大事だと思うんです。沢山の人間と遊びますと、人間関係がもろに分かりますよ。例えば、やり鬼だとか、ちょっと戦争をどうかしたようなゲームが多いですよ。駆逐艦だとか、軍艦が、水兵がというのを、男の子はやります。捕まえるとじゃんけんをしたりするんです。なにになにはこれこれに強くというのがあつたりします。人気者が捕まると、皆は我先に助けに行くんです。缶蹴りでもそうです。ところが、あまり人気のない奴だと助けに行かないんです。やはり助けてもらいたいものだから、人気のない奴とはいうのも、それなりに知恵を絞って、今度は袋もののお菓子とかカールとかを持ってくるんです。助けてくれと一つずつあげるんですね。僕は、もうそれで、ずっと自分は隠れていて助けたんですけどもね、途中までゲームにほとんど参加してなくて、皆が捕まると助けていたんです。もらった奴はまだやっていましたけれども。

そんなのがあって、だから、僕はそもそも、教員になりたかったんですけども、教員になると、思ったよりも制約がある。一番僕が違うなと思ったのは、いきなり新入社員で、世間ではボコボコに言われている段階に、今、ちょっとインターンみたいな制度ができてきましたけれども、学校の先生はいきなり先生なんです。で、先生には逆らってはいけないとか、ちょっと押し付け的な所があるなどというのか、残念だなと思います。学校の先生も、「あなたのお父さんは立派なのよ」とか、「あなたのお父さんに、これはちょっと聞いてみたらいいかもしれない」というような事を、もっと言えばいいのになと。家庭訪問までして会っているのに、ちょっともったいないかなと思っているんです。先生が絶対王国の君主なんですよ。それは違うと思う。家に帰れば、もっと、この事だったら、このクラスにはお医者先生の先生がいてとか、弁護士の先生がいてとか、弁護士というのは非常に頭がいいですね、ちょっと話をしてみても、この職業に就いている人は、やはり頭が良くないとかできないかなと思いましたね。(笑い) 一例ですけども、非常に聡明です。このややこしい会議をですね、見事にまとめられる。

僕は、一応、法律ですから、教員にならなかつたら司法試験でも受けてみるかというの

があって、伊藤まことという人がカセットを出して教材を作っているんですが、そういう司法試験を受けるにはこれがいいよと。その中で、憲法とかいうのをうたうんですが、人間て素晴らしいんだというようなことを、それが憲法なんですね。人間はルネッサンス的な事がある。憲法にしても何にしても、まあ、否定的なのは刑法ぐらいなもので、人間というのは随分信じられているんです。どこの国でもそうですね。人というものの未来は、どう考えてもやはり明るいんです。皆は仲良くやりたがっているし、皆は人と話したがつているんです。その中で、どこで規制ができていって、どういうところから人を疑うことを、密告をするとかですね、学校の社会が結構おかしいんですね。それは、子供が悪いのか、親が悪いのか、何かは知らないんですが、教師で何かをやろうとするとそれを抑えるところがある。あくまでも密閉された社会で、先ほど私は、ロータリーは開かれている社会なので素晴らしいなあというふうに言いました。人の話を聞くからすごいなど。でも、人間の本質からしたら、人のいいところを取り入れて、例えば、フグのあの部分を食べたら死んだらいいよという噂ですね。井戸端会議の噂を、やはり普通は取り入れるんです。それがなぜ、どうして、僕らが当たり前の事を不思議に考えるかということ、一般的にどこかでなされていないわけです。その閉鎖された社会というのが、残念ながら、僕は学校だと思いますね。

そういうような事を思った中で、先生が、部活の中でOBには優しくと、非常に私も納得のいくところで、下野先生みたいな先生がいいと思いました。(笑い) 非常に立派でがんばっていらっしゃる方というのがいるので、やはりまだまだ学校社会も信じられるなあと思ひまして、そういう安心できる場所というのが一番好きです。

だから、国の国会議員とかが色々、大蔵省とかという、寂しい話題がいっぱいありますけれども、ロータリアンを見ていると、あっ、日本は大丈夫だと、(笑い) 元気が出てきます。以上、そんなところを補足しておきます。ありがとうございました。

深川 助けてくれる人にお菓子をあげるというのはいいですね。(笑い) あれが発展すると、日銀とか大蔵省になるんだと思います。(笑い) ありがとうございました。

確かに学校というのは、ちょっと違った閉鎖社会といいますか、そういうところがあるかもしれません。インターンにもならない、研修に行った人に先生と呼ばせる。先生というのは色々呼び方がありまして、先に生まれているとも書くし、先ず生きているとも書きますからね。(笑い) 尊敬の意味で使っているかは分からないんでありますが、しかし、確かにちよって変わったところがあって、それで、実業家の方に行かれたそうではありますが、大変いいご指摘だろうと思います。

子供の心を考える場合に、やはり学校というものを抜いて考えることはできないだろうし、家庭という事も抜いて考えることもできない。そういう意味で、この辺の所が大変難

しい問題だろうと思います。後で、今井先生からこの場でのコメントがあるかもしれませんが。もしなければ、最後の日に、「21世紀に向けて心豊かに」という事ですね、全てのまとめをして頂くことになろうかと思っておりますので、その辺の所もお楽しみ頂きたいと思っております。それでは、下野さん、何か補足がありましたら。

下野（笑い）私は、教員ではありません。事務屋でありますので、まあ、それは別においときますけれども、学校が閉鎖的というのは、まさにそのとおりで、私も学校の中にながら、学校の閉鎖性は常々思っています。

私の所の事件は、学校の職員が知る前に報道の方が先ですから、だから、止めようがない状態でしたからオープンになりましたけれども、そうでない場合は、まず止めますね。一番ひどい場合は職員も知らない場合があります。まず担任と校長の間で話で止まってしまう場合、あるいは、それで止め切れない場合は、学年団というのがありまして、学年の、例えば、3年部であるとか、2年部であるとか、1年部であるとか、そのブロックで止まってしまう場合、それでもまだどうしようもなくなると、今度は職員間での話になります。それでいよいよだめになると、今度は教育委員会、それから、警察、父兄を巻き込んだ事になるという、そういう段階、ステップを踏むというのが、ごくごく一般的な学校のやり方だと思います。それが非常に問題であると思います。

それは一つは、教員は子供を信頼したいと思っているんです。それは、やはりわが子以上かも分かりませんね、子供に対する感覚というのは、どんなに悪いことでも、何とかならへんやろうかという思いは、ほとんどの教員が持っています。それは、やはりプロですね。それはプロだと思います。プロだからこそ、言葉は汚いですがけれども、警察に売るとかということではできないわけです。犯罪者とみたくないわけです。何か原因があってそうしたんだってということで、善意に善意に解釈しようとしています。だから、できるだけオープンにしたくないわけです。そこが非常に微妙なところで、これは、本当はオープンにした方がええのにと、僕らが思う事でも、できるだけ中で、まずその子供を呼んで、どうやったんという事をしっかり聞いて、親を呼んで、それで納得してもらえるように努力をするというのが鉄則になるわけです。本当をいうと、もっと、その部分だけでは収まらない地域性、あるいは、子供間の色んな軋轢とかというのはあるはずだから、根元を絶たないと、もう一度繰り返すというのは明らかなんです。

うちの事件の亡くなられた子供の場合も、本当に色んな問題があったわけです。本当はそれは、たぶん地域に返して、こういう状況なんだということをオープンにすれば、こういう事件はなかったかも分からないけれども、やはりそれができない。現に何度も何度も、その殺された子供は中学校にいる間に指導を受けています。親も呼んで。でも、難しいんですね。その場ではその子は納得したような顔をしますがけれども、1週間、2週間も経て

ば、また同じようなことを繰り返しているわけです。学校に見えるのはその部分ですから、本当をいうと、次の日からまたやっているかも分からないですね。分からないけれども、学校に見えてくるのは、1週間後に、またこんなあったでというような話で入ってくる。そこら辺は、非常に難しい問題がありますね。

小野さんの話を受けてそういうことなんですけれども、一つだけ、叱り方も、教師の場合は、先ほども言われたように、ベテランの教師と、それから、今年から新任で来た教師と、まったく同じように同一レベルです。新任の教師ほど学級担任になります。おかしな話ですよ。ベテラン教師が学級担任をやって、その副担任に新任教師が2～3年やるとかいう、そういうシステムはほとんどありません。新任教員がまず学級担任をやりますね。子供に対する叱り方一つとっても、ベテランの先生が、必ずしも100パーセントとは言い切れませんが、少なくとも怒り方が違いますね。

例えば、登校拒否でたまたま学校へ来た子供に対する声のかけ方一つが、やはり下手な言葉のかけ方だと、「朝から来たらよかったのに」という言い方をするか、「よう来たねえと、皆の顔を見に行こうなあ」というような言い方をするのか、「何で朝から来うへんかったん、皆、待っとんのに」という言い方をするか、同じことを言っているんだけど、言い方一つによってもう全然言葉が違う。それは、やはり経験がそういうものを積んでくるはずなのに、その経験のない人がいきなりそういうのに。子供は生ものなただけでも、生ものを腐らせていっているかも分からないですね。ただ、学校側としては、そのフレッシュさというものを一応、子供に還元してあげたいという思いがあって、担任を新任の人にさせるという方向が、大体の所がそういうふうになっているようです。以上です。

深川 ありがとうございます。北代さん、何か補足があったら教えてください。

北代 さっきの、愛の補足なんですけれども、子供も大人もですけれども、生きていることは素晴らしいというか、そういうのをもっと、ちゃんと子供に教えたらいいんじゃないかなと思うんですね。花も虫も木も山も、皆生きているんだよって。その子供も、ただ生きているというのではなくて、目もあって、耳も聞こえて、ちゃんとしゃべれて、心臓があるんだよって、ちゃんと腸があって、胃があって、足もあって、だから、歩けるんだよ、お友達と話せるんだよとか、何かもっとそういうところから教えていったら、皆、愛というか、愛しいというか、そういうのが芽生えるんじゃないかなと思うんですね。そうしたら、相手を傷つけるということも減るのではないかなとか思うんですけれども。大人も、そういう生きているという感覚を、何か忘れてる人が多いような気がするんですよ。だから、ただ生きて、仕事をして、生活をしている。そうではなくて、生きているという

のは、自分が五体満足で、五体満足でなくても、呼吸ができる、心臓がある、だから、そこにて働けるし、コミュニケーションもとれるし、それは本当に素晴らしい事、自分自身も素晴らしい事、だから、自分は素晴らしい、相手も素晴らしい、皆素晴らしいというふうに結び付かないかなと思うんですけども。

それと、小野さんがお話の中で、子供を見ると行く末が知れているとおっしゃいましたよね、ドラエモンののびたはだめだという言葉がすごく気にかかったんですね。(笑い) 何かそうやって決め付けている大人がいることが問題ではないかなと。(笑い)

小野 すみません、以後、気を付けます。

深川 ありがとうございます。今、パネリストの皆さん方から、素晴らしいご意見をそれぞれ出して頂きました。フロアの皆さん方で、自分はこういう意見を持っているという方があればおっしゃってください。はい、どうぞ。

Q 意見ではないですけども質問です。下野さん、いじめの問題について話してくれましたけども、いじめる側が悪いんですか、いじめられる側が悪いんですか、どちらが悪いんですか。

下野 これも、実は議論があるところなんです。教員の研修なんかでもよく取り上げられる問題で、いじめる側が悪いのか、いじめられる側が悪いのか、いじめられる側にはいじめられる要素があるのではないかなとか、いじめる側にとっては、いじているんじゃないという思いがあるとか、だから、どちらが悪いという言い方はできません。子供というのは、中学生まで含めてすごく残酷です。いいか悪いかという判断能力というのは、非常に難しいというか、レベルが低いです。それを、本当は社会が教えていかないといけないと思うんですけども、そういう状況になっていないのが一つ、現状にあります。

僕から言わせると、いじめる側、いじめられる側、さっきも言いましたけれども、それを見ている側というのがあると思うんです。一番悪いのは、その見ている側ではないかなというふうに、個人的には思います。

というのは、その見ている側が、例えば、大人に通報すると、自分が今度はいじめられるのではないかなとか、俺はいじめられていないからいいやというふうに思っているんですね。友達ということも含めて、口では友達と言っているんですけども、あれは友達ではないと、僕は思うんですね。

だから、うちの亡くなった子供の通夜、葬式に、同級生が沢山来て、女の子も泣いていました。男の子も泣いている奴もいました。でも、「そうなる前に、なんでおまえら、止

めてやらへんかったんや」と言って、僕は本気で、「おまえらが殺したん違うんか」というぐらいの気持ちになりましたね。もう中学校3年生の時にはものすごく悪かったですよね。下級生をいじめていたわけですから、使いっ走りさせているし、お金をとっていたかどうかというところまでは、学校はつかんでいなかったけれども、そんなことが現実にはあった。あったら、その連れというのが、仲間が校門前で帰ってくるのを待っているわけですよ。呼び出されて指導を受けているから、それを待っているわけです。待っていて何をしているかといったら、「大変やったなあ」とか言って、慰めているんだと思うんですね。「慰めるなよ、悪いことは悪い言うて、何で言うたらへんのや」というのが、私の気持ちです。それが言えない仲間関係という事だと、私は思います。

いじめは、皆、子供は見ています。どこの事件を見ても、後で報道を見たら、いじめられていたと、皆、新聞のどこかの記事には書いていますからね、絶対子供は分かるんです。大人には、それがいじめなのかどうなのかというのは、なかなか判断がつかない部分なんです。レベルが、子供の目線に下りられないというか、大人は大人の目線でしかものを見ないから、あれはじゃれているんだというふうに見てしまう部分が多いのでね、と思います。答えになりませんが。

Q ありがとうございます。そうしたら私の方から、その見ている側が悪いんでしょう。なぜ、そういうことになってきたのか、その辺は分かりますか。学校の中でどういう状況が出てきたのか。

下野 それは、また非常に難しいですけども、北代さんが自分の体験でおっしゃられましたね。そのうちに通り過ぎるのと違うかと、いじめられている側の子すらそう思う。逆に、見ている側は、自分の所にふりかかってこなければ、まあ、そのうちに何とかなるやろうという部分が強くなっているのではないかなという、それは、たぶん大人がそうだと思うんですね。核家族になっていますから、自分の所の家がよかったらいいんですよ。近所周りとの付き合いというのは、今はそれほど重要視していませんよね。だから、隣のピアノの音がうるさかったら、うるさいなあと言う社会ですね。今だったら、それこそ、都会で鶏を飼ったら怒られるでしょうね。何でこんな時に鶏を鳴かせるんやあと、朝5時頃に鶏が鳴いたら、それは怒ると思いますね。それは、昔は当たり前ですよ。うちの嫁さんの実家はまだ田舎ですからね、この間そこに泊まったら、朝の5時頃に鶏が鳴くんですよ。うわあ、5時やのに鶏が鳴いているわと、あっ、そうやな、昔は5時に鶏が鳴きよったわと。その鶏の声で、最初は、あっ、鶏が鳴きよると思ったんだけど、あっ、そうや、昔は鳴きよったわと思いましたからね。そこら辺の環境の変化、意識の変化ではないかなと、個人的には思いますけれども。

深川 はい、ありがとうございました。はい、どうぞ。

Q 僕は、バットで殴り殺したその男の子とか、例えば、自殺する子の気持ちがよく分かるんですよ。いじめられていたわけではないですけども、何でもかといったら、よく、そうなる前に話してくれればよかったのと言うけれども、話して、何をおっしゃるつもりなんですか。例えば、話して、その子を、どうやっていじめから救うかを知りたいんです。いじめから救うということは、いったい何なのかというのを知りたいんです。その子を助けるって、いったい何なんですか。教育者の人は、よく言いますよね。話してくれれば助けられたのと言うけれども、話してくれれば何を助けることができたのか。今、こういういじめの問題がすごくクローズアップされているけれども、昔からあったと思うんですよ。いじめは絶対なくなるんですよ。それは、たぶんこれから先もなくなっていくかと思うんですけども、その質をできるだけ、今みたいな残酷な形でないようにするために、教育者の人は、いったいどのような策をとるつもりでいるのか、そういう明確な答えが、今は全然ないと思うんですよ。だから、この場で聞かせてもらいたいと思います。助けるって何ですか。

深川 いや、それは、下野さん、ご自分の見解でおっしゃって頂いて結構です。いずれまた、今井先生が明後日、2時間半かけてたっぷりと解説をして頂きますから。

下野 だから、私は教員ではないので、傍観的に私の個人的な意見ですが、話してくれたらというのは、やはり一対一という部分では、いじめは無理です。当事者間同士での、例えば、いじめている子、いじめられている子と呼んできて、「あんた、いじめてたやろ、もうこれからいじめんようにしいよ」と、それじゃ収まりませんね。だから、おそらく学級指導という形になるわけです。それは、第三者、傍観者ですね、その人達を巻き込まないと、そういういじめはなくなるわけです。学級、あるいは、学校です。全てが、そのいじめている子、いじめられている子、その子供の事と違うやろうという事なんです。そんな事をしたら相手は嫌がるやろうと、嫌がる事をして平気なの、そういう現場を見ていて、皆平気なの、そんなんでええんかなという、そういうところを、やはり教師が抑えていこうと思っているんだと思うんです。ただ、そのあやふやな情報で判断は教師はできないんです。だから、タイムリーにならない。現場を抑えれば別ですよ。現にどついているとか、お金をせびっているとか、そんな現場を抑えれば、それは即、指導できますけれども、そうではないわけです。「昨日、こんなんしよん、見たでえ」とかいうのを、昨日、見たでえではいいんですよ。それでもそれが、ずっと1週間前の事が、何かの拍子でパッと出てきて、その情報というのは、すごく不適確な情報というのが、本当にそうだ

ったのかどうかというのは分からないわけです。そんな状態で色眼鏡で、あいつだったらやりかねんなあと行って、そいつを呼んで、「おまえ、やったやろう」と行って、証拠も何もないわけです。そういう周りから聞こえてくる事だけで、「おまえ、やったやろう」と言うのは、もうその子にとっては、もしかしてやっていなかったら、こいつ、俺を見たらそう思う、俺がやったと思うというふうに、常に思われてしまうから、やはりそういうことは、教師側は指導はできないです。そういうちゃんとした証拠があつてでないで、いじめられている側が直接、こうだと言われて、じゃ、その当事者を呼んで、そのいじめている側も呼んで、「どうやったん」というふうに聞いて、お互いの意見を聞いて、それで指導をしていくという。だから、やはり教えてくれないと分からないという、北代さんの言葉を借りたら悪いですけども、言葉で言ってくれないと分からないんですよ。

よく言われるのは、「教師が、子供の目、いつも目や動作をちゃんと見て、それで指導せなあかんよ」と言われているけれども、40人もいてね、40人、やはりずっとは見てられません。で、「一声かけるんやでえ」というのが鉄則になっているんです。「朝来たら、必ず声かけて行きや」と言うんだけれども、それができないくらい忙しい。僕から言わせると、自分で自分の首を締めているんだと思うんですね。

例えば、今、ワープロがありますからね、学級通信なんかワープロで一生懸命打ったり、それから、成績処理といったら、コンピュータの前でコンピュータを叩いたり、もう職員室に入ってポーツとしている事はほとんどないですよ。ほとんどワープロかコンピュータの前に座っている人が大半です。そんなんでええのになあと思うんですね。僕だったら、「必要なことは口で言うて、ノートに書かせて持って帰らしいや、紙の無駄やし」とか言って、「お金がぎょうさんかかるのに、紙代だけでうちの予算の半分とんでいくのだから、もうやめてよう」とか言って。それやったらボール一つでも買いたいのにか思うけれども、紙はボンボンボンボンいきます。学校の紙代といったら、もうすごいもんですわ。あんなアホなことやめたらいいのにと。時間も節約できるしね、労力もいらなしね。

それで、ちょっと脱線しますけれども、ワープロやそんなんは、定形的なのが決まっている時は有利なんです。日付だけ変えて出したらいいとか、名前だけ変えて出したらいいとかいうのは、ワープロとかコンピュータはすごく利点だけれども、学校は違うんです。同じ行事でも、子供が一年変わったら中身の文章はちょっとずつ変わるんです。また一から打たないといけないようなものです。だから、ものすごく膨大な時間がかかるんです。去年の人がワープロで打っていたら、今年の人でもワープロで打たないといけないと思っっているんです。だから、職員会議や何かでも、メンバーが変わっていなかったら同じ事をするんだから、もうそこを端折って、実際にするところだけを話すればいいのに、また一からやるんです。これの教育目標が何で、その効果はどうでとかいう、そこから始まるんですよ。だから、10分で終わりそうなのが2時間ぐらいかかるんですね。

だから、ごつい、本当に職場は忙しいんです。すごく忙しいんです。さぼっているわけではないんです。それは、見ていて分かるんですけどもね。さぼっていないけれども、自分で自分の首を絞めている。だから、うちの教頭が、子供と遊ぶ時間を作れと言っているのは、そこなわけです。遊んでコミュニケーションをとれと。遊ぶというのは、友達になれと言っているのでは違うんです。子供の目線まで下りて一緒に遊ぶことによって、ちょっと表情の暗い子とか、そういうのを敏感にキャッチしなさいという意味なんです。以上です。

深川 ありがとうございます。時間があと20分ですけども、曾根さん、何か。

曾根 兵庫県の淡路島から参加しています曾根です。よろしくお願ひします。今の色々なパネラーの方のご意見とかもお聞きしていて、すごく目から鱗が落ちるところがあります。私自身はその教育現場というのに実際にかかわっていないので、現場がどうだとかいうふうなことは言えないんですけども、今日、私がここに来らせて頂いたというのは、家庭の事情がありましてとても無理な事でした。でも、やはり何かのご縁があって、ここに参加させて頂いているんだと、それは、つくづく思っ、て、ありがたいなと思ひます。

今、現場の話を知っていたので、何か頭がちょっと混乱してしまいましたが、ま、ず、今、テーマが「子供の心・大人の心・ロータリーの心」というのを頂いて、ずっと思っているのは、心というのは、自分自身存在そのものではないかなというのを、すごく感じるんです。人間は心が傷つくとよく言ひますよね。心が傷ついた時に何が傷つくかという、自分自身が傷つくんです。それで生きていけなくなっちゃう。そういうものなのではないかなと思うようになりました。

それで、今、ここに集っていらっしゃる方は、たぶん自分自身というものをしっかりと持っていて、確立したものがあって、地域社会に認められているものがあって、というのは、人間は、自分自身ではとても立って歩けない存在だと思ひます。他人を通してしか自分の事というのは分かりませんよね。こうやってお話をさせて頂いて、私の顔はこちらを見ていますけれども、私がどんな顔をして今しゃべっているのかなんてというのは、自分ではとても見えないことで、どんなふうにも皆さんが感じてくださっているかというのも分かりません。だから、自分では何も分からない自分というのを、他人、ま、ず友達を通して、家族を通して、親を通して、どんどん色々な、ただ、ものを通して存在を確かめ合っていく、確立していく、そういう過程が人生ではないかなと、何かえらうなことを言ひますけれども、そんなふうにも思ひます。

それで、具体的なお話をしたいんですけども、昔というのは、年功序列の社会といひますか、家長制度というのがありましたよね。家長の言うことは白が黒でも、カラスは白

いと言っても白で通る。ですから、そういう意味で、年上の人、年配の人、学校でもそうかもしれません。先生、先生の上の年配の教頭先生、そのまた上の年配の校長先生という方の意見が絶対だったという、そういう価値観があったと思います。これは、社会全てそうだったのではないのでしょうか。それが今は、どんどん崩れていって価値観がなくなって、まず、自分というものは社会に出ると、立場というものでしか意見は絶対言えません。自分の今おかれている、まず、会社なら会社、地域社会における立場でしか、人はものは言えないし、それ以上のものを言っても、なかなか受け入れてはもらえない。それが現実ではないかなと思います。

でも、私は、何かラジオで放送で聞いたことがあるんですけども、大人が、まず、自分の存在というものを確立していない、迷っている、分からなくなっている時代だというふうに、そのラジオの解説の方はおっしゃっていました。あっ、そうなんやなあって、それは、つくづく自分を通してと思います。

どんなふうに思うかという、まず大人は、よく言われるんですけども、家庭崩壊とか言われますよね、ロータリアンの方はそんなことは絶対ないと思うんですけども、ご家庭に入られて、お父さんの立場というのはどうですか。皆さん、息子さんや娘さんと膝を付き合わせて話し合っているというのは……（笑い）たぶんおありだと思うんですけども。

お父さんと子供というのが、まずあかないですよ。家にお父さんがいても、亭主元気で留守がいいというのを、よく言われているように、いてもいなくても同じようなものだみたいな感じのところ、にこやかにアハハッと笑ってられるうちはいいんだけど、それが本当に深刻になってくると、お父さんは帰る家がなくなってという、今、社会問題ですよ。自分はどこに帰ればいいのか、その帰宅拒否症のお父さんが増えて、会社にいる、残業する。でも、会社も会社の立場というのが当然あって、平なら平、課長さんなら課長さんという立場でしか、その自分の座る椅子というのはないですよ。ここにいらっしゃる方は、皆さん、経営者の方でトップの方だからそんなことはない、自分の会社という感じでいらっしゃると思うんだけど、そういう大人がどんどん増えてきて、かといって、家と会社以外の地域社会に出た時に、自分の立場があるのかといたら、たまの日曜日に清掃とか、その程度のものですね。そんなに、地域社会にかかわってというのは、こういうふうに、自分からロータリークラブに入りますみたいな感じでアクションを起こさないと、それも皆無ですよ。普段、お母さんは井戸端会議をしていらっしゃるから、その地域、隣近所との付き合い、自分の立場というのがありますけれども、お父さんはありませんね。なにに会社になににでございませうという、名刺みたいなものでしか自分自身を確かめられなくなっているというふうなことをおっしゃっていました。その反映が、今、小野さんとか皆さんがおっしゃっているように、子供というのは、大人の姿を

すごくよく見ている。

これは、私が聞いた話ですけれども、ある学校の先生というか、教育委員会の方と生徒を集めてカウンセラーの方が質問されたんたそうです。「今、何が一番大事ですか。それを1分間で考えてください。今、一番、ご自分にとって何が大切ですか」と。それを色々考えますよね。そうしたら、そのカウンセラーの事務所でその説明を聞いた時に、「金・金・金」というのが浮かんだそうです。お金が一番大事やなあ。その方は、一人者で、親なし、子なし、夫なしかなんかいう感じで、お金が大事に思っていたみたいですが、その校長先生にカウンセラーの方が、1分経って、「今、何が大事だと思われますか」とお聞きしたら、校長先生は、「世界の平和・愛」みたいなことをおっしゃったんですよ。

そうしたら、教育委員会の大人の方は、さすが校長先生はご立派な意見をおっしゃる、さすが学校のトップはこうでなくちゃみたいな感じで、尊敬のまなざしで見ているんですけど、そこに集った子供からは笑い声が聞こえたんですって。「なぜ、笑い声が聞こえたか分かりますか」というのを言われて、私は、ええ、何でかなあって、分からなかったんですよ。そうしたら、子供が囁き合っている。「ほんま、そんなんちゃうやろう」と、「先生、ほんまはお金ちゃうん」みたいに、「またいいかこうやっているわあ」と。

本音と建前というのは、これは、現実と夢という言葉に置き換えると、すごく普段生活している上では大事な事ですよ。絶対なくてはならない事かもしれません。今まで、人間は社会の中でもまれてきて、子供でもそうだと思います。本音と建前というのを使い分ける。でも、その大きな意味での本音と建前を子供はすごく見ていると思います。ですから、家庭の中でのお父さんの姿、お母さんの姿をまず見ている。社会の中で先生の姿をまず見ている。先生は本当はお金が大事なのに、こういう立場に立ったら、愛とか世界平和とか、そんなふうにおっしゃるんだなって。でも、その本音と建前というのを、現実と夢ということに、もしも置き換えたとすれば、絶対することですよ。深川先生も最初に、理想を追い掛けているのが、夢を追い掛けているのが、このロータリークラブだっておっしゃいましたけれども、夢というのは、現実はそのではないという現実をふまえての夢だと思うんです。現実が本当にそうであれば、それは夢ではなくなるんだから。でも、子供はそれが分からないですよ。私もまだまだ分からないけれども、分からないから言葉を尽くして人間関係の中で、例えば、家庭の中で、何で、現実はどうだけれども、それをおしてまでやらなければならないのかって、私がちょっとうがった取り方をしたのかも分からないけれども、さっき、やりたくてやっているんじゃない、立場があるからそうしないといけないんだって、何か弁護士さんのお話をされていましたが、それは、意味がまた違うとは思いますが、やりたくてやっているんじゃないって、皆さん思っていらっ

しゃると思うんです、どこかに。でも、やらなければならないから。ひょっとしたら、ここに、私は小野さんではないですから、自分の立場をわきまえず言って申し訳ないですけども、ここに集っていらっしゃるのも、ひょっとしたら、そのロータリークラブの中の青少年委員長ですか、その立場にあるから来ているんだみたいな感じのことが、ひょっとしたらあるのかなみたいな。私というか、学生の方も、誰かに言われたからなんてことを、来ているのかなって。

私は子供を生んだ経験がないので分からないですけども、もし子供を生んで、その子供に言いたいのは、「あなたは、単なるあなたじゃないんだよ、過去を遡っても、未来永劫探しても、待っても、あなたという存在は一人、今ここにいるあなたしかいないんだよ」と、「どんなに世界を探しても、どんなに地球がひっくり返っても、自分自身というのは、今ここにいる一人しかいないんだよ」と。そして、自分の価値観というか、自分の存在がものすごく奇跡であって、この世に生まれてきたということ自体が奇跡であって、大切な事であって、存在がすごいことなんだというのが本当に分かったら、人を殺したいから殺すとか、あいつ、あまり気に入くないから殺すとか、そういう短絡的なことは少しはなくなるのではないかなと、そんなふうに思います。すみませんでした。

深川 ありがとうございます。あと7分ほどですが、ロータリーの心をしゃべっておりますので、ちょっとまとめておきます。

今、曾根さんの方から、弁護士の話していましたが、やりたくないけれどもやっているというのは、ちょっと意味が違うんでありますよね。義務として、人間というのはやりたくなくてもやらなければいけないことは沢山あるんです。それが人間の世の中でありまして、それから、ロータリーという所は、奉仕とか、世のため人のためのことをやりますが、あれは、義務としてやっているんじゃないんです。青少年奉仕委員長さんがクラブにおられますが、あれは、義務としてやらなければならないからやっているんじゃないんです。ロータリーの場合はちょっと違うのは、むしろ、そういう事をするのを喜びでやっているんです。義務と考えていません。そこの所だけ。

曾根 私が言いたいのはそういう、今、深川委員が私達におっしゃっていることを、社会の中でいくらでもありますよね、それを、子供達に現実の言葉として語ってあげる、そうなんだよって語ってあげる機会というのが、家庭にも、そういう職場にも、学校にも機会があまりにも少ないんじゃないかなという事を言いたかったんです。

深川 ただ、ロータリアンというのは、ちょっとシャイなところがありまして、自分がこういう事をやっているというのを人に言いたくない。(笑い) それで、あまり世の中に

は知られていない所があるんです。

それで、お金が大事という風潮は、一般的に今、大変豊かになりまして、その辺は大変問題だろうと思います。しかし、昔から、人間が金を求めて身を滅ぼした例は枚挙にいとまがないのであります。今もそうですね。全てのあの政財界の墮落は全部、金を求めている。しかし、人間が心を求めて失敗した例は、未だその例を聞かないのであります。

実はロータリーの心というのは、いつもロータリーというのは、ロータリアン個人の心の開発、それだけなんです。毎週一回例会に出てきて、そして、お互いに意見の違う人達の意見を聞きながら心を見がく、これがロータリーの第一意なんです。ロータリーの心というのは、そういう事だとお考え頂いて結構だと思います。それから、本音と建前の使い分けという話も出てまいりました。ただ、ロータリーは、本音と建前が違ったら、いかにして建前に本音を近づけるかという努力を、いつもします。これが、やはりロータリーの心の世界なんであります。

それから、パネリストの皆さん方から、子供が残酷なことをやっている、これは、やはり大人の世界の一つの投影だろうという意見も出ております。いじめも残酷であります。私は冒頭にちょっと触れましたが、人間というのは元もと残酷なんであります。

一つの例を申し上げますと、ローレンツという心理学者が「攻撃」という本を書いております。その中で、七面鳥をつんぼにして実験をしたんです。七面鳥をつんぼにして卵を抱かせたんです。それで、この卵が孵りますね。そうすると、その七面鳥のひなが孵って、巢の外へ何かの拍子で落ちて、今度戻ってくると、それをつつ突いて殺してしまうんですね。それは、二つのことを神様から命じられている。自分の巢に近づいてくるものは全部、自分の敵だと思ってつつき殺す。もう一つ、ただし、ひなの鳴き声が聞こえたら、それに歯止めがかかるんであります。だから、自分のひなであれば絶対に殺すことはない。それは、どういう形で出てくるかというのは、卵の中で、卵がかえる30時間ぐらい前にひなが卵の中で鳴くんです。それを聞いて、親が外からまた鳴き返す。ひなはその声を聞いて親を覚えるわけです。だから、カルガモが一例縦帯になるでしょう、あれは、親の鳴き声で全部付いていくんです。

それから、南極で沢山いるペンギンですね。親が海に入ってエサをとってくる。そして、沢山何万といるそのペンギンの子供の前で親がキャッと鳴いたら、間違いなく、その子供が飛んでくるんですね。それは結局、声によって親と子の間があるわけです。

ところが、今申し上げましたローレンツは、七面鳥をつんぼにしましたから、その七面鳥は、その卵の中でひなの声を聞いておりませんし、自分の子供の事を知りませんから、一旦外へ出して、また返ってきたら、そのひなが鳴いても聞こえないのでありますから、全部つがしてしまうんです。これは、外から見ていると、母親が自分の子供を殺して、なんて残酷だと思うんだけど、これは、神様がそういうふう七面鳥をつくって、本能

のままに動いている。

ところが、人間は、自分の子供がはっきり分かる。これは、自分の子供だと分かっているながら、子供を殺したり、そして、コインボックスに入れたりしますね。人間というのは、そういう意味でいつでも残酷になれる。現に戦争中に、生体解剖というのをやりましたね、捕虜を捕まえて生きたまま解剖してやったんですが、それを後で戦後、戦争犯罪で裁かれた人がいますが、本当に平凡なおじさんなんですよ。そして、その人が述べたのは、どうして、ああいう残酷なことができたのか、しかし、私はその時には平然としてやったと、だから、ある状況が与えられますと、人間というのは、いかに残酷になるかというのも分かるわけです。だから、動物は残酷でないと、私は当初に申し上げましたけれども、そのことを言いたかったんです。

それで実は、子供が非常に残虐なことをやっている、残酷なことをやっている。下野さんが、子供は残酷だとおっしゃっていましたが、まさにそのとおりで、大人よりもかなり残酷なことをやりますが、それは結局、どこかで大人の世界のあり方を子供が見ているのではないかなと、その辺の影響が一つあるのではないかなということも考えられます。そして、大人の場合は、私はああいうことは絶対やらない、そういう安心がある。それは、心の歯止めがあるんですね。子供の場合は心の歯止めができない。この歯止めをどこでつくるのか、それは、家庭のしつけとか、色んな人間関係の中で歯止めができる。その歯止めが一旦はずれたら残酷になっていく。

ロータリーという所は、いつも、その心の歯止め、ちょっと難しい言葉で言えば倫理とありますが、そういうものを、いつもお互いに切磋琢磨して、そして、一旦社会に出たら、世のため人のために、その心をロータリアン以外の人達に伝えてくる。そして、またロータリークラブへ戻ってきては、色んな話を聞いたり、ディスカッションをしたりして心を見がく。心を見がくところがロータリーだということを、ご理解頂ければと思うのであります。ロータリーの世界というのは、人類社会がどんなにひどくても、この人類社会の基本は個人の心だと考えます。そこから、全てのロータリーの理論というのが展開していくわけでありまして。一人一人の心、世界中の一人一人の心が、やがては世界をおうがしていく。

一つ、例を出しておきます。去年、台風が沢山来たでしょう。台風の渦は必ず左へ回ります。あれはなぜかという、地球は自転していますね。あの影響で、北半球では必ず台風の渦は左へ巻きます。南半球では逆で右回りであります。これは、発見者の名前をとりまして、コリオリの力と言っております。コリオリという人が発見したんです。フランスの人であります。地球があって、赤道があって、赤道に立っている人がですね、どれぐらいの速さで回っているかという、だいたい1秒間に460メートルの速さでグルグルグル回っているんです。それじゃ、目がまわると思うんだけど、空気も一緒に回っ

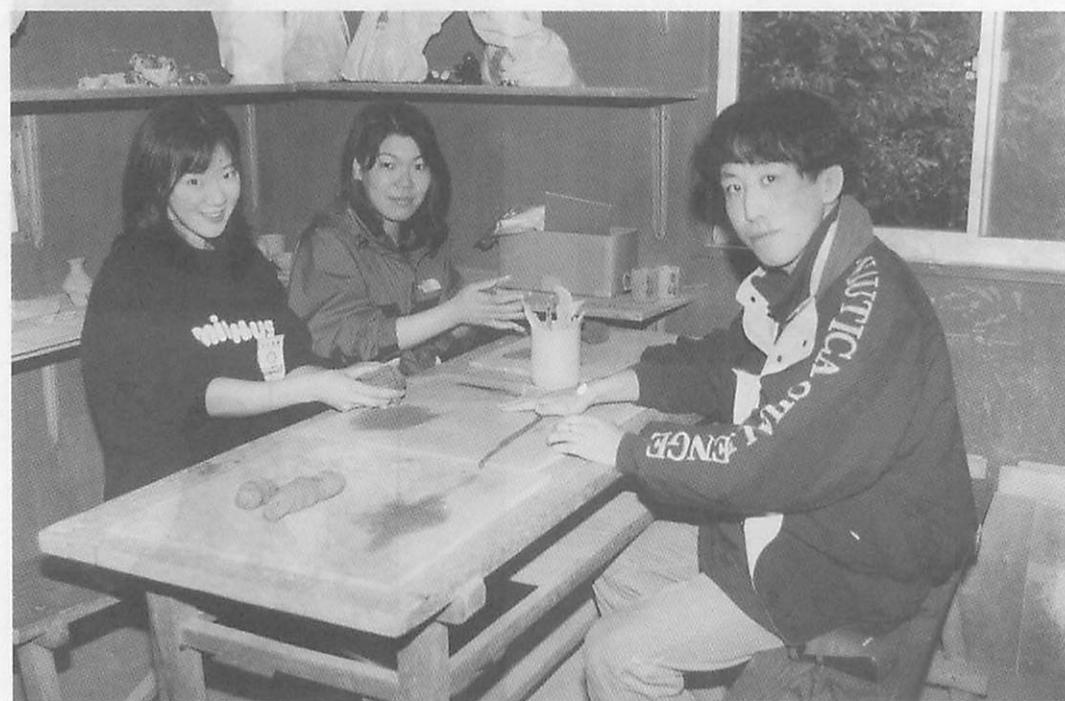
ていますから自覚はありません。コリオリの力。だから、赤道に立っている人がボールをポンと北へ放ると、これが回りますから、そして、こう左へ渦が巻いていくわけですね。これが、皆さん方の周囲でみられるのは、風呂の栓をピュッと抜くでしょう。水が抜けていく時に渦が左に巻いていきます。本当は物理の先生に言わせると、そんなに簡単なものではなくて、まん丸な容器の真ん中に穴をつくって、そして、その栓をスーッと抜かないと渦は左に巻かないよとおっしゃいますけれども、皆さん、一ぺん実験してみてください。そういう形ですね、自然現象があります。

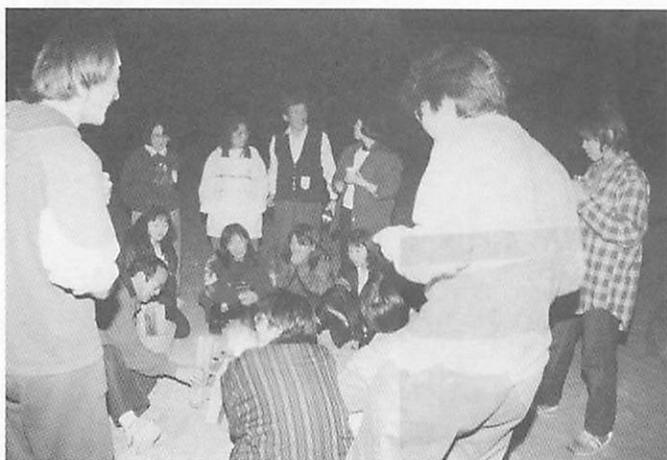
だから、コリオリの力という、我々はそのボールの上に住んでいるんだけど、ほとんどその力は自覚できません。それにもかかわらず、台風という、あの巨大な自然現象が出てきた時に、その弱い弱い弱い力がその自然現象、あの台風のあり方を決めてしまうのであります。これが実は、自然現象なんだけれども、人間の世界にもそういうのがありまして、国民一人一人の心の中にある不満、そういうものが、あのソビエト連邦、超巨大国家の主権を崩壊させたでしょう。あれは、ああいう一つの暴動とかいう、その一定の状況に達した時に、一人一人の国民の心の中にあつた不満が一気にあの国家形態を変えてしまったわけですね。それと同じように、台風のあり方を変える、そういうことがあるだろうと思います。だから、どんなに世界が広くても、ロータリーが一番大事なのは、個人一人一人の心が大事だと。その事を大事にするが故に、ロータリアンに毎週例会に出てきて心を見がいてください。そして、ロータリアン以外の人達にその心を伝えてくださいということをお願いしております。これがロータリーの心であります。

あと、今日は色々な問題点が出てまいりましたが、ちょっと時間の関係で、私のほうでまとめることができませんが、明後日、今井先生が総括として（笑い）全ての問題点を説明していただきますので、どうかお楽しみに最後までがんばって頂きたいと思います。4分超過して申し訳ございませんでした。これで、このパネルディスカッションを終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。



レクリエーション

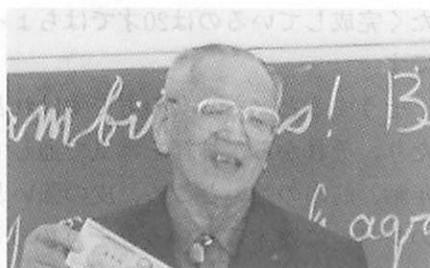






「受講生に期待するもの」

バストガバナー 森 滋 郎



僕が皆さんに期待するというと、なんですけれども、私は医者です、だから、皆さん、丈夫で長生きしてくださいという、とにかく、丈夫で長生きすることですね。アホのバカのと言われても、長生きしたほうが勝ちや。やがて白寿になったときに、いたずらに偉人をこえて傘寿かなと言いました。これが90になったら、いたずらに偉人をこえて卒寿かなというのを言ってやろうと思うんですね。それでいいやない。人間は、やはり命に限りがありますね。だいたい神さんは、人類に何年の生命を与えられたかということ、まず私なりに研究したんですね。そうすると、色んな方が色んなデータですね、しておられます。ハックスレーという学者が、哺乳動物、昆虫とか魚は別ですよ、お乳を飲んで大きくなる哺乳動物は、成長年齢の5倍、だから、4年で一人前になる馬は20年、3年で一人前になる犬は15年、だいたいそのようですね。

じゃ、人間は、はたして一人前になるのに何年かかるか、法律ではだいたい20年で一人前になると言っていますね。そうすると、それをとりあげて人間の寿命は100年だとだいたい出てくるわけですね。現に今、日本で100才以上の方が7,000人ほどおられます。私ね、人類は20年で一人前になるということについて、前からちょっとなんか引っ掛かったところがあるんですね。

例えば、馬は10月10日、お母ちゃんのお腹にいるんです。310日。人間も10月10日お腹におるでしょう。で、オギャーと、馬はオギャーとは言わないだろうけれども、生まれてきて、すぐ馬は歩きます。歩いて草も食べるしお乳も飲む。人間でオギャーと生まれた子をフニャフニャのを放っておいたら、絶対に死んでしまう。フニャフニャの未熟児ですね。で、3才ぐらいになって、はじめて歩くことができるようになるわけですね。だから、人間という動物は、馬は10月10日でないなるんですが、人間は普通の動物よりも時間がかかるんじゃないかしら。

そして、また、オリンピック選手のチャンピオン、これは、世界でそのとき、その競技では最高のレベルでしょう。オリンピックのチャンピオンの年齢というものを、私はずっと見てみたら、まあ、それは10才代のチャンピオンもありますけれども、30才代のチャンピオンもありますし、いろいろの年齢のチャンピオンがありますけれども、だいたい24～25才ぐらいのところ、一番の力、技術、体力、それから、そういう精神力、これがまっ

たく完成しているのは20才ではちょっと早いのとちがうか、こういうことを思っていたんです。

そうすると、ある女の方ですけれども、この人が、筋肉の繊維を引っ張って張力を計ったり、それから、神経を電気を通して早く神経に伝わる、その神経の伝わり方が一番早い年齢、筋肉の強いところ、皮の強いところ、色んなものを調べて、24才までかかって最高のレベルに達するという、そういうことを発表されたんですね。24才としますと120年ね。

それで、私は、これこれと思ひましてね、(笑い) 私の案と合っているんですよ。それで私は、うまいこといったら120年まで神様はくれているのと違うかなと思うんですね。現に100才以上で120年、130年という人も、わりあいおるんですよ。ところが、戸籍がはっきりしないものだからギネスブックには載っていない。ギネスブックに載ったのは、泉重千代さんという120才で死んだ日本人がいますが、これはギネスブックに載ったんですけれども、日本というのは戸籍が非常にはっきりしておりますから、何年何月に生まれたから何才と。

私は、毎日新聞で5月20日になると、いつもシラリ・ムグリ・ムスリモフという人の記事が、10年ほど前に死んだんですけれども、その人は、ウエリントンとナポレオンの戦ったウオータールーの戦いを知っていると言うんですよ。ウオータールーの戦いを知っているということから逆算して、だいたいこのぐらいかな、このぐらいかなといって、世界的に有名になりまして、毎日新聞がいつも5月20日を、一番気候がいいものだから誕生日にして、そして、もう沢山の人が集まって、シラリ・ムグリ・ムスリモフさんを讃える会をしているということで写真を撮って、私も写真を切り抜いて持っていますけれども、10年ほど前に亡くなりましたが、これは、だいたい164才ぐらいということになります。(笑い) まあ、伝説的に坂上田村麻呂など300年という話も先祖代々遡れば何代も何代もおったのではないかというふうにも思うんですけれどもね。これは、まあ伝説ですね。

それから、もっとはっきりしているのは、スコットランドの田舎にいたトーマス・パーというおじいちゃんですが、このおじいちゃんが98才の時奥さんが死んだんですね。そのおじいちゃんがお元気で、102才のときに村の娘さんを強姦したんです。(笑い) それで刑務所に入れられて、懲役18年、(笑い) それで、見事に18年懲役をするんですよ。それで、120才のときに無罪放免になってね。日本みたいに殺人しても5年ぐらいで出てくるようなことはなく、その頃、スコットランドではそういう懲役18年。それで、120才のときに出てきて、まあ、もう悪いことはせんやろうみたいなことで、念のために45才の奥さんをもらうんですよ。奥さんを結構だいじにして、おじいちゃんは130才まで夫としての義務を果たしたんです。なんか知らんけどね。(笑い) 有名になったんですね。

その有名なので、いわゆるイギリスの名君といわれたチャールス一世。チャールス一世は非常に名君なんですね。名君だけれども、最後は、いわゆるベニバラ戦争でギロチンで

死にます。チャールズ一世が聞いて一ぺん会いたいと。それで、そのトーマス・パーさんはスコットランドの田舎から、ガタガタと田舎道を通ってロンドンまで行ったんですよね。で、ロンドンで大宴会があります。ズラーツと勲章を吊った武官やローブデコルテかなんか着た淑女がズラーツと並んでいます。トーマスじいさんは、フロックコートを着て、カチンカチンになってご馳走を食べたんですけれども、カチンカチンになって食べたから、それから下痢して死んだんです。(笑い) 本当なんですね。そして、チャールズ一世は、あゝ、かわいそうなことをしたと、ウエストminster寺院に入れた。ウエストminster寺院というのは今でもあるでしょう。あそこには、チャーチルさんが入っているし、シェークスピアも入っているし、ウエリントンも入っているし、王様が全部入っています。ウエストminster寺院の地下にズラーツと、壁にこういうプレートが貼ってあります。そこに何年生まれというのを、誰だれが何年とね、壁の中に遺骨があるのではないのであって、そのプレートがズラーツと。そのトーマス・パーさん、おじいちゃんが一番正面のいいところに入れた。トーマス・パー、1483年に生まれて1635年に死んで、エイジ152。彼を記念してオールド・パー。知っているでしょう。オールド・パー。さすがにねえ、あのオールド・パーのところにラベルが貼ってありますね、おじいちゃんのラベルね、あれは、レンブラントが書いたとされております。当然、その頃の写真もありませんしね。そこに1483年から1635年と、エイジ152と書いてあります。今はパーを7,000円ほどで売っていますけれどもね、これなんかははっきりしているんですね。

けれども、だいたい日本人で、今の泉重千代さんね、あれは、海辺で朝早く起きたらワカメを拾ってきて、それで味噌汁をして毎朝食べて、焼酎を飲んで、非常に元気におられたんですね。それを新聞屋が引っ張り出したんですね、テレビに出したんですね。僕はあれを見て、バカなやっちゃんあ、と思ったんですね。おじいちゃんは、テレビに出てカチンカチンになっているんですよ。はっ、はあとね、それで、早く死んだ。(笑い) だから、テレビが殺したんですわ。

その点、きんさん・ぎんさんは大丈夫ですわ。ヘラヘラしているから、あれは、テレビに出てもかまわない。私の言いたいのは、カチンカチンになったら死んだ。これは、あとで話をしたいと思います。皆さん方もカチンカチンにならないように、ヘラヘラといきましょう。

それで、だいたいそうして、この120年説、案外ありそうでしょう、ねえ。だから、皆さん方も、神様は、おまえ達120年までいいよと。ところが現在は、100才がなかなかいけないですからね。松下幸之助さんなんかでも、この120才説を読まれたんですよ。それで、おれは120まで生きると言っただけで、65才からずっと病院に入っておられましたが、自分のつくった松下さんの病院の特等室に入って病院から、食べ物から管理から、毎日の血圧から、いつもちゃんとして、そして、病院から出勤しておられたんですね。そういうふうになさ

でも100才までいかなかったんです。ねえ、お亡くなりになったでしょう。なんでだろう。バチがあたっているんですわ。神様のおっしゃるとおり生きていないから神様がバチをあてたんです。皆さん方もバチあたりの生活をすると、神様が……連れていくんですね。

最近、生活習慣病という病気ができたんです。これは、厚生省がそろそろ認知する生活習慣病、どうぞ書いてください、これ見たらごつい書くところがありますから、どうぞ書いてください。生活習慣病というのは、皆さん方は病気と思わないけれどもね、命を縮めるようなことをしているんですよ。

例えば、たばこ。たばこを皆さん、パッパカパッパカ、さすがにね、皆さん方、あまりたばこを吸わないですね。昨日、キャビンに来たけれども誰もたばこを吸わなかったですね。昔だったら、モーモーとたばこを吸っていたんですよ、皆が集まったらね。たばこを吸うことは自分の命を縮めていることなんですよ。だから、肺ガンとかそういうものは、実はたばこ吸いの中で非常に多いということが言われている。現にアメリカではキャーキャー言って、たばこはもう売らないように税金を高くするとか、あるいは、飛行機のステューワーズさんが訴訟を起こしていますね。私達はたばこ吸いの世話をするために傷害を与えられたとって損害賠償を、そういう時代になってきたんですよ。

ついでに、たばこの害をちょっと言いましょうか。たばこはニコチンだと、皆さん、すぐ思いますけれども、たばこは、もちろんニコチンです。たばこを吸ったニコチンを煎じて注射をしたら死にます。たばこが20本入っているでしょう、あのニコチンだけを煎じて、そして、ニコチンとして純粋に取り出して、静脈注射をしたら死にます。それだけの毒がニコチンにはあるわけですね。もちろんニコチンがあります。

それから肺ガンになる。これはタールなんです。たばこの巻き紙を吸うと黒くなりますね。その黒いのがタールなんです。そのタールが肺の中でひっ付くんですよ。僕はパイプたばこを吸っていたんです。タールのないやつですね。もうやめたけど。僕は実は、たばこを吸ったかわいそうないきさつがあるんですよ。徹夜の団体交渉をする。病院に赤い旗を立てて団体交渉をして家に帰るとき車の運転中眠りかけるのでパイプをくわえたら、ポツと落ちるでしょう。だから、パイプをくわえて運転しました。そういういきさつで、私は、パイプたばこを日常に、ひと頃熱心になりましたね、色んな、これはなんだといってパイプを集めたんですよけれども、もう卒業しました。その紙たばこのタール。そこまで皆さん方はご存じでしょう。たばこの害はニコチンと肺ガンとね。ニコチンというのは血管を縮めてしまいますね。

もう一つ、一酸化炭素中毒です。たばこの害は三つあるんですよ。ニコチンとタールと一酸化炭素中毒です。スーッと吸うでしょう、たばこの火はなんぼ吸うたって1000度になりませんわ。たばこの火は赤いでしょう。だいたい500度から600度ですわ。500度や600度では炭素が完全燃焼しないんです。完全燃焼すると酸素が2つ付いてCO₂になるわけで

す。ところが、500度や600度では酸素が1つしか付かないでCOになるんです。CO、一酸化炭素です。これは、一酸化炭素で自動車のエンジンをかけていたら子どもが死んでしまったとか、これが一酸化炭素です。

一酸化炭素というのは、なんで悪いかという、我々は呼吸していますね。呼吸するのは、ヘモグロビンという赤血球、ヘモグロビンというそういうものがあるんですね。ヘモグロビンは浮気なんですわ、酸素ちゃんがようけおったら酸素にひっ付くんですね。それで、炭酸ガスちゃんがたんとおったら炭酸ガスちゃんとひっ付いて、酸素をポイと捨てちゃうんです。それで、炭酸ガスヘモグロビンになってくるんですね。それで、また肺に行ったら、肺は酸素がたんがあるから炭酸ガスをチャイして酸素がひっ付くんですね。だから、我々が呼吸すると、体外の酸素を組織のところでは炭酸ガスと酸素と交換して、そして、また持ってきて炭酸ガスを出す。だから、我々は生きているんですね。ところが、一酸化炭素はヘモグロビンともものすごく仲がいいんです。ヘモグロビンの恋人だから、ヘモグロビンと一酸化炭素がひっ付いたら離れない。こっちに行っても一酸化炭素、こっちに行っても一酸化炭素。つまり、トラックに荷物をいっぱい積んで降ろさずに東京と大阪を動いているだけなんですわ。本当は大阪の荷物を東京に、東京の荷物を大阪に持っていくのがトラックのお仕事でしょう。つまり、一酸化炭素を出すのと、そういうふうな荷物だけ積んで走っている。つまり、赤血球がせっかく心臓によって運ばれてもなんにもならない。

私の息子がたばこ吸いだったんですわ。たばこ吸いで、大学をどこに行ってもすべってね、何年浪人したのかな。それで、たばこばかり吸っている。というのは、私の奥さんが、たばこの吸殻でつづみを作ったり箱を作ったり、あんなのするでしょう。わしは親孝行やと、(笑い) 一生懸命たばこを吸っている。現に色んなたばこの箱で作った、いわゆるアートクラフトとかありますわ。だから、うちの息子は親孝行のためたばこを吸っていたと。一ぺん、ちょっと血液検査をしたらと血を採って調べたんですよ。そうすると、赤血球が550万です。普通は、男が1ミリの立方の中に赤血球は500万、女は450万です。つまり、女はトラックの数が少ないですね。男は500万台トラックが走っている。女が長生きするのはこれだと思うんですよ。女は血がサラサラしている。だから、非常に流通がスムーズなんです。男は500台のトラックを動かすから、ちょっと交通渋滞があって、そのために男が早く死ぬんだと思います。だから、血が濃くなるということは命が縮むことなんです。歳をとったら、年寄りの冷や水とって、ほくも、せっせせっせとビールを飲んでいる。冷や水のかわりにね。(笑い) これは、血を薄めてやろうと思ってね、ビール屋に行って買って沢山飲んできました。

それで結局、息子はそれからやめました。サッとやめて、今でも。まあ、結婚したら、奥さんがけむたがるのでやめまして、今はやめていますけれどもね。私は、息子をやめさせるのに、そういう理屈で赤血球を測ったんです。そうすると550万。というのは、50万

の赤血球、ヘモグロビンが一酸化炭素ヘモグロビンになっちゃうんですね。つまり、無駄なトラックになっているんです。無駄なトラックになったものだから、結局、我々は500万いるから、あと50万倉庫から車を出してね、普通500万走ったらいいのに、550万台のトラックを動かしてきたんですね。その点、たばこの害は、こういうことを言うとそれだけで時間が経ってしまう。たばこの害、覚えておいてね。ニコチン、それからタール、一酸化炭素、こういうようなことがある。神様がおっしゃっているんですよ、たばこを吸うと命がちぢむよ。

それから、お酒もそうですね。お酒はあまり言わんとこ、沢山はいかんですね、少量はええですね。私の友達で、一日にビール1ダースずっと飲んでた豪傑がいました。大きい病院長ですね。力道山がプロレスになれと言うほど、ゴルフはシングルでね、だいたい一日にビール1ダース飲んでいました。だから、早く死にましたわ。あれだけいい体で、あれだけすばらしい大きな病院の病院長でね、朝から晩までビールを飲んでいましたね。

それから、私の友達でニコチンというあだ名の人が出て、たばこ吸いなんですよ、学生時代からね、73で死にました。やはりたばこを吸うと命が短いですね。

それから、我々の体は一刻一刻ちびているんです。赤血球なんか4週間経ったら全部死んでしまう。死んだあと、我々は造っているんです。骨髄の中で一生懸命造っているんです。なんで造っているか、食事で造っているんです、食物で造っているんです。我々の体は、一刻一刻つぶれているんです。人間は全部部品を造っている。我々の体は、DNAという型がありまして、その型に食べ物をひっ付けてカチャカチャカチャすると赤血球の一部が出てくる。また、カチャカチャカチャすると顔の一部が出てくる。DNAの話をしたらまた時間がかかりますけれども、そういうものがあるんですね。我々は自分の消耗品を全部自分で造らなければならない。その工場を我々は持っているわけですね。皆さん方は、寝ている間でも赤血球はせっせせせと造っている。

これなんか、もう僕は歳をとったから、骨なんかはできているから、カルシウムなんかそんなに摂らなくてもいいわと思っていたら、大間違いですね。骨も3か月経ったら全部死んでいるんです。3か月で入れ替わっているんです。赤血球は4週間で入れ替わる。骨は3か月で入れ替わっている。ここにある骨は3か月経たらなくなっているんです。オステオクラステンという細胞が骨を食べて、オステオプラステンという細胞が骨を造っている。だから、長い間には段々顔が変わってくるんですね。……それからまた、こっちばかり下にして寝ていたら、やはり顔がいがんでくるそうですね。それは、この押さえられているところは骨のできが悪くて、こっちはできがいいものだから、こっちの骨の上で、そうすると顔がいがんでくる。そういうことも、長い年月の間に起こるんですね。特に女の人はメンスがあがってから、骨がどんどん、カルシウムが不足して、いわゆる骨粗鬆症になるんですね。

骨粗鬆症というのは、結局、カルシウムを沢山食べたら、そのカルシウムがすぐ骨へいくかという、食べたらすぐと違うんですね、カルシウムを食べて、骨の中にたくわえて、そしてあと、その骨のカルシウムを食べていくんですね。食べたものが、カルシウムがすぐ効いていかないんです。だから、もう40才位からどんどんカルシウムを入れておかないといけません。こういう点、我々の体はどんどんちびていくものだから、そのちびているのを食べ物でするんです。

さあ、そこで大事なものは食べ物ですね。食べ物、おいしいものを食べたらいい。カイコはクワしか食べないね。小学校のときにカイコを飼っていたらクワがなくなってね、本当は、アジサイの葉でもカイコは育つんだそうですよ。今、実験的にカイコにアジサイの葉を食わす、そういう実験をしているんです。アジサイの葉の成分でカイコは結構いけるんだそうです。それでも、カイコちゃんはクワしか食べないですね。それで死んでしまうわけです。

コアラは、ユウカリですか、くさいユウカリしか食べないですね。パンダは、笹しか食べない。各動物には各動物の食べ物があるんです。岐阜蝶なんかかんあおいの葉しか食べないですね。兵庫県のどこかにそんなところがありますね。

人間は、なんでも食べていますね。神様は、人間に何を食べろとおっしゃったか。歯を見なさい。キバがズラッと並んでいるネコとかイヌとかライオン。歯は肉を切り裂く歯です。肉を切る。これは肉が食物です。馬は前歯だけです。歯はありません。前歯は草刈り歯なんです。草を刈っていくのね。前歯で草を刈っていく。馬に1切れ5,000円のビフテキをあげてもいらないと、馬は草がいい。牛は前歯も牙もない、臼歯だけですね。臼歯というのは穀類をゴリゴリすりつぶす歯ですね。牛は穀類をすりつぶす。だから、草が生えていましたら、牛はギューッとしごいて実だけをとります。馬は根元からパリッと噛んで食べます。牛はシューッとしごいて実だけをとって4つの胃袋にまず入れるんですね。こぶの胃袋としわの胃袋と蜂の巣の胃袋と、もう一つ何とかいう胃袋、とにかく、4つに入れておいて、それで、安心な所にきたらゲボツと出して、ガリガリガリともう一ぺん食べて、反すうするんです。偶蹄類といって、ひずめが2つに割れているのが反すう、シカとかキリンとか、それから牛とかね、そういう点、色んな食べ方があるんですけれども、食べ物が決まっています。

さあ、そこで、人間の食べ物はなんだろうね。前歯が2本あります。犬歯が1本あります。歯が1本あります。臼歯が5本あります。これで分かったでしょう。神様は、人間に草が2、肉が1、穀類5を食べなさいと。草が2、肉が1、穀類5ですよ。これが、神様が人間に与えられた食べ物です。なんとこれは和定食です。中国料理でもなければ、フランス料理でもない。私は日本人はすばらしいと思います。和定食ですね。草が2、肉は、まあ、魚でもいいし肉でもいいですね、いわゆる肉系、動物たんぱく質ですね、それが1、

穀類が5なんです。

鎌倉時代の日本人は、1メートル80ぐらい、皆あったんですね。元寇の乱の武具、そういうものが、大山祇神社（オオヤマズニ）ですか、あそこに納まっているのを見たら大きいですね。刀でも長いですよ、それを片手でふりまわしている。そういうような点、鎧も大きいですね。あの頃結構、まあ、イノシシを獲ったり、ウサギを獲ったり、鳥を弓で落として獲っていた。その頃は冷蔵庫がないものだから、みんな干していた。干肉、カチンカチンになった干した肉を食べ、玄米を食べて、非常に大きな人間ができていたんですね。新田義貞が、北條を攻めたところに稲村ヶ崎という岬があるんですね、そこで剣を海に放り込んだら、海神が潮をシューッと引いた。そして、その潮のところを渡って鎌倉を海から攻めたんですね。鎌倉の北條は、全滅したんです。そういう稲村ヶ崎の戦いというのを私たちは習ったんですけども、その稲村ヶ崎で団地を造ろうと思って掘っていた。そうすると、ゴロゴロゴロゴロとしゃれこうべ、頭蓋骨が360出てきた。それは、稲村ヶ崎のときの戦いの首塚だったんですね。それを東大の法医学の教室にゴロゴロゴロゴロと並んでいる写真が、大塚製薬の月報に出ていたので、私は早速、東大の先生にいろいろ教えてもらったんですけどもね、今の人より頭はちょっと大きいそうです。それから、顎が非常に大きいそうです。固いのを噛むからね。それから、鉄分を沢山含んでいるそうです。その頃結局、鍋とか包丁とか、鉄瓶とか、みんな鉄で造っているから、鉄分を沢山含んでいる。最近はそれがアルミニウムになったり銅になったりステンレスになって、非常に鉄分が少なくなったんですね。昔の人は案外、鉄分を沢山とっていたんですね。

うちの娘は体は大きいけれども、なんや、すぐ、しんどい、しんどいと言って、マグロみたいにゴロゴロよく寝ころびます。(笑い) みたらね、やはり貧血しているんです。あ、これは鉄分不足やと、結局ね、アメリカ人あたりは、ビフテキとかそういう肉で鉄分を摂っていますが、日本人でお野菜ばかり食べていたら鉄分は不足しますね。昔は、大根でも包丁で切っていたら包丁の錆が大根にうつり、それで包丁がきれいになって大根をそのまま食べたりね、(笑い) あるいは、鉄瓶の中でお湯をチンチンいわせて、あるいは、鉄分のお釜でゴリゴリおこげをこすってね、案外、鉄を食べていたのに、今はそれが、全部、アルミニウムになったでしょう、ステンレスになったでしょう。皆さん方は鉄が入らないですよ。皆さんはひょっとして、その鉄分が不足の方があったら、フェログランチンの、錠剤を1錠朝飲んだらいいですよ。鉄の錠剤、色んな名前がありますけれども、鉄の錠剤、薬局で安いです、鉄の粉ですからね。大きな5寸釘ぐらいを入れておいたら誰も食べない。(笑い) とにかく、今の皆さん方は鉄分が不足です。

そして結局、草が2、肉が1、穀類5。この穀類を、玄米、麦、ひえ、あわ、大豆、小豆、トウモロコシ、ゴマ。種ですよ、穀類は。玄米、麦、ひえ、あわ、大豆、小豆、トウモロコシ、ゴマ。それを今は米を真っ白にしてね、米に白という字はなに？ 粕やね、米

を粕にして食べている、皆さんは。これがいかん。それで保健所が、いや、肉を食べ、牛乳を食べ、チーズを食べと言うんですよ。本当は玄米、麦、ひえ、大豆、特に大豆がいいんですね。

大豆は、実は日本が満州で、もちろん中国の原産ですけれども、満州と北海道で大豆を作ったんです、戦争前にね。それで、マッカーサーが日本に来て日本を占領したときに、マッカーサーというのは全部調べるんですねえ。その中で、日本人の食べ物の中で大豆を見つけたんですね。大豆は不飽和脂肪酸、書きましようか。もう一つ、ここへずーっと炭素に色んなのが付いて、6つ炭素ね、ここへCHOHとか、あるいは、CHO₂とか、色んなものが付いて飽和しています。それを飽和脂肪酸、これは動物の蛋白質の場合は飽和脂肪酸、で、皆さんだって両手に荷物を持って歩くと、あゝ、しんどいと言って落とす、ポロポロと持っているのを落とすんですね。飽和脂肪酸は、ポロポロと血管の中へゴミを落としている。つまり、血の中へゴミを落としているんですよ。ところが、大豆の脂肪酸は不飽和脂肪酸、これが一つあいているんです。手があいているんです。だから、大豆の脂肪酸は不飽和脂肪酸で手があいている。血液をきれいにする。これがラーマです。バターでも、いわゆる値の高いほうの牛乳から作ったバターは、いわゆる飽和脂肪酸で血が汚れるんです。だから、あれを食べるとコレステロールがたまってきまして高血圧になる、そういう傾向があります。けれども、植物性、やし油とか、そういう植物から作った脂肪酸は、いわゆるラーマですね、手があいていますからきれいにしてくれます。そういう点、しかも、蛋白質は、肉と大豆の質は同じ、カロリーは大豆が肉の倍ある。そういう大豆というものはすばらしいですね。

それで、マッカーサーは日本を占領して、へエー、こんなものを日本は食べている、これはなんちゅうもんやと。そのとき、世界の字引には大豆は載っていなかったんですよ、名前がなかったんです。で、これはなんやと、これは、こういうふうには日本で作ってお醤油を作る豆だということで、ソービーンという名前を付けたんです。ソースのソーですね、お醤油というのはソースです。ソービーンという名前を付けて、エンサイクロペディアアメリカとかブリタニカにはちゃんと載っていますね。そういうものを日本人は食べていたんですね。

で、日本人は大豆を一生懸命作って食べていた。あるいは、これはすばらしいというのでね。アメリカの怖いところはこれですよ、トウモロコシ畑を焼いてしまっ、あとへ大豆を植えたんですよ。今、世界一大豆の生産国はアメリカですよ。日本はアメリカから大豆を買うんですよ、悔しいね、日本が発明したんです。日本はどうしたかということ、大豆は段々植えなくなってきたんです。私は、大豆を植えて、大豆を植えてと言うんです。ところが、あれは手間がかかるんです。お米はコンバインでカチャカチャカチャとやったらお米ができてくるけれども、大豆はあとの手入が大変なので作らなくなりました。

あれは結局、大豆というものは、穴を掘って、灰とね、2つずつ入れておいたらみんな生えるんですよ。皆さん方、帰ったら、とりあえず大豆を植えたらいい。僕は、庭に植えたら日が当たらないものだから、日がよく当たるところに植えたら、昔だったら、皆ずっと大豆を植えていたんですが、この頃は大豆を植えなくなったんですね。それで結局、アメリカから大豆を買うんですよ。1972年にアメリカとソ連が、その頃は原子爆弾をお互いに落とそうか落とそうかと、ねえ、1972年、フルシチョフさんとアメリカのニクソンがモスコウで会って話をしているんですが、なんか世界の400万トンとかアメリカの大豆を、そうそう、ソ連がものすごい食糧危機になったんですよ、400万トン、アメリカが大豆を持っていったんですよ。そういうふうな大豆というものはすごい外交的な力がある。

日本が今、世界一の食糧輸入国、中国が今、世界2位の食糧輸入国です。ねえ、中国さんの大きな土地ですればいいんだけどね、中国が食糧輸入国になっていますよ。この点、オーストラリアとかアメリカとかカナダあたりは、そういうふうに着々と世界の食糧の確保をやっていますね。こういうことを思うと、日本も食べ物を自分の所でもうちょっと作ろうと考えないといけないですね。結局、大豆をもっとよく食べる。それが大事ですね。草が2、肉が1、この肉はお魚のほうがいいね、動物性のやつは、あれは飽和脂肪酸だからね、それから穀類が5、この穀類は種、白い米と違うよ、こういうことを考えて、そういう神様が与えた食べ物を考えてくださいね。

そして、食べるのに、皆さん方、塩とか砂糖とか味を付けますね。馬がご飯を食べているときに塩をふりかけて食べたり、ライオンがソースを入れて食べたりしないですよ。そのまんまの中身に本当の栄養があるんですね。それと、日本人は脳が発達したために脳が食べるんですよ。盆とか正月になったら病院の若い衆が5〜6人きます。ビールを出すときに2本ずつ1ダース、で、すき焼きをするんですね、これだけ、ようけ準備しても食べるは食べる、よう食うなあ……（笑い）それでまた、皆、あゝ、そうかと、じゃ、一つ魚町でも散歩しようかと、お茶でも飲ませてやろうと思って、皆、そういうところをブラブラ歩いてね、お寿司屋、まさか、ここまで食べますというかね、お寿司どうやと言ったら、いやあと行って行きよ。さっきはビールだから今度は熱燗でなんていって結構ね。それで、こんなうまいもん今食わんと一生食われへん、ええチャンスやと、チャンスやから食う、それは頭が食うんですね。もう胃袋はいらんとっている。ブタでもイヌでも腹一杯食わせたら、あとなんぼご馳走を持ってきても知らん顔していますよね。人間は脳が発達したためにそういう食べ方をして、そのおかげで大変なんですね。腹八分目、そして、そのまんまで食べる。草2、肉1、穀類5を食べる。これが大事なんですね。味を付ける。私はここ20年来、なるべく、お醤油とかお砂糖とか減らせて食べるようにしています。お刺身なんかもそのまま食べるんです。宴会とかに行ってもそのまま食べると、気味悪がられたら嫌だから、ちょっと付けるまねをするけれどもね、わさびだけこすって

食べる。そうすると、本当の味が分かりますよ。前はお醤油を付けていたら、タイやらヒラメやら味が分からなかったんです。今はお醤油を付けなかったら、あっ、これはタイやな、ヒラメやなど分かりますね。舌が賢くなってくるんですね。この点、皆さん方は、調味料、これもある程度考えてくださいね。

それから、先ほど言った生活習慣病というのは、これなんです。この油っこいものが好きだ、油っこいものを食べる。カナダとかメキシコでは膵臓ガンとか膵臓病が多いんですね。これはなぜかという、脂肪を沢山食べるんです。この頃は、お相撲さんに膵臓の病気が多いねえ。お相撲さんは油を沢山食べるからあんな形になる。あれも生活習慣病ですよ。お相撲さんもかわいそうにねえ、ごっつい太らせてねえ。そして、あんなに太っているのは、いつも俵や荷物を担いでいるのと一緒ですよ、飢饉の時にはいいかもしれないけれどもね。(笑い)。

山梨県のゆずりはらというところに長寿村があるんですね。そこのおじいちゃん、おばあちゃんのうんこを水でさらすと、最後にポヤーンと綿クズみたいなのが残るんですよ。これを顕微鏡で見ると、葉っぱの繊維です、葉っぱの葉脈です。これが溶けないんで、ホヤホヤポヤーンと。若い衆のうんこをとると、ワッとなくなってしまって全部溶けてしまう。肉を沢山食べているんですね。つまり、おじいちゃん、おばあちゃんのうんこの中には綿の繊維がいっぱいある。これは何かという、腸というものは、食べるものを消化するために、面積を広くするために、イボイボがいっぱいあるんです。腸は水道管みたいにツルンとしているのと違う。腸の中にいっぱいイボイボがあって、このイボイボの面積を全部測ったら、大人の腸はテニスコートの大きさやて、ほんまか嘘か知らんけれども書いてある。(笑い) テニスコートの広さに広げたらね。そのイボイボ状の間を綿の繊維が掃除する、ブラシをかける。ヘドロがたまってきたら、せっせとブラシをかけてきれいにする。ところが、肉を沢山食べる人はヘドロが多いものだから、この上にクーッと、こうなんですね、ほんなら、これはえらいこっちゃ、これはまたニューッと出るんですね、またクー、ニュー、それで、腸の中にニョッコニョッコとポリープができるんですね。腸内ポリープというのが肉食をするようになってから、レーガンさんなんか腸内ポリープを10回ほど手術をして、色んなことをされたといってね。それは、肉を食べるからです。皆さん方も、野菜、草を、これをしっかりと、そのブラシになるということを考えて食べてくださいね。あっ、これで120までいける。そういうことを私たちは試されたんですわ。

ところが、あかん、なぜか。それは、先ほど一番初めに言った泉重千代さんの事を思い出してください。カチンコになって死んだでしょう。カチンコになったらいかんですね。要は、精神的なものです。食べるもの、味付け、食べ方、これを全部、森先生の言われたとおりにしても、カチンコになったらだめ。いわゆる精神というものがいかに大きなものか。

「雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けず 欲はなく 決して怒らず
いつも静かに笑っている 一日玄米4合と味噌と少しの野菜を食べ あらゆることを自分
の感情に入れずに よく見聞き分り そして忘れず 野原の松の林の蔭の 小さな萱ぶ
きの小屋にいて 東に病気のこどもあれば 行って看病してやり 西につかれた母あれば
行ってその稲の束を負い 南に死にそうな人あれば 行ってこわがらなくてもいいといい
北にけんかや訴訟があれば つまらないからやめろといい 日照りのときは涙を流し 寒
さの夏はオロオロ歩き 皆にデクのぼうとよばれ 褒められもせず 苦にもされず そ
ういうものに私はなりたい」

ねっ、一生懸命、東大に行って、そして大蔵省に行って、最後には死んでいった、あんな人みたいにもなりたくないねえ。長生きする。こういう気持ちを持つと長生きできるんじゃないかな。

それから、「Boys be ambitious, be ambitious, not for money or selfish aggrandisement not for evanescent」、青年よ大志を抱け、さあ、立派になって成功して大臣になるんじゃないんだよ、not for money、お金と違うよ、または、自己的なキラキラした、自分をキラキラしたように見せる、そんなもんじゃないよ、出世欲やなんか、not for evanescent、むなしなもの、which men call fame、人が有名であるという、そういう空しい人々が famous、有名であるという、名声をとるという、そんなもんじゃない、be ambitious、for the attainment of all that man ought to be、人間としてあらねばならない、そういうすべてを手に入れるために be ambitious！

「受講生がロータリーに期待するもの」

コーディネーター 中島 万里 委員長



中島 第2670地区で、今、青少年奉仕委員長をやっております。先程の、森先生の講義の題が、ロータリーが「受講生に期待するもの」という事でありまして、今からその反対ですね。そして、今ディーンから紹介がありました通り、私と永松先生はロータリアンですけれども、もうこの時間では受講生という立場からロータリーに期待するという事で、まずお話をして、それから受講生の皆さんに色んな事を言ってもらいたいと思います。今回は、ホームカミングライラという事になっていますね。ですからこの3泊4日の中で、今日の午前中が1番大事な問題だと思うんですね。いかに、ライラセミナーを受講した方が社会、もしくは学校、大学に帰りまして、そして色んな事をやって、その生活の中で、社会の中で何を考えて、またここで考えた事がこういう事であればいいとか、ライラセミナーのこれからの事について、色んな意見を持っただろうと思うんですね。そういう事を言ってもらいたいというのが本来の、このホームカミングライラの目的なんです。ですから今日、皆さんが言う事が1番これからのライラに役に立ちますから、皆さんに後で言うつもりですのでよく考えて、色んな事を言いたい放題言ってください。

ではまず基調として、受講生からロータリアンになられた、神戸ロータリークラブの永松先生にまずお話をして頂きたいと思います。

永松 今日は。ロータリアンといえどもまだ3年くらいしか経っていない、まだまだ若いと思われている、ですけど20年前にいっぺんここに来た時は確か19の時ですから、まだまだ若かったですが、20年前にここに来た時に、まさか20年後にこんな所に立っているだろうとは考えもつかなかったんですが、こういう事をやれと言われました。それで僕は題名「受講生がロータリーに期待するもの」、この題名を聞くのも今が初めてなんです。それまで何をしゃべったらいいか分からなくて、いきなり言われたんで、ちょっと戸惑っているんですけど。

ここに立ったら受講生の立場でしゃべれという事ですので、今、思ってるんですが、ロータリーにしろ、入らせて頂いて、ロータリーの色々な活動をやってみまして、ちょっと本題それですけれども、ロータリーの方々にライラセミナーの事を知っておられる方がというのが、妙に少ないというのが僕の実感なんです。それでロータリーの方に「ライラに行

ってきます」と言ったら、「それ何や」と言われまして。こんなに20年も続いているものなんですよ。20年も続いているものが何でそんなに知られていないのかと思ったら、そしたら受講生も何かアピールをせないかんの違うかと。ロータリーをやっている人が、余島でここだけでやっているという事自体は、一応ガバナー日誌という広報雑誌みたいなのがありますのでね、それに載っているんですけどね。それを読んでおられる方、読んでおられない方、そのままごみ箱に入っている方、そんなのなんぼでもおると思うんですけど、全然分かってないと。それで、せっかくやって、せっかく皆いいなど言っているものが、今やっている委員長さん、副委員長さん、それからライラ委員の方々は分かっておられても、次からやってこられるロータリアンが分かってない場合には、今やっている方々がどこかにいかれた時にはブツと切れる可能性がやっぱり出てくると思います。そしたらブツと切れたら、20年やってた意味がちよっとなかなかないと。長い事続いているからこそ意義があるんであって、いいなという意義がなかったら、僕もここに再び来るという事はなかったと思いますね。20年前にここに来て、何か分からないけど何か得られたという事が、やっぱり心の奥底にあるもんですから、だから山口先生らに「ライラセミナーに今度来てくれへんか」と言われた時に、これはもう「行きましょう」と言う事は、それだけやっぱり印象があったという事ですね。

だから多分ここに来られている方々は、それぞれのロータリークラブから推薦とか受けられているんですけども、例えばこれが終わって、各クラブに行って、また卓話が与えられると思うんですけども、卓話に行って話をされている方も沢山おられると思います。卓話に行って1番感じた事というのは、今僕が言ったような、「せっかく私らはライラセミナーに行ってきたんや」と言ったにも関わらず、何か会場の反応がおかしいと(笑)。こいつらは一体何なんやろ、何か言うてるけど、ライラセミナー分かってない(笑)。分かってないのに、それじゃ行こう、講話に行つてね、全部分かってくださいって言うても、やっぱりこれは無理なんで。それで僕はやっぱり、僕が今言うのもおかしいんですけどね、ロータリーのメンバーの方々にどんどん来て頂いてもらったらいいと思うんです。僕の知る限り2回来ているんですけど、20年前と今と、あんまりメンバーが変わってないような(笑)。何か同じ方が、ずっと同じようにやっておられるんでね。その方々も熱心にやっておられる方もいいんですけども、その他の方たちは、あんまり。言うたら悪いんですけども、こんな事僕言うたら大変な事になるかもしれないんですけど(笑)。今までどうしようかな、どうしようかなと、言うてもええもんやろかと思ってたんですけど、いつも顔を知っておられる先生方、皆さんですので、今日はちよっと言えるかなと、ちよっと言うてみようかなと。だけど、ちよっと気になるのは、ここでテーブル回ってますから、ここで聞いた事が後で活字になって起こってきた時に、ちよっと困るんですけど(笑)。僕は正直なところ、やっぱり1番それを感じているんですね。

それで、神戸クラブの事なんですけど、神戸クラブは交換留学生というのを相当前からやってましてね。交換留学生がやってきて、皆よかったという事をやって。それで交換留学生が帰って来て、いっぺんクラブで卓話かなんかして、それで終わったら、その後何のフォローもないと。何のフォローもないのも何かおかしいな、と言っている内に何十年経ってきちゃって、それで交換留学生から帰って来ている彼らは、もう60何人集まったと。60何人も集まったら何かできるん違うかという事で、一昨年、地区の委員長さんから焚き付けられまして、その皆さんを集めまして、次から来る交換留学生のお世話をさせてもらおうと。ロータリアンだけでは、ちょっとやっぱり手が届かんところもあるから、そういう所をお手伝いしてもらえというような組織を作ろうとって、ローテックスという組織を作って、それで今はもう、率先して皆動いてもらってます。だから皆喜んでやってもらってます。

そしたら、交換留学生でローテックスって61人しかないんですね。61人、それだけ動けるんです。ライラセミナーの受講生、1,200人になってるんです。1,200人おったら、その内1割でもおったら、それ以上になる。地区ごと、地区ごとにおられてもいいんですけど。今日はこういうふうになんか人数が少ないからいいんですけど、Aグループ、Bグループ、Cグループ関係なく、もう皆ぐちゃぐちゃになって話して、皆連絡取り合っていてできていると思うんですけど、前のパターンだとAグループならAグループ、CグループならCグループ、それぞれが帰ってしまったら、同じ地区内にいながら連絡もとれてないと。これであつたら、何かおかしいん違うかなと思うんですけど。例えば僕の、神戸の2680地区だったら2680地区で何か、ライラ以外でいいですから、それ以外にいっぺん集まれるような機会がとれたらいいなと。それ以外に集まるというのを、いいだしっぺがなかなかとれないと。所が、いる人というのはあちこちにいるんで、なかなか集まる機会もないというんで、そしたら、ひょっとしたら、ロータリーの方々にちょっと声をかけてもらえると、そうしたら何か集まりやすいんと違うかなと、思うんですけどね。だから僕も、そういうローテックスみたいな大きな組織を作らなくても、何かそういうように働きかけてきたらいいかなと。そしたら、1人例会の所に行って、その辺のロータリアンをつかまえて、「ライラセミナーの人間の同窓会みたいなのをやりたいんですが」と言うた場合には、何のこっちゃ分からんといわれるのがオチなんでね。そしたら10人、20人集まって言いに行ったら、そりゃあ何かしてくれるとは思いますが。ですから——ここでののは受講生としての意見として、今ちょっとロータリアン外れますんで——何人か集まって、ロータリーの所に行って、その会長さんなら会長さんに言って、それで集まれるんかどうかというのをね。それとか僕は1番いいと思うのは、ロータリーの方々に来てもらうのが1番いいんですけどね。

それと1つ思うのが、ロータリーの方々に、ここに来てもらえる人はいいんですけどね、来てもらっても横の方でこっちのセミナーをじっと見ていると。それだけだったら、雰囲気

気というのが分からないんですね。だから何でもいからちょっと、ちらっと入って来て、色んな話をしてもらえるとね、そうしないと何か「学生さんとか若い人がいっぱい集まってセミナーしてるわ」というだけに終わってしまうんで、その内容というのが全然見えてこないというのが、実感なんですけどね。だけど、忙しいとか言われるんですけど、見ると同じメンバーの方ばかりでね（笑）。ここに来られている方が暇やとはよう言いませんけど、皆さんそんなに熱心に来られるんです。僕でも、一応診療所を休診してやってきているんですけどね（笑）。決して暇な訳はないと思うんですけどね。だけど、1日2日休んでも、患者さんにその前から謝っとけば、それなら許してくれるやろと思うんですけどね。それやったら、1日2日くらい、年に1回くらい、来てもらったら、僕はいいと思うんで。それにライラという事自体が、皆ロータリアンで分かってもらえれば、他の事もできるやろうし。この前、国際ロータリーの方でも承認の事を言われてましたけど、それやったら、ものすごくいい事だと思っているんです。だから、ロータリーにもっとアピールせんとあかんというのが、僕は1番の実感だと思います。皆さん、やっぱり思ってたっしやるのはその辺だろうと思うんですよね。ロータリーを分かっている上の先生に言ったら分かるんですけど、新しい人なんかは全然分からないというのが、1番実感だと思います。その辺が、僕が1番、今思っている事で、皆さんの期待に応えられたかどうか、でも受講生が期待するものはそれじゃないかなと、僕は思うんですけどね。

それでライラはどんどん増えていく。人数は増えていく。それで、今日の来ているメンバー表を見てみると、受講生の数が多いのがやっぱり、昔の人はあんまり来てられへん人やね。1回2回はやっぱり少ない。だんだん、最近になればなるほど、やっぱり受講生の数が多くなって来ているというのは、それだけ意識は薄れていくんですよね。常に、何かそういう事をやってないと、せっかくここでもらった意識がどんどんと薄れていって、最終的には——僕は特殊な例かもしれないですけどね——20年経った時点で、ライラってなんかあったなあって、それだけで終わってしまいそうな感じがするんで、だから常に、ちよくちよくやって、皆で会って話をすれば、この意識も高まるだろうと思うんですけどね。それでロータリーの例会というのは、週に1回ずつやると。毎週1回ずつ、皆さん話をし、話をするとそれだけ色んな知識ももらえますし、それに対してこっちの意見も言えるという事で、それは素晴らしい事なんで、ロータリーの例会みたいに毎週会うなんて事はできませんけどね。年にいっぺんでもいいですから、集まって話をし、そしたらまた意識が元に戻ってくると。それを繰り返していれば、常に何かちょっとしたロータリーの意識というものをもってもらえると。

それにはやっぱり、同じ人間ばかり話をすれば、何か方向性がずれていく可能性があるんで、時にはロータリーの方々、大先輩の先生方に来ていただければ、ちょっとずれとんちゃうかというような指導もしてくれますんでね。自分達でやっていたら、こんなもん

でええんやろかと、その内にこんな事してていいのかなという事になってくるんで、ところが、そこにロータリーの方がそれでええんやと言ってもらえたら、それだけで自信がつくと思うんです。だから、どんどんアピールしていくのもそうなんです、ロータリークラブのメンバーさんを動かせる力は、確かに1,200人もおったら絶対あると思うんです。だから、こんな所で僕がこんな事言ったら、「お前やれや」と言われる可能性は大分あるんですけどね（笑）。確かに、まあやりますけどね。1人じゃできんというのがあるんですね。1人で、なんぼ来てください来てください言うても、それは何じゃと言われたら、もうそれで終わりなんで、やっぱり沢山の方がやってきて、沢山で訴えかけりゃ、そりゃ数で勝負でいけるんで、いっぺんやってもらえたらいいと思うんですけどね。

僕が今考えているのはそれくらいなんですけど、今、受講生の方々がどんな考えを持っておられるかというのは、僕ら、まだちょっと分からないんで、ちょこちょこ言ってもらえたらいいんですけどね。こんなとこでこんな話してるのはね、どうも、ここにおられる今井先生なんて、僕が幼稚園のころからのね（笑）。自分の意識の外にある事まで覚えてられますんでね。「あんたこんな事言っとったな」って言われて、僕全然覚えてへんしね（笑）。「ロータリーって何や」って、「ロータリーって何してんの、おいしいの扱とるん、飯クラブや」って言うてたやないかと言われても、そんなもん覚えてへんですからねえ。そんなもん、こんな所で話するなんて、こいつも変わったんちゃうかと思われるんがオチなんですけど。ロータリーの話を書くという事がものすごく、僕らにとってもやっぱり貴重な事で、ロータリーに入った会員の方々も、結局、今井先生ら、この方々のロータリーって何やというような講義というのは、最初に入る時にインフォメーションでちらっと言われるだけで、後は何も分かってない状況があるような気がするんですけどね。だからライラセミナーにやってきて、こうやって話を聞くという事も、ロータリアンの方々にとっても重要な事やろうと思われるんですけどね。

だから地区大会なんかに来られて、話を聞かれてもいいんですけども、僕はよう思うんですけども、地区大会に登録ばかりして名札ばかり並んでいて、実際に地区大会に来た時に名札の数が減ってないというのが、よう見受けられるんですけどね（笑）。そういうふうにお金だけ出して、後は知らんでっていうのは、あんまり無責任やないかなっていう気はするんですけどね。だからお金も出してくれるっていうのは重要なんですけど、出した先がどんな事やってんのかというのを分かってもらった方が、もっと出し甲斐もあるんちゃうかなと思うんで、僕が期待するのは、もう同じ顔ぶればっかりじゃなくて、たまには変わった顔触れも、ぎょうさん増えていったらいいんちゃうかなと思うんですよ（笑）。とりとめのない事を言うんですけど、1番僕らが思うのは、その点が1番いい事だと思うんです。ここに来られている、確かにガバナーの方々というのはものすごく忙しいと思うんです。だからガバナーの話なんか聞けるというのは、なかなかないんでね。

ここに来てガバナーの話を知るといふのも、なかなかいい事やなと思ってるんですけどね。だから受講生もいい事があるんやろうと思いますし、ロータリアンの方々に来てもらっても勉強になると思いますんで、できれば、広めてもらうという事を僕は期待して、これで一応話を終わらせてもらいます。

中島 ありがとうございます。受講生というよりも、ロータリーの内輪話で終わったような感じですけども(笑)。受講生の方々には、何でも結構ですから言ってください。後で反映するようにして下さると思いますから。それでもう1度、この目的を、ワークブックの1ページ目を見てください。ねらいって書いてありますけど、いつもと違うんですよね。ホームカミングですから。それに目を通しておいてください。意見を充分交換できる…やってますよね。温故知新という事で、今までのライラセミナーを振り返ってこれからどうすればいいのか、そういう指針になるような事、まあそれだけでなくてもいいですから、本当に言いたい放題でいいですから、よろしく願いいたします。それを頭に入れておいて頂いて、今、永松先生からお話がありましたけれども、私も一応第9回の受講生でしたし、少しお話しておきます。

私は、受講生からロータリアンになったのではなくて、ロータリアンとして、ライラセミナーに受講生として参加したんですね。少し逆なんですけどね。だから、きっとそういう人間はこの20回の中で私1人しかいないという事で、いかにロータリアンがそういう事なのかとね、受講生にならないという話なんです。私からすれば、ロータリアンが受講生になって、一緒にやって、キャビンタイムでも一緒に話をすれば、もっともっと面白いし、永松先生が言われたように、ロータリーについての話ができるんじゃないかと思うんですけどね。まあそれは、ロータリアン側の話なんですけどね。これからどんどん永松先生のいったように各クラブでまた、こちらにお歴々がいらっしゃいますから、ロータリアンも参加できるように、ぜひ方法も考えて頂きたいと思います。

ですから私は反対だったんですけども、非常に実があります。第9回の時のカウンセラーが、今回のディーンをなさっている篠原さんなんですね。それで引き込まれて、カウンセラーに呼ばれて、そしてライラ委員に、されたと言ったら怒られますんで、自分でなりました(笑)。それからまた、ライラ委員長もさせられたんじゃないかと、自分でなりました、青少年奉仕委員長にも祭り上げられて、まあいつも下働きなんですけどね。そういう事ばかりやってきました。それで一貫して思うのは、確かに素晴らしいという事ですね、このライラセミナーというのは、私、見たら分かりますように住職ですから、一応。お寺の子なんですね。だから色んな、特に禅宗ですから新入社員研修とかそういう事の色んなプログラムをする訳ですね。社長学とか経営者セミナーとかいっぱいありますよね。その中で、色々比べてみても、このライラセミナーというのは素晴らしい

プログラムですね。これは皆さん、よく感じてらっしゃると思います。特にここで受講されて、社会に一旦出れましたね、皆さんは。ですから余計に、その良さとかがかかっていると思うんですね。そうじゃないと、こんな全日程ね、皆さん素晴らしいですよ、全日程をこうやって来るというのは、本当に。感謝しています。今年は高知が担当なんです、このライラセミナーを準備するのはね。それで高知の吉村ガバナー以下、4人の方が非常に一生懸命やって頂きまして、これだけの下準備ができて、やっとやってこられた訳なんです。だから下働きって事ばかりなんですけど。皆さんがこうやって、もう少ないんですよ。永松先生が言いましたように、1,200何人いる中で、四国でアンケートとって返ってきたのが70通だけなんです。ですから、いかにフィードバックしてこないか、という事を感じている訳ですね。だから皆さんは素晴らしいと、本当に。1泊2日で、今日の昼からどっと増えますけれども、これだけ少ない人数でね。だから今、さっき言いましたように、1番大事だというのはそういう事なんです。このセミナーの中で、今日のこの時間というのが1番大事な事なんです。後のライラセミナーについても、本当に大事ですから、充分自分が素晴らしいという事を認識して、色々言ってください。

私の話はこれくらいでいいと思うんで、だいたいの方向は分かったと思います。それでは、色々言ってもらいましょう。それでは、やはり担当地区ですから2670の方から、まずいってみましょうか。1番上に名簿があるんですけど、適当に載ってるんですけど。かわいそうですけど、がんばってください。それじゃ長崎さん、鳴門ロータリークラブ推薦ですね。第7回、11回、それと13回のホームカミング、3回受講されてます。年齢は、50うん歳です。それじゃ、何でもどうぞ、お願いします。

長崎 紹介して頂きましたんですが、私はこの余島が好きです。というのは第7回に来て、YMCAの施設は徳島県の阿南に大阪YMCAの施設があるんですけども、非常にこのYMCAの施設を使わせて頂いて、ここも素晴らしいですけども阿南とかそういう施設、沢山は知らないんですが、そういう資源を生かした施設で、素晴らしいなあと思います。

私はボランティアで、小さい時からボーイスカウト活動をやっております。YMCAとよく似た、世界的な団体なんですけれども、そういうボーイスカウトの子どもたちと、毎週のように遊んでいるというような状態ですけども。そういう活動を通じて、色々な事を学ばせて頂いている訳ですけども、このライラに来させて頂きまして、非常に学ぶ事が多いという事で、私は今言われましたように、8年ぶりにまたここにやって参りました。今回も非常に色々な事を学ばせて頂いておりますけれども、私たちがロータリーに期待する事というのは、ロータリーというのは非常に色々な所で活躍されております。しかし、一般的に昔からいわれている事ですけども、ロータリーがロータリアンっていうんです

かね(笑)。お金は出すという事ですけども、動きというか活動的というのは他の奉仕団体に比べてちょっと鈍いんじゃないかというような事も、一般的には言われておりますけれども。しかし世界的に素晴らしい組織であって、私もある所で、海外なんですけれども、そこでちょっと話をしていたら、その人がロータリアンだったんですね。それで色々、私は英語はよく分からないんですけども、ものすごくロータリズムといいますか、私はこんな活動をしているんだという事を一生懸命言ってくれました。分からないなりに、こういう事をやっているんだなという事で、説明を受けたりしながら聞いたんですけども、そんな所でもロータリーいるなあとという事で、ちょっとした旅先で会った人がロータリアンだったという事で、非常に感激しました。私たちのボーイスカウトでも、サインをすれば世界中に通じるっていうような、そういうような活動をしている中で、そういう感激も覚える訳ですけども。ロータリークラブのそういう組織も素晴らしいなあとという、そういう事を感じた事があります。

そういう事で、やはり世界的に色んな活動をしておりますので、そういう中で、先程言った私が1番感じているのは、先程永松さんが言ってくださったように、何かライラやってる、知らない、というのがやっぱり多いですよ。まあメンバーの問題で、中の問題だなと思うんですけども、どんどんメンバーの中でも知って頂いて、それで青少年のそういう指導者を出して頂きたいと思いますね。だから、そういう案内があったら、色んな所から、活動をしているメンバーを探し出して、ライラに送って頂きたいと思います。そういう努力をしていただく事が、1番大事でないかと思えますね。その点で、まず自分がライラっていう事を知らないといけないと思えますし、そしてそういう指導者を育てるための、第2世のそういう受講生を出すように、送り出していただければという事が1番期待する事でございます。以上です。

中島 素晴らしいですね。さっき永松先生が言われた事と非常に呼応して、素晴らしいと思えます。これはロータリークラブの方の姿勢に問題があると思えます(笑)。それでは2680の方でお1人。今の長崎さんは、鳴門市役所にお勤めでした。じゃあ2680の一貫田さん、13回と19回、あつ5回、9回、最多ですね(笑)。今回の受講生の中では4回、最多のグループでございますね。津名郡の一ノ宮町役場にお勤めです。お願い致します。

一貫田 私はロータリーに期待するもの、それは何もございません。というのは、あまりロータリーに期待しても…(笑)。私を推薦してくれた人はロータリアンの中でもそんなに、ロータリークラブの中でライラというのに関心を持っている人は少ないんじゃないかなというようなイメージがちょっとありました。関心のある人は非常に関心がありまして、私なり色んな人を推薦してくれたんですけども、関心のない人の方が多いんじゃない

いかなと思います。

但し、僕がここに来て非常によかった事は、やっぱり色々な人と出会えたという事と、自分の物の考え方が非常に変わったという事ですね。今まで僕が青年団活動とか子供会とか野外活動とか色々な活動をしてきたんですが、その中で得た知識とまた違うものをここで得たような気がしました。それで僕も非常に興味を持って、今も言われたように、これで5回目ですか。20回の内の5回ですから、4分の1ここに来ているという事ですね(笑)。役所も割と理解がありまして行かしてくれるのと、うちのロータリークラブ、津名ロータリーですけれども、そこも理解がありまして「お前なら行ってこい」と言ってくれるんで、来させてもらってます。

それで私がこの20回に参加して最初から感じた事は、今、1千何百人かの受講生がおられるという事なんですけれども、今回20回の中で、名簿を見させて頂いた中で、10何人くらいはほとんど名前は知っている方でした。それでできたら、その1千何百人の方の名簿的なものがあつたらいいんじゃないかなと、僕はちらっと思ったんですけどね。それで僕が今活動している中で、町おこしのグループがありまして、ここにも確か何回かの時に、萩原先生がお見えになったと思いますけれども。あの方の講演を聞いて、あれから萩原先生とも何度かお会いして、あの方の「花咲じじいの会」ですか、そういうような事で日本全国から町おこし人が集まって、年に1度、そういったような会を自主的に開いているというような事も先生から聞いていまして、僕にも1度来いと言われてます。それでロータリーに期待するものがないと言ったのはですね、この受講生の中で、先程おっしゃったように、できれば自主的に年に1度くらいそういったネットワークを組んで、何人か小さな会でも開いて、別に目的がなくてもいい、年に1度顔を合わせて近況なりを話合うような輪が設けられたらいいんじゃないかなと思って、この20回にできたら参加したいなという事で、津名ロータリーに申し出たんですけどね。大体そういう事です。

中島 今、言われました同窓会名簿の方は、両地区の方で今、作成しております。で、現在の状況がよく分からない、さっき言いましたようにアンケートが戻ってこないのが非常に多いので、ちょっと不備なところが大分あるんですけど。基本になるものは今作っておりますから、ぜひお役に立つようにして下さると思います(笑)。2680、2670、両方お1人ずつ、まずお願いいたしました。順番にいくよりも、今思っている事を話したいとか、そちらから、もう慣れましたから大丈夫でしょう。さあ、どうぞ。

吉田 私は第12回に1回来て、13回が同窓会らしかったんですけど、それはここに来られませんでした。その8年前に来て、それまで全然音沙汰なしだったから、そこでたまたま聞いた様なものですから、どうせなら年に1回くらい誘ってくれたらいいなあとは思

ます。それから今回、ちょっと受講生の数が少ないんですけどね。だから皆親しくなって、ほとんど名前も覚えてますし、同窓会なんかしたいんですけども、やっぱり範囲が広いですから同窓会をするような場所がないんですよ。例えばどこかに予約をとってとかしても、やっぱり来られない人間も多いし、そういう所で人数とか時間とか、無制限で借りれるような所を斡旋してほしいとは思いますが。やっぱり無理でしょうかね(笑)。それから、ロータリーと受講生の連がりがないというような話もありましたけれども、今回もこういうふうに並んでいるのでも、受講生ちょっと前の方に行けよって言って。それでロータリアンの人は後ろの方に行ったら、そういうのでも、混ざってもらった方が覚えやすいような気がします。食事の時でも、受講生とロータリアンの方は離れてるし、そういう事で、もうちょっとうまい事やったらいいんじゃないかなとは思いますが。そんなところです。

中島 ありがとうございます。前の方にすみませんね。有意義でございますね。どんどんでてる事を期待しましょう。それではどうぞ、挙手してください。…はいどうぞ。ロータリアンに言っておきますけれども、今の吉田さんは郵便局の方です。今度の里見君は大学院ですね。徳島の大学院です。

里見 徳島の里見です。今日来ている受講生の皆さんとロータリアンの方に質問なんですけれども、ローターアクトというのをご存知の方、挙手願いますか？ ローターアクトっていうのをご存知でしょうか？ ロータリアンで知らない方、いらっしゃいませんか？(笑)。あ、ありがとうございます。今、私は徳島ローターアクトの会長をさせてもらってまして、来年度、四国地区の代表をさせていただきます。それで1つ提案なんですけれども、ローターアクトっていうのは18歳から30歳までが、年齢制限がありますけれど、このライラセミナーのアフターフォローの1つの提案として、ローターアクトの加入をぜひ推進してもらいたいなと思っておりますけれども。ライラセミナーに参加された受講生の方は、皆同じ事を言ってくれまして、すごい面白かったと。ロータリーっていう所も何となくわかってきたと。ロータリーの精神とかも、ちょっとずつ理解してもらって、地域に帰ってもロータリーを見かけたとか、どこかのホテルにロータリーっていう名前があったとか、そういう事を言ってたんで、ちょっとずつロータリーっていうのを地域で見かけていると思うんです。でも離れてしまったら、結局分からないですよ。さっきも言っていたように、ライラセミナー…行ったなあってくらいで、ロータリーってあったなあってくらいでしか。やっぱりちょっとずつでもいいから、関わりを持ってほしいと思って、年齢制限はありますけれども、ローターアクトっていうのにぜひ参加推進してもらいたいなと。それで今日来ている方でも、ローターアクトの事を知れば、ぜひやってみたくて言ってくれる方が、多分いると思います。ですので、ぜひローターアクトというのを、今日連れて来てもらっ

たスポンサーに説明してもらって、ぜひ地域の方でローターアクトを立ち上げてもらいたいなと思いますけれども、どうでしょうか。

中島 今、里見君の方から、徳島ローターアクト活動報告書というのが出ているんですね。見せてもらってるんですが、去年97年から98年の事なんですけど、色々やっています。色んなダンスパーティとか。すごいですね、4月、5月というのは毎週1回、必ず何かやっていますね。これ、受講生の方に回しましょうか？ コピーしてお渡ししましょうか。それでは、これは後で配るようになりますから、お願いします。ロータリアンの耳が痛いようですが、今、ディーンが何か言っていますが。どんどん計画してください。では、次どなたか、どうぞ。

曾根 淡路島の洲本から参加させて頂いています曾根です。よろしく申し上げます。推薦ロータリークラブは洲本ロータリークラブです。私は今回、すごい悲しい思いをしました。まず、それから皆さんにご報告をしたいと思います。その前に、もっと悲しい事があるんですけれども、この20回のご案内を頂いた時に、私の名前は曾根サユリなんです。曾根サユリが曾根ユリコさんで、家へ届きました。やっぱり名前って大事ですよ。これ誰への案内だ、みたいな、よくこれで届いたよね、みたいな。淡路は田舎だから曾根と書いてあれば、大体届くんなんですけど(笑)。それが1つ。もう1つは、この20回のメンバーには入ってないんです。名簿に私の名前はないんです。名札も手書きの名札なんです(笑)。それはだから、私をもっと悲しいと思うのは、私がやっぱりどうあがいても将来ロータリークラブには入れて頂けない女性だからかなと。(笑。いえいえ、とんでもない。女性いますよ) あ、そうなんですか。うれしい。それを思って、1人でひがんだり悩んだりしていました。

それで、受講生がロータリーに期待するものと言っていますけれども、今回またもう1つ、真剣に悲しいなと思ったのが、洲本ロータリークラブからどなたか一緒できるもの、と思い込んで私は参加の申し込みをいたしました。最初に推薦頂いたロータリアンの方じゃなくても、今期のライラセミナーの担当の方は絶対来てくださるんだろうなと楽しみにきたら、ロータリークラブの方にお電話したら、「あ、誰も行きません。勝手に行ってください」みたいな感じで、もうそこから、がっかりしたところです。それで私は6回と13回と、2回行かせて頂いています。その時に卓話という事で、結果報告をさせて頂いたんですが、本当に例会が貴重な時間で、5分間だけ頂きました。でもその5分間で私は、何を話そう、ああいう事に感動した、あれも話したい、これも話したいという事で、とても5分間じゃ、と思ってもめにもめて行ったんですよ。でもその例会の日に、たまたまだと思うんですけど、「曾根さん曾根さん、5分って言ってたけど、3分でお願いします。も

う、行ってきたからね、それだけでいいから」という事をおっしゃられて、何かもう愕然とした覚えがございます。

そんなふうに、ここに來させて頂いて、ものすごく充実したというか、贅沢な時間と、それからロータリアンの方のお話とか、個人のロータリアンの方はものすごく人生経験は豊かだし、それぞれの業種で道を極めた方だし、それでもなお「一生勉強ですよ」と本気でおっしゃってくださっているし、その方々が、私なんかの、一言しゃべればもう人生が全部分かっちゃうみたい人間が一生懸命しゃべっても、それに答えてくださるロータリアンの方がこんなに沢山いらしてくださって、そんな贅沢な時間というのはちょっとやそっとで持てないと思うんです。それをライラで経験させて頂いて、それでこんなに年度末で忙しい時期に、時間を共有できるだけでもありがたいなって思うのに、食事も、最後のキャビンタイムも、ずっと付き合ってくくださっている方もいるし、本当にいい勉強をさせて頂いているというのが実感なんですね。

なのに、同じロータリアンの方が、こうも温度差があるのかって（笑）。ショックでショックで。だから、私が期待するのはそれだけでございます。ありがとうございます。

中島 まず、手続きの不備は深くお詫びいたします（笑）。今、もう素晴らしいロータリアンばかりいますから、皆さんも素晴らしいけれど、今いらっしゃるロータリアンも素晴らしいです。安心して何でも言ってください。ありがとうございます。それでは、さっきのローターアクトについて、重鎮がご説明させて頂きますので、ちょっと時間を頂きます。

井奥 ロータリーには、青少年で提唱しているものがございます。これは当地区なんですけれども、まず14歳から18歳まで、これは高校生を中心にしたインターアクトクラブ。目的が、社会奉仕と国際理解という大きな目的を掲げてやっています。そして次に18歳から30歳、30歳というのは6月末まで30歳という事で、これがローターアクトクラブというものです。このクラブは、専門職を通じてお互いが研鑽をするというのが1つの目的で、やっぱり社会奉仕も大きな目的になっています。どうも日本では、非常に根づきにくい部分がございます。2670地区は亡くなりました菊沢さんが努力をされて、今、四国地区には11クラブございます。当2680地区は6クラブしかございません。そして、崩壊寸前というのが1つございまして、維持するのが大変というのが1つになって、4つしかございません。昨日、お帰りにになりました松下ガバナーが力を入れられまして、本年度中に1つ新クラブができるんじゃないかと思えます。

ローターアクトクラブというのは、各ロータリークラブというのが提唱しますんですが、ローターアクトとロータリアンは、同じレベルであるという事が1つの前提なんです。そ

ういう意味で、入会の時に国際ロータリーのほうにもお金を出すと。それで活動も、各ロータリークラブの援助以外に、メンバーそれぞれが努力をして会費を出して運営をしていく。当然、とてもそんな事はできないですから、ロータリークラブに非常に依存しています。当地区では、青少年、本来社会奉仕に属していたものなのですが、我々の2680地区は継続という事で、ローターアクトの継続という事を重要視しまして、今井先生が青少年の方にウェイトをとるという事で、青少年に入っています。

日本では、どうしてもこの年代の方というのは、JCとか、そういう関係の団体の方に流れてまして、苦戦をしています。メンバーは素晴らしいメンバーが多いんですが、ちょっとおとなしい。個性を出せない人間が非常に多いなど。だけど素晴らしい、中身のある人間が多いような気がします。我々の地区も、5月16～18日に洲本で年次大会を開催します。ぜひ出て来ててください。私も参加いたしますので。そして6月27～28日、またこの余島に私は戻ってまいります。そして指導者育成セミナーというのを開催する予定にしております。建て直しに奔走しているんですが、なかなかうまくいかないんで、苦勞しているのが現状です。何か補足を、安平先生ございませんか。今井先生、お願いします。

今井 ローターアクトのカンパニーは日本で400いくつあります。それは世界の中で、もっとも沢山ローターアクトクラブがあるんです。日本は、今言ったように、1つ1つは大変です。それはロータリアンの責任でもあるし、ローターアクトの方の責任も大きい。もう1つは、今言われましたように、ローターアクトの方々は、ロータリアンと同じように社会奉仕を一緒にやって頂きたいと思います。ジュニアロータリークラブみたいな気持ちでやってほしいという事でね。いつも世界大会の時に、ローターアクトの大会もやっぱり一緒に致します。それで、この前頼まれて一緒に話に行った時に、バーに飲みに行った時に、ロータリアンもローターアクトも同じだけお金を払って、同じようにして飲んでいる。それ位、やっぱり主体性をもって、ローターアクトが働いている訳です。日本の場合には、なんか酒杯というような事で、ちょっとお金出してもらっていいやってね。おおいおい、ビールくらい飲ませてやるって言ったなら、よしてね、ついていくもんだからね。いつまでたってもローターアクトが主体的に、自分でもって、話をもっていくという事ができないんです。

その辺で、これが日本の場合は少し違うのかなあと、むしろインターアクト、ローターアクトを、やっぱりもう少しお世話しなきゃいけないんじゃないのかなという事で、2680地区は、青少年の方に私行って、この熱心な人達が応援する。今もお話があったように、ローターアクトは本当は、JCと同じように自分達でやる。それを、多少ロータリーが助けながら、しかし目的とする所はロータリーが目的とするような事をしていこうじゃないかという事で、パートナーとしてなっていただけたらありがたい、その事を私たち一生懸

命を願しながら、皆が応援してる。だからローターアクトにお世話できないという事もあるけれども、同時にローターアクトの方々が主体性が持てる、そしてロータリーが抱えているような大事な、人類が生きていくための共通の目的をやっていくパートナーになっていただければ、という事を私たち心から願っています。今、世界で1番、数としては日本が沢山あるという事だけはね、びっくりされるだろうと思いますけれども、実際はそうなんです。名前だけやなあ、あれはなあ(笑)。だから責任はあんた違うか。そういう事でございます。

井奥 今井先生、ありがとうございました。お助けを願いました。それで私どもの地区は、今、彼が言いましたように、ローターアクトは過去にかなりライラに参加しています。それで、ライラに参加してローターアクトに入会した人もかなりおります。そういう事で、今、彼の資料を配らせて頂いてますので。それで例えば、千葉県かなんかから来られてます。まあ、年齢的には無理なんですけれども。そういう各クラブでの資料が必要でございましたら、それぞれの地区のガバナー事務所に連絡して頂きましたら、全国ローターアクトの名簿がございますので、積極的に参加を考えていただけたら非常にありがたいと思います。以上です。

中島 ありがとうございました。時間もだいぶ過ぎましたので、どんどん貴重なご意見、ございましたら…。

西垣 これですら3回のお招きに預かりました西垣と申します。僕は、今年来て1番嬉しかったのは、私にも今年小学6年生になる娘がいるんですけども、昨日お2人にも話したんですけども、兵庫県は小学5年生になると長期のキャンプがあるんですけども、そのキャンプに私の娘も去年行って来たんです。それで、あ、もう自分の子供がこのライラに行っている受講生の中にも育てているんだなど。それで自分の子供も委ねていく年になったんだなど。後10年もすれば、それこそ僕に代わって、自分の子供がこのライラに参加するようになってくるんじゃないかなと思います。確かに、こういう人生の先達から見れば、私達がやっている事は危なっかしいと思うんです。それと同様に、僕らの立場から見ると、今のカウンセラーを見れば、たぶん危なっかしいと思うんですけども、でも同じようにキャビンで話してみてもね。あ、任せていいんだなど、決して自分達がやっていた時よりもレベルが低い事なんて全然ないし、ましてや僕らがやっていた頃よりは、意識は相当高いと思います。だから、どうやって任せられるのかなというのは、やはりこういう場でコミュニケーションをとって初めて、委ねていけるんだなあという。育てるとか共生とか共有じゃなしに、共に作るんだなど。立場は違うんですけども、こう相対すれば同じ

受講生なんですよ。永松先生だと、ロータリアンでありながら、受講生なんです。そういうものすごい大きなつながりの中で、世代交流というのが行われてきたのが、この20年という歴史の重みなのかなとつくづく思いますので、いい意味でこの会がどういう形をとるか分からないですけども、帰った時に、まかれた種は育っているんだなというのが1番の、ロータリーでの慰めでもあるし励みになると（笑）。やはりこれは、1つ1つ普段は見えないですけども、こうやって集まった時に、あ、自分の子供が僕らだったんだなと。それで実際、私の家内も今井先生の教え子なんですよ。今井先生、たぶん名前を言っても分からないかもしれないですけど。そういうつながりで、やっぱりつながっているんだなあって思うんですよ。それで、授業がどうのこうのって色々家内から話も聞くんですけども、やっぱり、流れのつながり、川のつながり、1人じゃないんですよ。普段は一緒に時間を共有していなければ、すごく短いんですけども、やっぱり確かなつながりがあるんだなという事だけ、今回久しぶりに帰って来て、すぐに僕も安心っていうか、励みになりました。どうもありがとうございました。

中島 非常に心強い意見をありがとうございました。励みになります（笑）。他にございませんか。挙手がなければ、永松先生からのご推薦ですが、2680地区の長谷川敏之さん、お願いします。

長谷川 突然言われまして何も考えてなかったんですが、長谷川です。今日は久しぶりに、第12回に参加したんですが久しぶりにこちらの方に来て、昔の事を全然覚えてなかったんですね、12回の事を。前はどなんしてここに来たのかなという、それも覚えてなかった。それでここに来て何をしたのかなと思い出しても、夜に酒飲んだなという事はちゃんと覚えてはいましたんで、とにかく荷物の中に一升瓶を持ってきたんですけども（笑）。それだけ聞いたら、旅行にね、遊びに来たと思われても仕方ないんですけども、本来の自分としての目的としては「人」というので目的をもって、ここに来た訳です。「人」というのは、多くの人と知り合いになりたいとか、話をしたいとかいう事で、こんな忙しい月末の年度末に来れるという人もそんなに多くなかった訳ですけども、そういう状況の中でも来られた方、そして知り合った方というのは、必要だから、偶然ではあるけれど必然的に、こういうふうに出会うような事になっとったのではないかと、こう考えてきた訳ですけども。何を言っているのか分からなくなって来てますが、自分としては今回、「人」という事でこちらの方に来ました。それで、もちろんこれがセミナーが終わった後も、今後も長くお付き合いができるような関係になって、できれば嫁さんになってくれる方がいれば1番いいんですけども（笑）。まあ、そうでなくても、末永くお付き合いできるような関係を作る事ができればいいなと。そのためにロータリアンの方も何か、先程から色々

話がありましたけれども、月に1回でも何か便りでもいただけたら、通知か何かあればいいかなと考えております。以上です。

中島 ありがとうございます。今の長谷川君のように、自分の心情を吐露するように言ってくださると、非常に嬉しいです。別にかしこまる必要はありませんから、何でもどうぞ。

井上 ロータリークラブの推薦があった井上と申します。前は14回の時に来させて頂きまして、今回6年ぶりになるんですが。前回来てから、この報告書が届いてそれっきりだったんですね。それで震災の時に、お手伝いしませんかという案内は頂いていたんですけども、それっきりというイメージが強かったです。それで、その時の班のメンバーとも、1回2回という形で同窓会みたいな事をやったんですけども、それも時間の流れと共に、会えなくなったり、所在がつかめなくなってしまうたり、結婚したりという形で、ちりじりばらばらになっていきました。それも、どうしても時間が経っていけば仕方ない事かなあというふうには思ったんですけども。やっぱりセミナーが終わってからのフォローアップといいたいでしょうか、個人で動こうとしてもその力というのは微々たるものですし、かといって数名で集まっても、やっぱりなかなかムーブメントというのは起こせない。そういう土壌を我々に、いつでも門を開いてほしいというのが、1つあります。それで、どうしても我々は社会的な立場ではかなわないから、弱いから、何をするといっても後ろ盾というのが必要じゃないかなとは思っています。そういうイメージを、やっぱりこのライラセミナーを卒業していったOBの会っていうんでしょうか、そういうネットワークとか、そんなやはり土壌としてそういうものを作っていくって、その中で色んな意見とか行なっていったらというふうに思います。以上で終わります。

中島 ありがとうございます。2680地区の方が続きましたんで、四国の方の坂東さん、1つお話をお願いします。

坂東 高知ロータリークラブの推薦で来ました坂東といいます。私が初めてここに来た時、ロータリーに、各県の代表者の方がみえたり、植樹するという事はしてましたけれども、お昼なり10時に1回集まって、偉い人が植樹して、札を立てて、お金を持っているからそういう事をしているだけかなというふうに思っていたんですけども、いつもこういうところで人と交流するのもちょっと苦手な方なんで、すごく憂鬱な気持ちで来ました。でも何人か友達もできて、何か自分でもアクションを起こそうと思って帰ったんですけども、また結局帰ってみたら、そのまま社会に流れて、そういう気持ちも薄れて来て、同

窓会するって言ってくれたんですけど、それも結局来なくなって。それでまた今回来てくれないかって言われて、自分が全然変わってないので、その事を皆に知られるのは恥ずかしくって、すごく心がブルーだったんですけども。来てみたら皆、ちょっとずつは変わっているけれども、やっぱり悩んでいる事とかもいっぱいあって、それで年齢が高い人も低い人も、皆悩んでいる事は同じというか、なかなか日常では高い人と一緒に心を分かち合って、交流するっていう事は、上司の立場上、そんなに部下に心を開いてくれる事とかもないし、部下もやっぱりある程度まではしゃべっても、部下の立場としてそれ以上心を分け合ったりする事がないっていうのも、ここだと今、本当に一緒の人間としてしゃべる事ができて、ああ、皆同じ事を考えているんだなあって思って、すごく安心する事ができるので、こういう場をもっと他の人にも分け合ってあげればいいなと。できるだけ多くの人にこういう場を与えてあげて、私のように、あ、皆こうなんだって思える人を増やしてほしいと思います。ありがとうございました。

永松 ちょっと今、考えとったんですけども、ロータリークラブって言われた時に、皆さん1番考えられるのは「なんや、何か奉仕のクラブや」というのが、1番思われると思うんですけど。ロータリークラブに入会した時に、会長さんから渡していただく中に、ロータリーの綱領もあるんですけども、ロータリーの綱領の1番最初に書いてあるのは、奉仕でも何でもありません。「奉仕の機会として知り合いを広める事…」、そういうふうに書いてあるんです。だから、皆こういう機会を通じて、知り合うという事が1番大事な事だという事を言ってますんで、だからライラセミナーっていうのは、僕は1番重要だろうと思っているので、ちょっと色々言わせてもらいました。

中島 どうも先生、本当にありがとうございました。内輪ですみません。今、坂東さん言いましたねえ。やっぱりそういう意識を持つっていう事が大事だと、結論の方から言えばね。今の意見っていうのは、皆さん聞いている意見は、ロータリーが何をやるかいうふうな、受講生がどういう事を思っているかというのは聞いていますけれども、まずさっき申しましたように、皆さん素晴らしいって事、自分で自覚を持って、そしてそういう意識を持つ。そしたら、周りの人は自然と優しくなりますし、そういう事が分かってきますからね。そういう意味で、坂東さんの意見、素晴らしいかったですと思います。それでは、もう時間ありませんが、後1人、2人、ありませんか？

一貫田 2回目ですみません。1番最初に参加したのは5回でしたかね。それから何度か、さっき言ったように参加したんですけども、こういう世代会議をもったという事は、確かこれが初めてじゃないかなあと。その時に出てこられたのが、永松さんと中島さんで

した。それから今日お見えになっていない小池さんなんですね。という事は、その時には誰もいなかったという事です、最初の内はね。それでこのライラが時代と共に少しずつ少しずつですけども、スタッフも若返りを図ろう、若返りを図ろうという事で、若い人達を前へ前へ前へと出そうというような、ちょっと感じられてきたと僕はちょっと思ったんですよ。それでそれと同時に、やっぱりそういう人達が、今言った3人達に、できれば次の世代を託したいのじゃないかなあというような事も、ちらっと感じました。それで、先程言ったようにネットワークを図っていくというんですとか、このライラを続けていくためには、やっぱり時代と共に若返りも図っていかないといけないだろうと思いますし、できればここにいるお2人、ちょうど兵庫と四国ですから、この人達を起点にして(笑)、兵庫と四国の、ライラの1つのネットワークづくりを、これから少しずつでもいいですから広めていきたいなあ。もし私に参加せえと言うのであれば、私もできれば参加したいなと思っております。この中にも、たぶんそういう人達は沢山いるんじゃないかなあと思うんですけどね、長崎さん(笑)。そういう風な事がありますけど、このライラのネットワークを広げていくというような事が大事ではないかなあというふうに思います。

中島 ご苦労でございました。もう前である以上、永松先生を中心にして、私たちやっています(笑)。他にご意見ございませんか。なければ、今、受講生からって言うんですけど、間に立つカウンセラーとして、有光ヨウコさんいらっしゃいましたんで、何かご意見ございましたらと思うんですが。要望とか何でも、いかがでしょうか。

有光 今、パッと真っ白になってしまったんですけど、わたし自身はこの会に来させて頂きまして、とても勉強になっているんです。それというのも、本当に主婦で、家庭の中にどっぷりいて、もう子育ても終わってする事もなくて、男の人のお勉強もしたいなと思っててもなかなかできない。花づくりをしたり、色々編み物もしたりとかいうように、家庭の中にどっぷりいる者が、こうして若い人達の中に入って、お勉強も少しさせて頂いて、それで若い方のエネルギーを貰って帰りますと、とても何か元気を頂いたような気がしまして。この会はとても楽しみにして参加させて頂いているんです。ちょっと家庭の方の事情がありまして、初日から来られなくて、とても残念なんですけど、今日と明日、また皆様の若いエネルギーを頂戴して帰って、がんばろうかなあと思っております。すいません、こんな事しか言えなくて。

中島 すいません、急な事で。大変失礼いたしました。ありがとうございました。それでは、2680の風間さんにも一言頂きたいんですが。あの、意見判定の方はありませんので。

風間 私は20年間、去年はちょっと来られなかったんですけど、20年間来て、この中に顔を存じている方も沢山ございますし、新旧交代の時期だなあというのをつくづく感じて、老兵は何とかじゃないですけど、来年からはそろそろ失礼しなくちゃいけないというのを常々感じております。男性のロータリアンの方は、それぞれに役割を持ってらして、いつまでもここに関わっていらっしゃる事を非常にうらやましく思います。私なんかカウンセラーとして、3年くらい前までですか、タッチさせて頂いて、どの位お手伝いできたかわかりませんが、今、ずっと色々な事を考えてましてね。1回目、2回目位の方と未だに交流があるんですね。それで、その後の若い期の方っていうんですか、そういう方とはあまり交流をもっていないというのはどういう事なのかなって思うんですけども、世の中がそれだけ変わってきたのかなとか思うんですけど。1回目、2回目の方とは時折ですけどお手紙頂いたり、結婚なさってお子さんがおできになっても、子供もこんなに大きくなりましたって写真を送って下さったりして。私は何人かご存知だと思いますけれども、ここで学生時代、今井先生の元でキャンプのリーダーとして働かせて頂いて、そしてライラがあるから手伝いに来ないかとおっしゃって頂いて、それこそ何十年來この島に来てますのでね。ライラ以外でも遊びに来ていますけれども、これでそろそろライラともお別れなのかなあなんて思うと、本当に涙が出るほど悲しい思いをしますけれども、また遊びに来させて頂きたいと思います。ありがとうございました。

中島 ありがとうございました。大体方向が見えてきたように思うんですけども、最後にあとひと方、何かございませんか。

山口 私は神戸クラブの青少年委員長をさせて頂いております、神戸ローターアクトも関係してまして、最近インターアクトクラブが1つできたんですけども。こういうローターアクトの皆に言っているのはね、皆、ライラの事もそうですけど、どれだけの人にこの事を伝えてくださっているかという事なんですね。それでローターアクトの皆に言っているのはね、例えば、就職の時に履歴書に所属クラブ・ローターアクトクラブって書いてあるかって言っているんです。書いて下さいって言うてるんです。そしたら会社の人、それ何やと。そしたら、こうこうこういうクラブですという事で、認識してもらえと思うんですね。だから、ローターアクトだったら、皆さんなんかあったら、ライラセミナーでこういう事に参加したという事を社長さんあたりに言うて頂いたら、え、そんなあるんか、それやったら新入社員研修の代わりに行かしてもええんかとかね。色々広がってくるかと思うんで、ぜひお願いしたいと思っております。

中島 皆さん、よくお分かり頂いたでしょうか。耳の隅に入れておいてください。あ、

真ん中に入れておいてください。他にございませんか。じゃあ最後に、名前が変わる方がいらっしゃるんですけどね。2680地区の神谷香里さん、5月3日が結婚式だそうです。

神谷 何かを急に言えという事なんですけど、何も考えてなかったんですけど、ロータリーに期待するものという事で、私は昨日夜野さんが言った、ちょこっとちびっこのキャンプの団体を、下野さんと一緒に活動しているんですけど、何かそういった小さい規模のグループが何かしようとする時に、行政とかのバックアップが少ないというか、そういうところでライラの受講生だけに限らず、他の機関の人ってロータリークラブって何なんだっていうのが全然分からないと思うんですよ。私もライラに来るまでロータリーって何だって言われたら、全然分からなかったの、もうちょっと一般の人にも分かってもらえるような窓口をつくったりとか、そういう何かしようとする人がいる時に、何かそういうバックアップをしてもらえるような大きな力もロータリーだと思うんで。行政はあまり頼れないと言ってしまうと、ちょっといけないんですけど、色々制約とか出てくると思いますけど、まずそういうのはロータリーとかJ.Cとか、そういう所に名前だけでも貸して下さいみたいな感じがあるので、そういう小さい団体にも開けるようなロジックみたいなのがあって、例えば公民館にロータリーはこういうクラブをバックアップしてますとか、そういうのをちょっと置いてみるとか、もうちょっと世間一般のロータリーというあるっていうのも、もう少し知ってもらえればいいんじゃないかなと思います。以上です。

中島 ありがとうございます。色々な意見を聞いてまいりましたが、ロータリーのほうからお話がございます。井奥委員長、お願いいたします。

井奥 ロータリーの方に皆さんから色々意見がありまして、私は言い訳に出てまいりました。反省をしております。まずロータリークラブのメンバーの意識が非常に少ない、ここに参加して頂いているロータリアンの方々は皆さん、ライラについては非常に詳しいけれども、他のロータリアンの意識が非常に少ないという事で、これはもう我々の責任でございます。ライラにつきましては、ロータリーでは前の地区協議会で、ご案内をします。それから広報、色々やっております。それで受け取る側の意識がないという事もあるようでございます。努力をしておりますが、努力足らずという事で、今後がんばっていきたいと考えています。

それから、初期の受講生から、今回非常に参加が少ないんじゃないかというお話がございました。初期の方、例えば20歳で参加された方、40くらいの方も来ておられますが、実社会でたぶん中心的な存在になってこられているんじゃないだろうかという事で、木金土日という4日間を空けるというのは、非常に問題があったんじゃないかなあと思います。

そしてセミナーの時の着席について、受講生が前でロータリアンが後ろというご意見がございました。今回はホームカミングという事で、あまり意識はしておりませんが、ライラセミナーを開催するという事は、我々はまず1番大事にしておりますのは、受講生の皆さん方を大事にしております。そういう事で先生が講義される時に、前の方にロータリアンがおられて、受講生が遠慮をするというような事があっては困りますので、これは徹底してこれで続けさせて頂いております。

それから修了生に対するフォロー、先程もバックアップというお話も出ておりましたが、ライラセミナーというのは、ロータリークラブが推薦をしてライラに参加をする。参加をして、全部参加をすると修了証書が出る。修了証書は各ロータリークラブから、推薦クラブから参加受講生に渡されると。その後ロータリークラブは、修了生と連絡を密に取って、地域社会の奉仕に努めるという事が入っています。これもフォロー、バックアップという事で、謝らなければならないのは、我々ロータリークラブではないかと思っております。

それから参加資格の事がございました。年齢の件、永松先生が19歳で参加されたと。私、これにはひやっとしました。我々がやっているライラは20歳以上、開催日までが20歳以上というのが、これが1つの大きな点です。それから回数の件がございました。永松さん4回ですけれども、ホームカミングは2回ですか。そしたら普通のは2回ですね。これはクリアなんですよ。2回までという事にしています。なぜ2回までかというと、ライラに慣れてしまったら困りますんで、それと毎年テーマが変わりますし、講師の先生方も違います。それで新たな気持ちで参加をして頂きたい、緊張感を持って参加をして頂きたいという事で、2回までにしております。それでホームカミングは制限しておりません。

それから世代交代をという話が、運営の方でありましたが、これは恐いところがございます。これだけ素晴らしいプログラムを考え出した、お亡くなりになりました梶浦先生と、本地区執行先生が開催されまして、このプログラムの形を今井先生が考えられたと。最近の話なんですけど、どなたがおっしゃっているかは申しません。ちょっとマンネリ化になってきたなというご意見も出ております。でも我々は、この形以上のものができるとは思っておりません。この形を崩す、これ以上のものを作れっていったって、とても無理だと思うんです。それでマンネリという意識を持ち、というのは主催者側の方が持っている。受講生は毎年新たに入ってくるんだと。その新たに入ってくる受講生に、この形をやって頂きたいというのは、私たち聞きます。何もロータリアンが偉そうにしている訳でもない。最近参加された方は、キャビンタイムにロータリアンが入ってきません。以前はそこに入っていったんです。これもすごく問題があるんですよ、やっぱりセミナーに参加して頂いた受講生の輪というのを第1にして頂いているのに、そこへ入っていかれたロータリアンがとんでもない方向へ導かれるという事は、あってはならないという意識で、別に隠している訳じゃないんです。だから、今ここで開催しているのは、皆様方が王さんなんで

すよ。これでよろしいでしょうか。がんばってください、以上です。

中島 ありがとうございます。では最後になりますので、あ、今井先生からお話がございます。

今井 もう少し、あなたたちに私からも。20年前に、最初にロータリーの、このライラをしまして、1回生の人がおられたら覚えている人もいますけれども。1番最初に出た大きな問題は、さっき坂東さんが言ったように、ロータリアンというのは高いお金を出して、ホテルで飯食って、遊んでるだけやないかと、そんな人は私ら信用せんというのが最初でありました。若者達がお年寄りを信用しないっていうのはそういう事なんだろうと思います。ロータリアンもそういう意味では信用性に欠く、どうせお前らお金が余っているから、たまにいい事せんといかんというからお金を出して、私達を集めて、私達はだしまいたいなものだ。それで帰ったら、ロータリーいい活動してるなあという事を言われているだろう、そんなものは私ら信用せん、と本音で言ってくれました。その事のために、私たちは一生懸命になって、いや、そうではない、ロータリーはそういうふうな事をしているのではないんだ——これはもう長い間かかって言った事です。そしたら最後に、やっと受講生が言った事。分かったと、そんなら今日来ているロータリアンだけは信用するけれども、後の残りは知らないと(笑)。そういう事です。

ところが、この事は大変大事な事です。今日も色々なお話が出ました。大事な事です。ロータリーの仲間にとっても同じであります。ロータリーが今、120万という世界中のロータリアン、日本に13万のロータリアンがおりますけれども、そのロータリアンの人達が皆、今日ここに来ておられるロータリアンの方たちと同じような考え方をもっているとは必ずしも言えない。なぜならば、ロータリーという所は長い間の歴史の中で、皆が一生懸命やっていたから、ああ、ロータリアンの人達は立派な人達だ、ロータリアンの人達は正直な人達だと、ロータリアンの人が紹介をしたんだったら間違いないというふうな意味で、いつのまにかその歴史の中で、責任をしっかりとってくれる人達のグループだなという事になっていますから、ロータリークラブのメンバーになったという事は自分の商売にある種のレッテルを貼られる。あの人は立派な商売をしているというような。レッテルを貼ってくれるんだったら、わしも入れてもらおうか、こういうふうになってきますとですね、ロータリーに入ってロータリアンになる事が目的になっているという人が沢山います。

それで、その人達が、あ、税金の代わりや、お金だけ出しとこうか、後はまあ、今日来ているような人達に任せとこうかと、いう事だって、それはありうるかもしれませんが。でもそれはロータリーの仲間の事であって、ロータリーの人達はその人達にも一生懸命になって、あなた方に言うように、ロータリーっていうものは本当に心から一生懸命な事を考

えながらやっている団体だ、団体としてはそういう事やっているんだと。酒を飲むと皆言います。先生、それは建前や。建前はいいと思うけれども、裏で何をしとるかわからしまへんで。先生知らんでしょ、三ノ宮のあそこ行ってごらん、ごろごろバッジつけていますで——そう言います。だから私は、そうかと。建前はあれだけど、私たちは実態としてごろごろやっているのでもいいのか。建前ってというのは飾っといたらいいものとは違う。そこに到達するために、皆必死になってやる事が実情なんであって、例え建前であってもそういう事言ってくれるなど、それでいいじゃないかと、言いながらやっております。だからどうぞ、ロータリーは一生懸命努力をしながらやっている人達の集まりだな、という事を覚えておいてほしいという事が1つ。

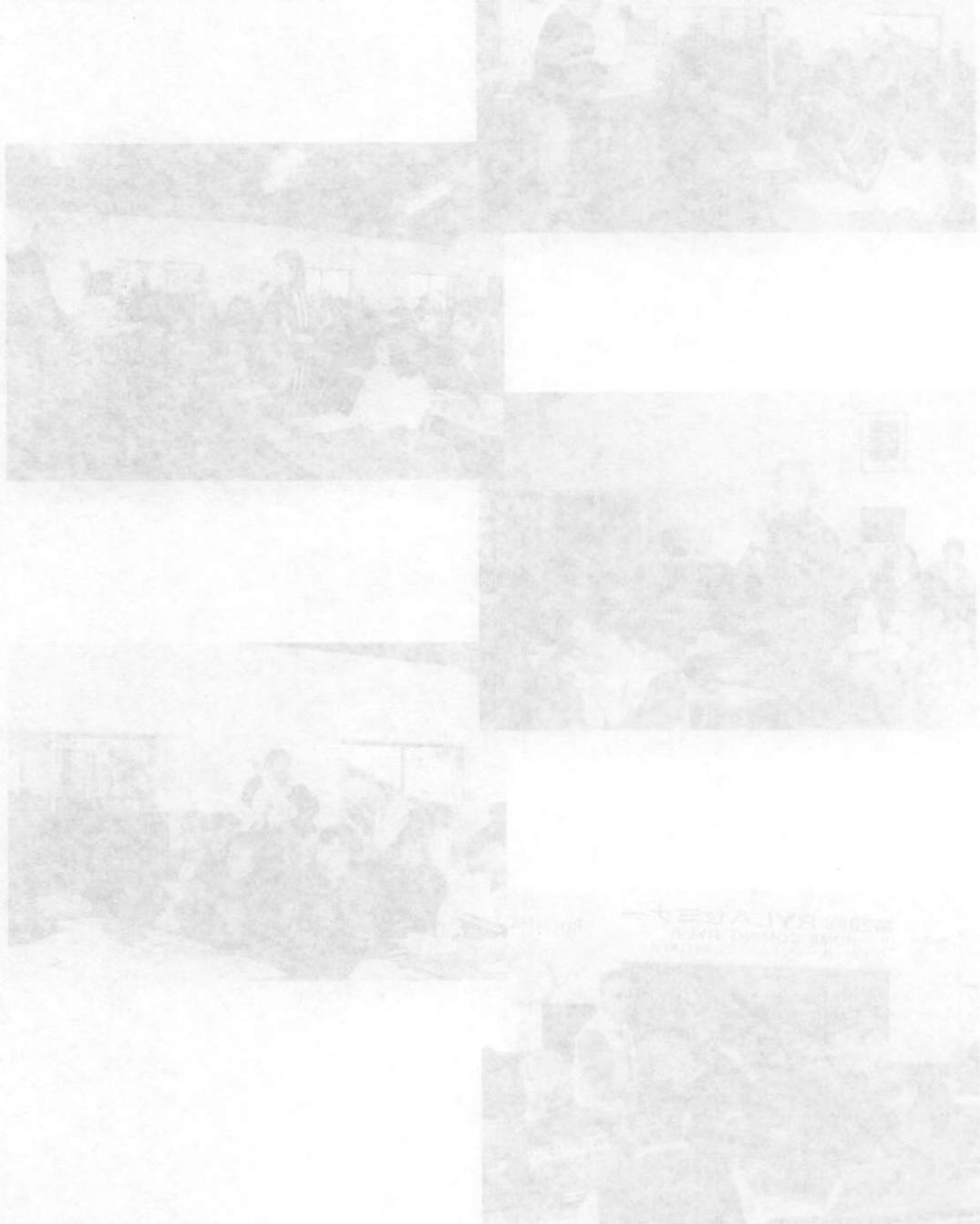
2つ目の事。あなた方が、スポンサーが足りない、もう少しバックアップが足りないという。私20年前にこれを考えた時に、いくつの事出したか。これも皆さん聞いておられると思いますが、1つは素晴らしい人の話を聞こうという事です。その素晴らしい人っていうのが、皆さんがリーダーとして色んな事をやっている時に、そのこのへん、あそのこのへんで聞くよりも、もう1段ランクの上の人達の話が聞けるようにしようじゃないか、その人達の話を聞いてくださいよ、これが1つでした。2つめは何か。ロータリアンと交わってください。ロータリアンの大人の、あなた方よりも先輩の諸君たちが一生懸命に人生を生きようとしているのを、一緒に雰囲気を感じて、そしてそういう人もいるんだなという事を感じてやってほしい。

3番目は何か、君たちがお互い同士の中で啓蒙してなって言いました。ロータリーは今、こうして続けて来ているけれども、お金を出して、皆さん方の代表を出して、ここに送っているというプログラムというのは、ロータリーの中では少ないです。ローターアクトの方の班長さんに言わせたら、ローターアクトにもう少し金をくれたら、もっといい状況になるのって思っているかもしれないけれども、実はあんまりそうしてない。なぜ、このローターアクトだけお金を出していないか、そして20年も続けているんだらうか。それは後でロータリーに頼りにしてもらいたいと思っているから。そうじゃないですね。私はなるべくさりとてそういう事をしたい。何も後までフォローアップしてやる、お前はあの時にただで連れて来てやって飯食わせてやったじゃないかっていう事を言わないで、それはそれで自分たちで育ててほしい。ここは自分たちで育つ人達が、どっかで芽生えてくれたらいいんです。そしてホームカミングで来た時に、あ、あんたがそんな事やってくれたんか。そうか、それはよかったなあ、ありがとう。あんたもこんなところでこんな事やってくれたんか、ありがとう。どんなにひ弱なものでも、種まきをしたら、後その事の世話をするのは農夫の仕事かもしれません。しかし同時に、種がばらっとまかれたら、その種がある時は枯れてしまう、ある時はその人達の種で育っていったらいいんですよ。そしてら青々となるんです。今、ロータリーはポリオというプログラムをしています。これは大

変壮大な、人類の壮大な実験です。ポリオという病気、或いは結核という病気もあるけれども、主としてポリオという病気をこの2,000年までに世界から無くしてしまおう。40年前、私はポリオの子供たちのキャンプへ行きました。沢山ポリオの人がいました。しかしもう日本では、ポリオという病気はフリーカントリーというふうに登録されています。それを世界中の人達にやろう。ロータリーロータリーって言って、一生懸命お金を出して集めてやっています。ところが宣言する時には、ロータリーもロータリーの仲間では宣言します。万歳万歳、一生懸命やってよかったなど。でも世界で宣言するのはどこが宣言しているかという、世界保健機構が、世界の中から、人類の中からポリオが無くなりましたよというのを、国連の、政府の保健機構がそれを発表するのを私たちは待っています。それを助けているのがロータリーなんです。ユニセフは確か発表してるでしょう？ 子供達の中から、こんなに忌まわしい病気は無くなりましたよと発表しているでしょ。その中にロータリーのおかげです、と書いてくれるかどうかは知りませんよ、たぶん書いてくれなんでしょう。でもその大部分をロータリーが今助けてやっているし、ボランティアが助けてやっているっていう事、どこにも載らない。でもそれでもいいじゃない。世界がそのために豊かになったら、いいじゃない。そういう意味では、ここもそうなんです。娯楽も少ないかもしれない。でもあれだけの話を聞いて、あれだけの仲間と話をしてくれて、あれだけのロータリアンと話をしてくれて、何かそこで経験してくれた事を皆の人生の中で、どこかに覚えていてくれたら。お前受講して覚えてないやないか、次に手紙が行って、また今度ボランティアのこの会に来い、今度は地震があったぞ、応援に来い、この次は何かでもってハイキングについてこいってなるのもかなわんな。それぞれの中で、あの時の気持ちを持っているというのもいいと思います。でもそれなりの人生を歩んでもらえるようにしたらいいだろうと思います。その意味において、私はここは大変ユニークだと思う。できたら私のお願いは、皆さんが皆さんと一緒に、或いは皆さんの後輩と一緒にグループの中で、あの事を思い出しながら、なんかグループ作っていかんといかんだろうと。世代交代というのはそういう事だね。今井さん、もういいかげんに消えろよって言うかもしれませんがね(笑)、まだ消えへんで(笑)。けれども、どんどん若い人が順番になっていってくれたらいいと思いますね。山口さんだって、僕の息子と同年や(笑)。どんどん若くなってくれたらいい。でも世代交代というのは、あなたの方の中からする事で、放っておいたからだめだなんていうのはだめですよ。放っておいたって生きてきません。ここの松みたいなものや。生きてこいよ、なあ。僕ら、それを期待してここでもってやっているっていう事。時間過ぎてすみません。あ、それからもう1つ。やれ嫁さんが来てくれんからって、嫁さんなんていっちゃいかんで。パートナーがって言わな(笑)。

中島 最後にありがとうございます。時間も過ぎてしまいました。色んな貴重なご意

見、本当にありがとうございました。重々身にしみて、皆さんと一緒に、ロータリーともども、一緒に良くなるようにやっていきたいと思えます。つたない司会で申し訳ありませんでした。これからも一緒にやってみましょう。ありがとうございました。



「心が人生を決める」

丹波あじさい寺・観音寺住職、詩人 小籾 実英 氏



皆様、どうもこんにちは。今、穴があったら入りたい程立派なご紹介にあずかりまして、恐縮したしております。私はそんな大した人間ではありませんで、私の特徴は何やといいましたら、非常に平凡な人間やないかと思っております。ある時期は、特殊な人間になりたいと——オウム真理教やそんなやないですよ、宙に浮いたりとかそんなことじゃなくして——非常に特殊な才能を持った人間になりたいなあと、思ったような時期もあるんですけども。しかし今は、私は自分が平凡な人間でよかったなあと、そんなふうに思っております。それはなぜかといいますと、平凡な人間というのは、喜びとか悲しみとか色んなことを皆さんと一緒に共有できるんやないかと、こう思うんですね。この世の中の80%くらいの方は平凡な人だから、私が嬉しいなと思ったことは多分皆さんも嬉しいなと思えるんやないかと。だからここにおられる方は、男性の方も女性の方も、それから年配の方も若い方も、職業もそれぞれ違うと思うんですね。しかし、私は色んな所へ出かけて行くんですけども、行く時にいつも、年齢やら職業やら性別が違ってても着ているものを脱げば全部同じ人間やないかと、人間としてこの世に生まれてきた以上は、多分皆、ちょっとでもよい人生、幸せな人生を生きたいと思って生きてるんやないかと、そういう観点に立って私なりのお話をすれば、ここにおられる方の80%くらいの方には通じるんやないかと。ところが20%くらい特殊な方がおられたら、多分私の言ってることは通じないかも分かりませんが。だから私は平凡な人間ですので、平凡な人のためにお話をさせてもらいたいと、そんなふうなことを思いながら今日は来させていただきました。

朝、出る時に檀家の総代さんに出会いまして、「お住っさん、早うから今日はどこへ行かれますんえ」と、こう聞かれたもんやから、「いや、小豆島の方へ行ってきましたわ」と言いましたら、「ああ、お住っさん、熱心なことですか」と。「何がですか」言うたら「いや、88ヶ所回られますんやろ」と言われて、「いや、それとはちょっと違う。ライラに行くんですわ」と言うたら「ライラ？ ライラ寺いうお寺ありましたかい？」と言われて、もうこれは説明しても分からんわと思って、詳しく言わずにきました。多分私ところの檀家の人には、真面目に小豆島の88ヶ所を回っていると思われているんやないかと思っていますんですけども。そんなことで、私生まれて初めて、この小豆島に来させていただいて、余島というところはひょっとしたらご縁がなければ、私は一生来ることはなかったかも分

からんですけれども、非常によいご縁をいただきまして、この世の別天地みたいなところで皆さんとお目にかかってお話ができるということは、非常にありがたいなあと、そんなふうに思って喜んでおります。

それで、今ちょっと皆さんのお手元に3枚資料があると思うんですけれども、見て下さい。1つは私ところのお寺の観音寺という、まあ丹波あじさい寺と言われているんですけれども、そのお寺のパンフレットと、それからもう1つ、関西の花の25ヶ所霊場のパンフレットと、それから『あじさい』という、これは私が年に4回出している機関紙なんですけれども、何でこれを持ってきたかといいますと、その『あじさい』のページを開いていただきますと、そこに私と今の三宅洋三バスター先生との出会いやら、色んなことが書いてある訳です。その『あじさい』の中の、三宅先生と私との出会いを読んでいたいたら、何か皆さんの心に感じてもらえるものがあるんじゃないかと、そんなふうに思い持参しました。

皆さんにちょっと質問しますが、NHKを除いて民放のテレビというのは全部コマーシャル付きで、スポンサーついて成り立っているんですね。ところが、民放のテレビなんですけれども、あるテレビ局のある番組だけはコマーシャルを使わずにやっている番組が1つだけあるんですけれども、どこのテレビ局の何という番組かご存知ですか。…これは、まあ自分のことが言いたいからそういうことになるんですけれども、読売テレビの『宗教の時間』という番組があるんです。多分皆さんは1度も見られたことがないんじゃないかと思えます。何でかといいますと、朝の5時半頃からやっていて、皆さんまだ布団の中やないかと思うからです。実は7時半頃からある時期はやっていたらいいんですけれども、やっぱり宗教とか色んなものがだんだん追いやられて、7時半頃から6時半頃になって、今5時半頃になっているんですね。それで私、平成5年でしたか、どこから私のことを嗅ぎ付けてこられたのかは知りませんが、読売テレビの『宗教の時間』の担当者の方が見えまして、いっぺん対談をしてもらいたいと。臂さんという成華大学の先生となんですけれども、対談してもらいたいということで、まあえらいべっぴんの先生で、私は非常によい思いをしたことがあるんです。その時のビデオを持ってきてますので、それを見ていただいて、その後またお話をさせていただきたいと思えます。

それで何で読売テレビで、コマーシャル無しで『宗教の時間』だけやっているかといいますと、読売新聞の創始者の正力松太郎という方がおられまして、その方に自分のお孫さんがあったんですね。ところが、できたら自分の孫娘は仏教精神で何とか教育をしたいということで、日曜学校みたいなものをずっと探されたというんですね。ところがキリスト教の日曜学校は沢山あったんですけれども、仏教で日曜学校をやっている所はほとんどなかったらしいです。それで、仏教は何を怠けておるんやと、これはなっとらんと、とにかくもつとがんばって、そういう青少年の育成もやれということで、今でも1年を通じて

青少年の育成に非常に貢献があった人には正力松太郎賞というのが出るんですね。賞を授けると100万円貰えるんですね、がんばれば。私まだ貰ってないんですが、それを狙ってがんばっているんです（笑）。そういう関係から、その『宗教の時間』というのは全青協、全国青少年協議会という所がプロデュースして作っている、そういう番組なんですね。だから、『宗教の時間』だけは読売独自でコマーシャル無しでやるということを正力松太郎さんが宣言されて、そういう関係でコマーシャル無しの15分まるまるの番組でございます。今から流させていただきますので、それをご覧になっていただいてから私のお話をさせていただきますと思います。皆さん眠いですか？ 今、時間見たら、学校で言うと6時間目の終わり頃ですわ。私は1番悪い時間やなあと思って、3時から5時いうたら、1番人間が疲れる時間やないかと、そんな時に話せえ言われてもよっぽど良い話せんと、たいがいの人は寝られるやないかと、こう思うんですけれども。それで、寝られるんやったらテレビの間に寝といてください（笑）。それでは係の方、ビデオをお願いします。

（ビデオ上映）

今、最後に、『まこと君の眼』という本をプレゼントで差し上げるということだったのですが、私の本だと思って沢山の人が応募したらしいんです。自慢するのではないですが、この『宗教の時間』が始まって以来、1番沢山、応募の手紙が来たということです。今、見てもらったら、大体のことが分かっていたと思いますので、これで講演をしないで帰ってもいいと思うくらいなのですが、後ちょっと私なりのお話をさせていただきますと思います。

今の放送の中に、花のお寺というのが出てきましたね。ここの小豆島にはさっき言いました88ヶ所の霊場があるんですけれども、関西の方に、関西花の寺25ヶ所霊場という、お花を訪ねて回る霊場があるんですね。これも自慢するわけではありませんが、誰がつくったかという、私がつくったのです。自慢していることになりますかな（笑）。なぜ、この花の霊場ができたかという、実は私、兵庫県の方で17年間高等学校の先生をしてまして、高校の教師を辞める時に、たいがいの先生やら事務の方が「小籾先生、あと3年がんばんな」と、皆が私が辞めることを止めてくださったんですね。なんで3年かという、昭和26年に生まれたものは20年間勤めたら厚生年金の基礎ベースというものができて、自分が60才になった時、年金を貰う時にすごく率がよくなる訳ですね。「あと3年がんばるといたら、小籾先生、年金貰う時にいいと思うからがんばんな」と言うてもらったんですけれども、その3年が、私の母が病気になるって亡くなったり、色んなことがいっぱいその時期におこってきまして、3年早く辞めてしまったんですね。

ところが、私はその3年早く辞めたおかげで、おかげというか、3年早く辞めてしまったもんやから、60才になった時に、人さんが年金をガバーっと貰ってるのに私だけチビっとした年金やったら、死ぬまでね、「くそー、あの時に3年がんばるといたら」って、死

ぬまでそんなこと思って生きるのはくやしいから、だから逆に、この3年早く辞めたからこんなにすばらしいことができたやないかと言えるような、そういう方向で物事を考えていったらいいんちゃうかなと、そういうふうに思い付いたんですね。この3年の間に、何か1つ人さんの役に立って、そして自分の人生の中に非常にプラスになるような、そういうことをやろうと思ったんです。学校を辞めてすぐには、坊さんの世界いうのはなかなか分かりませんので、武者修業やと思って、色んなお寺を尋ねて回ったのですね。

ところが私の所は、あじさい寺なんですけれども、ちょっと向こうへ行くと椿寺があったり、つつじ寺があったり、色んな花のお寺いうのがあるんですね。それで、そういうお寺をいっぺん勉強やと思って、関西のお寺をずっと回ったんですね。それで、私なりに思っている色んな僧侶としての意気込みを、そのお寺の住職さんにつけていくと、それに対してよい反応が返ってきましたね。まあ今、仏教というのは、葬式仏教や、法事仏教やと、何か死んだ人ばかり相手にして、生きた者の何にも役に立っとらへんやないかと、色々ご批判も沢山受けとんですけれども、その通りやと。とにかく生きてる人のために何か役に立って初めて、本当の仏教の、お寺の、存在価値が生まれてくるんやないかと思ったのです。生きてる人のためになるような、そういうお寺づくりをしたいという思いで、関西の色んな花のお寺を訪ねて回ったら、25ヶ寺のお寺さんが賛同していただいて、それでこういうお花のお寺ができたんですね。最初は39ヶ寺集めようと思ったんですね。何でかという、そういう花のお寺を訪ねて回ると、自分の願いが「咲く」ですわ、39でしょ。それで39を目標にがんばったんですけれども、なかなかないですね。特に大阪なんか行ったら、そんな場所があったら、駐車場に使うたら1ヶ月に1万円でも入るから、それの方がよっぽどええんやいうて、大阪の方のお寺は、本当に花のお寺というんは少なかったですね。まあ、それで39が無理になり、25ヶ寺になったわけです。これは花のお寺を訪ねていったら住職が「にこにこ」と迎えるということで25なんですね。まあこじつけみたいなものなんですけれども、そういうことで、25ヶ寺の花のお寺というのができた訳なんですね。それで一応、私ところが1番になっているんですけれども、立派な寺やとかそういうことじゃなくして、お前がいいだしっぺやからあんた所から回ろういうことで、私ところが1番になってくると、大体北から南に和歌山の方へ下っていくような、そういう霊場になっております。

今の話の中でもそうなんですけれども、今、ここに自分があると、この世の中に自分が生まれてきて存在したと、そこを考えた時に、存在している以上は私は色んな物事をプラス思考で考えていかんと意味がなくなるんやないかと思うんですね。だから、とにかくここに今、自分があるんやから、ちょっとでもよい人生、同じものに出くわしても、そのことをできるだけ自分にとってよいように考えて、よい人生にして初めて、自分がこの世で生きたその人生を振り返った時に、「ああ、生きとってよかったなあ」と思える人

生につながっていくんじゃないかと、そういうふうなことを思ったんですね。この間、アカデミー賞を貰った『タイタニック』とかいう映画がありますね。その時に、監督の人がインタビューに答えてましたが、「あの映画の1番の主題は、とにかく明日という日は不確かなものだ」と。「誰もが明日はあると思っているけれども、本当に明日というのは不確かなもので、あるかないか分からないのだ」と。「結局、明日があるかないか分からないのだから、今日を、今を、とにかく大切に、精一杯生きておくということが大事なんだということをテーマにつくった映画だ」ということを、監督の方が言われてました。私は見てないから分からないのですけれども、そういうことらしいんですね。だからとりあえず、生きている自分、今が本当によい人生になっていくように物事というのを考えていくということが大事なあと、そういうことを私は自分の考え方の基本に置いております。

それで私は、親しみやすいお寺、信仰のある人でもない人でも、若い人でもお年寄りでも、どんな方でも、「ああ、あじさいの花やったらいっぺん見せてもらいに行こか」という、そういう気持ちでお寺に来やすくなるんじゃないかと。だから明るいお寺、それから親しみが持てるお寺、そして私は生きた人の役に立つお寺、そういうものを目指して、自分なりのお寺づくりをがんばっているんですね。私は17年間高等学校で、特に17~18くらいの、青春を生きている若い子を相手にしてたものですから、死んだ人ばかりを相手にするのではなく、やはりそういう生きている人をとにかく相手にして、お互いに、自分も学ばせていただいて、また自分も生きている人の何かお役に立てるような、そういう生き方をしたい。その中心に自分のお寺を据えていきたいと、そういうことで私は今、あじさい寺で自分なりのお寺づくりに励んでおります。そういう観点で、今日はお話をさせてもらおうと思うんですね。

ところが、我々こうやって生きているんですけれども、自分自身を振り返ってみた時に、何が大事かという、自分の中に、誰でもだと思えるんですけれども、劣等感というものがありますわね。自分は人と比べたら、こういう点が劣っている、ああいうところが駄目やという。ところが、劣等感が自分の中にいつも巣作っておると、人生は1つも楽しくないんじゃないかと、こう思うんですね。だから私は、まず大事なのは、劣等感というものを克服するということが1つ大事なあとだと思います。例えば私は今、皆さんの前で、こうやってお話をしておるんですけれども、まあ今はだいぶん人さんの前で話すことに回数を重ねたもんですから慣れてはきたんですけれども、しかしやはり人間というのは人の前に立つと、やっぱりあがります。特に私は最初の時分、よくあがってね、足がガタガタ震えているのを自覚したりしたことがあるんですけれども。その「あがる」というのは普通で考えると、これはあかんことですわ。あがらんと堂々と人の前で、自分の思っていることがしゃべれるということがすばらしいことで、あがる奴はあかんと、こうなるんですけれども、そういう捉え方をすると劣等感克服できへんのですわ。

私はこの「あがる」ということをどういうふうにしたかという、ここにはお医者さんもおられると思うんですけども、生きてる人間と死んでる人間の大きな違いというたら何やと思いますか。私は母が亡くなる時にその事を思ったんですわ。生きてるということと死ぬということはどういうことなかと考えてね。それが最後、近くの内科のお医者さんが来られて看取って頂いた時に、「ああ、こういうことなんか」と思って分かったのは、生きてるということは感じるということやないかと思うんですね。死んだら、もう何も感じない訳ですわ。最後に看取られる時に、お医者さんが何をされたかいうと、私の母親の手を思い切りギューっつつねられたんですよ。ところが、もう死んでたから何の反応もない。感じないですよ。ところが我々やったら、ギューってやられたら、痛い！ と感じるんやないかと思うんですけども。だから生きてる人間と死んでる人間との大きな違いというたら、感じるか感じないかということやないかと、その時に私は思ったんです。ということは、「あがる」ということは、これは生きてる証しなんです。生きていうことは感じることなのです。

ところが、世の中にはあがらない人もいますよ。あがらない人間はすばらしいかという、あがらない人間はほろんな人間なんです（笑）。ということはどういうことか言おうと、テレビでもそうですわ。精密な感度のよいテレビほど、きちっと映像が映るんですね。ところが、1本も2本もアンテナが抜けてるようなのは映像も悪いですわ。ということは、感じないからなんです。あがらない人は神経が2本も3本も抜けていて（笑）、雑にできているから、あがらんとおれる訳ですよ。だから、私のように精巧にできている人間ほど、あがるんです。ところが、あがってばかりいると、結果としてあがらんと堂々としゃべっている人の方が立派やいうことになるから、感じながら自分の思っていることがちゃんと表現できるようになった時に、そういう粗雑な人間を乗り越えて、あがりながらそういう人を超えていく人間になれるんやないかと。だから「あがる」というのは決してだめなことじゃなくしてすばらしいことなやと、そう思うことによって、私は心がずいぶん楽になって、話しててガタガタ震えてても、「ああこれは生きてる証拠や」「ああ、感じとる。これはええことなや。俺は精密に出来た優秀な人間なや」と思ったら、逆に今度は落ち着いてくるということがあるんやないかと思うんです。

それから、「頭が悪い」というのは、さっぱりあかんことですわ。賢い人と比べたら、頭が悪いいうたら、もうこれは劣等感の固まりにならんとあかんのですけれども、しかし、そうとったらあかんのですわ。頭が悪いという事は、人生が楽に生きれるということなんですわ（笑）。賢い人というものは、確かに大事な事もパツパツと頭に入っていくけど、しょうもないこともやっぱり同じようにパツパツと頭に残っていくんやないかと思うんです。1年程前に、人に嫌なことを言われたことでも、まだ覚えておれるのが、賢い人やないかと思うんです。それで頭の悪い者は、大事な事も覚えられへん代わりに、嫌

なこともすぐ忘れて、さっきほろくそに言われていても、こっちではもうにた一と笑うてね。だから楽に生きれるなど。私は人間として生まれて、何が1番よい人生かというたら、楽に生きれる人生が1番よい人生やと思うんですね。だから、たいがい普通は頭が賢いのがよくて、頭の悪いのはあかんて言うんですけれども、私はそうやなしに、頭が悪いことは、これは仏はんのおかげでよい人生を歩ませてもらえる、こんなふうにつくってもらって感謝せんといかん思ってね。そういうふうに、無理にでも捉えていくということが、自分の劣等感を乗り越えることやないかと、こう思うんですね。

それから「ぶさいく」、女の人にはぶすですわ。男はぶさいく。これはやっぱり、女の人やったら別嬪になりたいと思うし、男やったら男前になりたいと思うんやないかと思うんですけれども、そうやないんですよ。私が大学の時に、ある先輩の部屋の前にけったいな文句が書いてあったんですよ。「もてない男がうらやましい」いうてね。よっぽど、その部屋の先輩はもてとったんやないかと思うんですけれども、言われてみたら、あっちでもてて、こっちでもてて、もてまくったら、あれもえらいんやないかと思ますね。私、ある人から聞いたことがあるんですけど、イスラム教のイラクの方に行ったら、一夫多妻制らしいですな。だから自分に甲斐性があったら、嫁さんも3人でも5人でも6人でも、何人嫁さん貰うてもよいらしいですな。それで、それを聞いたら男の人は、「うわー、わしもイラクへ行って」とか思うんですけれども。ところが、なんぼ貰うてもよいけど、平等に愛してあげないといかん、というような決まりがあるらしいですね。だから、今日1番目の人のところへ夜行ったら、そこばかり行っておったらいかん訳ですわ。次は2番目の人、その次3番へ、それで1番最初の人にダイヤモンド買うたら、次の人にもダイヤモンドいうてね。最後は大勢持っているということが、とにかく自分の苦しみになっていくいうてね。だからそういう部分を忘れて、別嬪はよいとか、男前はよいとか、甲斐性があるんはよいとか、いうことになるんですけれども。そういう捉え方じゃなくして、自分が不細工であるということは、結局他の人を持ち上げとる事になる訳ですわ。人を喜ばせている。自分が不細工やったら、隣におる人が「わし、男前でおれる」と、「お前がおってくれるんで、わしが男前でおれる」と。だから、人を喜ばせる行為をしていることやと思ってね。自分がぶすやと思ったら、この世の中の別嬪は全部自分がつくっとるいうことですね、非常に大きな存在価値があるんやないかと思うんですな。だから、そういう物事の見方というのが非常に大事じゃないかと思うんですね。「あんた、それはこじつけや」と、「そんなええかげんなことばかり言うとったらあかんて」と、ある人は言われるかも分らんんですけれども。

しかし、私は人間ほどいいかげんな動物はおらへんと思うんですわ。何でかという、人間というのはその時その時によってね、自分の都合のよいように考えて、それでこの社会をつくってきたのが人間やないかと思うんですね。多分、今のこの社会は誰が作っ

るかというたら、この間、今色々話題になっている、大蔵の官僚ですわ。キャリア官僚というか、とにかくここ（頭）のずばぬけたよい人がつくった社会やから、頭のよい者がよいという、それで頭の悪い者はあかんという。そういう人がつくっているんやから、頭の悪い方がよいというようなことに価値観を変えてしまうと、自分たちの存在価値がなくなるんですね。だから私は、そういうことに従わんでも、自分の本当の真実の価値観をつくる。それでいつも思うんですけども、戦争の時代やったら、人を100人殺したら、中国の方へ行って英雄になれましたわな。ところが平和な今の時代に、人を100人殺したらどうですか？ いっぺんに死刑やないですか。だから、ある時代は人を殺したら英雄やけれど、ある時代は人を殺したら死刑やいうのを、これを誰が作ったかという、その時代の人間が勝手に作ったことですわ。だから人間が勝手につくった価値観に踊らされるんじゃないかって、本当の真実のものを、正しいものと間違っただけのものを区別して生きていたらよいんじゃないかと、私は思うんですね。

昔からある歌で、こんな歌があるんですね。「雲はれて 後の光と思うなよ もとより空に 有明の月」、このパンフレットの裏に詩があるんですが、このお月さんというのは、雨夜でもいつでも、上空にある訳ですね。ところが、「今日はお月さん、全然出てないなあ。今日はないんやなあ」と思うんですけども、そうじゃない、ないんやないんですよ。自分とお月さんとの間に雲がさえぎってて、これがお月さんを隠しているだけで、お月さんはいつでもあるんですね。だからもしも風が吹いてきて、雲がすーっと向こうへ去っていくと、自分の上にお月さんはいつでもあるんやと。それと同じように自分の心の中には、すばらしい、このお月さんのように輝くすばらしい素質があるんですよ。ところが生まれてからこのかた、悪いこと考えたり、悪いもの見たり、悪い行いしたり、色んなことをしている内に、自分の中にある本当にすばらしいものが、この雲のようなもので閉ざされてしまって、見えなくなっているんじゃないかと思うんですね。だから、そういった雲になるような、心の垢というのか、心の曇りというのか、そういうものをいっぺん、さーっととってしまったら、自分の中に、こんなに素晴らしいものが自分にあったんじゃないかと、それに気がつく、気がついた時に本当に楽しい、本当の自分の人生が生きれるようになるんじゃないかと私は思います。

だから、例えば「あがる」ということは、だめなことやと思っていたのが、さっき言ったように、「あがる」ということは、自分は非常に精巧な人間としてつくられとるから、なんだととることによって、自分の中の優秀さに気づいていくということもできるんじゃないかと思うんですね。だからいっぺん、そういう人間が勝手にくつつけたような、1つの常識的なものの考え方じゃなくして、本当の、自然がつくりだした——世の中というのは自然が作ってますね——、自然を見てたら、私は人間の本当に生きていけないといけな道というのがみえてくるんじゃないかと、そういう観点でいっぺん自分を見るということ

が大事じゃないかと、そんなふうに思います。

それから、次の話にいくんですけれども、私は福知山という所で生まれまして、現在も福知山という所におるんですけれども、昔の言い方でいうと丹波という所ですわね。丹波というのは田舎の代名詞みたいな所で、日本海側のひっそりとした田舎町なんですけれども。今でこそ、都会も田舎も同じような文化で、同じような生活をしているんじゃないかと思うんですけれども、私の小学校の時分は本当に田舎という感じで、私の同級生も、皆あのへんはおかっぱ頭いうんですか、今は皆が美容院やら色んな所へ行くんですけれども、昔は全部家で散髪してもらったんじゃないかと思うんですけれども、女の子はこう、ぐるーんと回して切るだけで、河童がずらーっとおるようなもんですわ（笑）。それで、顔はまあ赤ら顔のね、きたない顔の田舎の子ばかりがおったんですけれども。そんな時に、山陰線が通ってまして、そこに石原駅という駅があって、2年に1回ずつ、駅長さんが交替してやってくるんですね。ちょうど私が小学校4年生になったときに、駅長さんの娘さんが、お父さんの転勤の都合で私らの学校に転校してきたんですね。

その子は色んなところを転々としてきてるから、我々、田舎の女の子と違ってあかぬけしとりましてな、その子だけ頭の髪も三つ編みしとんですね。ぴゅーっと、腰のへんまである長い髪でね。それで誰もがいっぺんに注目ですわ。そこらへんの調子のよい男の子が行っては、後ろからキューっと三つ編みを括り付けて、「あんた何するん」言われてつねってもらって、「あいたたた」と喜んでやっとなるような（笑）。ところが私はそんなことはせえへんです。私は小さい時分から、武士道で生きとったもんやから、ようフォークダンスをさせられても、本当はそのままだしときたいんやけど皆が見とったらあかんと思うて、わざと水道の所へ行って、女の子と手をつないだから洗っとかんととか言うて、ひねくれた子供やったんですけれども。

ところが4月にその子が転校してきて、学級委員長を決めないかんということで、学級委員長の投票があった訳ですわ。たまたま男では私にその時に学級委員長に選ばれて、女の子は男がほとんど入れてるからその三つ編みの女の子が学級委員長になった訳ですわ。そしたら、私とその子とで1学期、学級委員長をするということになったんやけど、私はそういう子と話すのはかなわんで、避けて避けておったんやけど、その子はとにかくまだ子供やのにすれとるいうんか、平気で近づいてきて、「小籾君、今度の学級委員会、何する」とかいうて聞きにくるんですなあ。そしたら、そこらへん中の男が見てますでなあ、それはもうそんな所でちゃらちゃらしとんを見られたら、後でまた何言われるかわからへん思うて（笑）、避けて避けてしとったら、それにその女の子も気がついて、「小籾君。そしたら学校で話すんもあれやから、次の日曜日に私のお家に遊びに来ない？」とか言われたんですね。誰がそんな所、おっそろしいこっちゃ、と思ひましてね（笑）。学校でもかなわんのに、そんな女の子の家に行っとるようなことが見つかったら、私や学校に行か

れへん思うてね、言うたんやけど、そしたらその女の子、同じ4年生なんやけど私なんかよりずっと精神年齢が高いうんか、人の心を見抜いているんですよ。そして次何言うたかいうと、多分普通では私は行かへんやろと思ったもんやから、次にね、「小籾君。日曜日に来たら、私ところのお母さんが、おいしいおやつをいっぱい作って待ってやるいうて、言うるとるよ」とか言うて、お菓子でつられてね（笑）。私は小学校の時分までは、本当にお寺いうのも貧乏で、芋の蒸したんやら、そら豆の炒ったやつやらね。それからお寺やお餅をお正月に鏡餅いうて貰うんですよ、あんなもんいっぺんに食べられへんから薄く切って、おかきにして保存食みたいにしといて、帰ってきたら焼いてバリバリ食べておったようなことなんですわ。だからおやついうて聞いたらね、心がごっつ動いた訳ですわ。その女の子の家に行くんはかなわんのやけど、おやつは食いたいと。それで、「ほな行くわ」いうてね、小さい声で言うというて、日曜日になったら泥棒猫みたいにな、誰か見とらへんか思うて、その子のお家に行ったんですわ。

そしたら、駅の官舎やから小さな建物で、部屋は4畳半くらいのがちょこちょこ中に入ったみたいなんですけれども。それで「こんにちは」言うて行ったら、お母さんが出てこられて、「ああ、実英君、よく来てくれましたね。こっちにいらっしゃい」言うて、その子の勉強部屋に連れていってもらったんですわ。そしたら3畳くらいの部屋でしたわ。それでそこに入って、その女の子が「まあ、小籾君、いらっしゃい」とか言うてね。これくらい、ままとみみたいに小さいテーブルが1つ置いてあって、私は分からんままに正座してちょこんと座ったんですわ。そしたらお母さんが出ていって、お盆に水みたいなものと、お皿に何かお菓子を入れてもってきてもらって、私の前にポンと置いてくださったんですわ。「ごゆっくり。これを食べながらお話してね」いうて、お母さんはすうっと出て行かれたんですよ。出て行かれた後、戸がまだ開いとったんですわ。そしたらその女の子がパッと立って、戸をパンと閉めるんですわ。3畳の部屋に女の子と私とがお見合いみたいにな、えらい私はもう緊張してきて、あそこ開けとってほしいなあと思とったんやけど、もう閉められたらしゃあないし、もう話も何もそんなもんでもええわ思うてね、もうよだれが出てきてね（笑）、目の前にお菓子を入れたんですよ。そしたら、もう舌がいっしょに溶けるんちゃうか思うくらい、ふわーっと広がっていったんですわ。びっくりして、うわあ、何というお菓子や思って、横にある水みたいなんをびゃーっと飲んだら、うわーっと（笑）。サイダーやったんですわ（笑）。それで最初に食べたお菓子は、デコレーションケーキみたいなバターケーキを切ったやつで、ケーキやったんですよ。私はそれまでね、そら豆とさつま芋とおかきの炒ったものしか食べたことがなかったんです（笑）。初めて、そこに行ってそんなもんをよばれたもんやから、もう本当に舌がびっくりしてね。溶けるんやないかと思って、それが小学校4年生の時の話やから、もう30何年前の話を昨日の事のように覚えているんですわ。

それは何でかという、毎日毎日まずいもんばかり食べておった、そのおかげで、今やったらバターケーキなんか子供に食べろいうても、こんなドロドロしたもん食べれるかいうて、食べしません。生クリームでね、生クリームいうても手づくりのやつでない、最近喜んで食べへんくらい贅沢になっとなですけれども。だから私はね、そうやっていつも辛抱して辛抱して生きてた、そんな所にそういうバターケーキやサイダーをもらって、もうこの世の食べ物とは思えへん、ものすごい感動があった訳ですわ。30何年経ってもその感動を忘れずに、何か伝わるでしょ、皆さんに(笑)。だから私はね、今の子供はかわいそうやと思うんですよ。何でも何でも与えてやるという事は、逆に言うと、子供の幸せを全部奪いとるような事になるんやないかと。だからできるだけ子供にはまずいもんを食べさせてやるのが、後々色んなもんを食べた時に、ああ、これもおいしかった、あれもおいしかった、いうて心に残っていくことになるんやないかなあと思うんですね。

それと世の中には、我々生きとったら必ず、嬉しい喜びごとと、悲しい悲しみごととがあるんですよ。ところが誰でも、今日も喜びごと、明日も喜び、明後日も喜びいうて、喜びごとばかりがあったらよいなあいうて思うんですね。ところが、これはさっきのお菓子の話とっしょですわ。今日もケーキ、明日もケーキ、明後日もケーキいうて、ケーキばかり食べとったら、途中でケーキ見ただけで胸が悪うなると同じように、今日も喜び、明日も喜び、明後日も喜びいうて、喜びばかりがあったらね、人間は、自分が本当に今、喜びごとのすばらしい中におっても、そのように感じない自分になってしまうんやないかと思うんですね。だから私は、悲しみごとというものがあって初めて、喜びごとというものが自分の心の中によいもんなんやと伝わって入って来るんやないかと。だから人間はすぐね、喜びはよいもの、悲しみはあかんもの、そういう捉え方をするんやけど、そういう捉え方じゃなくして、喜びもこの世の中の、人生の味の1つなんやと、そして悲しみもこの世の中の、人生の味の1つなんやと、同じ人生の味なんやと。夕飯の時にソース味のもんがあったり、醤油味のもんがあったりして、どっちがよいとか悪いとかじゃなくして、色んな味があるさかいに、おいしいなあと思っていただけると同じように、そういうよいとか悪いとかいう捉え方じゃなくして、今、悲しみ味やったら、ああ、今、悲しみ味かと、これをじっと味わっとけよということ、今、私は悲しみ味を味わわされとんやなあ。必ず人生は山があって谷があつてくる訳やから、私は人生それぞれを味わい深く生きていくということが、本当の人生を生きることにつながるんやないかと、そういうふうに思うんですね。うまいこといきましたやろ、話が(笑)。お菓子の話でどんな話になるやろと思うとったら、それが言いたかったんですわ、覚えといてください。このプリントの2つ目です。「喜びも悲しみも、共に人生の味」じゃないかと、そういうふうに思います。

私は子供ができるのが遅かったもので、今、1番上の子が小学校6年生になっているん

ですけれども。小学校6年生の子が、今度中学校1年生になりますから、ちょうど1年前の事なんですけれども、6年生になったときに宿題がでて、自分の性格やらプロフィールみたいなものなんですけど、特技やらお父さんの名前やらお母さんの名前やら、そういう自分のものを書いて、学校に出さないといけないことがあったんですね。それを学校に出す前に私の所に持ってきて、「お父さん、今日これ学校に持って行くんですけど、これでいいか見て」というて持ってきたんですね。それでざっと見ていたら、特技いう欄があってね。お、うちの子はどんな特技を持つとんやろ思うて見たら、普通、特技いうたら書道とかそろばんとか、そういうことを書いとる思うたら、ずるずるずるっと文章を書いてあるんですね。何書いてあるんやろと思って見よったら、こんなことを書いてあるんですよ。「僕は嫌なことがあっても、すぐ忘れることができる」というてね(笑)。ええー、なんじゃあ、こりゃまたしょうもないこと書いて、先生に笑われるんちゃうかなと思うたんですね。まあ、でもそう思うとんやったらそれでええわと思っつて、その時はそのまんま渡しといたんですけれども。ところが、ふっとある時に、うちの子供は何や、特技が「嫌なことがあってもすぐ忘れることができる」というんが特技やいうて書いとったなあ。これ、ひょっとしたら、それが本当にできるんやったら、これくらいすごい特技はないんやないかと思うたことがあるんですね。人生、生きとってね、面白くないいうんは嫌なことがあってもなかなか忘れらへんから、それがいつまでも尾をひいてね、むしゃくしゃして、それで面白くない日々を何日も送らないといけないんですね。ところが嫌なことがあっても、さっと忘れることができるんやったら、こんな楽しい人生はないんやないかと思ったんですね。だから、私はそれにつきるなあ、子供がそんなことを書いとったもんやから、たまたまそういうふう思ったんですけれども。

実は私ね、^{かいばら}柏原高校に勤めてる時に、朝、学校に行ったら同僚の先生がね、私の所へすうっと近づいてきて、朝から急にこんなことを言われたんです。「小敏先生なあ、わし今日でもう1ヶ月ががんばることあるんや」というて言わはるんですよ。「何を1ヶ月もががんばってますん？」というて聞きよったら、「いや、あんたにだけ言うけどなあ。これは恥ずかしいようなことなんやけど、1ヶ月間、家内と口きいとらへんのや」というてね(笑)。「へえっ、1ヶ月も口きいてないんですか」というて、「そうねん、うちの家内はな、とにかくぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅうるさいんや。わしが朝、こないだも1ヶ月前に学校へ出て行こうと思うとると、家内がそばに来ては、「あんたは子供の事を1つもみんと、自分の事ばかり考えとる。給料貰ってきても、私に何も買ってくれへん。自分のもんだけさっさと買って、あんたみたいな人はそれでも父親か、亭主か」とか色々言われて、もう普段からだいぶん頭にきとったから、あの時にもう堪忍袋の尾が切れて、「もうくそっ、このやろっ、口きいちゃるか」と誓ってから1ヶ月、まだ未だにがんばって、口きいとらへんのや」というてね、言われるんですな。「ほお、先生、すごいですな。1ヶ月間も口きか

んとがんばれるいうんは」いうてね。

その先生もまだ若い先生やから、そんな立派な一戸建てに暮らしてないですよ。2LDKくらいですね、そんな部屋なんですね、狭い、狭い。「先生、この間もちよっと寄らせてもらったことがあるけど、あそこのアパートにおられますんやろ」と、「うん、そうや」と。「あれ二間くらいしか部屋がないんちゃいます？」というたら、「そやねん」「そしたら、どうしてますんや。口きかんとって、部屋分けてますんか。ごはんのとき、どうされますんえ」というて、半分ちやかすように聞いたんですね。「いや、そんなもん、別々におるんやけど、ごはんのときはしゃあないわね、いっしょに食べるわね」「どうやって食べますん？ 口きかんと食べよう思うたら、難しいですやろ。お替わりどうしますんえ」「そんなもん、のうなったら、パッと出すだけや」というて（笑）、「そしたら、向こうがさっと取って入れたら、ぐっと取って、がっと食べるだけや」と（笑）。「テレビかて、きっちり見とるで。目そらして、目が合うたらもう気まずいでな。じいっとコマースシャルも、とにかく見とんじゃ」というてね（笑）。向こうもやけになって言うてましたけどね。「それは大変なことですなあ」というて、「そやけどな、小籾先生。わしは負けへんでえ。今日で1ヶ月やけどな、ほんなもん2ヶ月でも1年でも、ほんなもん向こうが悪いんやさかい、向こうが【悪かった】か何か一言言うたら、わしも機嫌ようしてもええとは思うとんやけど。向こうが言わん限りは、わしは絶対負けへんで」というてね、言われてましたけどね。まあ、意地を張るんもよいけど、だけどその1ヶ月間、口きかんとおる、学校に来るときとか忘れるときもあるんやろうけど、でもちくっと、何かのときに奥さんの憎たらしい顔が浮かんでくるやろし、またちくっとね、その間、心のどっかに一本棘がぶすっと刺さったようなもんですわ。棘いうんも、歩き具合によっては痛くないときもあるんやけど、何かきっかけでちくっとくるようなもんでね。取れてしまうまでは、何か気になるもんやないかと思うんですね。だから、自分の人生が80年あるんか50年なんかは分からんけど、それやって心の中に一物持ってやっている、その楽しくない時期を送るということは、50年の人生やったとしたら、そんなことを何日も何日も繰り返しているということが、惜しいことやないかと思うんですね。

それで私は、人間の心いうんは、よう見たら心、心、いうて言うんやけど、心ってどんなもんです？ どこにあるんです？ いうても、ここらへんのような感じがして、形はどんなんやいうたら、何かハートなんか四角なんか丸いんか知らんけど、よう分からへんのですよ。結局何やいうたら、心いうんは、形があるようでないんが心やないかと、こう思うんですね。ところが、これがまた不思議なもんでね、胃袋やったら形があるさかいに、あんばん百個食えって言われても、百個食えんと思うんですね。ところが心いうんはね、あの人とも仲良うしよう、この人とも仲良うしよう、100人でも1,000人でも、自分の心に入れてあげることができるはずやけど、あの人とは絶対いやや、この人もいややいうて、1

人くらいしか入らへんような心もありますわね。だから本当、この心いうんは不思議やと。だから、この心をどういうふうに操っていくかによって、何か楽しくもなったり、面白くなったり、色々するんやないかと思うんですね。それで心というのは、無色透明なんですよ。形がないから。だから、いつも心をさわやかにしておれば、人の厳しい言葉でも、奥さんが言われた言葉でも、びしーっと棘のようなもんがとんできて、ここに形をつくらへんかったら、しゅーっと抜けていく訳ですわ。ところが、そういうときに限ってここに形をつくるから、奥さんの言葉が棘として刺さって、それがぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ、うずきまわる訳ですな。そのうずいとる間は1つも面白くないというようなことになっていくんやないかと思うんですけれども。だから私は、できるだけ心に形をつくらずに、心にそういう透明さを失わんようにしておくということが、さわやかな心を持って生きることが、自分のためにも、また周りの人のためにも、私は大切なことやないかと思うんですね。プリントの4つ目の資料をみてください。「そよ風の心／この世には／優しい人もいれば 厳しい人もいる／褒める言葉もあれば けなす言葉もある／どちらがよくて どちらが悪いというのではなく／松葉の間をそよ風がさあっと吹き抜けていくように／捕らわれも 引っ掛かりもなく／素直な さわやかな心をもって／生きていきたい」と。こういうふう思うんですね。

次にまた、話に移るんですけれども、皆さんはお風呂に入られますわね。お風呂入られたら、どこから洗われますか？ 女性の方も大勢おられるけど、そんな女性に向かって、どこから洗われますか、いうて聞きよったら、このおっさん、何をすけべなことを考えとんやいうことになるかも分からへんのんですけれども、兵庫県に西脇市いうてあるんですけどね、あそこ行ってね、これは婦人会かなんかやったんですけれども、同じことを聞いたんですよ。お風呂入ったら、どこから洗われますか？ いうて、たいがい今みたいに、しーんとしとってね、何にも返ってこうへんのやけど。その西脇行った時には、ごっつい声で、あるおばさんが「へそから洗いますーっ」て（笑）。変わったところやなあ、あんまりへそから洗いよったら、腹痛うなるんちゃうかなと思ひよったら、後でそれは分かったんやけど、西脇市は日本列島のちょうどへその部分に当たるらしいですわ。それで、それをしゃれて言われたんですが、私はそれを知らんもんやから、変わったところやなあくらいしか、その時は思えなかったんですけれど。まあ、そういう方もおられるかも分からんですけれども、8割方は、やっぱり上から下向きに洗っていく人が多いんやないかと思うんですね。

何で上から下向きに洗うんかいうことを考えよると、これも人間の1つの、そういう常識がつくりあげたもんかも分からんし、ひよっとしたら学校教育の成果かも分からんと思うんですね。学校教育の成果いうんは皮肉で言うるとる訳なんですけれども。学校においてね、生徒が1番先生から褒めてもらえることは何やいうたら、やっぱりしっかり勉強して、

よい成績をとるということが、先生からも親からも周りの者からも褒めてもらったり、注目してもらえることになるんじゃないかと思うんですね。ということは、しっかりと勉強できるようになろうと思うたら、ここ（頭）を鍛えんとあかん訳ですわ。この体の中で1番大事なところはどこやいうたら、頭になるんですね。皆さんでも、家で枕があったりね、そういうもんをまたいで通ったりね、もしも踏んだりしたら親に叱られたことがあったんじゃないかと思うんですけれども、この頭という1番尊いものが横たわるところやからね、枕をまたいだり、踏んだりしよったら、頭が悪うなってあかんのやとか、叱られるんじゃないかと思うんですね。

まあ、確かに頭は大事なところかも分からんのですけれども、体の中で1番尊いところはどこやいうて言われたら、どこだと答えられますか？ 自分の体の中で1番尊いところ。私はね、足の裏やと思うんですよ、尊いところ。それは何でかという、頭いうのはね、こんな横着なもん、あらへんですわ。どこへ行くんでも、1番上にどんと乗せてもらってね、運んでもろうとるだけですからね。ところが1番体の中で損なんは、足の裏やないですか？ 私は今日、福知山からここまで来たんやけど、たいがい足の裏で来たんですわ。はや、もうバンガローでおトイレも行かしてもろうたけど、1番便所に行っても汚いところと接しとかないといかんのが、この足の裏やないかと思うんですね。だから、重い体重を支えて、汚いところへも行かならんと。ところが、足の裏がそれを拒まんと、汚いところでも遠いところでも、どんな所でも、自分の体を運んでくれるから、我々はさわやかな生活ができるんじゃないかと思うんですね。

そういうものの見方、世の中に色んな方がおられるんですけれども、おトイレの掃除やとか、家の中でいうたら人の食べ物をつくったりとか、そういうことはなかなかしんどいことすわ。だけど、そういうことを嫌がらんと、一生懸命してくれる人がおられるから、我々は快適な生活が送れとんやないかと思うんですね。だから、そういう人の嫌がるようなことを、嫌な顔もせんと、かえって自分の嫌なことを進んでできるということは、自分の心を磨いてることにつながるんやくらいの気持ちで積極的にできる人。そういう人を、私はやっぱり、世の中で1番尊い人やないかと、そういうふう思うんですね。ところが人間は、学校教育で9年間でも10何年間でも、勉強や勉強や勉強やいうて、結局、頭がよかったらよい思いができるということで、頭というのは体の1番上に乗ってるから、とにかく高いところにおられる人、高いところの人ほど偉い人やいうて思う観念が知らず知らずの内に、身についてしまったんじゃないかと思うんですね。だから私は、本当の正しいものの見方というのは、そういう見方じゃなくしても、例えば高いところにおられても、いつも人に勝つか、人より得するか、どこかに別嬪がおらへんか、どこかに美味しいもんないか、いうてそんなことばかり考えとる人がおられたとしたら、それは決して人間的に尊い人でも何でもないと思うんですわ。多分その、人に勝つか負けるか、得か損か、別嬪おらへ

んか、美味しいもんじゃないかいう、この世界は動物の世界ですわ。そこらへんの犬が、その感覚で生きとんやないかと思えますね。腹減った、何か美味しいもんじゃないか美味しいもんじゃないかってやっています。それでお腹いっぱいになったら、どて一っと道で憚ることなく寝てますしね。それで発情期がきたら、メスおらへんかメスおらへんかいうて、血眼になって探していますわ。だから、それは欲望に支配された世界なんですよ。それはだから、動物の世界やないかと。

それよりも、そういう欲望の世界から逃れて、本当に人のためになることを自分から進んで素直にできるような、そういう心をもった人が私は1番尊い人やと、そういうものを見方ができるようになって初めて、世の中の真実のものが見えてくるんやないかと思うんですね。だから、この「雲」をとるというのは、そういう高いところにおったら偉い人なんやと、低いところはあかんのやとかね、金持ちやったら偉い人なんや、貧乏者はあかんのやとか、そういう観念を取った時に初めて、本当の世の中の姿が見えるんやないかと思うんですね。人間として生まれて、本当のそういう姿を見て生きていかなかったら、せつかく生まれても、目の前に青いサングラスを掛けて見たら、世の中は青かったいうて思うけど、本当は世の中、そんな青やないんですよ。だから、本当にそういうものを取り除いて、心の眼で世の中を見て生きてこそ、本当の人生を生きることになるんやないかと、私は思います。6つ目の資料を見てください。『足の裏』という詩なんですけれども。「足の裏は／いつも汚いところと接しているのに／文句一つ言わず／私を支えてくれる／えらいなえらいなと軽石でこすってやると／けらけらと笑いながら／いいよいいよと答えてくれた」と。こういうことやないかと思うんですね。皆さんは、今日でもいいですし明日でもいいですが、お風呂に入られたら、いつも軽石ばかりでこすらんと、柔らかいさらのタオルでいっぺん、「今日はお前のおかげでライラのセミナー行ったら、丹波の方から来られた若い男前の坊さんのよい話を聞けて、これもお前のおかげや」というてね、いっぺん大事に足の裏を洗ってやってください。そしたら、けらけらいうて喜ぶんやないかと思うんですね。そういうことですね。

それから、これも私の子供の話で申し訳ないんですけども、私は子供が3人おりました、1番上が男の子で小学校6年生、今度中学校1年生なんですけれども、それから年子で5年生の子と、それから1年生の子と、3人おるんですわ。それで上が男の子で、あと下は女の子なんですけれども、1番上の子が、これはもうだいぶ前の話の、幼稚園に入った時の話なんですけれどもね。家内が、参観日がありまして幼稚園へ、自分の子供がどんなことをしているか見に行ったんですね。そしたら、ちょうどこのくらいのホールがありまして、そこで子供がうわーっと遊んどったいうんですね。ところが、親いうんは、参観日に行っても他所の子なんか全然見てへん、自分の子ばかりですわ。それで、たいがいよいところを見るんです。中心におってね、リーダーシップとってんのはうちの子やない

かいうて、そういう見方ですわ。うちの家内も、真ん中へんで子供がたわむれて遊んどったから、その中におるやろ思うて見るんやけど、なんぼ見てもおらへんのですね。おかしいなあいうてずっと見てたら、掃除道具を入れるロッカーと木で作ったごみ箱があったらしいですよ。そのごみ箱が木でできとったから節があつてね、その節がボーンと抜けとって穴が開いとったんですわ。それでふっと見たら、その穴の中がきよろきよろ動いとるんですよ。見たら、目玉がきよろきよろしてて、誰が入とんやろ思うたら、うちの子が入とったんですわ、ごみ箱に。誰もが遊んでるときにね。それを見て、家内は帰ってきてえらい心配してね、他所の子は真ん中へんでうわーとたわむれて遊んでるのに、うちの子だけごみ箱に入ったり出たり、大丈夫やろかいうてね。皆とちゃんとやっついていけるんやろかいうて、えらい色々心配して、私も相談されたんやけどね。私も最初に聞いた時は、危険やなあて思うたんやけど、その時に家内に、「お前、そしたらな。あの子をどういふ子に育てようと思うとる？」いうて家内に聞いたんですわ。家内は、「お寺の子やし、できたら、嫌がらへんたら、あんたの後を継いでここの住職になってくれたらよいなあとは思とる」いうてね、そういうことを家内が言うたんですよ。「そうか」と、「長男は後を継いだらよいいうて思うとんやな」「そしたらな、心配せんでええで」いうて、僕が言うたんですわ。「何でか言うたら、坊さんいうんはな、皆でうわーとやるんもええけど、僕も色んな所へ行って、どんな話してくるか知ってるやろ」「ちらっと見といては、あんなことがあつた、こんなことがあつたいうて、自分はせんとして話ししとるやろ。それと同じように、自分がうわーとやとったたら、何しとるもんか分からへんもんなんや」「それよりかは、ごみ箱の中の、穴からじーっと人のやることを覗いといて、それであいうもんもおつた、こういうもんもおつたいうて勉強したらええんやし、それはそれでいいんとちがうか」「もし賢こうなつたら、ごみ箱の穴から覗いた現実社会という小説でも書いたら、ベストセラーにでもなるかも分からんしの」とかいうて、冗談で言うとったんですけどね。だから、たいがい親というのは、こうあるべきやと、しっかりと勉強して皆と仲良く遊んで、きちっとしたことができる子が優等生やと、そういう観念で見てしまうんですけれども、それよりも自分の子供の本質というか、性質というものをしっかりと見抜いて、それが伸びるような生き方を教えてやるということが、大事やないかと思うんですわ。

ところが2番目の女の子、たいがい皆さんも経験あると思うんですが、やっぱり中はどうしてもね、ええかげんになるんですわ。ええかげんいうことはないんやけど、よう家内が言うてますわ。1番上の子はアルバムがいっぱい、3冊も4冊もあるいうて。ところが2番目の子になったら、それがまだ1冊くらいしかあらへんと。ところが1番下の子になるとこれが最後やと思うて、またがんばって、もう2番目と同じくらいあるいうて。ということとは2番目いうんはどうしても、親の心がすうっと子供を忘れ去ってしまうようなことがあるから、そうすると子供がひがんでしまうから思うてね。私もある時、家内が細長

いパンを買ってきたんですね。1本しかないもんやから、3人そのへんにごろごろと遊んどったから、たいがいやったら1番上の子からやろうと思うんやけど、またそれをすると真ん中がひがんだらいかん思うて、2番目の女の子に「おい、ユウコ、ちょっとこっちにおいで」いうて、「今日はな、1番最初にパンをあげるからな」いうてね。ちぎって、パンをやりかけたら、そのユウコは「そんなんいらん」いうて、さーっとどこかに行ってしまったんですね。それでしかたないから、こっち側でごろごろ芋みたいに転げとる長男に、「おい、これ食べるか」いうたら、「あー」いうてだるそうに手だして、寝たまんまうにやうにゃと食べよったですわ。それでしょうがないから、1番下の子に次のをちぎって、「ほなケイコ、おいで。これやるわ」いうてやりかけたらね、さっきすーっと行ったはずのユウコがぐるっとまわってきて、とんびが油揚げとるようにさっとそのパンを取っていったんですね。「おいこら、お前さっきパンいらん言うたやないか」いうたらですね。家内がこっち向いて、にたーって、「あんたは分からへんのか」「分からへんて、何がやねん」「あんたなあ、ユウコはパンが欲しいてしゃあないんや。ほやけどな、端っこのパンもろたら、開いてみい。あんが中まで通ってない。そんなパンはいらんのや。それを言うと、なんぼほうとした兄貴でもそれに気がついて、ほくも真ん中やいうて言い出したら、やっば力では勝たらへんやろ。うまいことフェイントをかけて端をとらせといて、真ん中のをとっていとるんや」いうてね。これはすごいやつや、こいつはサラリーマンになっても充分生き延びていける思うてね。これはもうサラリーマンや、いうて思うたことがあるんですけどね。

だから同じ自分の子供なんやけど、まあ私は分からへんやけど多分私の子やと思うんですけどな、家内にきかんと分からへんところもあるんやけど、全然性格が違うんですね。それで1番上の長男は、とにかくほうっとしとんやけど、お寺の住職いうんはほうっとしてるくらいのがええんやないか思うて。2番目のね、あんな狡猾に頭が走るようなんが住職でおったら、檀家の人が恐がってよう来んようになる、行ったら何説教されるか分からんいうてね。ところが1番上の子みたいにほおっとしとったらね、大抵人は、あのお住っさんやったら何にも言うてないし、ついでに寺でちょっと遊ばしてもらおうか、いうて、来てもらたらしめたもんなんですわ、寺は。手ぶらではなかなか行きにくいところですよん(笑)。そしたら、うちの寺はまた栄えるんやないか思うてね。だから、生かし方やないかと思うんですね。だから、さっきもビデオで言うとおったんですけれども、上手とか下手とか、できるとかできんとか、早いとか遅いとか、どうしてもそういうことにこだわってしまうんやけど、そういうことだけが大事なんやなしに、それよりも自分の持ち味、自分が自然から与えられた持ち味をもって生きるということが、1番人間が楽しく、充実して生きたる生き方やないかと、私はそういうふう思うんですね。

7番目の、さっきビデオの中でも言うてました「味」という詩を見てください。「味／

大根には大根の味があり／にんじんはにんじんの味がある／私には私の味があり／あなたにはあなたの味がある／下手でも上手でもどちらでもいい／あなたの味がでておれば／そして／私の味がでておれば」。大根が好きやとか、にんじんが嫌いやとか、そういう問題は別問題ですわ。嫌いやさかいになくなれいうんじゃなしに、にんじんはにんじんでああいう味があったらええんですよ。それで大根は大根でああいう味があったらええんやないかと思うんですね。私でも、私も坊さんの端くれなんやけど、私よりももっとも立派な、もう悟ったような、私もあんな坊さんになりたいというようなお坊さんおられますわ。そやけど私がそんな坊さんになってしまったら、私の存在価値は何もなくなる訳ですね。私は坊さんなのか、学校の先生なのか、そこらへんのおっさんなのか、俗人なのか、分からんようなそういう姿で、下手な生き方でもそれをさらけ出しながら生きてこそ、私の初めての存在価値が生まれてくるんやないかと、こう思うんですね。誰でも、上手に生きてよい格好をしたいと思うんですけども、人はそんな上手に生きた姿を見るよりも、失敗した時の姿を見た時のほうが嬉しいんですわ。そのほうが、自分の存在価値があるんやないかと思って、こんな立派な先生がおられるようなところへでも、私みたいな若輩者がきて話すんも、こんな若いもんがもさくさやとるいう姿を見てもらうことが、また勉強やないかと思って行動している訳ですね。だから、こういう話にも関係してくるんやないかと思うんですけども、そういうことで、人間は味というものを出して生きていくということが大事やないかと思えます。

この話は年配の方はご存知の方があられるかも知れませんが、私のお寺は弘法大師という方が開かれたお寺で、真言宗いう宗教でして、本山が高野山にあるんですけども。そこに尼僧さんで、しかも両手のない、立派な方がおられたんですわ。どういうお名前かという、大石順教さんという方やったんですけども、その大石順教さん、何で両手がなくなったかという、自分の義理のお父さんなんですけれども、その方が酒乱の気があってね、ある晩すごい酒に酔っ払って、床の間にある日本刀を振り回してね、大暴れしたんですわ。それで自分の家族、5人か6人おる全部、日本刀で叩き切って行ってね、止めに入ったその大石順教さん、まだ小学校くらいの子やったらしいですけども、その止めに入った手を、バッサバッサと刀で切り落とされて、そんな小さい時に、もうこの世の地獄を見られた訳ですね。他所から強盗が入って殺されたいうんなら、それもかなわんけど、自分の親が家族を全部殺して行って、しかも自分の腕まで切られてしまうような、そういう恐ろしい出来事に出会われまして、私のような罪深い女は普通の生き方はできんということで、女の人やったんですけども、頭を丸めて高野山に上って、それで尼僧さんになられたんですわ。ところが、尼僧になったさかいにそういう出来事を全部忘れてしまうことができるかいうたら、そんなこともできへんし、それから両腕がなかったらどれだけ不自由か、ちょっと考えてみてください。ご

はんかて、どうやって食べるんやということになりますわな。おトイレ行ったかて、どうやって始末するんか、色んなことを考えたらね、手がない不自由いうんは想像を絶するような不便さがあるんやないかと思うんですね。どんなに心ができた人でも、やっぱり自分の体の事を考えたら不満いうかね、口惜しさみたいなもんが出てくるんやないかと思うんですけれども。だからずっと自分の中に劣等感をもって、悔やみごとをもって、生きておられたらしいんですね。

ところがその方も、色んな所へお話にいかれるようになって、あるお家にお話に行かれたんですよ。自分の講演時間がくるまで控の間で待っておられたら、ちょうどそのお家のひさしのところへ、カナリアの鳥かごが置いてあって、カナリアが1匹入っていて、パイパイさえずりながら巣づくりをしていたんですね。それを見てたら、そのへんに落ちた小さなクズを拾っては巣の中に運んで、巣をつくっているんですね。その姿を見た時に、鳥から学ばれたというんですよ。鳥にも手がないと。だけどくちばしで、自分の家までつくっているやないかと。私も確かに手はないと。だけど私は、ぐちゅぐちゅ悔やみごとばかり心の中で思って生きてきたけど、私にもあの鳥と同じように口があると。よし、これからはこの口で生きてやろうと、そういうふうに思われたんですね。それから血のにじむような努力をされたんやないかと思うんですけれども、口に筆を咥えて字の練習をされて、次に絵まで描く練習をして、最後には人が手で書いた字よりも、すばらしい字を書かれるようになって、絵もすばらしい絵を描かれるようになったいうんですね。だから、手がないということは、人間にとって本当に大きな弱点ですわ。なんやかんやいうても、手がなかったらどれだけ不自由なことかいうことを考えたら、本当にマイナスなんやけど、ないものをいつまで思うてもしゃあないと。それよりも前向きに、何かできることはないかと思って生きていく。そこに私は、人間の本来の生き方というのが生まれてくるんやないかと思うんですね。

皆さんも、じっと自分を見つめたらね、自分の中に短所がいっぱいあるんやないかと思うんですよ。私も短所いっぱいあるんですわ。どうしても、真面目な人ほど自分の短所にこだわってね、私はあかん、これがあるからあかんのやとかいうて、自分の短所に自分でこだわってしまって、本当の生き方ができなくなったりするんやないかと思うんですね。ところが私は、短所というのはこれは皆さんの生まれもって出てきたもんですよ。その短所そのものも、自分自身やないかと思うんですね。その短所を直すということは、これはできんんですわ。それを、短所を直してしまったときには、ひよっとしたらそれは自分でなくなることも分からへんのやないかと思うんですね。どういう生き方が大事かと思った時に、私ところは丹波のほうやから、冬になったら吊るし柿を作るんですよ。軒先にずうっと。ところが吊るし柿にする柿というのは、皆さんはご存知ですな、あれは甘柿をむくんちゃいますわね。渋柿をむくんですよ。噛んだらぐわーっと歯に渋がついて、削り

落とさんといかんくらい渋い柿を、それを軒先に干しておく訳ですわ。そしたら冬の空
っ風とか、ぼかぼかした陽射しによって、1ヶ月か2ヶ月干しておいたら、あれだけ渋か
った渋柿が、今まであった甘柿よりももっともって甘い柿に生まれ変わっていくんですね。
私はそれやと思うたんですよ。柿で言うたら、渋は人間の中にある短所みたいなもんです
わ。だからその渋柿の渋を、ピンセットで1つ1つ取るようなことを考えても無理な
のと同じように、渋柿の渋はそのまま、冬の寒さやら太陽の暖かさによってまるやかな
甘柿になっていくと同じように、自分の中の短所をぬくんじゃなくして、短所は中に入
ったままで、その短所が見えなくなるくらい、よいところを出して生きていくというこ
とがあるんですね。だから誰もが短所のほうに目がいくんですけれども、それはそれで置
いておいて、それよりも自分の中によいものを見つけたら、それをどんどん伸ばしてい
たら短所の影は消えていくんじゃないかと、そういう生き方を私は目指したいと思うん
ですわ。8番の資料を見てください。「渋柿／冬の軒下に干される渋柿は／冷たい冬の北風と／や
さしい冬の太陽に／鍛えられ／励まされ／渋柿の渋はそのまま甘柿となり／元からの
甘柿よりもその甘さを増し／りんりんと輝く」と。ここに私は人間の本当のすばらしい
生き方というものを見つけ出すことができます。

さあ、もういよいよ最後のお話なんですけれども、今日は「心が人生を決める」とい
うことで、心のお話をずっとしてきた訳なんですけれども、この世の中の色んなものとい
うのは、私は心が具現化されたものがこの世の中やないかと思うんですわ。だから、心
が荒廃している、乱れている時には、その社会も乱れてきますし、学校でもそうですわ。
生徒の心が非常にすさんで、荒廃すると、学校の中も非常に色んな点で荒廃してくるん
ですわ。実は私、柏原高校に7年間ほどおったんですけれども、一応柏原高校というのは兵
庫県では4番目に古い高校やいうて、伝統のある学校なんやいうて、まあ姫路西いう
んが1番古いらしいんですけれども、内閣総理大臣になられた芦田均いう方も柏原高
校の卒業生なんですわ。だから生徒が入ってきたら、校長先生からも周りの先生から
も、ここの柏原高校は伝統のある学校なんやと、それを汚すな、がんばれいうて言
われるんですけれども、そんなもんどこ吹く風いうような感じで若い子はおりますわ。
しかし、やっぱり私は、そういうことにあんまりこだわらんでもよいんですけれども、
やっぱり学校としては、もうちょっと整然としてほしいと思うたことがあったん
ですわ。

それは何でかという、中間とか期末とかね、定期考査が近づいてくると学校がゴミ
だらけになってくるんですよ。なんでゴミだらけになるかいうたら、1つはやっぱり勉強
勉強いうんで、心が荒廃するんですわ。それで人の事なんか考えている余裕もなくな
って、とにかく試験やからペーパーをこしらえて、それを覚えなさいといかん。それ
を学校へ持ってきますわね。それで覚えたら、いらんやつはゴミ箱に捨てたらええん
やけど、まあ1つ

くらいいうて、ポイとそこらへんに捨てる訳ですわ。それでこっちの子もまたポイって。そしたら、あっちやこっちにですね、ペーパーが落ちる訳ですね。それがまた風でぶわーっと吹かれたら、校舎の横のほうへ吹きだまりみたいにいっぱいゴミが溜まったり、そういう状態になってたんですね。

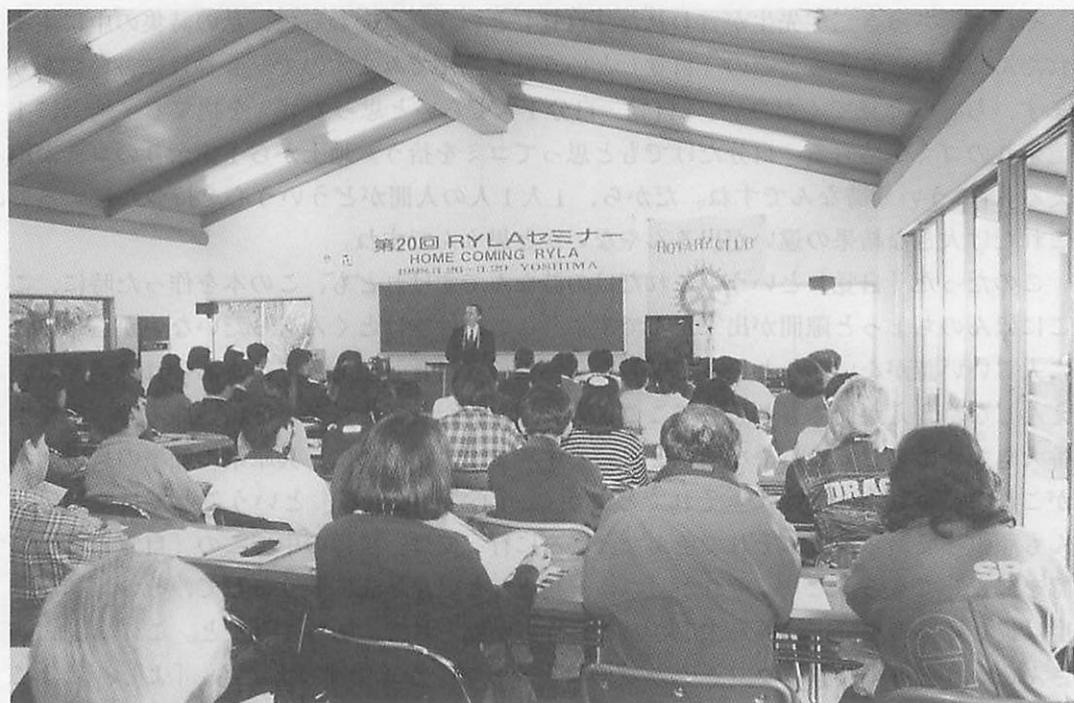
ちょうど、私はその時分に生徒指導の担当になっていましてね。何とかこれを直さんといかんと、朝礼の時間に15分だけ生徒指導部からということでお話する時間をいただいて、それから私はマイクを持って、1,200人いる生徒に向かって話をしたんですね。——君たちはとにかく柏原高校の生徒として、自分に誇りを持って、プライドを持って、頑張っているんやろうと思うけれども、しかし外からお客さんが来られて、この柏原高校を本当に素晴らしい学校と思うかと言うたら、見てみい、校舎のあの吹きだまりにゴミが舞っているだろう。あそこらへんにパラパラと落ちてるやないか。こんな状況を見たら、何とこの学校は荒れた、荒廃した学校やと思うで。だから、やっぱり自分の学校に誇りを持つんやったら、もっと1人1人がそういう面でのプライドを持てる人間にならんとあかんやないか。今から言うことは決して難しいことを頼むわけではない。簡単なことを1つだけ言うから、これを実行してくれんかいうてね、話したんですね。それは、こんな話です。皆、たぶんもうすぐ試験が近づくから、暗記ペーパーを持ってるやろ。そのポケットにあるペーパーを、大概もう覚えたら丸めてほいっと捨ててきたやろ。自分だけと想着てほいっと捨てたら、1,200人もここにはおるんや。そしたら1日の内に1,200ものゴミが落ちるんや。だから、ほいっと捨てる、そういう心じゃなくして、逆や。1つだけでええんや。学校に落ちてるゴミを1つだけでよいから拾ってくれ。そしたら1,200人もおるんやから、いっぺんに1,200ものゴミが消えるんや。1つほいっと捨てるか、1つ捨てるかによって、それだけ大きな違いが出てくるんや。だからそんな大きな努力もいらへんやろ。だから、頼むから捨てるほうの人間になってほしいいうてね、そういうことを訴えたんです。これは簡単なことやから、よう効きましたわ。もう本当にゴミが、まあ皆無ではないんですが、ずいぶん少なくなったんですね。

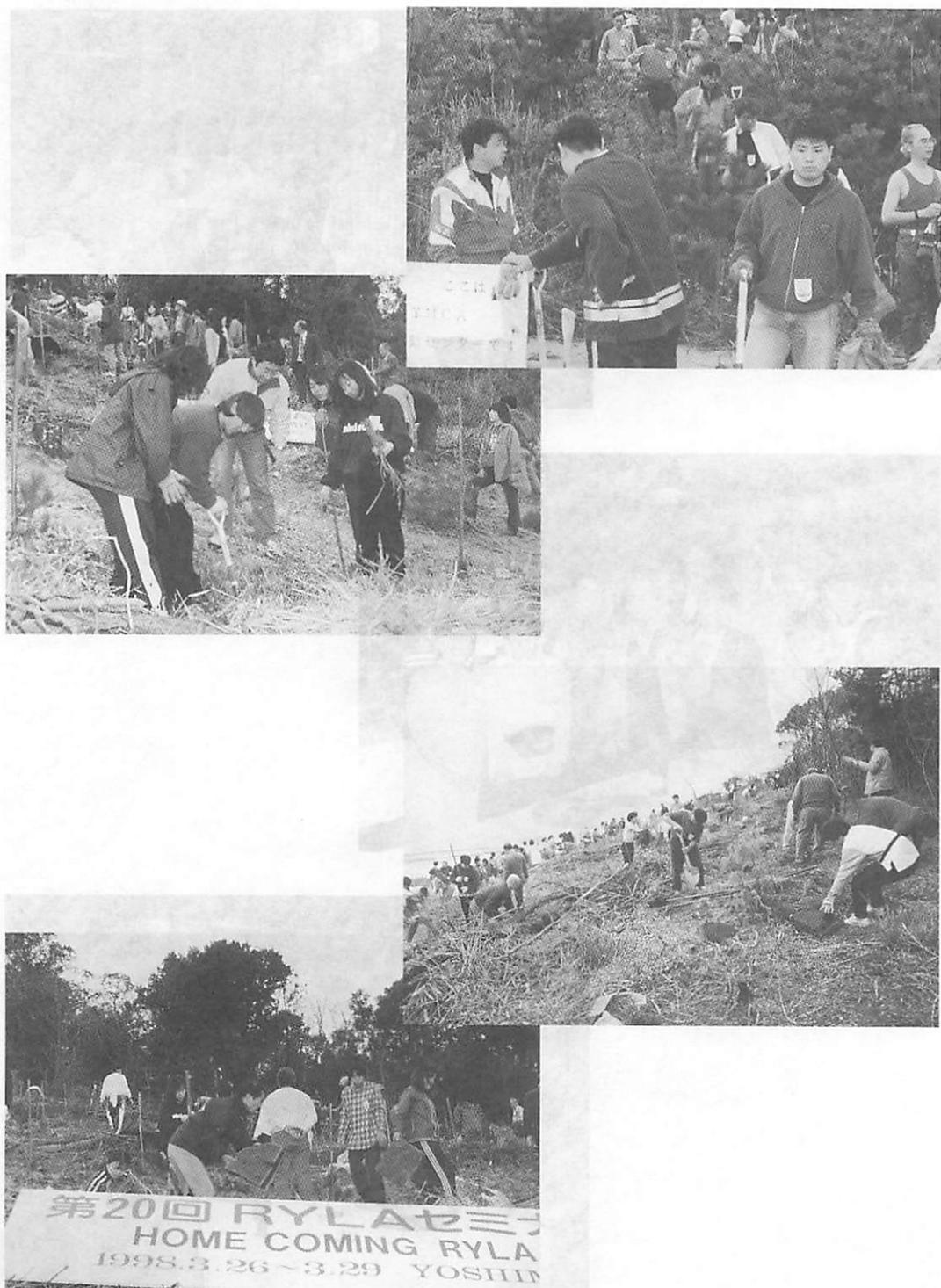
だから私は1人1人の心の持ちようが、結局その学校なり、地域なり、社会なり、この地球なりを変えていくんやないかと。だから今の大きな流れの中では、自分だけでもきちっとやっていこうという心じゃなくして、自分1人くらいええんかという心のほうが、大きい値を示すんやないかと思うんですね。だから、そういう心がどんどん育ってきたから、今の世の中が本当にすさんでいったんやないかと思うんですね。たまたま、ここにライラでみえている方は、これからこの世の中のリーダーになっていかれる方やから、そういう方が核になって、そういう友達を10人ずつでも作って行って、それでその友達がまたそういう自覚を持てる人に育っていけば、本当にまたこの社会が生まれ変わってくんやないかと、私はそういうことを思う訳なんですわ。

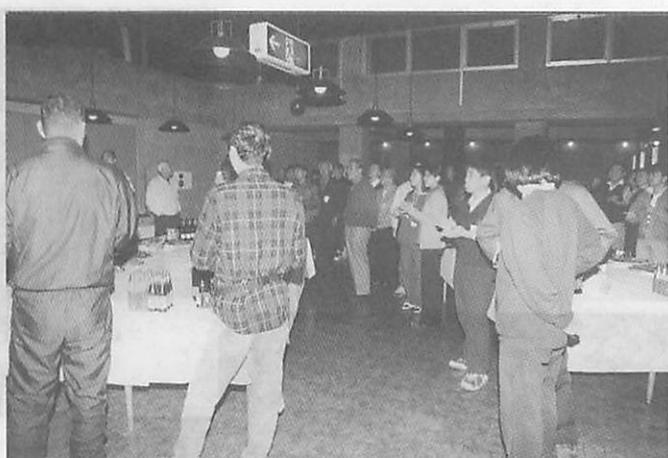
それが、さっき三宅先生が言われた「自覚」という詩に変わって、私の詩集の中に生まれたんですわ。ちょっとその「自覚」という詩を読みますので。9番目に書いてあります、ちょっと見てください。「自覚／自分1人ぐらいと思ってゴミを捨てる／地上に1億余りのゴミが落ちる／自分だけでもと思ってゴミを拾う／地上から1億余りのゴミが消える」。こういう詩なんですわね。だから、1人1人の人間がどういう心を持つかによって、これだけ大きな結果の違いが出るんやないかと思うんですわ。

このたった「自覚」という、これだけの詩なんですけれども、この本を作った時に、ここにほんのちょっと隙間が出来たんですよ。ここだけ空けとくんもったいないから、ここに入るいい詩がないかなと思って探したら、この「自覚」があって、まあこれは詩ともいえんしな、ええか何でもと思ってここに入れておいたら、これがいっぱいある詩の中で一番大きな仕事をしてるんやないかと思えます。まず1番初めに、兵庫県の知事の貝原知事がこれを見られたんですよ。それでとにかく、「心豊かな兵庫」ということで貝原知事さんも頑張っておられて、それで色んなところに行つては、挨拶の中でこの「自覚」という詩を発表してもらったり、それが『ニュー兵庫』という雑誌に載りまして、その雑誌が今度は、兵庫県の小野市に真島太郎さんという方が見られて、あっこれだと。この真島太郎さんという方も小野ロータリークラブのロータリアンなんですけれども、「よし、私はこれを使って、これからちょっとでも人の役に立つことをしたい」ということで、日本中のロータリークラブへこの詩を配られたんですわ。それを三宅ガバナーさんが今治ロータリークラブで休憩されている時に、額に入っているのを見られて、それで今日私がここに来た訳なんですわ。だからこの詩がなかったら、皆さんと私との出会いはなかったんやないかと。不思議ですやろ。私は本当に、人生は不思議なもんやなあと思うんですけれども。そういう関係で私は今日、この「自覚」という詩が取り持つご縁で、皆さんとここで出会えた訳なんですわ。

私の話を聞いていただきまして、人それぞれに受け止め方があって、どういうふうに皆さんの心に入ったかは分かりませんが、しかし、よい部分は入れてもらって、自分で入りにくい部分は別に入れる必要はありませんから、何か1つでももし入るものがあつたら、私はここへ来させてもらった甲斐があつたなあ、そんなふう思うところがございます。最後、この詩の3番目、「心の持ち方」という詩を朗読させていただきました、わたしのつたないお話ですけども、終わらせていただきたいと思えます。「心の持ち方／人の荷物を持って／疲れて損をしたととるか／手助けが出来てよかったととるか／同じことをしても2つのとり方ができる／人のことをしてあげられてよかったととれば／その人の心はそれだけ豊かになっている／心の持ち方次第で／幸せだともとれるし／不幸せだともとれる／幸不幸はその人の心が決めること／損得勘定だけで生きる生き方よりも／心の豊かさのために生きる生き方を／私は選びたい」。どうもご静聴ありがとうございました。







「21世紀を心豊かに生きるために」

直前 R.I.理事 今井 鎮雄



「21世紀を心豊かに生きるために」という大きな題が私に与えられ、しかもこのRYLAの間に起こった皆さんからの質問や疑問にも応えるようになどという、途方もない役目を負わされ、どうなることやら分かりませんが、今日は少し沢山時間をいただいているので、いくつかのお話をしたいと思います。

例えば昨日の皆さんのディスカッションの中で、「福祉とは何か」という大きな問題について話された中には「福祉とは自分の周囲を愛するということから始まってきた。自分と人間と、他者との関係についてもう少し考えたいというような気持ちがある」といわれた人がありました。又「皆から変人と言われているけれども、私は宇宙が好きだ」と。「宇宙の永遠性に比べて、人間というものは非常に小さいし、限界があると思う。自分はいつもつらい時や自分をみつめたい時には空をみつめたい」と言われた方もありました。若者が自分の問題について真剣に考えれば考えるほど、どういう風に生きるのかということ、色んな証しがしてみたい、そんな風に考えられると思います。

「殺人をした子供達の気持ちが分かる。しかしそれをどうして先生達は回避していくのか、どうしようとしてくれているのか」という大変切実な問題提起もありました。又これに関して「何故殺人のところまで追い詰められるのか」ということについて色んな話ができました。一つ一つの事について直接的な解答にはならないかもしれないけれども、あなた方が昨日話をしたものを掘り下げていくところの基底になるような事について、私の話から何か汲み取ってもらえると大変ありがたいと思います。

さっき、上から2～3人の人が私達の脇をさーっと走って行きました。「ああ、震災ルック」と思いました。ヤッケを着て、フードをつけて、リュックサックを背負って、スニーカーを履く。これはこの頃のファッションですね。神戸発・震災ルックってファッションが、今、全国的に広がっていますよね。ところでちょっと考えてみますと、フードというのは昔、私達は戦争中には頭を保護する防空頭布を被っていました。電池とかマッチ、油紙、蠟燭とか乾パンとかを入れたリュックを背負い、今でいうヤッケのような上着を着て、運動靴。今のあなた達のファッションというのは昔の脱出ルックですよ。戦争から逃げ出す脱出ルックでそんな格好をしていたものです。もっと言うと、あなた達と話していると、それほど日本或いは世界の人達がどこかへ脱出したい。できるならばどこかへ脱出

したい。そういう潜在的なものが逆にファッションとして表れて、そういう格好になった。ファッションなんてものは非常に感性に関係していますから、そういう感覚の中であのようなファッションに生まれ変わってくるということは、私達は考えてみてもいいと思うことなんですね。

今年のRYLAはホームカミングRYLAです。RYLAを20年間皆さんと一緒にやって来ました。そして私達は若い皆さんに期待をしています。

新しい世界というものを考えた時、若者が本当に考えていかなければならないことが沢山あると昨日も話し合いの中で出ていましたが、20回を節目にして、皆さんに集まっていたいただき、やがて来る21世紀という時代の問題を考えながら、21世紀にむかって、未来にむかって、私達は一体ここでどのように方向を変えていけばよいのかということをお話し合おうとしているわけです。

なぜ21世紀という事が、今こんなに意識されるのだろうか。それはただ時の刻みではありますが、特に21世紀ということ意識して皆が色々なことを考えたり、色々な事を言っているのは何だろうか。昨日の森先生のお話の中で、「人間という個体は100歳まで生きる」と言われました。大体100年という事で考えると、それで1世代、その人の人生が終わる。21世紀というのは1900年、20世紀から100年経って21世紀。丁度1回りしたのだから変わろうと。20世紀には第1次世界対戦、第2次世界対戦と2度も大きな戦争があって、世界も変わりつつある。時代的な時の系列の一つとして21世紀として考えるという事もいいかもしれません。

ところがもう一つ。色々考えてみると、人間の歴史というのは長い。先日2680地区の地区大会で河合雅夫という先生が講演をされました。環境との、或いは自然との共生ということで、人間はどう生きなければならないかというお話をして下さいました。この先生はお猿の先生で、霊長類やお猿の事などを研究しておられたり、兵庫県の人と自然の博物館の館長をしておられる方でもあります。

その講演で先生はこうおっしゃいました。人類の歴史は約500万年くらいのもので、間違いなく、人類はアフリカで生まれ、そしてずっと上がって来て、モンゴロイドが我々の先祖になり、またずーっと上がってコーカロイド、これが白色人種の祖先になり、ネグロロイドというのが、黒人の人達の祖先になったというような話をしてくださりました。人間が動物として生まれたのは5百万年前だけれども、人間が人間としての文化を持ってからは1万1千年くらい。私が前に調べた時には6千年、7千年前位からのチグリス、ユーフラテスの文明であるとか、黄河の文明であるなど、文明の歴史が証明されています。

その1万1千年前からの人間の文明社会で、一番最初に中心となったのが農耕の社会、みな耕して生活をする社会です。その農耕の文明社会の前にも狩猟の社会があったといわれていますが、皆さんご存じのように、三内円山遺跡と、東北の方に縄文の石器が出て

来た時に、いわゆるその辺のものを拾って食べただけでは、とてもこんな大きな集落は出来なだろうという事が分かって来て、縄文の時代に既にしっかりとした集落としての文化があったのだということが発見されました。

今からせいぜい2百年か250年ほど前に人間は自分達で機械というようなものを作り出すことが出来るようになりました。例えば水車というようなものとか、蒸気機関車というようなものを作ることによって、人間は急速に文明の社会へと変化していきました。それが工業社会という名前で呼ばれたり、産業社会という名前で呼ばれたり、色んな呼び方はしますが、文明社会へと入って行ってからそんなに長い歴史を持っているわけではありません。しかし文明社会に入ったことで、私達の生活は変わってしまったという事が出来るでしょう。

1万1千分の200という短い間に人間は産業社会という文明社会を作り、その生活が変わり、ここまで繁栄をしました。自動車も作ったし、船も作り、飛行機も作った。21世紀を前にして、これからもずっとこういう社会が続きますようにというのではなく、全く質的に違った社会、そういうものが生まれようとしています。その質的に全く違った社会が生まれようとしている時に私達はどうしてこの社会の中で生きたいのか、ということが問われていると言えます。これが21世紀ということとを皆の問題にしたことの理由であります。

もう一つ、21世紀ということとは2001年ということです。或る学者はこんな事を言っています。2001年というのは千年づつ数えると、第三・千年紀。ゼロ年から1000年まで、大化の改新なんかは第一・千年紀。そして1001年から2000年までが第二・千年紀。そして2001年からは第三・千年紀。要するに2001年からは3000年までの間にこの千年をどう生きるか。昔、恐竜というのがいて、この地球の中で威張っていたけれども、ある日突然皆いなくなってしまい、恐竜はもうSFの世界のものになってしまった。人類というものは5百年前から生きて来たけれども、今度この第三千年紀を人間が人間として生きられるかどうか分からないという人がいるのです。そんな時に「21世紀を心豊かに生きるために」なんて無理なことが言えるのかと。言いたい事は21世紀という時代がただ単なる歴史的な、経年的な意味での節目ではなく、人類が生きている生活の中で、本質的に違うものになりつつある中で、私達は21世紀を迎えようとしているのですという事です。そこには百年前とは全く違った生活があります。そのような時代の中で、どう生きるかということが考えられなければならないのです。しかもそれは今まで私達が考えて来たような姿勢の中で生きるのではなく、もっともっと色んな問題が沢山ある時代の中で生きようとしているのです。言い換えると、人間の歴史が変わって来る。或いは自然との問題、人類と自然とがどんな関係になるのかというような非常に大きな課題になって来るという事も考えられます。21世紀というのは経済的に変わるだけでなく、もっと大きく変わるという事です。

さて、その大きく変わるといふ問題を一つ。私が医学の話をしよふと思つたら今日は森先生を始め、お医者さんも沢山おられるし、化学の話に触れよふと思えば、バイオケミストリーのPHDを持った河合さんも来ておられる。やりにくいんですよ。私が間違つたら、彼らが後でこっそりと皆さんに訂正してくださると思つて、受け売りの形で曲がり角の一つの問題を話してみたいと思ひます。

ごく最近、2月28日に日本語に訳されて出た「メス化した自然」といふ本があります。デボラ・ギャドバリーといふイギリスの女性の書いた本です。この人は学者といふよりも科学ジャーナリストでありますから、世界の一番先端をいく学者のインタビューをして、番組を作り、そのうちの一つをNHKで流しました。フェミニナリゼーションといふのはフェミニズムのフェミニナリゼーションです。このNHKが流した番組は「精子が減っていく」男性の精子が減っていくといふ、科学の特別番組として放送されました。

この本は科学者ではなく、ジャーナリストが書いたものですから非常に読みやすいです。一つ一つの物語として書かれていますのですが、その中の一つにアメリカの一番南の方にあるフロリダの鰐がだんだん減ってくるといふ事に気がついた。フロリダから車で2、3時間のオーランド、ディズニーワールドのある所ですが、このディズニーワールドの周りには沢山の湖があつて、以前そこに鰐が沢山いた。小さなモーターボートに乗つて湿地帯にいくと、鰐がポコポコ顔を出して来る。それが10年あまり前からだんだん減つて来た。水質検査をしてもきれいで、鰐の生息に不適當なところは何もないのに、どんどん減つて来る。変ではないかといふことで調べると、卵の80%が無精卵であつた。100個生まれた卵の中で、ちゃんと精子が入つていて、生きてる卵といふのは20%にすぎない。80%は無精卵だといふ事に気がついた。調べてみると、鰐の生殖器が皆変形していたのですね。小さくなって役にたたなくなつていた。どうしてこうなつたのかといふと、いわゆる水俣病のような化学汚染物質で汚染されたのではなく、女性ホルモンのエストロゲンといふものの数値が上がつてしまつている。女性ホルモンのエストロゲンといふのは女性だけでなく、男性にもあるんですね。エストロゲンの値が上昇したために性を変化させたといふ事実が分かつて来たわけです。かもめなどもそうですが、オスとメスが一緒に卵を放卵しなきゃならないのに、気がついたらメスとメスが放卵している。メスとメスが放卵しても卵は孵つてこない。このような事実が沢山出て来たわけです。

ところがそれは生物や貝、魚或いは植物であるとかいふだけでなく、人間にもだんだん出ている。スコットランドのエジンバラに医学調査研究所がありますが、そこから報告書が出ているのです。1996年に不妊の家族を調べたものです。今までは不妊症といふときには、たいてい女性に問題があつたと言われていますが、この50年間に、人間の精子が激減している。1950年代生まれの男性と、1970年代生まれの男性の精子の数を数えると、たつた20年間の間に、50年代の男性の精子の数は1ミリリットルの中に1億あるのに対して、

70年代に生まれた男性の数は7800万、4分の3に減少している。その減少はずっと続いてきた傾向があるとエジンバラ研究所は発表したわけです。人類がそうなったら大変なことです。

じゃ、そのエストロゲンというものが増えてきたという事はどういうことなのか調べてみると、エストロゲンというのは女性ホルモンに似た疑似女性ホルモン。疑似エストロゲンというものが増えて、それが人間の体の中に入った時に女性ホルモ的な役割をするのだと言っています。3月28日の朝日新聞の「窓・論説委員会から」というコラムに載っていましたが、そこには環境ホルモンと書かれています。

「プラスチック製のコップを我が家から追放すべきか悩んでいる。落としても割れないことをいいことに、子供達が幼い頃から使い続けて来た。だが一部の化学物質はごく微量でも生殖機能に深刻な異常をもたらす事があると聞いて、心穏やかではいられなくなった。物質が体内でホルモンになりすまし、調節機能を失わせる、狂わせるらしい。それをホルモン作用攪乱物質とか、環境ホルモンとか呼ばれている。既に世界中の野性生物に様々な生殖機能の衰えがみられる。そうした事例を集め人間の危機を警告した『奪われし未来』の著者の一人は言い、「プラスチックのコーヒーカップでコーヒーを飲むのをやめている」と言っている人もあります。それにしても個人で出来る対策は限られています。一国でもこうした物質を作り、使っていれば、大気や海洋を通じて影響は世界中に広がる。世界が団結して対策をとらなければ、危機は避けられない。評論家の立花隆さんは、3年間勤めた東大客員教授としての最終講義で、環境ホルモンの研究が日本で遅れている事を憂い、こうした研究こそ大学ですべきだと強調され「二酸化炭素による温暖化問題より、はるかに深刻だ」と言い切ったのが印象的でした。21世紀という新しい時代というものが、実は世界的な地球的規模の中で起こり得る、こういった大きな変化に一体どうするのか。

昨日、河合さんと話をしていた時に、河合さんはその事を指摘しました。私達がこれまで科学技術によってすすめてきたものが、今、大きく変わりつつある。しかも、その変わってきたところで、科学技術が進んだ先端に、新しい時代を開こうという技術が沢山出てきた。一つはコンピューター。そして一つのバイオテクノロジー、バイオケミカルの問題。

例えば遺伝子組み換えの食料が多くなる。この遺伝子組み換えの食料、今のところは一番沢山あるのがアメリカです。遺伝子組み換え、私は今、生協の役員をしていますが、生協では遺伝子組み換え食品が人類の為に無害か、無害でないか、色々な大学の先生に調査をしてもらいました。今のところ、こうこうであって、将来こうなるから、禁止すべきだと言った人は一人もありませんでした。分からないのです。危ないかもしれないけれど、危なくないかもしれない。今、食べる分には無害です。しかし百年後にそれが無害かどうか分からないという答えでした。危ないのなら売らないようにしようかと。でもこの頃のお

母さんは何であれを売ってないのかと文句を言いに来るんですね。レトルト食品のようなものばかり食べて、みんなそれに慣れてるから、市場には遺伝子組み換えの商品がいっぱい出ていて、もうそれなしでは生きていけないくらいに出ています。今の世の中の一つの転換点はそういうことです。

これは日本の国だけでやるというわけにはいきません。ヨーロッパ、アメリカ、世界中の人と一緒に考えなくてはならないでしょう。ところが世界の人と一緒にものを考えるという事に、私達は慣れていない。ものを考える時に日本という尺度から、日本人という尺度から、日本の教育という尺度からだけものを考えてしまいます。皆と考えなければならぬ人類共通の話題というものを考えるような余裕をもっていない。しかし21世紀からは、要するに皆さんは日本の国がどうなるかという事ではなくて、世界の中の人間がどうなるかという視野をもたなければならないと言うほど今、曲がり角に立っています。今までの政治家、今の政治家だってそうです。一番中心に考えているのは日本が儲かるか儲からないかという事で、えげつない言い方をすれば儲かる儲からないかによって政治をコントロールしているのであって、世界がどうなるかという視点でコントロールをしていない。それは既に遅れてしまっています。世界に出た時に、日本はお金を持っているけれども、何かをまねしてパッといろんなものを作る事は出来るけれども、世界的な視野でものをしてくれるという人は少ないのではないかと、日本は世界への貢献度が少ないと言われるのはこの事です。これはロータリーでも同じことが言えて、ロータリーで今、一番お金を出しているのは日本のロータリーだろうと思います。じゃ世界の中で新しい時代に重きをおいた発言を日本のロータリーはしているのかというと、まだまだそうではない。やはり日本の社会の中でもものを考えています。

今、私は二つのことを言いました。時代が変わりますよという事。そして変わった時には、全く私達の視野を変えなければならないところでもって、大きな変化がありますよという事。したがって変化によって対応できるような姿勢をとらなければいけないという事。こういった事が問題であると。

二番目の問題にすすめます。数年前から私はここで松食い虫の事を申して来ました。この島でも松食い虫がひどくて、200本程松を切りました。200本っていったらあっという間に剥げてしまいます。「小豆島というのは瀬戸内海の島で、その瀬戸内海に面して四国はあるのだから、私の方でお手伝いをしましょう」と梶浦先生や菊澤さんが言ってくださって、何か彼らの遺言のようになってしまったのですが、ずっと毎年植林を続けてくださっています。私の願いは瀬戸内海という所にある島だから、ここを海洋性の中で育つ植物を集めた日本一の所にしたいという事です。他所の植物を取り入れて、観光植物園にはしたくない。昨日植樹をしていただきましたが、あれは単なる記念樹ではなく、自然の修復をする為の植林であるという事に大変大きな意味を持っているのです。

私は20年位前から学生を500人程つれて毎年中国に行っています。昨年は近畿青年洋上大学の船に乗りました。行く前に学生達に、環境問題を考えて欲しいという事で、あちこちで汚染が進んでいるかどうか調査をしようと、下水の調査だとか、雨水の調査、湖の調査、川の調査、海上汚染の調査という風に、つけ焼き刃ではありましたが、あちこちの研究室で教えてもらって、中国でそれを調べました。それと同時に中国や韓国の学生と環境問題について話をしてもらいました。

ところが私が海洋大学で行くようになった20年の間に中国の政策が随分変わりました。例えば毛沢東という人が政治をしていた時には「産めよ増やせ」だったのです。毛沢東が言うには「人口が増える分だけ食料を作ればよい」という事で、人口が増える分だけ、その国の国力は高くなるという政策でした。ところがそれが破綻してしまいました。だから合作社というのは無くなってしまいましたが、私達が初めて中国に行った頃には、必ず模範的な農業協同組合、合作社を見せてもらって、皆は畑の中に1列になって、赤い旗を立て、農業を盛んにする事によって中国の人口の食料を確保し、中国は強くなりますと頑張っているところをアピールしていました。ところがどんなに生産性を上げても人々の口に入るものは増えない。なぜかと言うと、それだけ人口が増えたという事です。それでどうしたかと言うと、子供を産んではいけないと号令をかけた。一人っ子政策です。一人以上産んだら税金がかかるよと。女の子が産まれた場合、もう一人まではいいけれども、男の子の場合はもう産んだらだめだと。こういって、今度はどんどん一人っ子政策で人口を抑制しました。その為に中国は現在12億あまり。2050年くらいには13億くらいになる。ところが政府は一人っ子政策ととるけれども、各家庭ではそうはいかない。ことに農村部ではやはり労働人口というのが必要だから、こっそり子供を産むけれども、戸籍には載せない。戸籍に載せると税金が沢山かかって、今度は暮らせなくなる。この戸籍に乗らない子供の事を「黒い子供」といって、5年前に既に1千万を越えていました。これからの中国の一つの問題は、その子供達が小さい間はいいけれども、学齢に達した時、教育が受けられないという事です。

また、毛沢東が亡くなって、鄧小平が中心となって来た時、今度は工業生産という事を中心にやるようになり、人々が都市に流入して来たわけです。北京や、上海や、広東等の都市に人口が急激に流入しだしたわけです。広東駅というのがありますが、私が広東駅に行った時、その駅の周りには人が群がっていました。皆、蒲団を抱えて、まあなんとかなるだろうというので、農村から出て来て、男の人も女の人も工場のある所に群がって生活をしています。政府としては一人っ子政策をとっていますから、たった一人の子供を大事にし「小皇帝」という名前がつくほど皆で蝶よ花よと大事にし、躰の出来ないことが問題になるほどです。その小皇帝が大きくなった時に、一人で六人の親族を養わなくてはならないのではないかと言われています。今まで遅れていた中国が近代社会に仲間入りして

いこうというので、一生懸命やっているというのが今の中国のうねりであります。

この中国のうねりの中で面白いことがあります。今、中国では農村の戸籍と都会の戸籍は別になっています。というのは、都会ばかりに片寄っては困るからという政策なのでしようが、都会の戸籍を持っている人は都会生活者という事で、切符を発行して、それによって食料を都会で買う事が出来るけれども、農村の戸籍を持っている人は食料を都会で買う事はできません。それは農村の人は自分の村で食料を作って食べなさいという事です。それが今のように都会へどんどん人が入って来ると、都会で切符を持っている人よりも持っていない人が多くなって、闇で取り引きをする事になります。今の中国は上海でもどこでも、どうしてあんなに人が沢山いるのか、不思議なくらい沢山の人がいます。

さて、こうして考えた時に、都会に工場がどんどん作られ、その中には日本やアメリカの作った工場もあります。中国の人々は日本の縫製工場やアメリカの自動車会社に働きに行きます。その人達の生活は今までよりも豊かになり、生活レベルの高い暮らしをするようになります。自動車産業、電気通信、石油化学、エレクトロニクス製品等が今の中国の基幹産業になっています。中国は既に農業国ではなくなり、自分達の食料を自分達で全部賄う事ができなくなり、アメリカから輸入をしているのです。そういう時代になりました。中国のお正月は旧正月ですが、広東省で働いている人達が旧正月に帰省するのに、汽車が全然たりなくて、帰省禁止という事を打ち出したほどです。政治的に判断出来る間はいいいですが、本質的な問題としては、禁止されるではすまない問題です。今は鉄道と僅かの自動車が主な輸送ルートである中国がもし日本と同じように、自動車を運転する人が多くなったらどうなるでしょうか。人口比からいうと、日本の10倍の人達が運転するようになるわけです。一家に1台なんて事になると、中国だけで一日に8千400万バレルの石油を消費する事になります。世界の石油の精製量は6千400万バレル。世界の石油の精製量よりも20%も上まわるわけです。

こうして考えてみると、私達の世界は、片方においてはバイオテクノロジーの発達であるとか、コンピューターの新しい分野の発見等どんどん発展していくと同時に、今までで発展途上国といわれた国が目覚ましく発展してくる。殊に中国のような、今までは農業国だといわれて来たものが、もうすでに農業国ではない、むしろもう工業国に入ってきていると言えると思います。もう4～5年の後には大変な発展をしてくるでしょう。

昨年私が中国に行った時、最初に天津に着きました。天津というのは黄河の縁です。黄河の一番河口の所ですね。その河口の所に黄海があります。黄海というのは、黄河の流域の水が流されて来て、いつも濁っているから黄海という名前がついた。中国で揚子江と並んで代表的な河の一つです。そして一番早い文明の発祥の地といわれています。去年、その黄河、母なる河とも言える黄河をずっと遡ってっていったら、もう黄色くないのです。「黄色くないじゃないか、おかしいな。もうすぐ黄色くなるぞ」と言っていたら、黄色く

ならないうちに天津新港という所に着きました。その天津新港というのは、港を作っても、砂が流れて来て、もうどうにも発展できないというのを、神戸市の港湾局の人達が行って、新しい港湾施設を作り、立派に港が使えるようになった所です。その代わり、天津市というものの、ダウンタウンに行くのにはバスに長い間乗らなくてはならないと言った所です。河が黄色くないのは何故なのだろうと思うと、水がないのです。水がなくなりました。黄河の水がなくなっちゃったのです。河の水が逆さに流れるという転変地変が起こるといふ話がありますが、それと同じ現象が黄河の流域に起こっている。

何が起きているのかと言えば、まず黄河の流域に人口が急増して来た。どこでもそうですが、昔は中国では城郭をめぐらして、門を作り、門から外に出る。人々はこの門の中で暮らしていました。20年前に行った時には天津市は30万位の都市でした。今は600万、30から600に移った。西安は3千200万、東京の3倍です。たった30万くらいだったら、黄河の水はよかったです。3千万が増えてそれがみな地下水を汲み上げて、水道を使うようになった。経済的な豊かさが上がるに従って、一人一人の水の使用量は増えてきます。また黄河流域に工場がどんどん出来て、その工場がみな黄河から水を汲み上げた。黄河流域では今は砂があって浅くて登ることは出来ません。工場からの煙はもくもくと出ており、これがみな二酸化炭素となって、流れている。春頃になると、日本の空が黄色くなる、黄砂現象といって、中国から風で舞い上がった砂が流れて来て、我々の所にやって来るわけです。これが砂ならまだしも、二酸化炭素だったらどうなるのか。雨が降ると酸性雨です。酸性雨によって緑が全部なくなります。

ドイツではほとんどの木がなくなりました。近くの工場から出た硫黄や二酸化炭素が酸性雨によって運ばれ、やられてしまったのです。この事でヨーロッパでは大騒ぎとなり、環境問題を大変厳しく言うようになりました。ところが日本は島国ですから、イタイタイ病や水俣病は問題となったけれども、これまであまり公害問題を真剣に考えなかった。しかしそれは日本で起こすことだけでなく、他所から来る。中国から酸性雨によって運ばれ、日本の山々の木が枯れてしまったらどうなるのか。とたんに表層の土が水で流されて、裸になってしまう。現実の問題としてあり得るわけです。

水を世界的にみると、1950年代の水の消費量の3倍となりました。地下水を汲み上げる為に水の量はどんどん減って、伏流水というのほとんど無くなってしまいました。中国はそれが一番激しいことになって、黄河が干上がるという危険があります。河川の水が使えなくなると、灌漑用水の水はどうなるのでしょうか。水が使えなければ畑は出来ない。畑が少なくなると、食料が不足するという事になります。

1950年から1990年までの間に穀物の生産は3倍になった。しかし今後はもうそうはいかないでしょう。近代社会といわれた時代から色んな分野が急速に成長して来た。しかし21世紀を目前にして、そういう資源を我々は使い切ってしまったらどうなるか。例えば我々

を100メートルの選手とすると、私の中学の頃には中学で100メートルを15秒位というのが割と早い方でした。ところが今では12秒、11秒を切るという人も出て来ています。じゃ、このままいくと5年もしたら7秒で走れる人が出てくるかと言えばもう出て来ない。人間には限界という事があります。後はほんのわずか、0.0何秒というところでは色んな事があるかもしれないけれども、昔のようにもう伸びない。生産物にも同じことが言えます。日本の経済と一緒にです。これからもう一度バブルの元に戻って豊かな暮らしになるかという、そうはならない。もういっぺん走れといわれても走れない。もうあかんもうあかんと言いながら、なんとか前に進むしかない、私達が今ある姿です。

中国についてももう一つ話をすると、今の中国の人は鶏を沢山食べますね。卵も食べています。だけど昔は卵を食べる事などめったになかった。昨日の小薮先生のお話じゃないけれど、日本でも昔は卵料理なんて食べる事がなかった。それこそお祭りなど特別な時に食べた。今の私達を考えると、毎日卵を食べる。おまけにカステラやケーキやら色んなもので卵を食べています。その卵で中国を考えると、12億の人口の中国人が1日1個ずつ卵を食べると、12億の卵が消費される。もう少し少なく考えても、1人1年間に200個の卵を食べるとすると、鶏を何羽飼うことが必要か。仮に1羽の鶏が1年間に200個の卵を産むとします。計算は簡単ですよ。12億羽の鶏を飼わなくてはならない。その12億羽の鶏の餌はどこから持って来るのか。この12億羽に餌を与えるにはと調べたらどうだったかという、何とオーストラリアの1年間の農産物の生産量と同じだけ飼料が必要になります。

もう一つ、2680地区の松下ガバナーは文武両道で、柔道の先生であって、書道の先生でもあります。この前、監督として、柔道の選手を連れて外国に行かれたのですが、飛行機でビールがでますよね。1缶あいたら又次ぎというわけで、どんどん飲んでたら36本空いたんだそうです。又と言ったらスチュワーデスに「ユーアー クレイジィ？」って言われたそうです。仮に中国の人が1日1本ビールを飲むとすると、消費するトウモロコシの数や大麦の数は大変な事になります。

中国はもう農業国ではなく、飼料を輸入しなければならない国になりました。勿論中国でも農作物は生産をしています。その農作物を作るのに、水が足りない。肥料をよけいやらなくてはならない状態になっています。レスター・ブラウンさんという人が一昨年の調査では中国はアメリカのローカルに比べて、3倍の肥料を使っていると書いています。中国はアメリカ農家の3倍以上の肥料を使わないと、あの痩せた土地では生産が上がらない。ですから中国は農業的に発展途上国というのはもう間違っていて、国際的な水準から見ても、中国の農家は或るレベルに達している。けれども農業で使える肥料には限界があつて、一定のところまでは栄養を吸収するけれども、それ以上は肥料をやっても栄養を吸収しない。だから1990年代には中国の生産率は下がってきます。恐らく2000年になったらもっと下がって来るでしょう。あの大きな中国がそうになると世界の食糧危機というものは、もっ

と大変なことになって来ます。もう10年か15年経って、中国の人口が13億となったとしましょう。その人達が1日1ドル以下で生活をしている。その人達にとって米や麦やトウモロコシの値段が2倍になるということは命にかかわってきます。穀類の値段もこれ以上2倍3倍に上げる事はできません。

こういう風に考えると、穀物の備蓄という事ですが、今一番の農業国はアメリカです。もし、エルニーニョ現象で雨が降らなくなって、アメリカの農業の生産が減ると大変な事になります。実はこの9年間でアメリカの穀物の生産は3年にわたって、20%づつ減っています。1988年今から10年前になりますが、史上初めて、アメリカの穀物生産量がアメリカの消費量を下回りました。消費量を下回ったという事は、アメリカが世界に穀物を出さなくなるという危険信号です。今は備蓄がありますから、備蓄でまかなう事が出来ませんが、だんだんそれでは足りなくなって来ます。さあ、いかがでしょうか。21世紀を豊かに生きる為はどうしたらよいのでしょうか。

レスター・ブラウンさんはこう言っています。一つは伝統的に今まで対応して来た方法、私達が科学的に研究した、肥料をやり、水をやるといった方法でこれからは役にたたなくなる。何か新しいアイデアが出て来ないと、やっていけなくなる。言い換えると、知恵を出さないと新しい時代は生きられないという事が一つです。その為にはどう考えればよいかと言うと、食べる人の数を減らさなければならない。人口は今、中国が最も多く、12億何千万、その次がインドで7億。このインドではどんどん子供が増えています。中国は一人っ子政策で人口の抑制率が効いていまして、13億までは何年かかかるでしょうが、インドでは宗教的な意味もあって産児制限というものが無いので、どんどん増え続けるだろうと予想されます。インドだけでなく、85%の発展途上国では今でも爆発的に人口が増えています。世界の人口問題の会議が開かれ、産児制限の事になると、「産む権利は私達にある」と女性から反対の声が上がります。そして神様の意志に反すると言って、宗教的に反対も出てまいります。しかし、一方では科学的には家族計画をしなければいけないという事も言いだしてはいます。

言い換えると、人口政策、家族計画なんてものは、私達はこれまで個人の問題だと考えていましたが、地球大の規模で人類の問題だという事を考えなければならなくなってきています。

先程から話している一つ目の問題は、時代が変わるということを私達は近視眼的にとらえないで、21世紀というものについては、長期的な、人類の敵視的な意味で大きな変革があるという事を捉えてくださいよということです。

二番目の問題は、私達の住んでいる社会が、或る意味においてはテクノロジーの進歩の為に、私達の考えの及ばないような、問題が出て来ていますよということです。新聞から引用しますと、平成9年7月11日の朝日新聞では次のように報じられています。「文明の方

向性をどう考えるか」これは臓器移植の問題です。臓器移植の問題で、移植医療が進むと、臓器は必然的に医療資源の性格を持つてくる。私達は、死んだ人の生きた心臓を移植してもらう。そして一人の人間が生きているという事は、医療として素晴らしいけれども、よく考えてみると、それがだんだん高じてくるとどうなるのかということ、もう既に始まっている。貧しい所では、自分の生きた臓器を一つ売るので。そしてそれを腎臓移植に使います。死体から取ったものならまだしも、生きた人の腎臓を取って売る。腎臓は一つなくなっても生きていけます。だから片方売って、それでお金をもらって、食べる。そういう事になった時に、昨日の森先生の言葉でいうなら、「神様から貰った体をいつの間にか人間が物化している。」移植医療という言葉で、最初は人間を生かしていくという事を中心にしてきたのが、いつの間にか人間そのものを「物化」してしまう。これが臓器移植の非常に大きな問題と言われるようになりました。あらゆるものが商品化する可能性を持っている。資本主義経済の非常に大きな特徴であります。テクノロジー、とりわけ医療テクノロジーの発達と資本主義経済の発展が、人体の商品化をもたらしてきた。これも一つの警告であります。

1997年11月6日の新聞には、「アメリカ的価値観に警告を」という事が記事となっていました。京都で環境会議が開かれた時、二酸化炭素の排出を減らそうという事を、ヨーロッパは盛んに主張して、50%減らそうと提案しました。ところがアメリカは、それを減らしたら、私達の経済が止まってしまうから、減らす事は出来ない。そういう事になった時にいったいそこでは何が問題なのだろうかという事なのです。アメリカが最後に言った事は「二酸化炭素の排出量を売ったり、買ったりしようじゃないか」アフリカにも排出権があります。中国にも権利があります。アメリカは例えば中国の権利を買って、もっと自動車を走らさないとアメリカの経済がもたないから、その排出権を売買するようにしようじゃないかという提案をしました。その考え方の中に何があるのかということ、私達はいつでもお金で沢山の物を作って、沢山の物の中で生活をする事が、文明の方向として正しいのだと思う誤解があるのではないか。地球温暖化の問題は、そのような意味においてはアメリカの問題であると言えます。何故なら、今世紀、20世紀、アメリカ社会に端を発して、全世界に浸透した大量消費文明からの決別を促したのが、実は温暖化会議という事ではないかと。20世紀の終わりにあたって、21世紀に変わる時に、一番大きなものは大量消費の文明、産業社会といわれた文明から決別をして、私達が世界と一緒に生きる、或いは世界の自然と一緒に生きる、自然と共生する、文明の方向をそういう方向に変えなければ、私達はもうこの地球社会に、他の生き物や植物と共生することが出来ないのだよ、という事を促した。それが今、温暖化現象という方向から、酸性雨という方向から、食糧危機という方向から、あるいは私達はいつの間にか女性化して行って、子供が出来なくなるような人間社会を産んでいきますよと。それに決別しなければ、新しい21世紀へ向かえません。

二酸化炭素の排出権を市場化するなどという事は、まさにこの消費文明を先に引き延ばすという事にすぎないのじゃないか。そういう文明の方向に警告を与えなければいけないのではないか。人類、文明の未来の為には、我々がアメリカ的価値観に苦言を呈するという事が必要ではないかというわけです。日本はアメリカに苦言を呈する事は出来ません。というよりも、アメリカの傘の下で生活をしているという事です。

そこで、今度は我々の国の事を考えてみたいと思います。こうした中で、一体どういう世界になるのだろうかという事を簡単に話します。

ロベール・ホセールというフランスの社会学者が一昨年、『21世紀の社会システム』という本を書きました。それには21世紀になった時に、世界の地図がどう変わるだろうかといった時に、彼はそう変わらないだろうと言っています。もう変わってしまった。ソ連というものが解体して、そしてロシアという国が出来た。或いは簡単ではなかったけれども、ヨーロッパ諸国が連合して、EU（欧州連合）になった。それは生き延びていく為にはEUとして共同しなければやっていけない。そうなると、残った所はどこかと考えると、アジアなんです。アジアはどんな風になるのかというと、これも色々ありますが、朝鮮の問題は解決するでしょう。台湾と中国の問題も、大きな流れの中では、もう少し時間がかかるでしょうが、解決するでしょう。中国はものすごく工業化して来ましたから、中国が近代国家という形をもって、大きくなって来るという意味においてこれから大変クローズアップされて、世界の中ではむしろ中国とヨーロッパとアメリカが中心になるかもしれません。アメリカは今のよう消費文明なんていう事を言っていて、大きな国ではあるし、人口も少ないし、農業も沢山あるとなると、可能性としてはアメリカが一番伸びることが出来るわけですが、ヨーロッパや他の国からの軋轢もあって、アメリカの地位も相対的に低くなってくるでしょう。今まで日本はアメリカの事ばかり言っていたけれども、これからの状況ではアジアの事も少しは言わなくちゃならなくなって来たとし、中国とも仲よくなって来たら、アメリカの事ばかり言うわけにはいなくなるでしょう。全体を予想出来るのは、それくらいのことだけれども、問題は何かというと、文明の衝突がこれから21世紀にはもっと起こるだろうという事です。どういう価値観で、どういう事を考えるかという、文明の衝突がこれから21世紀にはもっと起こるだろう。言い換えたら、人間は物の面ではなくて、物の考え方の面で。一度もっと整理しておかなければいけないとロベール・ホセールという人は言っています。

このような中であって、日本の国はどうなんだろうかという事です。日本の国は明治になった時、我々は明治維新なんて言い方をしますが、あれは革命です。1868年、明治元年です。日本が文明の方向を近代社会、西欧文化に切り替えたのが1868年。黒船が来たのは寛永ですが、それまで日本という国はどういう国だったか、簡単に考えると、幕藩政治といって、百数十の藩がありましたね。それぞれの藩には、藩校という学校があって、

その時の官僚が皆そこで勉強していたわけです。江戸時代からこの勉強が非常によくなされたので、日本の近代化に役にたったわけです。さて、そこで幕藩政治という時に、一番強いのは何かというと、藩主です。自分の直属城下で一番偉いのです。「君に忠」というのは藩主に忠なんですね。

ところが1868年、幕藩政治から一つの国になったのです。幕藩から一つの国に統一した時に、変える中心は何か。国民ということを中心に考えなければなりません。日本の国という意識を皆に持たすという事はどういう事かと言ったら、中心は天皇だという意識を持たす教育をしなければならなくなりました。そこで教育勅語というものが出来、皇国史観という史観が作られ、これによって日本は一つの国家になりました。今まではバラバラの国が一つの国になったのはそういう事、言い換えれば近代社会と称する、或いは近代国家といわれる国家の形態をとったわけです。そして大日本帝国という名前がつけました。これを国民国家と申しますが、この国民国家の国民になるための教育が、基本的には大事な教育でありました。国の一員となる、そして国のために尽くす。国のために尽くすという事は天皇陛下のために尽くすという事ではなく、私達の国、皆のために尽くす、私達の仲間のために尽くすという意味の教育が中心となりました。これが1868年であります。

これは日本だけではなく、あい前後して、それまでバラバラの領主国家だったドイツも、ドイツ連邦共和国になりました。ドイツにもお城が沢山あって、色々な物語がありますが、日本の高知城とか、姫路城と一緒にです。イタリアもそうで、一つの国のサイズというのは一つの街のサイズでした。ドイツがドイツで、イタリアはイタリアで、日本は日本で国になる、国民国家であります。これを単位として、150年の間、近代国家として、近代社会として営んできました。だから当然そこで中心になる考え方は、国民国家であり、国の為にどういう国民を作ったらよいかという事が中心であり、標しでありました。今年の2月10日の新聞を紹介しますとセミナー「現代社会における平和のモデル」このトップに国民国家とあります。国民国家ではもう限界が出て来たと言われています。その国民国家では平和を解決するにはもう限界が出て来た。先程言ったように私達は日本の国の事だけ考えればよいという考え方は、もう古くなってしまった。現実には私達は日本の中にいますから、日本の事を考えないといけなけれども、21世紀の事を考える時に、国民国家という教育のシステムは、それだけでは間にあわない。では何を考えなきゃならないのかと言うと、地球にいる皆の幸せ、世界の事を考える教育をしなければならぬ。世界の人達の教育という事を我々は考えた事があるのか、という事です。例えば国際交流という時に、日本のためになるかどうか。これが中心だったのです。明治維新は随分沢山のお金をかけて、外国の学者や技術者や先生を呼んで、例えば東京帝国大学に配属をした。大体医学はドイツから偉い先生を呼び、陸軍のやり方はフランス、アメリカからは蒸気機関車の技術者といったように、多くの人を呼び、高い月給を払って日本のものに習得した。幸いな事に、

さっき言ったように藩校であるとか、寺子屋であるとかで、日本には300年来の読み書き算盤の基礎があったために、それを吸収する事が出来た。その為に日本はたちどころに高いレベルでもって、私達の国を繁栄させる事が出来ました。一人一人の読み、書き、算盤と一人、一人の個人の教育があったからです。

しかし、これからは私達は世界の人達に向かっていく教育がないといけない。世界はどのようなかと考える教育がないといけない。国家自身がどうしていいか分からないという時に、国の教育の方針もどうあったらよいか分からない。その一番大きな混乱の原因は何かというと、戦後、私達は民主主義ということを行いました。民主主義が大事だといって50年やって来ました。でも私達は本当の民主主義をいうものが身につきましたか？民主主義という事はずいぶん言われていますが、本当の民主主義ではなく、結局国の方針でいきましようという事になって、外国に行っても、自分で自分の意見が言えない。私は本当は賛成なんだけれども、ちょっと本庁に聞いて返事しますと、それを民主主義というのでしょうか。

民主主義というのは、自分がいいということ、自分が正しいということを書いて、相手の意見もなるほどよく聞いて、修復する面もある。個人の尊厳の中に息づいているのです。一人一人が大切な事が言えるから、皆の意見が正しい事であるのです。一人一人が勝手な事をいう時、それは正しいのではない。民主主義という事が本当に身についたらこれが本当に人類の為に、何が正しい事であり、正しくない事であるかという判断を皆で決めて、それが通るような、個人の尊厳を認める事が民主主義です。ところがそうではなく、好きか嫌いか、得をするか損をするかによって決めていくのは、民主主義じゃありません。勝手な事を言って、自分の好きな事を言って、それが通ると思ったらそれは誤解です。「個人の自由」という事が言われますが、正しい事をお互いにおっつけあうという自由、一人一人を尊重するという自由があって、はじめて本当の個人の自由というものが成り立ちます。この100年の歴史の中で、日本では本当の民主主義や個人の尊重というものが充分に育って来なかった。

そして今、時代がこんなに変わり、世界の人達の事を考えなければいけない、世界の人と一緒に生きなければならない時代に、未だにそんなことを言っているのが現状です。「そうか、そういう事をしたか、世界の為にもいいけれども、ところで日本はいくら儲かる？」というのが日本の政治家です。世界が豊かになったら、目の前では私が損でも、それは結局は世界の人達のためになるのだという事が分かったら、それをやることの出来る人。その知識と技術を身につけ、心を持った人が21世紀を考えないと駄目なんです。だから世代の交代が必要だと言っているのです。「貴方たち、君たち、がんばってくれや」と安心して頼める。それが世代の交代というものです。「貴方たち頼むぜ」と言えるかどうか、これは貴方たちの問題であり、そう言えることを私達は願っています。

閉 講 式



2670地区 ガバナー

吉村 雄治

どうも皆さん、長時間、お疲れでございました。いよいよ閉校という事でございますが、私も、昨日、今日と、目を覚ますと、鳥のさえずりが窓から聞こえてくるというような事で、非常に素晴らしいこの余島の自然の中で3泊4日、また、昨日おいでの方は1泊2日と、こういう事でございますけれども、この素晴らしい環境の中でお互いに本音を語り合って過ごしたわけでございますが、何といたしまして、今回は20回の記念セミナーという事ございましたので、特にこの両地区のライラの委員の方に非常にご努力をいただいて、立派な内容で終わる事ができたという事を非常に喜ばしく思っているところでございます。特に皆さん方に、このパネル討議や新世代会議のなかでですね、ロータリーに望むものというものと、それからもう一つは、受講生に望むものと、こういった色々な本音のご意見が出てまいりました。

その中でも特に、私もロータリアンの一人としてですね、皆さんがロータリーに望むものの中の一つとして、どうも、ライラそのものはロータリアンの中で、あまりそのライラというものの意識があまりないじゃないかというご意見があったように思います。これは確かに、そのとおりだと私は思います。そういった意味で、今日は、ロータリアンの中でも後ろの方に沢山ご出席いただいて、ライラに関心を持っておられる方々が、今日ご出席もいただいておりますので、私は、クラブへ帰ったら早速、今回のライラはこういうような状況だったというような報告もしたいというようにも思っておりますし、一人でもライラの理解者を増やしていきたいと、こういうように私は思っております。

今回は「21世紀を心豊かに」というテーマでございましたので、非常に前向きに、しかも、非常に中身のある内容であったというように思います。特に、先ほどの今井先生のお話等はですね、我々がその中から、皆さん方がなにか一つ心に残るものをお持ち帰りいただくわけでございますので、これを日常の、また職場の中でも、またご家庭の中でも、またそれぞれの地域社会で指導者としてご活躍する中でお役立てをいただければ非常にありがたいと、このように思うわけでございます。

また、昨日の小薮先生の「心が人生を決める」という、非常に示唆に富んだお話をいただいたわけでございますが、私も、講演が終わって、あと、キャビンで色々先生とお話をしていました中でもですね、先生は、やはり学校の教員をなさっていたという事から、非常

に青年の心をよく捉えておられるというように、私は思いました。そういった意味で、非常にいいお話を承われたというように思っております。

それからもう一つ、これは、後でディーンの方からお話もあろうかと思いますが、今回のこの20回にあわせて、前々からこの記念植樹の関係、特にこの余島に活着できる松の苗を育てていただいて、松山のロータリーの方、今日は深見さんをはじめ、その世話の方が沢山お見えになって、もうすでに仕事をやっていただいておりますが、そういった方とか、それから、特に今日は、この地区の社会奉仕の委員長さんの吉原さんにもお見えをいただいたおります。そういったことで私ども、地区のほうからも、できるだけ資金的なご援助をしようという事で、今回の記念植樹の実現になったということでございますので、20回を記念してですね、この余島に、さらに多くの木を植えていこうと、こういう事でございます。

いよいよ、もう終わりが近づきましたので、この程度でやめさせていただきたいと思っておりますけれども、毎年、ロータリーにはテーマというのがございます。今年のテーマは、ロータリーの心をという事で、この右側の分がショーロータリーケアーズと、今年のテーマでございます。そして、その隣にありますのが、ロータリーの夢を追いつづけようというのが、来年、いわゆる7月からの新しいテーマでございます。そういった意味で、私は、このロータリーの夢を追いつづけようということになぞらえまして、一つここで、ライラの夢をお互いに追いつづけていこうということを、皆さんにお約束申し上げて、今回のライラセミナーの閉校にあたってのごあいさつにいたしたいと思っております。どうか皆さん、それぞれの職場なり地域へお帰りになりましたら、地域のために、また一つ、大いにふんばってがんばっていただきたいという事をお願い申し上げて、閉校のごあいさつに代えさせていただきます。本当に長い間ご苦労さまでございました。お名残りがつきませんけれども、これをもって閉校のごあいさつにさせていただきます。どうもありがとうございました。

図版0705号
2003年7月高松伊予田門前
植樹 植樹



さびかよせ、ふるまひにせむし、もは
、ままるア、
こぶのびくわん入舞のかんじりバロコ
、全、ア、う、すまの想ひのぶを、
おれ来出た、おのの立脚の発狂、
びくア、高野は、開、
もこの本、

図版0805号
1971年伊予田門前
植樹 田貴一



さぶ福臨、
内、
は、
さ、
、
、
、
、
、

A班

A日程

第2670地区
鳴門市鳴門町高島字北225
長崎 亀四郎

13回にひき続き、ホームカミング形式で開催していただいたおかげで、8年ぶりに大好きな余島に来ることができました。懐かしいロータリアンや仲間達と再会し、有意義な日々を過ごせたことに感謝申し上げます。

今回は「21世紀を心豊かに」をテーマにパネルディスカッションや貴重なご講演をいただき、心はどこにあるか、形もないものですが、心の持ち方次第でずいぶんと生き方は変わってきます。

このRYLAで教えていただいたことを、これからの生き方の心の糧として、大切にしていきたいと思います。そして、今、ともされたRYLAの灯を絶やすことなく燃やし続け、地域社会に役立つ何かが出来ればと考えています。

20年という長い間、お世話してくださったロータリアンの皆さん、すばらしい自然の余島、各地でご活躍の仲間達、本当にありがとうございました。

第2680地区
津名郡一宮町江井191
一貫田 達也

余島に着くと来たというよりも帰ってきたという気持ちになる。

メインホールの前にある「人と出あい 神と交わり 愛の火のもえるところ」と書かれた碑を静かに一読する。

なつかしい顔に出会った。「よう、久しぶり」と声をかけあう。いい響きのことばだ。この一言を聞きに私は、この余島に来たのかもしれない。

日程の中では、パネルディスカッション、講話などが行われた。

どれをとっても私の考えをゆれ動かすすばらしい内容のものであった。

夜はみんなで酒をくみ交わし、語り合った。みんな地域で頑張っていることがわかった。私も淡路島にもどり、ライラに参加して得たあらたな気持ちを大切にしていきたいと思います。

ライラは何度参加してもいい。

又、この仲間に出会えるのを楽しみにしている。淡路島に来たら連絡ください。

第2670地区
松山市平和通3丁目1-27
小野 清二

R Y L A第18回修了生としてこのアドバンスコースに参加した。ホームカミングとあって、ロータリアンが受講生として参加していたので、ライラの歴史をゆっくりと語っていただいた。キャビンタイムでは夜遅いのもいとわずに、ライラ委員の先生方が意見交換をして下さった。意見を聴いてみると誰にも心の師のような方がおり、それぞれ引き継いでいる。世代を超えた語りからは、時代の変遷とその時のリーダーとしての考え、反省が伝わる。私は、現代の自分は、このような先輩方の後で存在するのだと自己の確認ができた。いつもは忘れがちな事だが、こうして時に思い出し、その中で万古不易な思考を模索しようと思う。社会をどのように導いて行くかという事が、リーダーに求められるのであろうが、私が講演で感じるのは、身近なところに良いリーダーがいるのだという事だった。講師の方々は、書物をすすめて下さったり、新聞の切り抜きを出したりと、その姿勢から、本当に日頃から社会について考えておられるという心が伝わりました。第18回の後、愛媛大学と、松山大学に、ボランティアサークルを作ることに成功しました。私は今回は、よりグローバルな視野と、環境を考えるポイントを押さえて、帰り次第、年齢で分かたないグループを作りましょう。余島に植えた松が島になじめる事を祈りながら、私をライラへと導いて下さった諸先生方と故梶浦暉一パストガバナーに御礼申し上げます。

第2680地区
神戸市北区鹿の子台北町4-14-3-101
赤枝 康隆

4年前にR Y L Aに参加した時はまだ学生でした。いろいろな教育機関にたずさわっていて、その経験などを活かしていろいろとみんなで議論しました。そして今回は教師という、実際の現場で仕事をしている立場で参加してみて、改めて自分というものが見出せたと思います。日々毎日仕事をして、自分の時間をこんなにも長く持てるということはあまりありません。そういう意味で“いい遊び”の期間でありました。

第2680地区

千葉県市川市原木3丁目13-9-509

北代 玲子

第20期、ホームカミングライラセミナー、本当に良かったです。7年ぶりの余島で島の空気にふれたとたんに、初心に帰る思いでした。そして、童心に。ライラの友に再会しました。新しいライラの友にも、たくさん出会いました。なつかしいロータリアンの顔・顔……。本当に古里に帰ってきたんだなあ。このライラセミナーには、間際まで、参加出来るかどうか、実はわからなかったのです。1月末～2月まで、23日間、入院していました。水腎症の腎盂炎で、退院後も療養と検査の日々で。ここに再び来る事ができたのは、神に感謝です。久しぶりの自然に出会えて、海や空や星が、やさしく包んでくれました。もう、大丈夫だよ。って、言ってくれている様で、嬉しかった。たくさんのお会いの中で、心やエネルギーをたくさんいただきました。もう、嬉しくって、嬉しくって。

思いがけず、パネラー体験もさせていただきました。まともならず、たどたどしかったにもかかわらず、心が伝わって来たよ、と声をかけていただいた時は、ほっとしました。これもまた、明日の力になるんですね。本当にありがとうございました。このエネルギーをどんどん使ってゆきます。そして、また吸収して……。21世紀に向けて……。

ロータリアンの皆様、本当にありがとうございました。

ライラの仲間達、本当にありがとう。

人間が好きです。自然が好きです。宇宙が好きです。

宇宙より愛をこめて……。

第2680地区

高砂市金ヶ田町5-24

掛川原 桂子

昨年、第19回のRYLAセミナーに参加させて頂き、人生観が変わるくらい素晴らしい話や友を得ました。そんな素晴らしい経験と引き換えにもう2度とこの余島にも来れないかもしれない、あの日々を過ごした仲間と会えないかもしれない、という不安がずっとありました。そしたら1年後、運よく同窓会。ちゃっかり私は、余島を満喫している。とてもラッキーと思っていたら人生そうあまくはなく、私はカゼをひいてしまい、みなさんに御迷惑をおかけしてしまいました。気にかけて下さったみなさんに、心から感謝しています。ありがとうございました。そして、すみませんでした。

一番印象に残ったのが、砂浜でのキャンプファイヤー。私はリーダー活動をしているの

で、大先輩と一緒にファイヤーができたのがとてもうれしかった。しかし、カゼで声が出ないにもかかわらず、前で踊らされるハメになり、ここでも人生そうあまくないと学びました。RYLAセミナー経験者というだけで、全く知らなかった者同士が手と手を取り合っ
て、踊り、歌い、笑った。この時が、一番楽しかった。そして、RYLAに参加して仲間を得たんだと改めて実感する瞬間だった。

A班

B日程

第2680地区

明石市東人丸町29-21

岡山 毅

今回は、2回目のセミナーの研修会に来て大変勉強になりました。

1日目は、小藪先生の「心が人生を決める」ということで、大変たのしく、おもしろく、心にのこる人生観をおしえてもらい、人生がひくつにならないようになる。2日目は、今井先生の「21世紀を心豊かに生きるために」という、環境問題について、日本国だけの問題でなしに、全世界の問題にとりあげていこうと……。これからの人生観は、だんだんと道が大きくひらかれてくるのではなからうか？

この余島に来て、今年は大変、あつい1泊2日でした。6年前の人と2～3人会い大変よろこばしいことでした。

またあう日をたのしみにしています。

第2670地区

高松市鶴市町2007-19

藤田 清彦

昭和56年3月に参加して以来、17年ぶりに余島を訪れました。香川県内で問題になっている松くい虫による松林の被害が、この島にもおよんでおり、松の植林作業を行いながら環境問題の重要さを感じた2日間でした。セミナーの中でもあったように、このような問題は日本だけで考えるのではなく、特に二酸化炭素などの問題は特に急速に工業化の進む中国と連れいしながら解決しなければならないなど、日ごろのいそがしさの中で考えることのない問題にとりくむことができたように思います。

私の住む高松では栗林公園に接する松林に毎年5月にヘリコプターによる農薬の空中散布が行われていて、その効果の為かわからないが、その山の松は松くい虫の被害を受け

ることなく育っている。農薬による人体への害とか、他の動植物への害も心配されているが中止されたことはないように思います。

最後に一言。17年前に24歳で参加したのと41歳になって参加したのを比べてみると、やはり若い時の初々しさや何ごとにも純粹に取りくもうとする気持ちが大きい17年前のセミナーの感動が大きかったように思います。

第2680地区
美方郡村岡町福岡1037
西口 泰

1泊2日という時間は、あっというまに過ぎていった。今思えば、前回（第18回）に参加した時の3泊4日の時間と比較すればあまりにも短かすぎ、新しい人との交流というものがあまりもてず、多少残念な気持ちがのこっている。片道約5時間かけても余島に行こうと思った理由は、非日常や違った価値観との触れ合いを求めてということにつきるが、確かにそういう面では十分な体験をさせていただいたと思っている。ライラの素晴らしさは、前述の2つに加えて講演をきけることにあると思う。今回も様々な示唆にとんだお話ばかりであり、大きなこやしになるものと感じるが、これからの世の中又会社を生きるには、感じただけではだめで、その感じたことをいかに実行に移すか、そしてそれをいかに継続できるか、さらに成果をあげるかというところまで到達しなければならないと思う。自分の力で結果を出すということは、自分の存在をアピールでき、又一定の満足感も得られるものである。もちろん簡単なことではないが、それができることを信じてコツコツと毎日考え、実行するしかない。今、私はある資格取得に向けて少しずつではあるが知識をつみかさねている。一日にできることは、確かにわずかであるが、3ヶ月つづけた今、少しずつではあるが頭の中に確かな部分が残りつつある。あー続けるってこんなことかなということを実感として感じている最近である。（実は今までそんなに物事を続けたことがなかった。）

21世紀、考えれば考える程、良い話というのはできそうにないが、前向きに生きることしか我々の世代には選択肢がない。一日にできることは僅かであるが、それが大きくなることを信じてこれからの自分の人生というものを考え、そして歩いていきたいと思う。

第2670地区
小豆郡土庄町測崎甲569-1
関 圭吾

第18回 R Y L A セミナーに参加してから、早いもので二年もの歳月が経ちました。楽しくも有意義であった3泊4日の前回と違い、1泊2日ということで、新しい仲間と深くまで語り合うといことはできませんでした。前回一緒だった数人の仲間と顔を合わせることができ、不思議なもので友人の顔を見ると松原先生、シスターのお話をはっきりと覚えている自分に我ながら驚きました。この2年間に、自分はふと何をやってきたのだろう、と思いをはせてみると“これだけはやれた”と特に誇れることがない自分には情けなく感じました。それでも、2年振りにまたこの変わらない余島に来て少しでも何かやってやろう、という気持ちになっているのも事実です。

小藪先生の講演にありました、存在している以上は常にプラス志向で、そして今日、今という一瞬を大切に、という部分は何かしら松原先生の講演に通ずるものがあったようにも感じられました。社会、またはそれをとりまく環境が大きく変わりつつある今こそ、この一瞬を大切にしろというメッセージには胸を刺される思いでした。

今井先生には変わりつつある現代の状況を厳しく見つめ直す機会を頂けたと感じました。「宇宙船地球号」という言葉がありましたが、まさにそのとおりだという実感を抱かずにはいられませんでした。私一人はちっぽけな個人であり、地球どころか地域に対してさえ何かをできるという自信は全くありません。が、意識を少しでも変革させてくれたこの R Y L A セミナーに深く感謝し、関係者の方々に深く感謝いたします。

貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。

第2670地区
神戸市東灘区岡本6丁目13-28-406
兵頭 啓子

今回で4回目のライラに参加させていただきました。第1回の受講生に20年ぶりで再会でき、私を覚えていて下さったことに感激しました。

子どもに手がかからなくなり、少しずつでも何かの役に立てればと思い、地域のお世話やPTAの仕事に前向きに頑張っています。

3人の子どもの持つ親として自分の子育てを振り返ってみると、子どもの悪い所だけを見てしまって、良い所を認めたりほめたりすることがあまりにも少なかったことを反省しています。思春期の子どもたちの心をゆがめないように子育てを頑張らなくてはと思いま

す。

2年前からお年寄りの方に大正琴を教えるようになりました。音楽を楽しんだり仲間のおしゃべりを楽しんだり。また家では言えない愚痴こぼしの場ともなりますが、私は生徒さんのお話を聞きながら人生勉強をさせていただいています。

大正琴を教えている方々と演奏グループを作り、地域の行事に参加したり老人会や老人ホームで訪問演奏をしたりとボランティア活動も始めました。音楽を通して皆様と心の交流をしています。

数年後には、是非私の子どもたちもライラに参加できれば、このすばらしい自然の中ですばらしい友との出会いを体験できればいいなと思っています。

お世話して下さった方々、どうもありがとうございました。またこれからもよろしくお願い致します。

第2680地区

津名郡北淡町212

風 ちずゑ

私は、第5回参加でしたので、15年ぶりの余島への里帰りでした。15年前より少しふるくなった「銀波園」を見て、月日を感じました。

私自身、この間に結婚、出産育児等、あわただしい日々を過ごしてきました。子供から、少し手が離れ、自分の時間を持てるようになったこの頃、「20回記念セミナー」のおさそいをいただき余島に帰ってきました。今は特に社会活動をしているわけではないので、「青少年指導者」とは、気はずかしいかぎりです。2人の子供も指導できてません。でも、参加できてよかったです。小薮先生のお話の中の「意地をはって会話をしない夫婦」、「友だちと少し離れて、自分の事だけの世界にいる男の子」それは、私の家族そのものでした。うちだけじゃないんだと思い、考え方を換えればもっと、楽に暮らしていけるんだと思い、参考になりました。先生の詩も難しい言葉を使わず、素直な表現で感動しました。

今井先生のお話は、大きな視点から物を考える大切さを考えさせられました。

今回、新しく知り合えたみなさん、何年かぶりにお会いできたみなさん、お世話をいただいたみなさん、ありがとうございました。「30回の記念セミナー」を期待しています。

第2670地区

高知市一宮3384-6山本ハイッ102号

二宮 紀子

ライラセミナーに再び参加できるとは思ってもいなかったのですが、今回この余島へ来ることができたのは、とても楽しかったです。私は第19回ライラ受講生で、その時に「心に悲しみを持ったとき」という本をいただき深く感銘を受けたのですが、その著者の小藪さんの講演を今回聞くことができ、うれしいこと続きでした。小藪さんの講演「心が人生を決める」のお話で自分の中の劣等感を克服しないと人生は楽しくないし、短所を長所に思える様な前向きな発想が心を豊かにすることを学びました。心に透明さを失わないでいることは、大切なことであるけれど人間の気持ちは晴れたり曇ったりたまに雨も降ったりで、いつも心が晴れていることは難しいです。それでも、つらい時や悲しい時でも天気雨の様に、すぐに悲しみを吹き飛ばせるつよくてしなやかな心を持ちたいと思いました。

次に今井先生の講演「21世紀を心豊かに生きるために」では、環境ホルモンや携帯電話、自動車の問題が取り上げられました。私自身公害を毎日作っていることを自覚しながらも、だからといって「車に乗らない」と宣言することは難しいと思いました。悪いことと分かりながらも、自分の身にふりかからないと改善できないことは情けないことだと思います。だから、せめて車に乗る時は環境問題を考えながら乗りたいと思いました。

一年ぶりの旧友との再会と新しい友人との出会いをいつまでも大切にしたいと思います。今回も参加させていただきロータリークラブの方々どうもありがとうございました。

第2680地区

姫路市大津区天満1181

後藤 江里子

たった2日間だけでしたが、お世話になりました。前の参加は4年前、体も気持ちも今よりずっと若く、3日3晩、班のみんなと情熱的に語りあったものでした。あの時は、本当に色んなことを勉強しました。今の私は、社会人となり、少し世間が見えてきたこともあって、あの頃のように純粋な気持ちで人と触れあうことができなくなっているような部分があります。なぜ？きっと私自身が大人になったということなのでしょうね……。しかし、RYLAに来られているロータリアンは、目が輝いていますね。私も若さを失うことのないように、もっと興味深く毎日を過ごすように心掛けないと、このままでは腐ってしまいそうです。となるとやっぱりまたまたRYLAに参加して、違世界の人々をお話をすることが必要だと思えます。ぜひぜひ次回のホームカミングセミナーにも参加できるよう、

ロータリアンの皆様、どうぞよろしく申し上げます。そして次回こそは3泊4日で、みなさん、お会いできるように……。

第2670地区
倉敷市北畝5-13-26

長谷川 いづみ

3日に入社式を迎えます。時間に忙殺される日々が訪れるであろう事が予想されます。そういう日々を送る中で、前回も含めた余島での生活を振り返っていきたくて考えています。それは、現実逃避や郷愁のようなものでなく、現実を見つめ返すものです。講師の先生方や友人・先輩達の話の中に、生活していく上での多くのヒントを得た気がします。

その中でも、YMCAがYou must care always.の略だと聞いたのが印象的です。社会人1年生として、友人に対しても、周りの人に対しても、あるいは世間の人に対しても、どれだけの事ができるか分かりません。しかし、この言葉を1つの目標として持ち続けていければと思っています。

最後になりましたが、前回のRYLAセミナー、第7470地区との短期交換留学、今回のRYLAセミナーと、重ね重ねお世話になりました高松南ロータリークラブの方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

B班

A日程

第2670地区

西条市大町315-5

高石 順一

ライラセミナーより案内を頂き、参加の機会がまた頂けたという気持ちと、この一年を振り返り、これと言った活動もしていない者が参加することは大変、失礼なことと考え参加希望を差し控えていると、小生が大変お世話になっている富井幸則氏からライラへの参加依頼もあり、参加させて頂いた。

ホームカミングということで、ライラの皆様からも昨年以上の暖かい歓迎をうけ大変充実した3泊4日のセミナーを受講しました。「受講生に期待するもの」として森滋郎氏からは肩の凝らない人生の送り方、「心が人生を決める」小藪実英氏からは考え様、心の持ち方によって人生が決まるんだと言ったお話。今井鎮雄パストガバナーからは「21世紀を心豊かに生きるために」と言うテーマで私達がこれからの21世紀を生きる者達にとっていかにこれからも生きるかという考える起点を多方面から示唆して頂いた。

これらの方々のすばらしいお考えをいかに伝えたら良いものか大変難しい使命をかかえてしまったと責任の重さを痛感している。とともに私達の力は微々たるものであります。ロータリーの方面からも私達の職場にまで足を踏み入れ頂ければ大変有難く思います。

第2680地区

明石市二見町西二見31-10

明治グランドヒル二見402号

肥塚 和昌

第20回ライラセミナーに参加できた事、本当に感謝して居ります。

私の場合、とかく日常にうもれた生活になりがちな毎日で、職場と家との行ったり来たり、休みになると家族とのんびりとした生活を過ごすのが精一杯になりがちで、“ゆとり”がなかなか持てない日々が続いて居りました。

しかしながら、ふと思い出した様な時期に、ロータリーの方々より20回セミナーに参加の機会が与えられ、日常では、話をする機会がない様な方々と、自然に恵まれた環境のもと、さまざまな価値観を持たれた人達と生活を共にするなかで学び合い、又、話ができ、遊べた事、心に残る思い出と成りましたし、再会できた事嬉しく思いました。でも私の期待が大き過ぎたのか、再会できなかった人達が数多くいらっしゃいましたが、その内、何かの機会に連絡がとれる様、心から願い次の楽しみとして心にしまっておきたいです。

反省いたします所としましては、すばらしい機会が与えられたにもかかわらず私自身、最大限に有効に活動できず、ひっこみじあんに成ってしまった事が気がかりです。またこの機会が再度経験できる様でありましたら、もっと有意義に参加する様、心がけたいと思って居ります。

今の私の心にありますのは、さまざまな立場に立っている人々の意見を一つに統一してゆくのは、無理な様に思いますが、よりよき社会と成る様、共存してゆかねば、その道はどこに？ 具体的には思い浮かびません。

家庭に職場に、地域社会に、日常生活にもどりましたら、多少なりとも、人との出会いを機会に試行錯誤してゆきたいと思って居ります。皆様有難う御在りました。

第2670地区

臨門市大麻町市場字川向二61-4
ホーブス勝瑞301

松井 昌志

テレビを見る。ブラウン管の向こう側でなんだか重大な問題をつきつけられた様な気がしてくる。だけど僕らはそのことを時代の流れに取り残されない様、知識の一片としてとらえることしか出来ない。21世紀にみんな期待しているくせに、動いてくれるのは他人だと信じている。21世紀なんてほんとは人間が身勝手につくり上げた尺度の一点に過ぎない。ものさしが利便性の為に、5cm、10cmを少し大きな字で表示してる様に、21世紀も少し大きな字で書いてみただけである。何かが変わるきっかけとしてほんとうに21世紀を期待してもいいのだろうか。世界も国も社会も学校も家庭も自分達が負の方向に歩んでいることを少し感じはじめてる。それ等を単に世紀や年度が変わることに、実に具体的な正の終着点を感じることなく、ばかばかしい程期待をしていないだろうか。

人は常にその歴史の中で問題を抱えてきた。試行錯誤しその問題を解決してきた。ただそれが出来たのは解決までの状況を自分達の中でまず考えることが出来たからである。原因の追求→対策→結果というプロセスに基づき、全てを解決してきた。だけど今は違う。例えば青少年犯罪についてもそうである。自分達の創造の枠から完全にはみ出した問題が急に襲いかかってくる。するとまず対策を考える。原因を探るのに自分の常識の中でかたづけられる事が出来ないままに対策に走り結果を求める。

時代は明らかにその速度を増して流れてゆく。いろんなことが速度にのりきれず取り残され、いろんなことが時代の流れにはじき出されずれてゆく。川の流れをゆるやかにするために21世紀というダムを建てる。また負の方向に流れる時代を21世紀というダムで変えようとする。ただ一ついえることは決して誰もダムを作ることは出来ない。数えきれない問題を抱えたまま、21世紀という単なる時代の分岐点において、そんなつまらないきっか

けで、理由もわからず対策に走らぬよう、僕は願っている。

第2680地区

洲本市塩屋1-1-8

阿部 貴久

4日間、素晴らしい環境と仲間たち、そして素晴らしい講義をありがとうございました。単調な毎日の中でRYLAセミナーは私に新しい活力を与えてくれました。

さて前回も同じ事を感じましたが、今、私はRYLAで終わるのでなく、RYLAから何かが始まる否始めなければならないという気持ちで一杯です。何事もそうだと思いますが、現状を変えるには日々の不断の努力が必要だと思います。その意味でRYLAは私たちが進むべき方向を暗示してくれてはおりますが、そこから何を読み取り、何を指針としてゆくかは私個人の気持ちの持ち方にかかっていると思います。

フォローアップとはそうした個々人の「気持ちの持ち方」をサポートするものであり、効果の測定を重視する企業研修では（企業研修に限らず当たり前の事と思いますが）その実施は常識であります。

「4日間のRYLAで人間が変わる」多少のアクセントを割り引いて考えても、このような表現はとても乱暴ですし、私は同意できません。しかしRYLAセミナーを一つのきっかけとして受講生に変化を促す、そして（ローターアクト等も含めた）様々な良質の社会活動の中に結果を還元する事ができれば、RYLAセミナーはより有意義なものになるのではないのでしょうか。

最後に今回のRYLAセミナーにあたりお世話になったすべての方々にご心より御礼申し上げます、感想とさせていただきます。ありがとうございました。

第2670地区

徳島市津田本町3-3-15

里見 和彦

約1年ぶりに、ここ余島に帰ってきました。参加者名簿を見ると、昨年同じ班だった人や、RACで知り合った人がいて、3泊4日のRYLAが楽しく過ごせそうで安心した。

今回はホームカミングRYLAということで第1回から19回までの同窓会という形式となっていたため、30代・40代の方も数人いらしており、前回とは違ったキャビンタイムとなりました。

2日目は残念ながら雨が降っており、どんよりした感じでパネルディスカッションが行

われましたが、4人のパネラーの意見を見事にまとめていた深川さんにはとてもとても感心しました。

その後の新世代会議では「ロータリーに望むこと」という題目で行われたため、僕は「RYLAの受講生に是非RACをすすめて欲しい」ことをロータリアンに提案しました。現在2670地区も2680地区もRACは減少傾向にあり、このままの状態では現状維持どころか、消滅してしまうクラブが幾つかあるため、来年度地区代表になる僕にとっては切実な想いとなってしまいました。

RYLAセミナーが面白い楽しいと感じれる人にとって、RACも同じ様に興味を持ってもらえる信じ、何人かにRACをすすめると、みんな「とても楽しそう。是非やってみたい」と良い返事をたくさんもらい、とてもうれしく想いました。

やっぱり人と人との出逢いは最高です。RYLAは最高です。そして、RCもRACも最高です。たくさんの人と出逢い、語り合い、通常では聞けないような最高の方達（森滋郎先生、小薮実英氏そして今井鎮雄先生）の話も聞け、最高の3泊4日を過ごすことができました。最後にRYLAを企画・運営して頂いたロータリアンの方達にとってもとても感謝しています。RYLAで学んだ全ての事を、これからの僕の活動の源とし、RACをこれからも活動的にしていきたいなという想いでいっぱいです。ありがとうございました。

第2670地区

高知市宝町30-30みどりハイツ3F

坂東 香織

今回このライラセミナーに参加して今度こそ何か自分がちょっとずつでも変わってゆける気がしています。前回のライラの時は何人かの人たちと仲良くなったり、これじゃいけないな、何か自分の目標を見つけよう。ということで、帰っていききましたが、結局何がやりたいかみつからないまま月日が流れ、ライラでせっかく知り合った人たちとも交流のないうままでした。すごくみんなにとり残されている気がして、自分に自信が持てず、いじいじした自分がいました。けれどこのライラに来て久しぶりに昔の何人かの仲間に出て何かふっきれた気がしました。少しずつ勇気を出して心を開けば、みんな私を受け入れてくれるのです。昨日の小薮氏のお話にもあったように自分は自分なんだから立派な人を目指さなくてもいいんだ。自分なりの味さえでていけば。これからは、あまり片意地をはずらずに、もっと気楽に生きていこうと思います。

そして、今回この3泊4日で仲よくなった人たちと、このセミナーの後も自分からコンタクトをとって交流を深めて行きたいと思います。もう4人の人と今後会う約束をしました。これから、今の気持ちを忘れずにもっと気楽に前向きに進んで行こうと思っています。

第2680地区
相生市那波野1-6-5

神谷 香里

今回の20回 Home Coming R Y L Aでは、前回とは違い、広い出合いができました。前回、班ごとのスケジュールが多く狭く深い話がありました。その時と今回とでは比べられませんが、前回同様とても実のある4日間でした。

新世代会議の席では結婚を間近にひかえているということで、みなさんに祝福して頂き、とても恥ずかしかった半面とても嬉しく思いました。

本当なら1ヶ月後にひかえいろいろと忙しい時期ではあったのですが、3泊4日にち全日程どうしても参加したく思い、今回に望んだわけですが、やっぱり来てよかったと思いました。

パネルディスカッションではいろいろな意見が聞けたし、小藪先生のお話はとても楽しく、心にしみこんだ様な気がしました。

最後の夜、浜辺でのいきなりファイヤーには驚きましたが、みんなアドリブでいろいろ楽しく盛り上がり、「すごい人達と知り合えたなあ。」と嬉しくなりました。

これから帰っても、今回知り合えた人達と連絡をとりあいたいと思うし、結婚して住所や名前が変わってもずっとこういった出合いを大切にしていきたいと思います。

今回再びR Y L Aに参加させて頂けた事を本当に心から感謝します。

また10年後、20年後、Home Coming R Y L Aのある時は是非参加したいと思います。その時はどこに住んでいるかわからないし、どんな生活をしているかわからないけど、今の気持ちを大切にしたいと思います。

B班

B日程

第2670地区
勝浦郡勝浦町大字三溪字定岡85-4

中瀬 弘晴

第17回ライラセミナーに参加してから3年ぶりに余島を訪れました。最初3泊4日の予定で申し込んでいたのですが、都合で1泊2日で参加しました。記念講演の小藪実英さんの話の中で、人間には欠点があり、それを克服して生きていかなければならない。例えば「あがる」ということは「人より繊細にできているから感じるんだ。」、「頭が悪い」ということは「いやなことがあってもすぐに忘れられる。」、「ぶさいく」ということも「自分

がそうだから周囲の人が美人と思って喜んでくれる。」というように、物事の見方を変えることによって、普通は悪いことでも、プラス思考に考えることによって良いことだと思えるようにできる。

また悲しいということがあるから喜びを感じることができるんだ。喜びも悲しみも共に人生の味、自分には自分の味があり、自分自身の味がでていけばいいんだ。

その中でも一番私の心に残った詩は、

自分ひとりぐらいと思って

ゴミを捨てる

地上に一億あまりの

ゴミが落ちる

自分だけでもと思って

ゴミを拾う

地上から一億あまりの

ゴミが消える

という詩である。

自分自身も特殊な人間になろうとはせず、世の中の80%の人がうれしいと思うことをうれしと感じて、人生を生きていこうと思いました。

第2680地区

神戸市東灘区住吉本町3-6-20

松島 誠治

国際ロータリー第2680地区及び2670地区ガバナー、ライラ委員会の皆様、事務局の皆様方、此度は第20回ホームカミングライラセミナー参加の機会を頂き誠に有難うございました。私が参加させて頂きましたのは11期1989年頃で当時は未だ学生でありました。3泊4日の日程はカウンセラー、メンバーにも恵まれ非常に充実した日々であった事を昨日のように思い出します。

今回9年を経て再び御縁頂きましたのも当時のメンバーのおかげであると非常に感謝しております。

今回は社会人になってからの参加という事で一泊二日の参加になりましたが、同じグループのメンバーも私と同じ体験をして来たところから話も盛り上がりました。以前とは違い、年齢も上がり社会経験も積んできた今、こうして同じような年代を含む方々と話し合える機会はとても重要でありました。

今回集まったメンバーは教育関係者が多く、実際の教育現場の問題や制度などのテーマ

が中心でした。今回は課題や日頃の不満・苦勞、アイデアの意見交換のような型でしたが、今後必ず私達自身が解決しなければならない立場に置かれてくると思います。

その時になって、今私達が持っている疑問や課題を決して忘れず、また、後々になってこれから育てて来られる方々から同じような事を指摘されないよう、学び考え活かしていかなければいけないと再認識させられた2日間でした。

スタッフの皆様を重ねて御礼申し上げ、感想にかえさせていただきます。

第2680地区

姫路市大津区長松129-3

小倉 正明

国際ロータリー第2680地区ガバナー事務所から、ホームカミングライラセミナー参加の依頼が来た時は私が参加してから14～15年もたっていた事もあり、頭から参加する気にはなれませんでした。友人のすすめもあり、共に1泊2日のRYLAに参加したわけですが、キャビンに入るとやはり。皆様RYLA経験者であるため、年代はバラバラですが、過去の経験をお互い語り始め不安は消え去りました。

またキャビンタイムでは男女とはず7～8人が集まりRYLAでの経験談、教育論など、お互いの意見を聞くことができ参加してほんとうによかったと思います。

また小薮実英氏の「心が人生を決める」の講演は、小薮氏が私と同年代でしかも子供の年頃も同じで非常に参考になりました。

今後も余島RYLAのよりいっそうの発展と、そして受講生OBをあたたく迎えてくれるRYLAを希望しています。

どうもありがとうございました。

第2670地区

新居浜市高津町4-19

高橋 聡

高松から土庄までのフェリーの中で、こんな船にのってこんなところに着いたのだったろうか？とほとんどなくなってしまっていた記憶をなんとかたどろうとしても、この6年間に聞きしてきたことが色々邪魔をして、なかなか結びつかなかった。

第14回のセミナーの直後、新居浜ではRCと市教委が合同で「ライラ新居浜セミナー」を始め、ずっとお世話をさせていただいた。この4月の人事異動で市教委から離れ、つまりライラから離れることが決まっていたので、なんとなく複雑な気持ちでいたことも理由

のひとつだったと思う。

市役所に入って10年が経とうとしている。まだわからないことの方が多いけれど、たくさんの方を見聞きし、自分なりに、なぜ世の中がうまくいかないのか、なぜよくなるのか、その理由が少しずつわかりかけてきたような気もする。自分の力で何をどこまでやれるのかはわからないけれど、少なくとも世界中の誰がどこからみても「間違いではない」ことをしていきたいと思う。

地球上には私たちがうれしかったり、たのしかったり、美しいと思ったりするものがたくさんある。私という存在も、そういうものの中のひとつでありたいと思う。正しいかどうかはわからないにしても、間違いであることを、断じて許さない、そういう強い気持ちを持って、これからも生きていきたいと思う。

今井先生、まだまだ任せられないことも多いとおもいますが、ライラはこんな若者をそだててくれました。もう少し見守っていてほしいと思います。今日もまた、新しい勇気を与えてくださってありがとうございました。

第2680地区

東京都豊島区雑司が谷2-16-10

森田 孝明

私は去年のセミナーに参加させて頂きましたので、2年続けて参加させて頂いたことになります。快い日射し、ウグイスの声、波の音、余島は本当にいい所だなとつくづく思いました。

私は今、自分の進路に迷っています。その中で、小藪先生、今井先生の講演は心にしみいりました。「自分」をしっかり持って自分らしく生きる事、簡単だとは思いますが、努力していきたいです。

最後に、お世話になった皆様に御礼を申し上げて筆をおきたいと思います。本当に有難うございました。

第2670地区

小松島市板野町字目佐50-2

川内 玲子

セミナーに参加させていただきありがとうございました。

一日目の小藪先生の講義はとても優しい語り口で、内容も楽しく聞かせていただきました。「自分らしさ、自分の味をだす」さて、私は自分の味をみつけない。もっと物の

見方、考え方を変える必要があると感じた。

二日目の今井先生の講義は、興味深く「世界の中の日本」を、日常の中であまり意識する機会もなかった。

日常、非日常の中でも、今世界で何が起きているのか、もっと視野も思考も幅を広げそして深く物事を捉えていかなければと感じた。

自然との共生、私達は自然から色々な恩恵を受けている。まずは、自分の地域から、又身の回りから、環境保護について行動を起こしていきたいと思います。1泊2日と短期間ではありましたが、浜辺でのキャンプファイヤーも楽しい思い出となりました。皆様、お世話になりました。また、お会いする日までお元気で。

第2680地区

三田市下田中560-3-203

藤本 美香

前回参加させて頂いてから10年という節目にまたRYLAに参加させて頂く機会があり、とてもうれしく思いました。そして、なつかしく思い出されてきたのですが、前回の時にはまだ学生で最年少でしたので、聞くこと、触れ合うことが全て新鮮で、カルチャーショックを受け、勇気ももらって帰りました。その後もRYLAで知り合った方と何度も同窓会と称していろいろな所に旅行に行ったのは私の財産でもあります。

今回は一泊二日ということで班行動でもなく設定されて話すということはありませんでしたが、だからこそ、自分から限られた時間の中でいろんな人の考えに触れたいと感じました。前は自分にあまり経験がなく聞くことが多かったのですが、今回は聞かれること、話たくなることが多くて、時間はなくても前回に劣らない位有意義な話ことができました。

今回までの10年の間にできたことというのは形にはなかなか現せないけれども、RYLAでの人とのつながりとそれによって満たされた私の心ではないかと感じます。また勇気をたくさん頂いたので明日からの日々少しでも形にも現せるよう励みたいと思います。

本当にありがとうございました。

第2680地区

北宇和郡津島町北灘甲470-5

池田 やよい

3年前の受講と今回の受講では、私の生活環境は大きく変わっています。3年前は大学3年生の春休みでした。ローターアクターとして、頭のとっぺんから足の先までロータリ

一一色に染まり、突き進んでいました。このRYLAセミナーの受講も一つ一つが新鮮で、ロータリーのお陰でまた幸せになれた、と充実感でいっぱいでした。

去年4月から、出身地の愛媛に戻り、社会人として、中途半端なものですが、仕事を持つ身になりました。正直なところ毎日不安で、あの学生の頃のやる気や自信はどこへ行ったのだろうか、私のなりたい自分はこんな人だったのだろうかとなさげなく思っていました。だから今回の受講は、指導者としての自分を磨くというよりも、まさに古巣へ返って何かを取り戻そうという心構えで参加しました。

1泊2日の日程が終わり、少しは気持ちの整理ができた様に感じています。

今はまた自分自身で精一杯ですが、行動をおこして、いつかまたここ余島に戻りたいです。皆さん本当に有難うございました。

C班

A日程

第2680地区

神戸市東灘区甲南台5-2

永松 潔和

今から20年前の1回2回と参加させて頂き、昨年はカウンセラーとして貴重な体験をいたしました。今回は受講生とリロータリアンの中間的な立場と思いキャビンタイムも楽しく過ごしました。20年前のあの熱気というような物が少しうすれたように感じられたのは時代の変化によるものか、自分の年齢又は受講生の年齢の移り変わりによるかは良くわかりませんが、いぜんとして熱い討論は生きてるなあと感じました。今回、受講生がロータリアンに望むことということでお話をさせていただきましたが、私の思っていることと皆の思いがいっしょであったことがうれしく思いました。この報告書を読まれる方々、特にロータリアンの方も一度受講生として参加して下さいることを希望します。参加することによりロータリーのことを再び考えることもできますし、ロータリアンの考えとロータリアン以外の方との考えの相違も勉強になることが多いと思います。今後はこのRYLAが続きますことを望みます。

第2680地区

明石市松の内2丁目8-8

フルーレゾン西明石605

西勝 秀

3度目の招きにあずかり、心より感謝いたします。同じ時を共有した仲間に出会ったことの喜びを心に秘めて、又普段の生活の場に帰っていきます。会を重ねる毎に、講演者の話に、実感がもてるようになっていく自分に気付かされます。気が付けば自分の子供を若いリーダー達に委ねる年齢に達していました。少し不安もありますが祈りを持って我子をキャンプに送り出しても良いと思えました。

リーダーになろうと志す若い人が少ないと聞きますが、決していなくなってしまったわけではありません。自分達の時以上に素晴らしい人格を持った若きリーダーに会ったことがなによりも嬉しいことでした。後9年もすれば自分の子供が20才となります。その時RYLAに親子で参加できたら、これほど、素晴らしいことは無いと思います。毎日の生活の中で自分の子供が、そして子供の仲間が、RYLAに参加していくことを祈りの課題に加えていきます。世代を越えて共通のテーマで語り合える時が来るように、親として、又、RYLA受講生として、家族と接していこうと思います。楽しい仲間、楽しい思い出をあ

りがとうございました。自分にとってRYLAは招きが無ければ決して踏み入れることのできない場です。20年前の忘れかけていた自分が、少しだけ思い出せたような気がします。今の自分にできることを大切に、今日できることを探して実践していくことに気付かせていただきました。お前は何者だと毎日問われ、その答えができるように祈ります。この素晴らしいチャンスをくださった、スタッフ一同、又、ロータリーの方々に心より感謝と祝福をお祈りして、感想の終わりと致します。以上。

第2680地区
加古川市野口町北野1157-42
井上 孝洋

私は第14回に参加し、今回のセミナーは6年振りの参加でしたが、まず最初に感じたことは、「ああ、帰ってきた!」という感覚でした。ロータリーの理念、RYLAセミナーの理念、そしてそこに関わって運営して下さっているロータリアンの皆さんや受講者の皆さん、そしてこの神戸YMCA余島という場所。其のすべてにふれることにより、6年という歳月が私の心から風化しかけていたとても大切な気持ち呼び覚ましてくれたような気がします。日頃の生活や職場、地域との関わりの中で、私は、何が大切で、何が重要か？また、何が問題で、何が変わらなければならないか？という自分自身への問い掛けを放棄していたような気がします。時間と周囲の動きや流れに身をまかせ、ぬるま湯の中で、身をどっぷりつけていたことが、今回のセミナーで私自身に気づかせてくれたように思います。このセミナーで一緒だった班のメンバーや受講生の皆さん、そしてロータリアンの皆さんと様々な話をしたり、聞いたりする度に、そんな自分になっていた事に気づくにつけ、本当に恥ずかしくもあり、申し訳ないといった気持ちになりました。「子どもたちのために私は何をすることができるのだろうか？子どもたちと共に何が出来るだろうか？」それと「今住んでいる街をどうすればもっと良くなるだろうか？」ということを常に考えていた自分を新たな気持ちで思い出し、そしてその意欲が沸いたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

第2670地区
松山市清水町2-18-8第7
永井マンション103
菊川 享佑

21世紀を目前にする現代社会の中であって再び余島に戻り、セミナーで指導者としての心構え、豊かな心を再確認でき、大変有意義な時を過ごせました。

今回のテーマは「21世紀を心豊かに」ということで、目前にある21世紀をどう生きるべきかを考えたわけですが、まず、20世紀を振り返ると、高度成長期にともない、科学技術も発展し、人々の生活も急激に豊かになってきました。しかし逆に、人間の内面的な心の弱さが目立つようになってきたと思います。世の中は猛スピードで進んでいるが、人間の心は疲れきっているように思う。「心が荒廃していると、社会もすたる」まさに、その通りだと思う。

こういった時代だからこそ、人間の内面的な「心」について、もう一度考え直す必要があるのではないと思う。

また、今の社会に、そして未来にしっかりと目を開いていく時間を大切にしていきたいと思いました。

今回のライラ・セミナーで得た物を、「ロータリーの心」を、一人でも多くの人達に伝えていきたいと思います。

第2670地区
南国市岡豊町蒲原493
山本 雅子

昨年、19期生としてこのライラ研修を受講した。その時も得るものを得て元の自分の生活に帰っていったように覚えている。そして今回、また大切なことを得られたように思う。その1つが人と触れあうことのうれしさ、喜びだ。確かに今までにもこういう機会はたくさんあったし、昨年のライラ研修でも“人と触れ合う”ことをして来た。しかし今回は今までとは違う喜びがある。人のぬくもりを、充分感じる事ができた。このぬくもりを絶やすことなく、この先温め続けていきたい。

今回私が出会った人たちは、人と知り合うことを楽しみ、それも徹底して楽しんでいる。そんな人達に圧倒されつつ、しかしよく見ると自分らしさを決して失っていない彼、彼女たちを見て、今更ながら、人と交流することの居心地のよさを感じることができた。

人との交流を通じて、たくさんのことを学ばせてもらったので、これを実生活でも活かさなければいけないと思う。

第2680地区
姫路市船橋町4-2-3
名定 香織

私が一番印象をうけた講演は小藪実英氏によるものでした。心のもち方次第で、人生感

も変わってくるという思いを忘れずにずっとこれからも生きていきたいと思えます。もちろんこれは一朝一夕にできることではないけれども、継続することによって少しずつでも変わっていきけるのではないかと思います。

今回の楽しかった思い出としてあげられる中に、キャビンタイムがあります。そこで、道徳教育についての話がでて、「普段私達は何げなく話している言葉である人を傷つけてしまっているのではないか」という事は、私には衝撃的でした。自覚のない人間が発する言葉ほど恐ろしいものはないのではないかと思います。

今回ホーム・カミングという事もあってか（どうか）、様々な人生観をもった、私がこれまで接したことのないキャラクターの人がおられ、これも又、私の勉強になったと思えます。

C班

B日程

第2670地区

板野郡土成町吉田字城根木44-1

出口 喜正

12年ぶりに参加させて頂き本当に有難うございました。自己の研修として、ライラの研修は自分を見つめる所であり、最高の場所であります。人の出会い、みんなとの話し合い、喜び合い、正しく考え合うと言うこのYOSHIMA、私の名前に「あい」を付け加えるところであります。研修の場、又今回、講師先生と出会える場を作って頂いた、高松RCの三宅さん、本当に有り難く感謝しております。小藪先生に一度わが町に来て頂き、青少年に、又町民に話をして頂きたい気持ちです。町の行政職員は一番に住民の奉仕者にと、町を美しくと考えている一人です。一人の百歩より百人の一步と言うように。又、みんなと出会える日、自己研修をさせて頂きたいです。横文字でボランティア精神をよく言いますが、みんな仲よく手をつないで前進していきたいです。

第2670地区

小松島市横須町19-40

仁木 敏之

あじさい寺の小藪住職さんの生き方に感動しました。即ち生きている人の為になる事をしたい、物事を+思考で考える、今現在を大事に生きる、そして主題の「心が人を決める」、

即ち考え方で人生は幸せに生きられる。人前で話てもあがる事はない、そして花を中心に人を集める、こちらへの着眼点に感心しました。私は登山が趣味ですが、登る時は苦しい。だからこそ頂上に立った時、苦しいのが大きい程それに比例して喜びがある。おいしい物ばかり食べてはそのおいしさが分からない等は山登りも同じ事の様に思えます。又、住職さん詩の「自覚」「心のもち方」には特に共感を得て、ロータリーに帰って報告したいと思います。

今井バスターガバナーの講演は、私は今後どの様にして生きて行けば良いのかという視点でずっと聞いていましたが、最後迄自分の結論が分からない様な状態です。これから「メス化する自然」という本と「21世紀の社会システム」という本を読めば分かるのかなあとありますが、21世紀は人類にとって大変は問題が起こっている。例えば人口の減少、中国等の発展による環境問題、コンピューター化社会、日本の米国人の偏り、日本独自の考え方をようしない点、これらの問題は私達、又は私達の子供が考えていかなければいけない問題で今後は日本にとってはこれらを解決する為には教育が大事であるという事を話されたのだと思う。これは個人個人が考えていく必要があると思います。最後に、講師セミナーを開催して下さったスタッフ・ロータリアンに感謝して感想文を終わります。

第2670地区
那賀ノ浦町春日野1-138
池田 重政

15年振りの余島に上陸して、古い記憶がよみがえってきました。今回参加するに当たって、前回のメンバーや資料を改めて見直してみました。しかし、顔と名前も忘れてしまって、正直言って参加者の中に知り合いが居るかどうか…。現地に着いて何人かの旧知の人を見付け再会を喜びました。一泊二日のコースであったので、時の過ぎるのが非常に早く感じました。講師先生のお話を楽しく拝聴して、今後の参考として非常に有益な内容でした。キャビンタイムでは、仲間からまた参考となる話も聞き、帰ってから使わせてもらおうと良い情報もいただきました。

余島の荒地に植樹した黒松が、将来、大きく成長して素晴らしい大木になる事を期待して、余島を後にします。今回のセミナーを企画、運営いただいたスタッフの方々に深く感謝するとともに、今後も若い人達の養成にご尽力下さいますようお願いいたします。以上

第2680地区
神戸市灘区六甲台1-2-1-203
倉本 勉

第1回目、第13回目と参加させていただき、今回で三度目になります。わずか一泊のみの日程でしたので、またたく間に2日間が過ぎてしまったような気がしますが、なつかしい仲間と再会し、新しい仲間ができ、またロータリーの方々がお元気でライラを運営されているのを拝見し、たいへん有意義で心強く思いました。

今井先生の講演も、これで三度拝聴したことになります。最初の内容は残念ながら忘れましました。二回目は、たしかトララー著の『第三の波』を紹介されて、情報化社会についてお話をされたように記憶しています。こう言うと失礼かもしれませんが、今回がいちばん(私のような凡人には)わかりやすく、面白く、為になったと思います。また、いちばん熱が入っていたようですし、ユーモア(ブラック・ユーモア?)も豊富で、いくたびも笑いが起こりました。今井先生の、若者は本当の民主主義というものをしっかりふまえて、一国の為のみならず、世界的視野で世界全体の幸福を考えてこれからの日本を背負ってもらいたい、と云う激励にたいへん身がひきしまる思いがしました。と同時に、第1回目のライラに参加して以来この20年間、自分はいったい何をしてきたのかという反省の気持ちの起こりました。そうした思いにさせてくれるのが、このライラだどつくづく痛感した次第です。

第2680地区
尼崎市瓦宮2-10-23-201
市川 多恵子

初めてこの余島の土をふんだのは、もう12年も前のこととなります。第8回と第10回に参加させて頂きました。行く前は、ただ無人島での生活を単なる旅行気分で見たいという動機でした。その頃の生活は単調で、変化の訪れる気配など何もなく、ガンコに気ままにひとりで生きていました。まさか、こんなに人生観を変えてしまう出来事に出逢えるとは。

その時、ライラで出逢った人たちとのふれあい、そして理念とそれに基づく講義などが、私のひどく堅い殻をぶちこわしてしまいました。ですから、訪れる前の私と後の私はまったく違う人間になった気がしたものです。ただ、残念ながら殻は一層ではなく、その後も何回もぶちやぶられる事があり—ということはあまり変らなかつたというこのなのか、また、新たに出来ていたのかわかりませんが…。ともかく、一番ぶ厚いやつをかたづけてくれたのがライラではないかと思えます。

元気を頂きました。また明日から勇ましく人生を切り拓いていけそうです。
ありがとうございました。

第2680地区
小豆郡土庄町甲5937-1
森川 有子

前は第14回ライラセミナーに参加させていただきました。最高にすてきな思い出となったライラだったので、今回、なつかしい旧友に会えるかなあと期待の中での参加でした。残念ながら同じ班の友人には会えませんでした。また新しい友との出会いがあり、楽しい1泊2日のライラをすごさせていただきました。今回は、家庭の母として参加となり、「こころとは」とのテーマで小藪実英住職の「心が人生を決める」の講演、また、今井鎮雄先生の「21世紀を心豊かに生きるために」の講演をきかせていただき、やはり1番に感じたことはまずは家庭のぬくもり、個々からすべてはじまっていくことを実感しました。現在3歳と1歳の子供がいますが、21世紀の大切な青年に温かさ、優しさ等を体で感じられる青年に成長してほしい。そして、小さなそこからが21世紀への先が見えてくるのではと感じました。我が家に帰り、子供に対して1人の人間としてのそれぞれのもち味をいかせていける青年に成長していくよう、まず母である自分が「心」への暖かい家庭をめざしていこうと感じました。2日間、ありがとうございました。

第2680地区
神戸市中央区北野町2-17-16-306
黄 愛玲

再びRYLAに参加して4年前初めての参加時に感じた新鮮なやる気を思い出したように思える。思えば、4年前は大学を卒業してで院入学という新しい環境への期待が胸いっぱい時期にいつもは少し引込みじあんになってしまう自分のしりをたたいての参加でした。その時に得た人生への更なる期待を手中に院への生活に飛び込んで早4年となり、4年の歳月は私に多くのことを学ばせましたが、人生への新鮮なやる気をも少し失わせてくれた。その折、ロータリRYLAの誘いのパンフレットが心に気づいたかのように舞い込んできた。しかし、雑務？に追われるがままに申し込みもせまり、やめようかと思っていた時に、井奥さんから再度誘いを受け、なにかきっと今回も得ることが多いだろうと奮起し、余島に戻ってきた。

余島に踏み入れるまではただ日常からの避難（一時的に）と考えていたが、普段お会い

することのない学校外の人達に接したり、真心をもう一度気づかせてくれるお話が聞けたり、更にはともに世界に目を向けるようにしようとの問題提起の呼びかけ等の活動を経て、日常つきまとわれる様々な悩みに多少食傷ぎみになっていた自身の心がまたあの4年前のピカピカなやる気を取りもどせたように感じ、夜空に光ファイヤの燃えるパチッパチッの音とともに私の気持ちもピチッピチッと若返った気分です。

第2680地区
三重県志摩郡阿児町船方4015
宇都宮 千春

久しぶりに故郷に帰ってきたような気分です。私は（実家の）三重県から出て来た田舎者で学生時代のRACの関係で、16回に参加しました。RYLAで何か形には表わせないけれど大事なことを得ることができ、学校卒業した後も三重に戻らず、2年程兵庫の教育の場に身を置いていました。しかし、去年は縁あって、新しいタイプの教育をする場に就職できることとなり、たくさんのことを学ばせてくれた兵庫を去ることになったのです。そして1年が経ち、第20回目にお誘いしていただき、また兵庫を訪れることができました。楽しかった思い出ばかりの余島へ来ることができました。多くを学び取る機会をロータリーの方々がたくさん作っていただきました。RYLAを通して、RAC活動を通して、多種多様な人と出会い、考えさせられ、未熟そのものだった私はかなり豊かに成長できたと確信しています。現在、県立で全寮制総合学科の高校の寮の「舎監」というめずらし仕事をしています。生徒と共に生活し、スクールカウンセラーのようなことをするのですが、規則など全くなく、「自主自律」をモットーに教育活動を行います。自分で善悪を判断し、責任を持って行動させるということは、指導者としては、どうすべきなのかと毎日毎晩考えます。迷ったりすることも多々ありますが、RYLAなどで考えたこと、共に話し合ったことが、とてもとても役立っています。県は違いますが、青少年育成のため、私自身の育成のため、私はがんばることができています。ロータリーの皆さんのお力と感謝しています。このRYLAが長く続き、ますます多くの人何かを得る機会を持てることを願っています。ありがとうございました。

第2680地区
相生市古池本町2-1
大重 博康

D班

A日程

第2680地区
相生市古池本町2-1
下野 博康

3泊4日、あっという間に時間が過ぎてしまいました。余島に来る前には、3泊4日を過ごせる体力があるかどうか不安もあったのですが、何とか無事修了することができ、また、多くの新しい仲間と出会うことができたことを嬉しく思います。第12回・第13回とライラに来て私の人生は大きく方向を変えました。第12回から数えて8年目、この間振り返る余裕もなくひたすらに前だけを向いて突き進んできたように思います。昨年、遅ればせながら人並みに結婚することができ、家庭を持ったことで、自分なりにひとつの節目にさしかかった時に、丁度また余島をおとずれる機会を得たことに感謝するとともに、この8年間を自分なりに振り返って見る時間を持たれたことを嬉しく思っています。

また何年か後に余島をおとずれる機会があることを楽しみにして、これからは急がず、余裕を持って活動して行きたいとおもいます。

3泊4日、本当にありがとうございました。

第2680地区
加古川市新神野6-9-1
吉田 典生

今回久しぶりに参加して、8年前にこの余島に来たことをよく思い出しました。

あのころは何もわからずに来て何をしたのかも覚えていませんでしたが、今回は大変有意義な毎日でした。初めは3泊4日のA日程にするか1泊2日のB日程にするか迷いましたが、やはりA日程にしてよかったと思います。2日目に雨が降ったのが残念ですが、その代わりにロータリーのかたが、3日目の晩にわざわざ予定に無いキャンプファイヤーをしてくださったり、キャビンタイムに私たちのキャビンに来て討論をしたりと前の時にはなかった楽しさをありました。それに今回は受講生の数が少なかったので、1日目ではほとんどの人の名前を覚えることが出来たのもこの4日間を楽しく過ごしたことのひとつかもしれません。だから1泊2日のB日程にしなくてほんとうによかったと思います。B日程の人は24時間も余島にいられないので、とても残念そうでした。またこういう機会があれば、何回でも参加していきたいと思います。

第2670地区
宇和島市伊吹町1131-6
渡辺 重夫

私は、本会の主旨に反しまして、初参加で来させていただきました。

私の仕事は、公務員（市役所）であり、現職場は、公民館です。公民館の仕事は、地域・人づくりでありまして、常に私が成長していかないとはいけません。そのために、自分自身いろいろな研修を受け、学ぶとともに、人脈もひろげていかないと地域の課題をクリアしていけないわけです。

初参加ということで、同キャビンの受講生等には迷惑をかけたとは思いますが、私にとってすばらしい、4日間を過ごさせていただきました。

すばらしい講師の方々の講話・演、他分野で活躍なされている担当者、受講生とのディスカッション等、私には一つ一つが身になる貴重な時間でした。特に夜のキャビンタイム何の課題もなく、個々それぞれのカラーのぶつけ合い、これこそ自分の地域にもって帰るよしみやげがたくさんころがっていました。

この3泊4日のライラセミナーの参加により、私自身が一つ成長したと同時に、私の地域の課題をクリアしていくいい経験となったと思います。いい人脈にも出会え、運営委員会、ロータリーの方に感謝するとともに、この経験を私の職場・地域にいかすことを約束するというで文をしめさせていただきます。

第2680地区
加古川市志方町永室311-5
長谷川 敏之

第12回ライラセミナー参加以来、2回目の参加となりました。長い間来なかったので以前のことはほとんど覚えていず、新たな気持ちで3泊過ごせました。

特に今回の参加にあたって、自分自身の目的は、「人」をいうことを考え、多くの友をみつけ、語り合うということでした。あまり他人との話が得意ではなかったのですがキャビンタイムなど、多くの人と語れたことが、うれしかった。このセミナーのプログラムは、時間を有効に使えてよかったです。このように多くの人と知り合えましたが本当は、今後いかに友達でいることができるか、ずっと長い付き合いができるか、ということだと思います。これは、今日、今の気持ちを忘れず、時にはふり返ってみることをすれば、可能なことではないかと考えました。

そして、講演はどの先生方のお話も楽しく聴きました。少し、うとうとしたことがあり

申し訳ありませんでした。最後の今井先生の講演の最後の「民主主義・自由とわがまま」の内容は、今まで自分が考えていた内容とまったく同じことでした。先生と同じ考えを持っていたことがうれしかった。また、この内容は前日のキャビンタイムの中で、知り合った人に同じことを言いました。そして次の日、今井先生から同じことをお聴きし、自分の考えに自信ができました。

第2670地区
安芸市本町1丁目2-7
高橋 知宏

前回（第12回）8年前のライラでは自分自身すごくひかえめで人に話かける事ができず、4日間あまり楽しい思い出がありませんでした。今回ライラに参加するにあたり、自分のテーマを持ち（積極的に話かける）を実行できるように、幸いキャビンのメンバーも同年代で気軽に声がかけやすく（自分が年取った分ずうずうしさが出たのかも）すぐにとけ込むことができました。ただもう少し勇気があれば、発表もできたと思うのですが…。いつも心とか愛がテーマになりますが、これは目に見えずすごく難しい問題で、字に書いたり言葉に出すとすごくよいものですが、自分ではいくら考えてもピンとこない。

私が思うに心とか愛・幸せというものは与えようとしたり、感じてもらおうとするものではなく、相手がいつの間にか感じたりするものでよく過程の中で満足したり即結果を求めたがったり自分もそうなんです、あまり意識せず、普通に生活しているうちに感動がある訳で自分もあまり考えずに生きていきたい。

愛すれば傷つく事が少なくなるという意見もありましたが、傷ついたり痛い目にあったりしたことで思いやりが起き本当に愛することができるのではないのでしょうか。

私には今悩みがありません（大きな）。日々平凡に暮らしているだけでつまらない事もあります。しかし本当につらい時になってから考えればいいし、先にあれこれ考えると不安材料が増えるだけだと思います。

今後はいろいろ勉強して意識的でなく人に接する事ができるようにしたい。

ライラは自分を見つめなおす良い機会でした。

今後の生活に生かせる様努力します。

人との出会いのすばらしさを実感しました。

すばらしく楽しい時間を過ごせた事に感謝します。

ありがとう。

第2680地区
川西市湯山台1-12-7
笠井 慶彦

このRYLAセミナーに参加したきっかけですが、私は現在ボーイスカウトのリーダーをしています。担当は小学校5年生～中学校3年生までです。ロータリークラブの方からRYLAセミナーがあるから参加出来ないかという連絡があり、私は以前参加したことがあるので他の人にして下さい、と答えたのですが、今回はRYLAセミナーの修了生が対象とのことを聞き、参加させて頂きました。

余島に来て何となく以前の事を少しずつ、少しずつ思い出してきました。名簿を見ると第9回参加と書いてあり、11年前に来ていたんだと思い、その頃は大学生で、子ども達のリーダーとして始めたばかりだったと思い少しなつかしく思いました。

このRYLAセミナーのよい点は、フリーワークの時間を多くとっていることだと思います。いろいろな形で青少年と接している人達が様々な内容で話が出来よい経験となります。講義ではロータリアンの楽しく有意義な話があり、参考になりました。

前回参加した時にこのセミナーに参加してすぐに成果があがったとは思いませんが、あれから10年ボーイスカウトのリーダーとして活動し、今回もう一度RYLAセミナーに参加してわかった事は、一つの輪の中にとどまらず、いろいろな人と接し話をする事で少しずつ自分が大きくなれる気がしました。

これからも多くの人々と接する事で青少年活動を頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

第2670地区
松山市本町6-1-5葡萄館302
日田 優子

私は今回、特別に初参加させてもらったのですが、事前にロータリーについて勉強しなかったもので、ほとんどロータリー（ライラ）についての知識なく参加してもらいました。

私が一番よかったと思うのは、世代の違う人たちと対等に話ができる場所であるということです。ライラには、本当にいろいろな人たちが参加しているので、その年代ごとの考えという大学では聞けない話が聞けたのがとてもうれしかったです。しいて言うなら、もう少しロータリアンとの話が聞けたらよかったのになあと思いました。

それと、大学生として感じたことは、徳島RACの活動を知ったときでした。私は、R

ACの組織によく似たものに所属しているので、徳島RACの活動計画表を見たとき、活動力の差にとっても驚きました。同じ大学生でありながら、これだけの差がでてしまうのは、意欲の不足なのかなと改めて感じました。何かやろうとしても、何かつまづくことがあると、なかなか先に進まない。そこで、意欲が減っていつてしまってるのではないのかと。はじめは、人のマネでもいいから、とりあえずやってみる。そして、失敗してもそれが先につながると思い、経験を積んでいく中で、成長していくべきなのだと思います。このライラでの出会いを大切に、自分たちの活動へつなげていきたいと思いました。

それと、キャビンタイムで現場にいる人たちからの話を聞いたのが、私にとって財産となりました。まわりからではみえない現場からの考え、まわりと対応していく上でのむずかしさというのが聞いて、とてもよかったです。まわりが言うほど、その場にいる人たちは苦勞してないわけじゃない。それを真剣に話してもらえたので、印象としてすごく残りました。

私は、このセミナーに参加して、まずいろいろと個性のつよい人たちの集まりだと感じたのを筆頭に、こんな貴重な話をきけて、人に出会える場所があるということが知れたことにすごく感謝しています。このようなセミナーが存在しているということをもみんなに広げたいと感じました。

第2680地区

洲本市本町8-1-2

曾根 小百合

ライラ第20回にかかわって下さった全てのロータリアン、及び関係者の皆様。

本当にお世話になり、有難うございました。

ご案内を頂いた時、よほど家庭の事情でおことわりしようかとも思い（父親が病気で自宅にいるもので、母か、私かが家に居て看なければならぬのです。）何度も、何度もまよいました。

でも、今（現在）だからこそ、ひよっとすると参加する必要があるんじゃないかしら。今の私にとって、必要だからこそ、お声をかけて頂けたんじゃないかしら——。と思い、参加させて頂きました。（私の留守中は、何とかひと様の手をおかりしています。）

まず、行ってもいいヨと言ってくれた母に感謝しています。このセミナーで、ストレスを思いっきり発散させて、又、新たな気持ちで、家に帰りたい。そうすることが、母へのお礼になるし、一番いいお土産になると思います。

次にライラに参加された全ての皆様に、改めてお礼を、感謝を申し上げたいと思います。やはりライラは、自分を改めてみつめる場でありました。

このライラで、いくつもの反省点が分かりました。日頃、自分で気が付いても、見て見ぬふりをしていた欠点、いたらなさが、イヤという程、どんどん出てきて、ショックを通りこしてアキれました。本当に――。

今日、この日を、0からのスタートとして、大きく変わりたいと思います。大変なことだとは思いますが、ゆっくりと成長して行きたいと思います。

今度、どこかでお会いたした時に、今の0から、少しでも変わった、成長した私がお見せできるように生きていきたいと思います。

ロータリアンの皆様には、この私を忘れないで、この私の成長を楽しみにして頂ければ、これ以上の喜びはありません。

有難うございました。

D班

B日程

第2670地区
板野郡上板町高磯116-2

福田 幸司

平成2年の春にRYLAに来た。あれからもう8年たった。独身最後の年だったから生活への糧としてセミナーで受けた感動は残っていた。今、夫として親として日々生活を送っている。20年記念のセミナー募集が来たので、なつかしく、また日々の生活に活力を戻すためと思応募した。小藪先生の講演は、社会、人生への標として私はとらえたい。また実生活に生かせるのではと思っている。

今井先生の人類への課題については、私なりには大きすぎる課題と思うが、生活の中から一つ一つの積み上げにより、世界へ影響をあたえられるものが見つかると思う。小藪先生の詩「自覚」はその一つの例として私は実行していきたい。

前回のセミナーで同じ班になった方々と1年ぐらいやりとりしたが、その後忘れ去った。今日、会えるかと思ったが、ほとんど知らなかった。ロータリアンだけは何人か覚えていた。また1泊2日だったので新しく交流する機会が少なかったのは残念。

ありがとうございました。

第2670地区

今治市常磐町8-3-21第2馬越コーポ2-C号

宮崎 修次

今回B日程で小藪先生と今井先生の御講演を聞かせて頂きました。私は第17回ライラに参加させて頂いた時、今井先生の全世界的視野に立った経済論を聴いて、日常生活で私自身がいかに狭視的立場で物事を考えていたかということに気付き、自省する機会を得ました。そういう訳で、今回も今井先生のお話が聴けるということを楽しみに、3年振りに余島を訪れた訳ですが、「21世紀を心豊かに生きるために」我々、世界の中の日本人が抱えている大きな課題点を提示され、眼前にかかっていた霧が晴れたような気がしました。しかしながら、そこで明らかになった問題点は日本だけが努力しても何の効果も得られそうにない大きなものであり、将来を見すえて、先進国、或いは発展途上国との協調、あるいはコンセンサスを持った共通理解を示す必要性を強く感じた。第三千年紀をこれから歩んでいこうとする時代に、地球あるいは人類を存続していただく一つの鍵を握っているのは人間である。この時期を人間が自然との共生に関心を持ち、ワールドワイドな視野で物事を語り、わがままで利己的な判断による利益追求型の民主主義社会を再建しなければならないと切に感じた。また一つ私自身の今後の生活の刺激となるチャンスを得られ、今回のライラに参加できたことを、心から喜んでいる次第である。

最後に、三年前のライラでは、今井先生の御提言による「ロータリーの家（フレンドシップハウス）」を神戸YMCA横に建築するワークキャンプに参加させて頂き、神戸の震災復興に少しでもお手伝いさせて頂くことができ、心から感謝している。1995年12月に再度建設場を通った時、あの家の部屋の窓の明かりがともっているのを見て本当にホッとしました。

第2670地区

神崎郡福崎町西治767-2

落原 康弘

第19回（昨年）のRYLAセミナーに参加させて頂いてから1年間、あっという間でした。昨年知り合った友人との再会、変わりのない大自然いっばいの余島、この地に来た時、感動しました。

仕事の関係で1泊2日の参加でしたが、28日の小藪実英氏による講演「心が人生を決める」、勉強になりました。心の持ちようによって、人生が楽しくなりまた暗い日々を送らなければならない、どちらかと言えば、楽しい人生の方がよい訳でそのためには、物事の

とらえ方、考え方をいい方向へ持っていくようにすれば楽しい人生になる。心の持ちようによって人生を左右できる自分で変えられる事を教えられました。ありがとうございました。

29日の今井鎮雄氏による「21世紀を心豊かに生きるために」の講演ですが、僕たちにとってとても大切な事だと思いました。21世紀を背負うあたっの心がまえ、目の向け所などいろいろ教えてくださいました。自分の事だけ考えるのではなく、世界の人々の事をみんなが考え行動していかなければならない事の大切さが分かりました。

この2日間を終え、昨年セミナーでは、地区に帰っても何もできなかったけれど、今年はこの講演の内容を帰って地域の人々に伝える事が大切、また行動できるよう努力していきたいと思います。

第2680地区

神戸市灘区六甲台町1-2-1-203

倉本 洋子

第1回、13回、20回とライラに参加させていただきました。その間、結婚、出産、子育てと、私自身たくさんの経験をし、その度悩み、考えたことが幾度もあります。そうした事の中で、今一番気がかりなことは、やはり子ども達の未来です。日本は大きく経済発展を遂げ、世界（特にアジア）から注目、お手本となっているのですが、それらがはたしてよいお手本となっているのでしょうか。日本はアメリカを見習い、目ざして来ましたが、教育の面ではどうでしょう。（アメリカでは一学級28人編成を新たにもっと少なくしようとしています。）今少子化して子どもの人数が減って、学校では空き教室がたくさんあるにもかかわらず、40人編成を続けています。そして子どもの私生活においてまで、教師に学校教育や指導を問われています。私は今、保育所にパートとして働いていますが、以前（私がまだ20代の頃）の私が保育所に預けられていた子ども達と、今の子ども達とは、あきらかに家庭状況の違いを感じさせられます。今の若い母親（父親も含めて）は、生活の為に働くというよりも、独身時代の経済を維持するために、子どもを保育所に預けているようなのです。あそびを通して伺える子どもたちの家での親の接し方が、私にはよくわかるからです。夕方、子ども達を迎えに来る親に、どの位の人が一番に我子を抱きしめているのでしょうか。私はいつも夕方、ああ急いでいるのね。でもずっと子どもはあなたを待っていたのに……。とってしまうのです。今、働く女性がとても多くなりましたが、子どもを持ったなら、この幼い、そして短い時期を大切にしたいと思います。そして国、あるいは人類は子どもを育てる一員としての役割を、いつも忘れないで欲しいと思います。その為の受皿としての福祉の充実、学校教育（できることからすぐに始める）の改善を望

みます。

第2680地区
神戸市西区美賀多台4-23-1

永井 道子

R Y L A 18回生の私にとって、今回は2年ぶりの余島でした。前日の大雨もうそのように素晴らしい春の日になりました。到着して荷物をキャビンに置くやいなや懐かしい友と二人で余島散策をしました。2年前に来た時は松がれがひどく余島の山の色がとても暗い色だったことを覚えていた私は、歩いていて、少し違うことに気がつきました。私の足元に松の子供たちが青々と元気よく春の日差しを一杯に浴びていたのです。私達は踏まぬようにその間に行きました。何だかわくわくした気分になり山を歩き回りました。

私は一泊二日の参加でしたが、その間、三度にわたり植樹をしました。土に穴を掘り、松の苗を植え、苗を固定する、海風にも負けぬようにしっかりと地を固める。幾度も幾度も同じ作業をくり返しました。植樹のあとをみると、数えきれぬ程の固定に使った竹がたっていました。何だかすごいなめですが、それらは今回のR Y L A参加者全員で汗を流した結果です。途中、今井先生が、これらは私達の子供達そして孫達の代のためのものであるとおっしゃいました。松枯れの前はとても見事な松が多くありました。そのようになるには、まだまだ先のことなのです。しかし、その先に思いを馳せて私達は今、活動します。来年になると、私をわくわくさせてくれる松の子供たちはさらに増えていることでしょう。

第2670地区
愛媛県西条市大町242-3-3E

松本 明子

3月28日、2年ぶりに土庄へと足を下ろしました。来るまで同期と連絡を取っておらず、どれほどメンバーが集まるかも知らないまま、少しの不安もありました。と、そこへ見覚えのある顔が目の前に現れ、相手も様子を伺っている……。一瞬のうちに、思いは2年前にフィードバックします。あの充実した4日間を共に過ごした仲間との再会は、本当に嬉しいものでした。また、自然を感じ、友人と出会い、さらに自分を見つけられるR Y L Aに再び参加できたんだと実感できました。

前回大学生として参加していた自分が今回社会人となり余島へと戻ってきて、1泊2日ではありましたが、やはりいろんなものを得られた気がしています。小藪実英先生のお話

の中でも、「自覚」の詩の中にもあるように、人間ものの見方が大事であることを強く感じました。また今井先生は、21世紀にむけて私たちは地球的視野を持ち続けることの大切さを教えて下さいました。そしてキャビンタイムではゲームを交えながらも語り合い、相手を知りながら自分も見つめ直せたと思います。職場や普段の生活では味わうことのできないことがここではできてしまう。余島で見つけたこと、考えたことを再び日々の生活のなかで活かすことができます。そういった意味で、私にとっての余島は原点になっています。これから自分がどうあるべきかを改めて考えさせてくれる場所。このようなチャンスを与えて下さった伊予ロータリークラブの皆様、またRYLAセミナーのスタッフの皆様へ感謝致したいと思います。ありがとうございました。最後に I must care always, you must care always.

第2680地区
姫路市西新在家3丁目1-30
濱田 真由美

今回の、私は2年連続でライラに参加した事になります。今回のライラは、かっちり班で分けて何かを討論するという事はなかったのですが、なつかしい人達と久し振りに、何やかやと話ができ、まるで一年経ったというのが嘘の様に感じました。

去年ライラを受講した時、いろんな事について考えた事を、地域に帰って全て実践してきたか、というとなかなかできていません。

久し振りに余島に戻り、一年前に思った事、感じた事を改めて思い返して、もっと心に余裕を持って、今の生活に手一杯にならずに、いろんな事にチャレンジしていきたいと思いました。本当に、1泊2日という短い間でしたが、とても楽しく有意義に過ごす事ができたと思います。本当にありがとうございました。





第20回 RYLAセミナー運営委員会

ガバナー	松下克巳	(第2680地区ガバナー三田R.C.)
	吉村雄治	(第2670地区ガバナー高知南R.C.)
顧問	今井鎮雄	(直前R.I.理事 第2670地区P.G.神戸西R.C.)
	橋本憲佳	(第2670地区P.G.高知R.C.)
アドバイザー	深川純一	(第2680地区P.G.伊丹R.C.)
	須之内淳二	(第2670地区P.G.松山西R.C.)
ライラセミナーアドバイザー		
	安平和彦	(第2680地区姫路R.C.)
	吉本功	(第2670地区高知東R.C.)
ディーン	篠原成行	(第2670地区北条R.C.)
副ディーン	井奥寛泰	(第2680地区姫路南R.C.)

■R.I.第2680地区

青少年活動委員長

井奥寛泰 (姫路南R.C.)

ライラ委員

赤穂哲 (姫路南R.C.)

三木且視 (龍野R.C.)

三木明 (姫路R.C.)

ライラ委員長

山口徹 (神戸R.C.)

小池弘三 (神戸ハーバーR.C.)

大村泰司 (高砂R.C.)

■R.I.第2670地区

青少年奉仕委員長

中島萬里 (徳島西R.C.)

ライラ委員

谷口修平 (松山西R.C.)

坂井幸博 (高松東R.C.)

有光和雄 (松山南R.C.)

猪野恵一郎 (松山南R.C.)

ライラ委員長

平地保治 (小豆島R.C.)

篠原成行 (北条R.C.)

中島萬里 (徳島西R.C.)

山下和彦 (高松グリーンR.C.)

加藤敏仁 (高知南R.C.)



主催 ● R. I. 第2670地区 ● R. I. 第2680地区 ● R Y L A 運営委員会

R Y L A 運営事務局

● 第2680地区ガバナー事務所

〒669-1531

三田市天神1-5-33 三田市商工会館208号

TEL(0795)65-9222 FAX(0795)65-9223

● 第2670地区ガバナー事務所

〒780-0862

高知市鷹匠町1-3-35 三翠園ホテル212号室

TEL(0888)24-8488 FAX(0888)24-8498